

萬葉集

その漲るいのち

元 富山県立図書館長

廣瀬

誠 著

国文研叢書
No.30

萬葉集、その漲るいのち

社団法人 国民文化研究会

本書の上梓にあたって

（旧）国民文化研究会理事長
元亜細亜大学教授

小田村 寅二郎

（数へ年七十六歳）

私どもの国民文化研究会が、その研究成果として上梓してきた「国文叢書」が、本書で三十冊目となった。その記念すべきNo.30を、畏友・廣瀬誠氏を煩はして、待望の、「萬葉集」について、ここに上梓するを得たのは何にもまして喜ばしい限りである。

著者・廣瀬誠さんは、明けて数へ年六十八歳とられたが、本書の「はしがきに代へて―萬葉集と私―」によると、若き日の中学三年の時、「文庫本の『萬葉集』（しかも擬つて『白文萬葉集』）をいつもポケットに入れて持ち歩くほど熟読した。」と回想してをられる如く、その生涯を通して『萬葉集』（そして『古事記』と）に親しまれた方である。

廣瀬さんは、『萬葉集』の一首一首の和歌に相對するとき、いつも細心の考証を重ねられながら、その詠者の、人柄、その折の心組み、当時の環境、詠草の対象課題などを次々に推し測り、その作品に溢れ出てゐる「歌のしらべ」の律動までを、心して感得しようとする

された如くである。目次に見られる本書の構成の仕方をはじめ、記述された内容が、きほめて独創に満ちてをり、読む者に深い感動を覚えしめずには措かないのも、『萬葉集』の持つすばらしさと共に、廣瀬さんの終始一貫した真摯な人生姿勢及びのちに記す人柄の然らしめるところに拠るのであらうかと思ふ。

巻末の「著者略歴」でお判りの通り、廣瀬さんは、富山で生れ、終始富山で過された。私が廣瀬さんとお会ひしたのは、富山中学生の時上京された折であつた。後、国学院大学に学ばれたが、中途退学されて富山に戻られた。そして昭和二十三年から昭和五十七年の定年までの三十五年間を、富山県立図書館に勤務され、その最後の数年間は、同図書館長として活躍された。その間、富山県史、富山市史の編纂、富山県文化財保護審議委員などを歴任される傍ら、日本山岳会にも所属され、立山・黒部の踏破・研究に精魂を尽された。さうしたことから、富山新聞文化賞、北日本新聞文化功労賞、富山県文化賞を相ついで受賞されたのである。

多くの著書の中には、昭和四十六年に書かれた新書判『立山と白山―その歴史・伝説・文学―』は、旅行者の良き手引き書として、今も北陸各駅の売店に並べられ、多くの人た

ちに愛読されてゐる。一方、昭和五十九年に桂書房から出版された大冊の著作『立山黒部奥山の歴史と伝承』（A5判、六四〇頁）全十三章、（付録『立山さら越え道筋絵図』）は、その道の権威ある学者としての名声を、世に確乎不動のものとされたと思ふ。

「はしがきに代へて」の中で廣瀬さんは、「昭和五十一年二月、皇太子殿下が冬季国体に来県された時、私は立山の歴史についてお話申上げたが、『萬葉集』に立山が歌はれてゐることに言及すると、『それはどんな歌ですか』と御下問になつた。私が朗々と立山賦たちやまのうたを暗誦したところ、殿下も妃殿下もニッコリほほゑまれた。なつかしい思ひ出だ」と記してをられる。その状況を偲ぶと、廣瀬さんがこの光栄に浴された折の緊張したお顔が彷彿として浮んで、『廣瀬さん!! 本当に良かったですね』と声をかけたい思ひさへする。

御皇室を敬仰すること人一倍厚い廣瀬さんについては、いま一つご紹介したいことがある。戦後の荒廃した国内を、天皇さまがくまなく御巡幸くださり、富山にお越しになつた昭和二十二年十月のことである。当時の富山市は戦災を蒙つてをり、お泊りいただく旅館とてなく、県庁の二階を御宿舎に当てられた。その日の御巡幸を終へられた天皇さまは、

御宿舎前の広場を集つて「天皇陛下萬歳」を唱へる数百人の群衆に、御部屋の窓をお明けになつて、お手を振つてお応へくたさつた。そのうち「萬歳」の声も低くなり、陛下が窓辺から奥にお戻りなされようとされた時、群衆の一人が渾身の力を振り絞つて天にも響けかしと「天皇陛下萬歳」を改めて三唱した。すると、陛下はお戻りになりかけてをられたのを、再び窓際に引き返されて歓呼に応へられ、改めてお手をお振りなさる。それが数回繰り返へされた、といふ。その群衆の一人とは、実は廣瀬誠さんその人であつた。何とも畏れ多いことではあるが、廣瀬誠さんの人柄を偲ぶにふさはしい逸話と思ふ。

廣瀬さんは、もともと若い時からの病弱な体質を、いたはりいたはりつつ勵んで来られた。しかし遂に大病に罹つてしまはれる。今から七年前の昭和五十七年である。その手記に、「二月二十四日富山市民病院・耳鼻咽喉科の診察を受く。わが口中を見たる瞬間、医師の顔色さつと変れり。医師の態度、検査の綿密、すべてただごとにあらず、われ容易ならざる病やまひなるを知り、身辺を整理す。なすべきこと余りにも多く、力及ばず。」「三月二日、予期せしごとく「口腔癌」の宣告を受く。翌日入院と決す」と。そして八月十日、東京癌研病院に移り、同二十日、八時間に及ぶ大手術により「舌」の三分の一を切除されたので

ある。

しかし廣瀬さんは、この病中に、実に詩一篇、短歌百四十連の五百三十余首、俳句若干を詠み続けてをられたのである。驚くべき労作といふほかはない。それが夜久正雄氏に送られ、同氏から私の許に届けられた。それに目を通させていただき、感極まつた私は、夜久さんと御相談の末、廣瀬さんの御了承を得て、原稿のペン字のままを写真版にとつて、筆跡のままの歌集として刊行させていただいた。題して『坂の沼琴』といふ。廣瀬さんによれば、この題名は、「黄泉よもつ比良坂ひらさかを喘あへぎ歩きなつかつな掻かき鳴なした琴ことの意。すなはち生死のはざまをさま迷ひつつ詠じた詩歌の意である。出典は『古事記』、沼琴ぬごとは玉で飾りつけた琴」の由である。正に生死のちまたを往き来された憶ひをこめての題名であつたのであらう。そして副題として「―癌病養中詠草―」と付けられた。その巻頭に一文を寄せさせていただいた私は、その中で「一体、大手術に前後する日々の体験と所感とを、このやうに切実に”率直に”そして”いのちのほとばしるままに”詠み上げ、詠みつつけることが、果して出来ることなのであらうか」と書かせていただいた。その歌集の末尾に廣瀬さんが書かれた次の一節は、今も私の心の中に刻み込まれてゐる。すなはち、

「私はなほ、生死のはざまの黄泉つ平坂のすぐ近くを歩みつづけてゆく。そして悲しみも喜びも、古典に託して誦みあげ、また、みづからの拙き言葉にこめ、全力をそそいで歌ひあげてゆく。歌は私の魂のひびきである。歌を詠み歌を作ることは、わがいのちのあかしである」と。

なほ、この歌集は、さきの御縁にかんがみて私から然るべき筋を通して 皇太子殿下に献上させていただいたところ、後日、東宮侍従様から富山の廣瀬氏に直接お電話があり、病後を大切に”との有難いお言葉が伝達された由である。廣瀬氏の感激いかばかりであったことか。

かうした大病後の廣瀬さんに、本書の執筆をお願いするについては、私にも同人諸氏にも、かなりのためらひがあつた。しかし、「国文研叢書」の第一冊目が、夜久正雄氏の『古事記のいのち』といふ名著であつたことに照らし、はじめての『萬葉集』についての「叢書」であつてみれば、私ども同人の中では廣瀬さんにお願ひするのが、最善の計であつた。お身体を無理なさらぬために、既発表のものを中心にしての執筆をお願いしたつも

りであつたが、しかし廣瀬さんは、多忙な日々の中で精一杯の努力を傾けられ、すべてが書きおろし原稿となつたのである。びつくりしたのは私どもで、お身体に響かねば、と案じ祈る思ひ切なるものがあつた。なほ、頁数の都合で、一部を割愛させていただかねばならなくなつたことは、何とも心残りであり、かつ、廣瀬さんにまことに申し訳ないことと思ふ。それにしても「国文研叢書」に、『古事記のいのち』と並んで、『萬葉集みなもろその漲みなぎいのち』を得た嬉しさは、たとへやうもないものである。

さいごに、著者並びに本書の上梓に御協力された小柳陽太郎氏はじめ諸氏に深く御礼申上げ、一筆、本書の刊行に寄せさせていただいた次第である。

平成元年一月十二日

「はしがき」に代へて——萬葉集と私——

『萬葉集』は一大山嶽である。ふところの深い大山群である。壮大な人麻呂山脈が天を突いて連なり、長大な家持山脈の山脚は遠く海に没してゐる。憶良山脈・虫麻呂山脈・赤人山脈・旅人山脈等々いくつもの山脈が折り重なり、ところどころから火山塊が噴き出し、盛りあがり、錯綜し、その間に谷川がきらめき、大森林が山腹を埋めて黒々と茂り、天上の楽園のやうなお花畑が開け、かと思ふと、巨岩累々たる山稜が烈風に吹かれてゐる。雪溪の割れ目からは落ち激つ水の音が聞え、冷たい霧を吹きあげてくる。そんな感じだ。

この奥深い山路は、いくたび歩いてても新鮮だ。その目のさめるやうな風景に、私は驚き、感動し、嘆息し、興奮する。先人の踏み分けた跡は縦横についてゐるが、時には、その踏み跡は細々と樹海に没し、途方に暮れることもしばしばだ。『萬葉集』とはそんな古典だ。

顧みれば、山群の背後には、古事記山脈、書紀山脈、風土記山脈、祝詞山脈が相重なつ

て、碧青へきじょうに匂におひ、縹渺ひょうびょう、天あまに溶とけてゐる。

ゆくてには、平原へいげんに没もつした萬葉大山脈まんやうだいさんみやくが彼方かたで再び隆起りゅうきし、実朝山塊まねともとなつて聳そびえ、更さらにかなたには真淵まぶち・宗武むねたけ・良寛りやうかん・元義もとよし・篤好あつこう・曙あけみ覽らんらの山々さんざんを起おこし、そのいや果はには、子規しきの巨峰きよほうに始はじまる根岸山脈ねがしが、いくたの近代山群しんたいさんぐんを率りつゐて都市地としちの彼方かたに連つなつてゐる。すべて萬葉山脈まんやうさんみやくの山勢さんせいのつづきだ。

この深山路ふかやまぢの一角いっかくを、たどたどしく辿たどつた私の、拙せつい山岳紀行さんかくきぎやうが本書ほんしよだ。

私が『萬葉集』を初めて読よんだのは富山中学二年とみやまちゅうがくにねんの頃ころであつた。勿論もちろん、萬葉の神髓しんずいなどわかるはずもなく、当時たうじ、愛誦あいじゆしてゐたのは、

秋風あきかぜに大和やまとへ越こゆる雁かりがねはいや遠とほざかる雲くも隠かくりつつ（10、二二二八）

さ夜中よなかと夜よはふけぬらし雁かりがねの聞きゆる空そらに月渡つきわたる見みゆ（9、一七〇一）

おちたぎち流ながるる水みづの磐いはに触ふり淀よどめる淀よどに月つきの影かげ見みゆ（9、一七二四）

山のまの雪ゆきは消けざるをたぎちあふ川がはの柳もは萌もえにけるかも（10、一八四九）

のやうな自然詠であつた。まだ人生の労苦を知らず、社会を知らず、専ら自然の美しさを讚嘆し、かつ古雅なものを愛好してゐた少年時代の私は、どちらかといへば萬葉よりも、古今調の伝統美の世界に惹かれてゐた。

中学三年の時、たまたま『子規隨筆』を読み、その歌論に接し、雷に打たれたやうに愕然として目ざめ『萬葉集』を読み直したのであつた。文庫本の『萬葉集』（しかも凝つて『白文萬葉集』）をいつもポケットに入れて持ち歩くほど熱読した。当時、中学の校友會誌『文武會報』に「柿本人麿かきのものひとまろの歌」と題する拙い文を發表したのが、私の文が活字になつた最初のものであつた。

更に同時代の文学といふことで四年の時から『古事記』『日本書紀』『記紀歌謡集』『風土記』『祝詞・寿詞』のりとよじ（いづれも文庫本）なども読み、神韻縹渺たる『古事記』には魂を奪はれる程感動した。

昭和十四年、伊勢・熱田に参拝した時の私の歌がやはり校友會誌に載つたが、「忌火屋いみびやの御屋根みやねにゆらくみけぶりを畏みかしこ仰ぐその御けぶりを」さかどの「酒殿みづの瑞しめ繩なはの白ぬさの揺れゆもかすかに秋の風吹く」ひらまへ「廣前ひろまへに神の御鳩みの羽ばたきの音すがすがし八劍やつらぎの宮」といった

もので、萬葉調の根岸派からの影響とともに神祇に対する関心の程が顕著だ。萬葉にまねて長歌も二三試作したが、「山虎やまこの吼なゆるが如く高く叫ばね強く叫ばね」と結んだ稚拙ちせつな作があったことを記憶してゐる程度で、ノートはすべて戦災で焼失してしまった。

『書紀』の文が漢文調でござつてゐるのを残念に思ひ、これを（内容的に感銘した神話伝承の一部分を）『古訓古事記』の文体で改作するといふ幼稚なことをやってみたのもその頃であった。とにかく、中学後半が最も記紀萬葉に熱中した時期であった。（熱中といつても、学問的研究とは全く無縁で、十分意味も分からないまま、その言葉の調べに惚れこみ、陶醉したのであった）。

一時、萬葉から遠ざかった時期もあったが、また萬葉に戻り、不即不離、五十年余にわたって私は『萬葉集』『古事記』を味はって来たわけだ。

図書館に勤務し、郷土資料を担当し、郷土史会などにかかはり、『萬葉集』の越中関係の部分、いはゆる「越中萬葉」に関心をもち、これに関する論文・随筆をいくつか書き、『富山県史』にも『富山市史』にも「記紀の伝承と越こしのくに国」「越中萬葉」などの項目を担当

執筆した。市民大学その他各所で私が講演したうち、最も多く扱ったテーマは「立山の歴史・立山の信仰」と「越中萬葉」とであった。その立山と萬葉の接点は家持・池主の立山賦唱和だ。

昭和五十一年二月、皇太子殿下が冬季国体に来県された時、私は立山の歴史についてお話し上げたが、『萬葉集』に立山が歌はれてあることに言及すると、「それはどんな歌ですか」と御下問になった。私が朗々と立山賦を暗誦したところ、殿下も妃殿下もニコリはほゑまれた。なつかしい思ひ出だ。

昭和五十六年、癌研病院で生死をかけた大手術を受けた時、妻は幾夜も徹夜で看病してくれたが、妻は萬葉の歌「わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれ無けなく」(4、五〇六)を誦しながら、私を看とった。小学校を卒業するとき、担当の先生から一人に一首づつ萬葉歌を贈られたが、たまたま妻はこの歌を与へられ、それが四十年後、口をつけて出て来たのであった。

やうやく死地を脱し、療養期間に入ったが、舌の三分の一その他を切り取られた私は、発声思ふにまかせず、毎日病院の屋上で、発声訓練を兼ねて萬葉の長歌を朗誦し、これに

よって機能を七分通り回復したのであった。私と萬葉の因縁はまことに遠くして深い。

国民文化研究会の小田村理事長から『萬葉集』について『国文研叢書』の一冊としてまとめるやうお電話をいただいた時、簡単にお引受けしてしまったが、考へてみると、今まで書いたものはほとんど「越中萬葉」ばかりだ。全国の国民文化研究会の方々に読んでいただくには、「越中萬葉」だけではぐあひが悪い。『萬葉集』全般について書かねばならぬと覚悟し、新たに稿を起した。従つて二、三を除き、大部分は書きおろした。

小田村さんのお話では、萬葉をまだ読んだことのない学生たちの「入門書」が目標といふことなので、最初に概説めいたものを書いたが、その他、多少専門的な書き方の篇もまじり、不揃ひになった。研究調のもの、評論調のもの、随筆調のもの、さまざまだが、雑然たるところに魅力のある『萬葉集』についての書だから、本書も雑然となったと弁解しておく。

「海ゆかば」「大君は神にしませば」あしはらのなかつくに「葦原中国と葦原水穂国」あしはらのみづほのくになど思想的なテー

マ、あるいは記紀傳承に閑説した個所は多いが、相聞—恋愛歌についての取り上げ方は甚だ少なかつた。遣唐使・遣新羅使関係の歌はぜひ取り上げたいと思ひながら、紙幅が遙かに予定を超え、他の事情もあつて断念した。この他にも用意した粗稿のいくつかは紙幅の関係で割愛した。

目下、萬葉ブームとかいはれ、書店の店頭には萬葉関係書は汗牛充棟もただならず、紀要・雑誌等に掲載の関係論文はおびただしい数だ。私が目を通したのは、その何千分の一、否、何万分の一、何十万分の一にもならぬであらう。是非読まねばならぬと買ひ揃へた書も、読むにいとまなく、空しく書架の一隅に鎮座させたままだ。

そんな不勉強な私が生いたのだから、得々として筆を揮つても、すでに学界では旧説陋説として顧みられなくなつてゐて失笑を招くのもあらう。独創的意見と思つて書いたことが、すでに先学の発表したものに近く、「今更何をいふのか」或は「口真似、盗作でないか」と批難される場合もあるのでないかと、ちょっと気がかりだ。中には、ずっと以前に読んだ知識を、自分の考へつたことのやうに錯覚してゐる場合もありさうだ。さうなる

と、先人に対しても失礼で、はづかしく、恐ろしいが、「何とか蛇におぢず」、目をつぶって、五十年間読み味はって来た私の『萬葉集』を一気にここに打ち出した。萬葉の大山脈、その山ふところに足を踏み入れ、先人の足跡を辿ったり、見失ったりしながら、自己流に縦横に歩き廻り、ちび筆をなめなめ書きしたためた紀行文、それが本書である。

不勉強とはいひながら、やはり先学の深い恩恵を蒙ってこそ本書は成ったのである。あらためてその学恩に感謝するものである。

最後に、本書の出版をとりあげていただいた小田村寅二郎氏、私の執筆を強くおすすめいただいた夜久正雄氏その他の方々、刊行につき煩雑な諸務を担当していただいた小柳陽太郎氏・長内俊平氏その他の方々に甚深の謝意を表するものである。

昭和六十三年八月二十八日（大伴家持卿・千二百三年祭の日）

廣瀬 誠

例言

一、本書は正仮名遣（いはゆる歴史的仮名遣）を使用した^が、促音便の「っ」は小活字にした。

二、ただし、漢字音の表記は字音仮名遣に拠らず、おほむね現代仮名遣に従った。

（雑歌・相聞^{ざふか}など若干の伝統的語彙には、例外的に字音仮名遣を用いたので、その点いささか不統一である）。

三、漢字の表記は、おほむね常用漢字の字体を使用した。ただし、萬葉集には「萬」字を使用し、「万」字を用ゐなかつた。

四、『萬葉集』『古事記』『日本書紀』等を訓み下すには、特定のテキストに拠らず、各種の訓読本を参考にしつつ、その時々で著者の好みに従った。

目次

本書の上梓にあたって（小田村寅二郎）

「はしがき」に代へて——萬葉集と私——（著者・廣瀬誠）

第一章 たぐひなき古典 萬葉集 1

一 萬葉集について 3

一 はじめに 二 歌数と番号

三 分類と構成 四 雑歌・相聞・挽歌等について

五 名義と成立

第二章 活力みなぎる日の大朝廷 17

—— 萬葉宮廷歌のかがやき ——

一 巻頭歌 雄略天皇御製をめぐって 19

○春光あふるる雄略天皇妻問ひの歌 ○ワカタケル大王と鉄劍銘

○上から下への敬語表現 ○大伴家持と越中娘

二 国原と国見 —— 舒明天皇御製をめぐる —— 26

○国見の御製と国見の意義 ○国原と海原 ○うまし国 ○大和
にかかる枕詞 —— 虚見つ・秋津嶋・しきしまの・日の本の ——

○大和盆地から日本国への拡大 ○雄略・舒明両御製巻頭の意義

○聖山天の香具山 ○国原の語と近代短歌の用例

三 大和朝廷と白村江の敗戦 —— 熟田津の船出と三輪山離別歌 —— 38

○熟田津の船出 ○齐明天皇崩御 ○白村江の敗戦 ○三輪山離

別歌 ○神山三輪山について

四 豊旗雲の夕映え —— 天智天皇御製 —— 47

○三山妻争ひの伝承 ○豊旗雲の夕映え ○百済救援行と「中大

兄三山歌」

五 春秋競憐と近江朝 —— 才媛・額田王 —— 52

○春秋の争ひ ○「秋山吾は」 ○後世の類例 —— 左千夫・節・

秀真・麻須美・子規

六 藤原宮讃歌の明暗 57

○藤原宮御井歌 ○藤原宮役民作歌 ○明日香風

七 相飲まむ酒ぞこの豊御酒は——聖武・孝謙御製をめぐって——……………63

○聖武天皇御製と節度使 ○孝謙天皇御製と遣唐使 ○帝王調と
仏教 ○御製下賜の伝統——江戸時代の後水尾・仁孝御製に及
ぶ

第三章 萬葉びとの悲しみ……………71

一 萬葉集の挽歌群と安騎の大野……………73

○萬葉集における挽歌（勅撰集哀傷歌との比較） ○卷第二の挽
歌群 ○人麻呂の宮廷挽歌 ○笠金村の挽歌○人麻呂らの私的
挽歌 ○安騎の大野における人麻呂の絶唱

二 『死者の書』の山 二上山——悲劇の皇子たちとその挽歌群——……………82

○当麻寺と二上山 ○大伯皇女と大津皇子 ○二上山越え ○有
間皇子辞世 ○聖徳太子磯長御墓

第四章 神話伝承の体現者 柿本人麻呂をめぐって……………89

一 近江荒都の悲嘆と橿原宮回顧 91

○近江荒都を嘆く ○夕浪千鳥 ○行く水と人麻呂の無常感 ○
橿原宮回顧(人麻呂と家持) ○中国における黄帝崇敬 ○後村
上天皇の橿原宮回顧の御製 ○後世歌人の神武懐古の一端——五
十嵐篤好の二千五百年賀歌・积迢空・会津八一 ○「めやも」の
用法について(堀辰雄の「風立ちぬ」の疑問)

二 柿本人麻呂と海の旅——大和島根・遠の朝廷 100

○明石大門(古今歌と萬葉歌) ○大和島根 ○遠の朝廷

三 天地開闢神話と人麻呂・赤人——天地の初めの時と天地の分れし時 110

○人麻呂・赤人の天地開闢表現 ○記紀開闢伝承の比較 ○天地
初発から皇室起源伝承へ ○天地初判から大自然の讃嘆へ ○神
議りと天孫降臨 ○天照らす日女の命 ○スメミマノミコトと歴
代天皇 ○天地の依相の極み

第五章 萬葉中期の歌びとたち 125

—— 赤人・虫麻呂・憶良・旅人など ——

一 赤人と虫麻呂の富士讃歌 127

○赤人の望不尽山歌 ○萬葉の原歌と新古今の改作歌 ○持統天皇、香具山の御製とその改作歌 ○虫麻呂の詠不尽山歌 ○日の本のやまとの国 ○万年雪の伝承 ○語りつぎ言ひつぐ山——不尽山と立山 ○古代ヨーロッパ人の山岳観との対比 ○後世の立山を神山と仰ぐ歌

二 高橋虫麻呂をめぐって——伝説歌人・自然歌人・日本の歌人——……………139

○真間の手児名と芦屋の菟原処女 ○浦嶋子伝説歌 ○虫麻呂の自然描写 ○虫麻呂と登山詠——日本最初の登山歌人 ○虫麻呂の日本的自覚 ○龍田山の桜花

三 愛憐と志操の人 山上憶良……………146

○子を思ふ歌 ○貧窮問答歌 ○惑へる情を反さしむる歌 ○神功皇后伝説の歌 ○好去好来歌 ○辞世悲嘆の歌

四 志賀の海人の遭難を悼む——山上憶良の悲傷連作歌——……………152

五 夢想の挽歌と大伴旅人の夢の歌……………157

○天武天皇崩御と皇后の夢想歌 ○天智天皇崩御と一婦人の挽歌 ○大伴旅人の文芸趣味的夢想歌 ○仙女歌・讃酒歌と旅人の人間

像 ○家持の夢の歌 ○旅人と家持の「志」(志を秘めた父旅人、志を歌ひあげた子家持)

六 大伴旅人の亡妻挽歌 —— 連作短歌の開拓者旅人 —— 165

七 才女 大伴坂上郎女をめぐって 169

○大伴氏と国際感覚 ○新羅の尼と大伴家 ○祭神歌 ○恋愛歌
○甥大伴家持への愛情 ○娘大嬢

第六章 葦原の水穂の国 177

一 大君は神にしませば —— 天皇神格語彙をめぐって —— 179

○雷の丘(人麻呂の歌と『日本霊異記』の伝承) ○「大君は神にしませば」「神ながら神さびせず」 ○明つ神 ○現人神をめぐって(天皇を現人神とは称さず) ○遠つ神 ○すめろきと大君
○「高光る」「やすみしし」 ○「高御座」「天つ日嗣」と「天の日嗣」

二 言挙げせぬ国 言霊の佐くる国 付、「言立て」について 192

三 葦原の中つ国と葦原の水穂の国 —— 古事記語彙と萬葉集語彙 —— 199

○古事記の葦原中国 ○古事記の豊葦原水穂国 ○萬葉集の葦原水穂国 ○未開、妖怪うごめく葦原中国 ○荒ぶる自然を制御し調和させた日本文化 ○現実の地上を舞台とした萬葉びと ○付記 千早振る荒振る神について（明治天皇御製の「千早ふる」と、龜山上皇御製の「荒ぶる」）

四 天孫降臨伝承と大伴氏・物部氏 208

○天孫降臨伝承と大伴家持の表現 ○八重雲押分け伝承と磐船漕ぎ伝承 ○物部氏の始祖伝承 ○古事記の天の鳥船 ○神宮の御船代 ○天の梯建伝承 ○天の浮橋 ○暗涙から聞晴へ

五 「海ゆかば」をめぐって 219

○大伴氏の言立て ○萬葉集における屍の表現 ○防人歌の採録 ○老幼婦女福祉の行政と「海ゆかば」 ○「海ゆかば」の歌碑
追記一 大伴氏と佐伯氏（越中国守大伴家持と越中国守佐伯有若） ○追記二 外国人の疑念

第七章 萬葉集の種々相 227

一 萬葉集と記紀歌謡 229

○「待ちにか待たむ」と「待つには待たじ」 ○木梨輕太子情死の辞世 ○走り出の宜しき山 ○聖德太子の飢人・死人悲傷の御歌

二 萬葉集の短歌と旋頭歌

○萬葉集の歌体 ○短歌のすがた ○旋頭歌のすがた

三 能登国歌と越中国歌（北陸民謡）

○熊米の夜良と熊米酒屋の勞務者 ○鶯營菓の祝ひ歌 ○仏足石
体歌と伊夜彦の神事歌謡 ○能登鯖の木筒と家持 ○しただみの
童謡 ○能登の海の漁火 ○繁道森徑

四 野の花 東歌（東国民謡）

五 大群作 防人の歌

六 「醜の御楯」論議

七 萬葉茶漬飯

○天武天皇と藤原夫人 ○持統天皇と志斐姬 ○大伴家持と紀女郎 ○家持とウナギ ○卷第十六の即興歌群（長奥麻呂の歌、子

第八章 萬葉集と日本の自然 …………… 281

一 記紀萬葉とさくら …………… 283

○国の花としてのさくら（若宮年魚麻呂伝誦歌） ○神話伝承とさくら —— 木花咲くや姫

二 山桜花 —— 大伴家持・池主を中心に …………… 288

○落花と死の幻想 ○思ひ出の桜 ○死の譬喩と桜 —— 安積皇子挽歌 ○自然のリズムと日本人の人生観

三 虫の声・鹿の声と萬葉集 …………… 293

○虫の声と日本文化 ○萬葉集とこほろぎの声 ○天皇と鹿の声 —— 仁徳天皇伝承、雄略・舒明御製の鹿 ○今昔物語の鹿

第九章 大伴家持をめぐって …………… 299

一 常世の橋と大伴家持 …………… 301

○田辺福摩呂の越中下向と橋の歌の伝達 ○家持の橋愛好と橋讃

歌 ○文化勲章と橘のデザイン

二 萬葉の雷鳴と雪夜の宴

○四尺の豪雪と雪夜の宴 ○萬葉の雷鳴歌と棟方志功の蒼青不動
明王像 ○棟方志功の「天皇拝從記」

三 大伴家持の悲劇的生涯と萬葉集

○越中赴任と叔母坂上郎女 ○橘諸兄と家持 ○応詔献歌と預作
未奏歌 ○「大君の任のまにまに」 ○单身赴任と愛妻家、家持
(常初花、奥妻) ○「海ゆかば」の感激 ○越中離別 ○凄淵
の意、歌に非ずば撥ひ難し ○橘奈良麻呂の変と大伴池主 ○萬
葉集卷末の歌——家持の地方左遷 ○鎮守府將軍としてみちのく
赴任 ○遺体葬るを許さず ○家持の死と萬葉集の伝存

第一章

たぐひなき古典

萬葉集

一 萬葉集について

一 はじめに

『萬葉集』は現存する、わが国最古の歌集である。現存するといふのは、『萬葉集』に先立って「柿本人麻呂歌集」「笠金村歌集」「高橋虫麻呂歌集」「田辺福麻呂歌集」等、個人名を冠した歌集、或は山上憶良が編集した「類聚歌林」の如き合集の存在したことが確實だからである。これらの歌集は、『萬葉集』に引用再録された部分を除いて、すべて散佚してしまつた。奈良時代、諸国から撰進された「風土記」も、出雲・常陸・播磨・肥前・豊後の五カ国分がまとまって現存するのみで、他の国々の風土記は、他書に引用された断片を除いて、すべて散佚した。(引用されて遺存した断片を「古風土記逸文」といふ) 平安時代になつて菅原道真が勅を奉じて撰んだ『類聚国史』全二百巻も、現存するのは六十余巻、三分の一にも達せぬ量である。国の正史『日本後紀』でさへ、全四十巻中、残存わづかに十巻である。

このやうな中であつて、『萬葉集』は『古事記』『日本書紀』とともにほぼ完全な姿で残つたのである。これらの古典によつて、千二百年前のみ祖たちの声は今もわれら子孫の心にいきいきとひびき、われら日本人の魂を呼びさまし、はぐくみ、培ひ、力づけてゐる。『萬葉集』が伝存したといふ、このかけがへのない幸慶に私は深く感動し、感激の言葉を知らないのである。『萬葉集』の研究はここから始まるのである。

「ほぼ完全」といつたのは、巻第一の末尾、巻第十八の一部に、僅かながら欠損があるやうに思はれるからである。

二 歌数と番号

『萬葉集』は全二十卷。雄略天皇御製長歌を巻頭に据ゑ、大伴家持の天平宝字三年（七五九）正月の賀歌に終はつてゐる。歌数は長歌約二六〇首、旋頭歌約六〇首、短歌約四二〇〇首、その他計約四五四〇首前後である。

歌数は、数へ方によつて多少の差が生じてくる。明治三十四年編集された『国歌大観』では四五一六首となつてゐるが、昭和五十年代の『新編国歌大観』では四五四〇首となつ

1 萬葉集について

てゐる。『萬葉集』の研究には『国歌大観』の番号を使用するしきたりである。「新編」の方が多年の研究成果を取り入れた尊重すべき数字であるが、従来の上べての研究は「旧編」の番号を使用してをり、また公刊されてゐる諸種の『萬葉集』も大部分は「旧編」の番号を用ゐてゐるので、混乱を避けるためにも、「旧編」番号に拠らざるを得ないであらう。本書引用の萬葉歌に付記したアラビア数字は巻数、漢数字は旧編『国歌大観』番号（例、3、三七九は、巻第三の三七九番歌）を示す。

注。ただ一つ伊藤博校注の角川文庫本『萬葉集』（昭和六十年刊）は「新編」の番号に準拠し、旧番号をも添記してゐる。同じ角川文庫本でも、旧版の武田祐吉校『萬葉集』は当然の事ながら「旧編」の番号を使用してゐる。

三 分類と構成

『古今和歌集』は、春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名・恋・哀傷・雑・雑躰・大歌所御歌と全二十卷、整然として一糸も乱れぬ編成である。『古今和歌集』に続く代々の勅撰集も、ほぼ同じやうな編成である。

ところが『萬葉集』は卷第一雜歌、卷第二相聞・挽歌の三大部類で、各、天皇御代順に歌が配列され、ここまでは一応整然としてゐるが、卷第三にまた雜歌・譬喩歌・挽歌と、ほぼ卷第一・第二兩卷を反覆したやうな編成。卷第四は大伴家を中心とした相聞。卷第五は大宰府における大伴旅人・山上憶良を中心とした卷で、雜歌と題されてはゐるが、挽歌も含む。卷第六がまた雜歌。卷第七は作者未詳の卷で、雜歌・譬喩歌・挽歌の構成。卷第八は春雜歌・春相聞・夏雜歌・夏相聞・秋雜歌・秋相聞・冬雜歌・冬相聞と、いはば春夏秋冬を各雜歌・相聞と分けた形。『萬葉集』中、後世の歌集のやうに春夏秋冬が分類の基準になつてゐるのはこの卷と卷第十の兩卷だけだ。

卷第九は雜歌・相聞・挽歌の基本的分類。卷第十は前述した卷第八と同じ春夏秋冬分類。卷第十一・十二は「古今相聞往來歌類」の上・下と題され、作者未詳の恋愛歌を集めた卷。卷第十三は古い歌謡風の歌を雜歌・相聞・問答・譬喩・挽歌と五分して編成。卷第十四は全卷東国民謡ともいふべき東歌で、前半は採録国別に分け、後半は国別にせず、雜歌・相聞・防人歌・譬喩歌・挽歌に類別。

卷第十五は特殊な卷で、前半は天平八年の遣新羅使をめぐる歌群、後半は中臣宅守と狹

野弟上娘子ののおとのかみのみをとめとの悲恋贈答歌群。卷第十六は「有由縁雜歌よしある」といふ見出しで、伝説を伴ふ歌や諧謔・機智の風変りな巻、また越中・能登の国歌えつちゅうのうた（民謡）や乞食者の諷刺詠ほがひびともこの巻末に収録。

卷第十七以下は俗に「大伴家持の歌日記」と呼ばれる程で、家持を中心とする歌や家持が伝聞してメモした歌を年月日順に記載。そのうち卷第二十中には、家持の採録した防人歌九十数首が一大歌群を形作ってゐる。

かう見てくると、全く雑然としてゐる。雑歌・相聞・挽歌は『萬葉集』の三大部類といはれ、テーマソングのやうに各巻に繰り返し出没してくるが、部類に閑せぬ巻々もあるから、何か別々の歌集を寄せ集めたやうな感じだ。

しかし、その雑然たるところが『萬葉集』の大きな魅力だ。原・森・丘・沼などが錯綜して続き、川を越すと、川の向うにまた別の姿の原野・森林・丘陵・池沼が現れ、時には岩石地・砂礫地さだにも出くはすといったぐあひだ。『古今集』以下が、隅から隅まで整備された人工庭園とすれば、『萬葉集』は、多少の人工的部分もまじへながら、大部分は未開拓の自然、何が出てくるかわからぬ自然、そんな感じだ。

しかし、一見雜然たる『萬葉集』も、各卷の卷頭には、卷頭歌にふさはしい重々しい作を据ゑ（卷第一は雄略天皇御製、卷第二は磐姫いはのひめ皇后御歌おほきさきのみうたといったぐあひに）、隠し味のやうに行き届いた配慮がなされてゐる。

そして、全二十卷の卷頭（雄略御製）と卷尾（家持の賀歌）とは見事に照応し、国学の先賢契沖けいおうちゅうも、その構成の妙を讚嘆したのであった。

四 雜歌・相聞・挽歌等について

雜歌・相聞・挽歌を『萬葉集』の三大部類といふことは前述したが、「挽歌」とは、葬儀の車を挽く歌といふのがその原義で、転じて人の死に関する歌（愛する人の死を悲しむ悼む歌、死に臨み自ら悲しむ辞世の歌等）をいふ。後世の勅撰集の哀傷歌に相当する。

「相聞」とは「往復存問」の意で、人と人との言問ひの歌である。従つて男同士の歌・女同士の歌でも、親しみの言葉をかはすのは相聞でいいわけだが、また事実、長皇子が皇弟に贈られた歌、坂上郎女さかのうえのいらつめが娘の坂上大嬢おほいらつめに贈つた歌、大伴田村大嬢おほともむらのが異母妹の坂上大嬢に贈つた歌、大伴家持と藤原久須麻呂との贈答歌も卷第四の「相聞」に収められてゐる。

る。また男女とはいっても、遣唐使の母がその子に贈った歌も、叔母の坂上郎女と甥の大伴家持との贈答も「相聞」に分類されてゐる。しかし、全体の上から見ると、このやうな歌は僅かで、大部分は男女恋愛の情を詠みかはしたものだ。また恋愛の情を歌ったものならば、

君待つと吾が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く（額田王、4、四八八）
 三熊野の浦の浜木綿百重成す心は念へど直にあはぬかも（人麻呂、4、四九六）

のやうに、恋愛の情を歌ったものならば、独詠歌でも「相聞」に入れてゐる。勅撰集の「恋歌」とはほ同じだと見ていい。

「雑歌」と書くと、いかにも「雑の部」といふ感じがする。分類した最後に、どこへも入れやうのないものを集めたみたいな名だ。ところが『萬葉集』では、開卷劈頭「雑歌」と出てくる。『萬葉集』を初めて披いた人は異様な印象を受けるであらう。

『萬葉集』の「雑歌」には、天皇国見の御製、行幸・行啓の折の歌、詔に應じての献上歌、宮廷の儀式・公宴の折の歌といったやうな、公的な歌がずらりと並ぶ。中には「挽

歌「相聞」のどちらにも分類することのできぬ私的な歌もまじってはゐるが、重々しい公的な歌が多いのに驚くのである。だからこそ三大部類の第一に「雑歌」が据ゑられ、雑歌・相聞・挽歌の序列は例外なく厳守されてゐるのである。

なほ、雑歌・相聞・挽歌はザファカ・サウモン・バンカと読むのが普通だが、鹿持雅澄の『萬葉集古義』では、クサグサノウタ・シタシミウタ・カナシミウタと読ませてゐる。『古事記』をフルゴトブミと読むやうなものだ。

この他、「譬喩歌」の名目が巻第三・巻第七などに見えるが、これは、読んで字の如く、自分の感情を他のものに事寄せて詠んだ歌、例へば、独り寝のさびしさを、

軽の池の浦廻往きみる鴨すらに玉藻の上に独り寝なく（紀皇女、3、三九〇）

と鴨にこと寄せて歌ふといったやうなもので、大部分は恋愛感情を歌つたものだ。「相聞」の一体と見ていい。

巻第七の譬喩歌は、更に「寄衣」「寄弓」「寄玉」「寄鳥」「寄山」などと細分類されてゐる。

「問答」といふ標目も時折見えるが、これも字の如くで、問の歌と答の歌とが一對になつてゐる。『古事記』には、男女間で、或はライバル同士の間で、問の歌と答の歌をやりかはす場面がしばしば出てくるが、そのやうな伝統を引くもので、鋭く相手に切り返すやうなところがある。

同じく贈答の歌でも、「問答」には機智の閃きひらめがあるのに対して、「和歌」と記された歌が数多く出てくる（これは分類標目としてではなく、題詞に出てくるだけだが）。後世、「和歌」といふとヤマトウタのことになるが（我々も通常、五七五七七の短歌を主とし、長歌なども含めて和歌と称してゐるが）、『萬葉集』では、「和歌」とは「和こたふる歌」であつて、相手の歌に対して唱和した歌である。機智で切り返すのではなく、まさに「和」といふ字義の如く、柔かく相手の気持ちに寄り添ふやうに答へた歌だ。（多少の例外はあらう）。

コタフルウタでも「報歌」「報贈歌」と書いたのは、「和歌」よりも幾分強い態度で答へたやうな感じだ。

巻第十一・巻十二は「古今相聞往来歌類」であると前述したが、それが更に「正述心緒ただにおもひを」「寄物陳思ものによせておもひを」「問答」「譬喩」などと細分されてゐる。「正述心緒」は「ただに心緒おもひ」

を述べ」で、

たらちねの母が手放れかくばかりすべなき事はいまだせなくに（11、二三六八）

と、母の手を放れてから、こんな苦しい、切ないことは初めてだと、恋の苦しみをうちつけに歌ったやうなもの。これに対して「寄物陳思」は「物に寄せて思を陳ぶ」で、

山ぢさの白露重みうらぶるる心も深く吾が恋ひ止まず（11、二四六九）

のやうに、山ぢさの葉が白露が重くてうなだれてゐるやうに、自分もとどめることのできぬ恋のためうらぶれてゐると、物に寄せて思を陳べたものだ。譬喩歌に近い歌だ。

鬱屈した激情が塞を破って一気に迸り出づる姿の正述心緒、逆に、やり場のない哀切な思が、囁目の草樹花鳥のささやかな揺らぎにも共感し、その自然と自分が渾然一体となつて歎く姿の寄物陳思、抒情詩の両面である。

この他、巻第十二には「羈旅発思」「悲別歌」などの標目が掲げられ、旅にあって人と思ふ歌・旅ゆく人に別るる歌を集めてゐる。その例を一首づつ挙げておく。

み雪ふる越こしの大山行き過ぎていづれの日にか我が里を見む（12、三一五三）

玉かつま嶋熊山の夕ぐれひぐりに独ひとりか君が山道やまぢ越ゆらむ（12、三一九三）

補記一 雑歌か相聞か

雑歌・相聞・挽歌と分類してあつても、理路整然と類別されてゐるわけではなく、雑歌の中に恋愛情調を帯びた作も配列されてゐる。それがまた『萬葉集』の複雑さを示して興味深い。額田ぬかたのおほき（女）王みと大海人皇子おほあまのみこの有名な贈答歌も、熱烈な恋情を歌ひながら、「相聞」でなく「雑歌」に配列されてゐる。それで、これは恋の歌ではなくて、公宴に余興を添へるための座興歌だったといふ説も出てくるわけだ。

補記二 倭歌・倭詩・日本挽歌

「和歌」は『萬葉集』では「こたふる歌」の意だと書いたが、ヤマトウタの意を表すため「倭」字を用ゐて「倭歌」と書いた例が巻第五に、「倭詩」と表記した例が巻第十七にある。いづれも漢詩を意識して、これに対してヤマトのウタであることを正面に打ち出し

たものだ。また山上憶良は巻第五で「日本挽歌」の語を使用したか、これは漢文で綴った文のあとにヤマトウタの挽歌であることをことわったものだ。「倭歌」「倭詩」「日本（挽）歌」は、後世の「和歌」のもとの姿だ。

五 名義と成立

『萬葉集』の名義については諸説があるが、その代表的なものとしては、多くの歌を萬の葉に譬へたものとする説、および「萬葉」は萬世、よろづ代を意味し、萬世までも伝えることを念願し、予祝したものとする説、あるいは天皇の萬世を祝福したものとする説がある。

『萬葉集』の編者、編纂事情、この二つは正確なことは不明である。古来、橋諸兄もろえが勅を奉じて撰したといふ説が行はれ、鎌倉時代には、橋諸兄・大伴家持共撰説が唱へられた。江戸時代になって、契沖は家持私撰説を主張した。

その後、『萬葉集』は全部が同時に成立したのではなく、前撰の巻、後撰の巻が複雑にまじり、勅撰の部も私撰の部もあるといふ考へ方がされてゐる。同じ巻でも、古く成立し

た部分と、後から追補された部分のあることも指摘されてゐる。

巻第一・巻第二の両巻は多分最初に成立した巻で、何々天皇御宇の標目のもと年代順に歌を配列した整然たる姿から、おそらく最古の勅撰集だったのであらうといはれてゐる。

巻第三は、第一・第二の補遺の巻といった感じだ。そのあとはさまざまで、巻第四は大伴一族を中心とした相聞歌巻。巻第五は大宰府長官大伴旅人と筑前守山上憶良を中心とした筑紫歌壇の巻。巻第十七から第二十までの最終四巻は「大伴家持の歌日記」といはれるくらので、家持が自分及び周囲の人々の作を年月日順に書きまとめた私的な歌集といつたぐあひだ。

『萬葉集』は幾層かにわたって編修された最後に、家持がいゆる歌日記四巻を追加してしめくり全二十巻にまとめ上げたのであらう。しかし、他の巻々にも大伴一門の歌は多いから、大伴家がかねてから集められてゐたものが基礎的資料になつてゐるのであらう。

巻第十九の末尾には、「この巻中、作者の名字を併せず、ただ年月所処縁起を録せるは皆大伴宿祢家持が裁作せる歌詞なり」といふ注がついてゐる。つまり作者の名を記さぬの

はすべて家持の作だと、家持が自分で注記してゐるのである。また家持の作に「拙懐」と記した個所がある。『萬葉集』成立の経緯はまことに複雑であるが、家持がその編成に最も深く関与してゐたことは誰の目にも明らかであらう。

大伴家持は越中守として五年間任地で精勵した。その公務の間にも、多分家持は『萬葉集』の編成増補に意を用ゐ、心を砕いてゐたであらう。越中国府が置かれてゐたのは現在の富山県高岡市伏木古国府の地。勝興寺がその国庁跡、伏木測候所が国守館跡と推定されてゐる。両地ともに家持の歌碑が建てられてゐる。国府背後の二上山には家持の銅像が建ち、伏木一宮多神社境内には昭和六十年大伴神社が創建され、家持を祀つた。家持がしばしば遊覧した布勢水海の旧跡、氷見市布施山山上の式内社布勢神社の背後には古くから小祠御影社があつて、家持を祀ると伝承され、里人に護持されて来た。かつて土屋文明はこの社に詣で「遠き世の守家持の御影まつり伝へ来りし心をぞ思ふ」「うづくまるばかりの祠松の下に此の里人の齋きたもてる」と詠んだ。眼下には水海跡の水田が広がり、颯々たる松風の音が萬葉びとの詩魂をひびかせてゐる。

第二章

活力みなぎる日の大朝廷

おほみかど

—— 萬葉宮廷歌のかがやき ——

一 卷頭歌、雄略天皇御製をめぐって

春光あふるる
雄略天皇
妻問ひの歌

『萬葉集』の卷頭を飾るのは雄略天皇御製である。「泊瀬朝倉宮御宇天皇」の標目の下、「天皇御製歌」として掲げられてゐる。

籠もよ 美籠持ち ふくしもよ 美ぶくし持ち この岳に 菜採ます兒
家さかな 名告らさね 虚見つ やまとの国は 押しなべて 吾こそ居れ
しきなべて 吾こそ座せ 我にこそは告らめ 家をも名をも (1、一)

『萬葉集』の中でとびぬけて古い歌だ。卷第二卷頭の「磐姫皇后御作歌」は「難波高津宮御宇天皇代」即ち仁徳天皇の皇后の御歌だから、雄略天皇よりもずっと古いことになるが、歌そのものの姿は雄略御製の方が遙かに古い感じだ。

「籠もよ、美籠持ち、掘串ほりくしもよ、美掘串持ち……」こんな歌ひ出しは『萬葉集』長歌中、他に類例のない詠みぶりだ。音数も、三・四・五・六と揃ひだ。「籠よ、その美しい籠を持ち、フクシよ、その美しいフクシを持ち……」と、岡に春菜を摘む少女に向かつて親しく語りかけ、たたみかけてゆく言葉の綾が、民謡的・牧歌的に、美しくのびやかに響く。そして「家きかな、名告らさね」（家を聞きたいものだ。名を名のりなさい）と優しい言問ひに続いて「そら見つ、やまとの国は、おしなべて我こそ居れ、敷きなべて我こそ座せ」と、われこそは国家統治者であるとの、堂々たる宣言におし移り、まぶしいほど威光を帯びた求婚の辞だ。ひたすら羞ぢらひ、恐縮する少女に対し、また声を柔らげて「さあ、家をも名をも言ひなさい」と言ひ寄る。牧歌的などかさ、統治者としての威勢とが明るく一つに触れあって、美しくおほらかな韻律をかなでてゐる。まことに不思議な一首だ。

「やまと」の枕詞も、この場合は「あきづ嶋」よりも「しき鳥の」よりも、「そらみつ」の方がふさはしく、力強く生きてゐる。「空見つ」と解しても「空満つ」と解しても、天空のまぶしさを連想させ、ミツの語調も強くひびき、統治者の威光を直感させるのだ。

1 卷頭歌、雄略天皇御製をめぐって

『古事記』『日本書紀』ともに、雄略天皇が野道山道で少女に言問ひされた説話と歌謡を幾篇も載せてゐる。古代の人々は、雄略天皇のイメージをこんな風に思ひ描いてゐたのであらう。その記紀の雄略天皇像が『萬葉集』の巻頭に最も美しく結晶したので。

冬が終り、さんさんと春の光ふり注ぐ岡に菜を摘む少女、そこに臨みます「八隅知し大君、高光る日の御子」、そのめでたい歌を、開巻第一に掲げたのだ。まさに『萬葉集』の巻頭を飾るにふさはしい一首だ。

ワカタケル大王と鉄劍銘

雄略天皇とは後世（奈良時代後期？）になつてからの漢風諡号で『古事記』では大長谷若建命、『日本書紀』では大泊瀬幼武

天皇と記されてゐる。シナ（中国）の『宋書』順帝の昇明二年（四七八）に記載された「倭王武」（いはゆる倭の五王の最後の王）は多分雄略天皇のことであらうといはれてゐる。

「幼武」の「武」を漢訳して「武」としたのであらうといふ。

昭和四十三年、埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した鉄劍に百十五字の金象嵌の施されてゐるのが、昭和五十三年発見され、史学界・考古学界を驚かした。百十五字の銘文中に「獲加多支鹵大王」とあつて、ワカタケル大王と解説された。

明治六年、熊本県菊水町江田の船山古墳から出土した銀象嵌大刀に「獲□□□齒大王」(三字判読不能)とあるのを、従来「蝮宮瑞齒大王」と推定し、反正天皇のこととされて来たのであったが、船山古墳出土鉄刀の銘文と対照して、これも「獲加多支齒大王」即ち雄略天皇と考へるべきだと訂正されるに至った。船山古墳金象嵌大刀には「杖刀人」、船山古墳銀象嵌大刀には「典曹人」と記され、前者は武官、後者は文官と推定された。両刀は一對のものかともいはれ、雄略天皇から東西の有力豪族に下賜されたのであらうといふ。といふことは、雄略天皇御代には、大和朝廷の版図が東は関東、西は九州にまで及び、日本がほぼ統一されてゐたことの重要な物証とも考へられるに至った。(少数の反対説はある)。

そのやうな画期的な意味を持った大王でおはしたから、『萬葉集』は、その天皇の御製と伝誦された歌を巻頭に据ゑたのであらう。『日本靈異記』(平安初期、薬師寺の僧景戒の著、日本最初の説話集)もまた雄略天皇の説話を巻頭に掲げてゐる。古代の人々が、いかに雄略天皇を重要な天皇と考へてゐたかがわかるわけだ。

難波宮を讀へた家持の長歌に「かけまくも あやにかしこし 神ながら わご大君の うち靡く

春の初め」(20、四三六〇)と歌はれてゐるが、まさにこの卷頭御製は「わご大君のうちなびく春の初め」の歌だ。

上から下への

敬語表現

この御製中、「菜摘ます子」の「す」は敬語。「名のらさね」の「さ」も敬語。直訳すれば、「菜を摘んでいらっしやる子」「名を名のりなさいよ」とならう。丁寧な物言ひである。「たまふ」のやうに重々しい敬語ではなく、

「す」は軽い敬語ではあるが、それにしても敬語は敬語だ。

『古事記』にも、やはり雄略天皇御製として、大御酒おほみきを捧げ献こる春日の袁せ杼ど比売ひめに対して、「みなそそく 臣おみのをとめ ほだり取らすも ほだり取り 堅く取らせ 下堅く 弥や堅く取らせ ほだり取らす子」と「取らす」「取らせ」の敬語形が使用されてゐる。(古代歌謡では、作者と記されてゐる人が必ずしも眞の作者でないかもしれぬ。猪のうたき(怒号)を恐れ、木に登って難を避けた歌が『記』では雄略御製、『紀』では舍人とねり(従者)の歌となつてゐるやうに、同じ歌が記紀で作者を異にして伝へられてゐる場合が多々あることからも、伝承に揺れのあつたことがわかる。それ故、この歌の作者が雄略天皇でなく、従臣であつたかもしれぬが、それにしても、このやうな「臣のをとめ」に対して敬語を用

ゐた歌を、雄略御製と伝へて怪しまなかつたといふ事實は、古代日本人一般の心意を示すものである。

大伴家持と越中娘

大伴家持も、越中の無名の娘たちを「をとめらが 春菜つまずとく
れなゐの 赤裳もの裾の 春雨に にほひ湿ぬづちて」(17、三九六九)と
詠んでゐるが、ここにも「春菜つまず」と敬語を用ゐ、また国内巡行中、

雄神河をくれなゐにほふ少女等をとめらし葦附あしつき採ると瀬に立たすらし(17、四〇二二)

と詠み、やはり敬語を用ゐて「立たすらし」と表現してゐる。大きな権力を持って地方行政の頂点に立つ越中国長官が、名もなき田舎娘いなかの動作を敬語をつけて詠んでゐるのである。雄略天皇御製の場合は、相手に呼びかける言葉であつたが、家持の場合は、その少女たちに直接話しかけての歌ではない。そのやうな歌にかくの如く敬語を用ゐてゐるのである。

なほ、「をとめらが春菜つまず」は、家持が越中守として赴任してから作つた歌の中で、越中在地の人物を詠み入れた最初のものである。逆にいへば、『萬葉集』に登場する最初

の越中女性である。赤い裳（スカート）の裾を春雨にしとど濡らして菜を摘む娘である。巡行中の歌に歌はれたのも、雄神川の河面に赤く映じながら、瀬に下り立って葦附（食用水生植物）を採集する越中娘である。なほ紅は家持の好みくれなゐの色であった。

雄略御製・家持の歌等に見られるこれらの例は、日本語の敬語について考へる上で重要かつ興味深いことである。

なほ家持は、故郷奈良に残して来た家族を思ひやうの作歌中、「はしきよし妻のみことも（中略）嘆かすらむぞ」（17、三九六二）と、妻を「みこと」と敬ひ、「嘆かすらむぞ」と敬語づけにしてゐる。「フエミニスト家持」では済まされぬ問題で、おしなべて古代日本において、清純な少女、特に山仕事・野仕事に従事する少女に対して、特別の心情があつたことを思はせるのである。近代に至るまで、田植に従事する女たちは盛装した。泥まみれの汚い作業であるに拘らず、晴着を着用した。農作仕事は神に仕へる聖なる行事とされ、これに従ふ早乙女さきをとめも聖なる女とされたのである。また家刀自いへとじ（一家の主婦）は、その家の祖神祭祀をつかさどる聖なる人として尊ばれた。そのことが思ひ合はされるのである。

二 国原と国見

—— 舒明天皇御製をめぐって ——

国見の御製と

雄略天皇御製につづく二番目の歌は「高市岡本宮御 宇 天 皇 代
おきながたらしひるぬか

息長足日廣額天皇」の標記のもと「天皇、香具山に登りて国を望みましし

国見の意義

時の御製歌」、すなはち舒明天皇が香具山に登って国見された御製だ。

やまとには 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば

国原は 煙立ちたつ 海原は かまめ立ちたつ うまし国ぞ あきづしま や

まとの国は（一、二）

大和の聖なる山として畏敬されて来た香具山に登って国見されたのだ。国見とは、本来は土地の首長が所領の山に登って、領域を見渡し、国土の繁栄を予祝する、重要な宗教的

政治的行事であった。古くは、土地土地の首長がそれぞれの地で行って来たが、やがて大和朝廷によって総括され、天皇が毎春執り行はれる饗礼になったのだといはれる。

政治的意義を失った地方地方では、単に高尨に登って壮大な眺望を楽しむ物見遊山ものみあそび的・観光的・レクリエーション的要素の濃い国見の姿が残った。卷第十には「雨間あまあけて国見たにもせむを故ゆさとの花橋は散りにけむかも」(一九七一)といふ作者不詳歌がある。卷第三には丹比国人たにひのくにびが筑波山に登って「神代より 人の言ひつぎ 国見する 筑波の山」(三二八二)と歌ってゐる。卷第九には、高橋虫麻呂が秋の筑波山に登って眺望を楽しみ憂うれさを晴らす歌(一七五七)、同じく虫麻呂が大伴卿おほとも(大伴旅人か)を案内して筑波山に登り「国のまほらを、つばらかに」見て遊び楽しむ歌(一七五三)がある。筑波は東国の代表的な国見の山であったが、この他全国各地に国見山とか国見峠といふ地名が残ってゐて、古代の面影をとどめてゐる。

国原と海原

舒明天皇が国見されると、国原くにほらには「煙立ちたつ」、すなはち人家の炊煙が盛んに立って生活の賑はひを示してゐる。人家の炊煙ばかりでなく、地の果かげらふに陽炎かげらふがゆらめき、ちらちら光りかがよつてゐたであらう。それも広義の煙で、これまた国土に生氣が満ち溢れ、活気みなぎつてゐるしるしだ。

海原うなばらには「鷗立ちたつ」、カモメが群れてしきりに舞ひ立ち、国土海辺の豊かさを示してゐるといふのだ。大和の香具山から外海は見えぬであらう。この海原は香具山の麓にあった埴安はにやすの池を海原に見立てたのだといはれる。古代には埴安池は相当大きな池だったといはれるが、それにしても盆地の中の一湖沼だ。

後世の庭園などで、築山を作って富士山に見立てたり、池を造って琵琶湖に見立てたりすることがよく行はれた。「見立て」とは、さうでないものを、心の目で、大きな特別のものに見なすことだ。天皇は、単なる大和盆地の首長ではなく、「大八島国しろしめす」「八隅やすみ知し大君」である。渺たる埴安池を通して、帝は、大八島国の四周にめぐらした大海原をありありと見そなはしたのだ。

「煙立ちたつ」「鷗立ちたつ」のリズムはまことに心地よく、読む者の心も揺れ立つ。天皇は、国土の繁栄、国力の充実を見そなはして、喜び、満足され、「うまし国ぞ、あきづ島、やまとの国は」と国土讚美の一首を力強く歌ひ収められた。

「うまし国」は美しい見事な立派な国の意だ。後世「うまし」は食物の美味のことだけ言ふやうになったが、古代では、すべて結構なもの・立派なものをほ

め讀へた言葉であった。『書紀』には「うまし鏡」「うまし道」「うまし小汀をばま」などの用例がある。貴人を「うまびと」といふのも「うまし」の語幹の「うま」を「ひと」に冠したのだ。

富山県の方言にはこの言ひ方が残つてゐて、健康さうな幼児を見て「なんちう、うまそな赤ちゃんだいね」とほめ、頑丈な体格の人を見て「うまそな体だね」と感嘆したりする。形容動詞「うまさうな」「うまそな」の形が主に使はれてゐるが、これを更に形容詞化して「うまそい」ともいふ。赤々とした幼児の頬を「うまそいホベタ」とほめ、また私が終戦後苦心して『大字典』を手に入れた、机上に備へてゐたら「うまそい辞典があるね」と羨しがられたことがあつた。萬葉の古語が多少姿を変へながら地方に息づいてゐる一例だ。(しかし、若い世代の人々の間で、このやうな方言を使はなくなつてゆく傾向があるのはさびしいことだ)。

大和にかかる枕詞

「秋津島あきづしま」は「やまと」にかかる枕詞。雄略天皇御製には「虚見つきみ」が用ゐられてゐた。『萬葉集』全巻を通して「あきづしま」は五回、

「そらみつ」は七回(「そらにみつ一回」を含む)、「しきしまの」が七回、「日の本の」が一回。枕詞といふのは、土地を讚める呪詞から発生したといはれ、『常陸国風土記ひたち』などに

その古い例がいくつも記されてゐる。

『日本書紀』の伝承によると、饒速日命ニギハヤヒが天ノ磐船イハネフネに乗って天空からこの国土を見下ろし飛び降くだったので、空見やまとつ日本の国といふと。また神武天皇が腋上わきがみの噺間丘ハシマタから国見して「蜻蛉あきづの臂となめ帖」の形に似てゐるといはれたので秋津洲の名が起こつたといふ。また雄略天皇吉野遊獵の時、天皇の腕に食ひついた虻あむを蜻蛉が退治してくれ、天皇が蜻蛉をほめて「あきづしまやまと」と歌はれたと伝へてゐる。『古事記』にも同じ伝承を書きとめ、歌詞には小異があつて「かくの如 名に負はむと そらみつ やまとの国を あきづ島とふ」となつてゐる。

「そらみつ」は天空につながる悠久のひびきを持ち、人麻呂はこれに創意を加へて「そらにみつ」として使用し、大和をめぐる青垣の山々が天空に群がり満ちたイメージを持たせてゐる。

「あきづ島」の名は、秋豊かに五穀みのり、その豊穰の田畑の上に赤蜻蛉群れ飛ぶイメージを持つてゐる。『古事記』の国生み伝承では、本州の名を「大倭豊秋津嶋」といひ、その亦の名を「天の御虚空みそら豊秋津根別とよあきつねわか」といふと記してゐるが、この亦の名には「そら見

つ」と「あきづ島」の両語が織り込まれてゐる。

崇神天皇の宮はシキ（師木・磯城）、欽明天皇の宮はシキシマ（師木島・磯城嶋）にあった。稲荷山古墳出土鉄剣銘中の獲加多支鹵大王の宮も斯鬼宮と刻まれてゐる。歴代天皇の皇居に深くかかはった地名であった。『古事記』記載の御歴代の宮名を見てゆくと、「敵火の白禱原の宮」「禪向の日代の宮」「輕嶋の明の宮」「難波の高津の宮」等々すべて何々の宮の形で現されてゐるが、欽明天皇の場合に限って「師木島の大宮」の形。「大宮」とあるただ一つの例だ。シキシマがヤマトの枕詞になつた深い思はれる。なほ、シキシマとは、岩石をめぐらして築き固めた、堅固で神聖な区画の意。今日も、伊勢皇大神宮はそのやうな岩石をめぐらし築き固めた上に建てられてゐる。古代の師木島の大宮も、かくの如くであつたかと偲ばれる。これを押し及ぼして、ヤマト全体を神聖堅固な島根と見立てたのが「しき島の日本」だ。

後世、敷島と書くが、上代特殊仮名遣上、シキシマの城・木は乙類のキ、敷（志岐）の岐は甲類のキ。従つて、天皇の敷きます島の意と解するのは誤りである。

国文講釈で、枕詞は意味のない言葉として解釈せず、とぼしてゆく人があるが、その短

い語に、さまざまな呪的イメージを齎いたひこめ、文学的な美しいイメージを重ね加へ、一首の味はひを深くしてゐるのが枕詞だ。「うまし国ぞ、秋づ島やまとの国は」、そこには、秋豊かに穰みる国土を予祝する心が力強くこめられてゐる。大きな感動が枕詞に宿ってゐる。

大和盆地から
「大和には 群山あれど」の歌ひ出しでは、その大和は奈良盆地の大和であった。歌ひ進むにつれて視界は無辺に拡大し、「海原はかまめ立ち

日本国への拡大

たつ」あたりから日本国の意の大和に拡がってゆく。まさに日本国しるしめす天皇の御製である。

なほ、「煙立ちたつ」の語から、おのづから連想されてくるのは、仁徳天皇にまつはる伝承、「天皇、高き山に登りて、四方よしもの国を見て詔らししく、国中くにうちに烟発けぶりたたず、困まみたる窮きつし」の御歎きである。そして三年間の免税によって「後に国中を見たまへば、国に烟満まてり」の御欲びである。舒明天皇は、その遠みつ御祖みおや仁徳天皇の故事を思ひうかべながら、弾むやうな歌詞で「国原は煙立ちたつ」と詠まれたのであらう。

雄略・舒明両御製 巻頭の意義

『萬葉集』はその巻頭に雄略天皇御製・舒明天皇御製を併せ掲げ、全篇の序曲とした。その意義はまことに深い。

雄略天皇は第二十一代、舒明天皇は第三十四代、その間十三代百五十年ほどの開きがある。萬葉の初期から盛期にかけて活躍されたのは、天智・天武・持統の諸天皇とその后妃たち皇子たちであるが、天智・天武両帝とも舒明天皇の御子で、持統・元明天皇は御孫。文武・元正天皇は御曾孫。聖武天皇は文武天皇の御子。これらの帝のもとで萬葉の花畑は百花燎乱くわいれんと咲き盛った。従って、萬葉時代の初祖とも申上ぐべきが舒明天皇であられた。雄略天皇が日本の統一を達成された偉大な天皇として、とびぬけて古い。その御製をまづ巻頭に掲げ、これに続いて、密度の濃い萬葉時代の始祖としての舒明天皇の御製を並べて載せたといふわけだ。(この両御製巻頭掲載の意義はほほ学界の定説)。

聖山 天の香具山

天香具山は聖なる山であった。『日本書紀』は、神武天皇大和平定の時、天皇、天つ神の夢告によって、ひそかに椎根津彦おとづかと弟猾おとろかをこの山に遣はし、山の埴土はにつち(粘土)を取らせられた。二人は敵陣を欺いて突破し、山に到り、その土を持ち帰ることに成功した。天皇大いに悦び、この土で八十平瓮やそひらか・天の手扶たたくじり・敵瓮いっぺなどの神聖な土器を作り、丹生にきみの川上で天神地祇を奉祭され、つひに平定の大業を達成されたと伝へてゐる。

後に、崇神天皇の時、武埴安彦が叛乱を起こすのに当って、その妻がやはりひそかに天香山の土を取って、「これ、倭の国の物実」と称して呪術を行なったといふ。香山の土は大和全国の領有を左右する靈力を備へてゐると信じられてゐたのだ。

風土記逸文は、かつて天上、高天原にあった天香山が地上に降下して大和の香山になったと伝へてゐる。それ故、香山に「天」を冠して天ノ香山といふのだ。『萬葉集』にも「天降りつく天の香山」（二五七）とも「天降りつく神の香山」（二六〇）とも詠まれてゐる。天から地上に降下した神聖な山とされたのだ。そのやうな神山であつたからこそ天皇の国見される山として重い意味を持ったのであらう。

（『古事記』の天岩屋戸ノ条には「天香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて」「天香山の天の朱桜を取りて」「天香山の五百つ真賢木を根こじにこじて」「天香山の天の日影を手次に繋けて」「天香山の小竹葉を水草に結びて」とくりかへし天香山の名を掲げ、その神山の神聖な樹木を用ひたことを強調してゐる。これは高天原、即ち天上界の天香山であるが、その神性を継承したのが大和の天香山なのであつた。）

昭和十五年春、中学生の時、私は母・弟・妹とつれだつて伊勢路・大和路を巡つた。母と妹を籠

の駅（何駅であったか忘れたが）に待たせ、私と弟は香具山に登った。海拔一五二メートルの低山だから、わづかの時間で頂上に達したが、木々が茂ってゐて、国原を見はるかすことのできなかったのは、予期に反し、残念だった。会津八一も「かくやまのかみのひもろぎいつしかにまつのはやしとあれにけむかも」と詠み、香具山が松林となつてしまつたことを歎き、「いにしへをともらひかねていきのをにわがもふころそらにただよふ」と歎息してゐる。

国原の語と近

代短歌の用例

なほ、国原といふのは、単に原とか野といふのと違って、国の力の強く張り満ちた大地だ。しかも現代語の「国土こくど」のやうに抽象的でなく、いきいきと目に見える具体的な原だ。『萬葉集』で国原の語が使用されたのは、この舒明御製と、中大兄なかのおおまへ（天智）御製の「伊奈美国原いなみ」のただ二例。初期萬葉らしい充実した語だ。多分「国見」と「国原」はセットになつた語であつたらう。

『古今和歌集』以下、代々の勅撰集には国原の用例は多分無いはずだ。近代に至つて、萬葉調復古の波に乗つて、かなり使用されたが、伊藤左千夫さちむすの「うまし国越の国原ときは木も冬木もなべて新みどりせり」（明治三五。東宮御巡遊）、斎藤茂吉の「日の皇子ひのみこのいま

したまへばみめぐみの雨にうるほふうまし国原」(大正八。奉迎摂政宮殿下)の如く、行幸啓に関する作が目につくのは、この語に備はった性格を示すものであらう。ただし左千夫・茂吉の歌ともに儀礼的に過ぎて、感銘は浅い。

会津八一の「うなばら を こえ ゆく きみ が まながひ に かかりて あをき
やまと くにはばら」(大正九。豊後海上懐古)は神武天皇を偲んでの作。釈迢空(折口
信夫)の「大倭国原の歌」八首(昭和一五)は題詞にのみ国原とあって、歌詞には国原の
語は用ゐられてゐないが、「櫃原の殿戸ゆ見ればとりよろふ群山深き冬枯れの色」などと、
やはり国見の伝統を思はせる作だ。

長塚節「春霞いたち渡らひ吾妻のやうまし国原見れど見えぬかも」(明治三五。筑波山
にて)、土屋文明「ひさかたの雪の国原つらぬきて遙かなる河ここによどめる」(千曲川)、
など、私のメモから二三抜いておく。

福本日南の明治三十一年の歌に「唐のうまし国原」「亜細亜国原」の語、伊藤左千夫の
明治三十四年の歌に「ひむがしの亜細亜国原」の語が見えるのは、明治日本のアジア大陸
に対する積極的関心を思はせる用例だ。

国原の語を用ゐた歌で私の愛誦する三首を左に引く。

雪残る峽路越え来し眼に沁みて春日あまねき高志の国原（木俣修）

これは昭和九年、作者が高山線の列車に乗って春浅き神通峽谷を北上、富山高校へ赴任した時の作。峽口から突如開けた越中平野には、目に沁みるまで春の光が照り満ち、充実した力を全身に感じて「高志の国原」と詠んだのだ。

高山ゆおし下り来てひろごれる雪かも満てる富山国原（川出麻須美）

「呉羽山にて望見」と注。呉羽山は富山市の西に続く丘陵。冬、その山上に登って見ると、立山山脈・飛驒山地などの高い山々も、富山平野も、一望の雪だ。雪が高山から富山の平野までおし下って来て、ひろがり満ちみちてゐる感じた。大正七・八年富山在任中の経験を想起しての作。

見さくれば国原南傾きて八十河我にむかひて流る（三井甲之）

山道を登ってゆくと、眼下に甲府盆地が開け、その国原全体が大きく南に傾斜し、数多くの川がきらめき光ってゐる。その川が皆自分の方に向かって流れてゐるのだ。壮大な歌だ。明治三十八年「四尾連湖に遊びて作れる歌」の一首。伊藤左千夫が「小生を驚かしたるは三井甲之君・胡桃沢勘内君に候。その製作の手腕は偏に先進を押し申候。如此無造作に進歩するものにやと実に呆申候」(アシビ二巻一号消息)と讃歎した時期の作だ。

萬葉の国原の語が後世どのやうに活用されたか、その一端をかいまみたのである。

三 大和朝廷と白村江の敗戦

—— 熟田津の船出と三輪山離別歌

(御製説と額田王代作説をめぐって) ——

熟田津の船出

齊明天皇六年(六六〇)冬十月、百済国(くだらのくに)が使を日本朝廷に遣して「唐が侵攻して来て、まさに百済は滅亡に瀕してゐる」と実情を報じ、救援を切望した。友好国の危急を聞き、朝廷は援軍派遣を決意し、宮を難波に遷して準備を進め、翌七

年正月、日本の船団はともづなを解いて難波を発し、瀬戸内海を西進、伊豫の熟田津（まきだつ）に寄港、三月には北九州の娜大津（なほつ）（博多）に着き、五月、朝倉宮に本營を置いた。

五十八歳の女帝斉明天皇は、古伝承の神功皇后（じんこう）の如く、全軍を統率しての颯爽たる御親征であった。中大兄皇子（なかのおおえ）（後の天智天皇）、大海人皇子（おほあま）（後の天武天皇）以下、朝廷の首脳すべて征旅に従事、いはば大和朝廷は臨時に九州に移転したのであった。

その熟田津（愛媛県松山市付近）滞在中、額田（ぬかたの）（女）（おな）王（きみ）の詠じた一首が『萬葉集』巻第一に取められてゐる。

熟田津（まきだつ）に船乗り（ふなの）せむと月待てば潮も叶（かな）ひぬ今は榜（こ）ぎ出（いで）な（八）

夜の船出には月光と満潮が必要だ。出航準備を整へて月の出を待ってゐると、月も昇り、期待通り潮も満ちて来た。さあ今こそ出航だ。榜（こ）ぎ出して行かう、といふ歌だ。「叶（かな）ひぬ」と確信を噛みしめて、ぐっと息をのみ、「今は榜（こ）ぎいでな」と一気に吐き出した。澤（おも）久孝博士は、花田比露思（ひろし）の「悠揚迫らず、堂々として王者の風格」といふ評を引いて賛意を表し、「語勢まことに天皇の御製たる事を思はしめる」と論評した。斎藤茂吉も「一

首の声調大きくゆらいで古今稀なる秀歌」と讚へた。

この歌には左注がある。山上憶良の『類聚歌林』るじゆりかりんには、この歌を齊明天皇の御製としてあるとの注記である。一行中の一女性歌人の作とするよりも、全軍に号令する王者の作とする方がふさはしい風格の歌だ。だから澤潟博士も、天皇御製とほぼ断定してゐる。

「いでね」とすると、「ね」は他者に希望する助詞で、「榜ぎ出しなさいよ」と、よそよそしくなるが、「いでな」の「な」は自らの意志・願望を表はす助詞で、ここでは、自らの意志を中心にしなから、他を率ゐてゆく気迫がみなぎってゐる。

それで齊明天皇御製説も捨て難いが、近年、額田王が天皇の意を体し、天皇になり代つての作、それだから作者に両伝を生じたのだといふ説に賛同する人が多い。伊藤博氏もこの説に立ち、「一声のもとに大船団を動かしたのは、額田王の全身によりついた天皇の魂であった」と論評してゐる。

（大船団の夜の船出など、そんな危険なことはありえないとして、熟田津滞在中の舟遊びの歌といふ説もあるが、この一首に漲る気迫は、遊覧の歌とは到底思はれないのである）。

『萬葉集』には「額田王歌」とあって、『類聚歌林』に「御製」とした作がこの他にも二、三首

あつて、いづれも、王が天皇に代つて作歌したのであらうといふのが通説である。萬葉初期の代表的歌人として、額田王の存在はまことに注目すべきである。

斉明天皇崩御

朝倉宮あさくらのみを構へたのは五月であつたが、不吉な事件が頻発し、七月には斉明天皇俄かに崩御された。まさに古伝承の仲哀天皇の急崩を想起させる大事件であつた。天皇の御遺骸は海路、難波へ、難波から大和へ帰還された。御喪舟みさふねが港に停泊したとき、中大兄皇子は、

君が目の恋こほしきからに泊はてて居てかくや恋ひむも君が目を欲ほり（日本書紀）

と詠んで母君を哀慕された。

「昭和四十六年六月、北九州で古事記学会の大会が開かれた時、夜久正雄氏はぜひ朝倉宮跡を尋ねたいと言はれ、私もお伴をして、宮跡伝承地の恵蘇えそ八幡宮に参拝し、斉明天皇を偲び奉つたことであつた。夜久氏はその後『白村江の戦』（国文研叢書 No. 15）を著述された。」

斉明天皇は崩ぜられたが、皇太子中大兄皇子が喪服のまま称制しょうせいされ、百済救援の軍政は進められた。（即位せずして天皇の政務を執り行はれることを称制といふ。正式に即位さ

れてはゐなかつたが、便宜上、天智天皇元年とも称してゐる。

白村江の敗戦

天智称制二年（六六三）八月、日本・百済連合軍の艦隊は白村江はくすきのえに大唐の艦隊と決戦し、たちまちにして大敗した。日本の将村市田来津えちのたくつは「天を仰ぎ

て誓ひ、齒を切りて嘔り、数十人を殺し」奮戦して壮烈な最期を遂げた。（後年の壇の

浦合戦における平知盛・平教経の最期（『平家物語』）を思はせる記述だ）。

百済は亡び、敗残の軍は日本へ逃げ帰り、百済の王族その他亡命者も共に日本に難を避けた。日本最初の対外大敗戦であつた。

敵地に取り残された大伴部博麻おほともべのひろまが、祖国のために種々画策し、三十年後の持統四年（六九〇）やつと帰国し「尊朝愛国」と嘉賞された逸話は、大東亜戦敗戦後、三十年間グラム島に潜伏した横井上等兵・小野田少尉を思はせる話だ。

勝に乗じて、唐・新羅軍しらまが日本本土に進攻してくる危険を感じ、対馬・壹岐・筑紫つくしに防人を配備し、烽を設置し、筑紫には水城みづきを築き、翌四年には長門ながとにも築城、筑紫には更に大野城・椽城きの両城を築き、国防体制を固めた。

六年には都を近江に遷したが、これも万一の敵軍来攻を慮つての遷都かともいはれてゐる。

る。その後も、大和・河内の境の高安城築城、讃岐の屋嶋城、対馬の金田城などを固め、防備には念を入れた。

白村江敗戦こそは初期萬葉の重要な史的背景であった。萬葉末期の防人歌もまたこの防備体制に関連して生み出されたものだ。白村江の戦ひの『萬葉集』における意義は実に深く大きい。

三輪山離別歌

都が畿内を出て、「天さかる鄙」近江に遷された時、額田王は大和の鎮め
の山三輪山に名ごりを惜しみ、長歌一首短歌一首を詠んだ。

味酒 うまさけ 三輪 みわ の山 あそ 青丹吉 あそよし 奈良の山の あそ 山の際に あそ い隠るまで あそ 道の隈 あそ
い積るまでに あそ つばらにも あそ 見つつ行かむを あそ しばしばも あそ 見放けむ山を あそ
情なく あそ 雲の あそ 隠さふべしや（一、一七）

反歌

三輪山をしかも隠すか あそ 雲だにも あそ 情あらなも あそ かくさふべしや（一、一八）

神山に尽きぬ名ごりを惜しむ思ひが切々たる息づかひとなつて、この長歌に波打つてゐる。「情なく 雲の 隠さふべしや」無情にも雲が隠すとは何事ぞと血を吐くやうな絶叫である。その反歌は長歌の内容を要約して「雲だつて心があつてほしい。そんなに隠していいのか」と呼びかけてゐる。「三輪山をしかも隠すか」「雲だにも情あらなも」「隠さふべしや」と一首三文。初期の短歌にしばしば見る形だ。しかし後世の一首二文構成の歌のやうに、因果関係を前半・後半に分けて対比させる理知的構成ではなく、一筋の思ひを息せくやうに畳みかけてゆく、直情吐露の詠風だ。

この歌にも左注があつて『類聚歌林』の天智天皇御製説を引用してゐる。遷都に当り、三輪山見をさめの地点で行幸の駕をとどめ、大和国の鎮めの山に対する別離の儀礼が敷衍されたものであらうか。その時、帝の意を体し、それ以上に額田王自身の三輪山思慕の熱情をこめて歌つたのがこの歌であらう。だから、天智御製であつて同時に額田王作歌であつていい。熟田津（じやうたつ）の歌と同じケースだ。

かくて遷都された近江の大津宮は、天智天皇崩後、たちまちにして壬申（じんしん）の乱で焼け亡び、それがまた人麻呂・黒人（くろひと）の近江荒都哀歌を生み、大乱に活躍された高市皇子（たけち）の英姿は

『萬葉集』最大の長歌（高市皇子尊たけちのみこのみことの城上きのへのあらかののみや殯宮ひなみやの時、柿本人麻呂作歌。2、一九九―二〇一）に怒涛の如きリズムで映し出されてゆく。萬葉の歌から、大地をとどろかす古代史の足音を聴きとめねばならぬのである。

神山三輪山

三輪山は御諸山みもろともいひ、海拔四六七メートル、円錐形の美しく青々とした山で、大和朝廷守護の神山として崇められた。『書紀』の伝承では、崇神天皇が皇嗣を決するため、二人の皇子に夢を見させられた。二皇子潔斎して寐

についで

に就き、各夢を見たが、兄豊城命とよぎのみことは三諸山みもろに登って東に向き、八たび槍ほこをふるひ、八たび刀撃たちうちした夢。弟活目尊いくめのみことは三諸山みもろに登って縄を四方にめぐらして粟を食む雀を逐おふ夢であった。そこで豊城命には東国を治めさせ、活目尊には天位を継いで四方に君臨させられたといふ。この伝承を見ても、三諸山（三輪山）がいかに大和朝廷にとって重要神聖な山であったかがわかるのである。

（なほ、この伝承で、四方に縄をめぐらして雀を追ひ殺物を守る農耕的平和的行為によって天皇のお仕事を象徴し、刀槍を振るふ軍事的行為は、後世風に言へば、征夷大將軍的な仕事として區別されてゐる点も興味深い）。

三輪山の山麓一帯には、崇神天皇陵・景行天皇陵、更に倭迹々日百襲姫命（孝靈天皇の皇女）の箸ノ墓などが点々と列なり、神山と朝廷との深い関係を思はせる。『古事記』の伝承では、出雲の海に寄り着いた神霊を、大國主神が遙か大和のこの三諸山に寄ひ鎮めたといふ。神名を大物主神と称し、いくつもの神婚伝承が伝へられてゐる。社名を大神神社といひ、今も拝殿のみあって、本殿なく、山そのものが神の鎮ります聖域とされ、神体山の古い姿をとどめてゐる。

禁足の山であるが、昭和三十八年、私は神社で許可を得、清めの木綿襦を掛けて登拝した。山中の岩石累々たる処が神聖な磐座であらう。米・酒・鶏卵などがお供へしてあった。神殿の気満ちた山を下ってくる時、天を突く巨木が、風も無いのに激しい音を発し、その不思議な音が陽に徹り、心魂にひびき、私は恐れをのく思ひで急ぎ下ったのであった。

「味酒」は美味な酒の意で、三輪の枕詞。この神は古くから酒の神としても信仰されて来た。「うまさけ」と四音の形が最古形であらう。「うまさけを」の形がこれに次ぎ、更に「うまさけの」ともいった。三形とも『萬葉集』に使用されてゐる。三輪の里を歩き、杉玉を吊した古風な酒屋の軒を仰ぎ、この枕詞をしみじみと味はひかへしたことであった。

四 豊旗雲の夕映え

—— 天智天皇御製 ——

三山妻争ひの伝承

中大兄なかつのおほえ（後の天智天皇）の三山歌

高山たかやは、雲根火うねびををしと、耳梨みみなしと、相諍あひらそひき、神代かみよより、かくにあるらし
古いにしへも然しかにあれこそ、虚蟬うつせみも、媪つよを、あらずふらしき（一三）

反歌

かく山と耳梨山と相あひし時立ちて見こに來いし伊奈美国いなみはら（一四）
わたつ海みの豊旗雲とよはたぐもに入いり日ひさし今夜こよひの月夜つくよ清明あきらけくこそ（一五）

女山の香具山が男山の敵火山に惚れこみ、耳梨山と相争ったといふ、山岳妻争ひ伝説を歌ひ、「神代からこのやうであるらしい。昔もそのやうであればこそ、今の世の人も妻争

ひをするのらしい。(妻争ひするものなるほどもつともなことだ)と人の世の現実と言及された。いかにも古風な歌で、その蒼古素朴なところに不思議な魅力を持つ。その反歌(反歌とは、長歌に添へて、長歌のさはりの部分を反復、あるいは長歌の内容を要約した短歌。後には、長歌の内容を超えて、これを補足展開させてゆく反歌も生じた。短歌体でなく、旋頭歌体せんとくかの反歌が一例だけある)の一首目は、「香具山と耳梨山とが戦った時、立ちあがって見に来た、その印南国原いなんくわらはここだ」と、長歌の内容から一步踏み出して歌はれた。

しかし、この短歌だけ取り出すと、意味がとりにくくなる。「あひし時」は『萬葉集』では通常、男女相逢ふ場合に使ふ語だ。「立ちて見にこし伊奈美国原」も、伊奈美国原が立ち上って見物に來たと解しさうになる。ところが、『播磨国風土記』によると、出雲国の阿菩大神あぼがみが、大和国の三山相争ふと聞き、これを仲裁諫止するためにやって來たが、播磨の神丘あかまで來て、争ひ止んだと聞いて、乗船を伏せてここに止まったといふ。この伝説と照らし合はせて、初めてこの歌の意味が分かるのだ。その古拙なところが、伝説取材歌として興味深い。また『萬葉集』を読むには、『古事記』『日本書紀』『古風土記』などの

古文献と引き合はせ、照らし合はせて読む必要のあることのわかる一例だ。

三山のうち、何山が男山で、何山が女山かについても、「畝火を愛し[＊]」か「畝火雄々し」かについても、研究者の間でさまざまな説があつて決着つかぬ状況だが、今は深入りしないでおく。

豊旗雲の夕映え

二首目は、海上にたなびく旗のやうな雲に入日のさしてゐる壮大な夕景をまづ歌ひ、今宵の月の清く明らかなことを思った、堂々たるお歌だ。

結句の原文は「清明已曾」で、「清く照りこそ」「清⁺み明かりこそ」「まさやかにこそ」「さやけかりこそ」「あきらけくこそ」などさまざまに試訓されてゐる。その意味も、「こそ」を願望の助詞として「清明であつてほしい——清明であれ」と念願したと取る説、「こそあらめ」の下略形と見て「どんなにか清明であらう」と確信的に推量したと説く説とがある。「明らけくこそ」が最も歌の調べが大きく、朗らかで、美しく、斎藤茂吉・土屋文明・窪田空穂^{うっほ}・川出麻須美^{ますみ}など歌人は概ねこの説を採つてゐるが、国語学上、「あきらけくこそ」といふ用法には難があるので、近年の諸学者は通例「こそあらめ」説を疑問視してゐる。手近な文庫本で見てゆくと、岩波文庫本（佐佐木信綱訓）は「あきらけくこそ」、角

川文庫本（武田祐吉訓）は「清み明かりこそ」、角川文庫新版本（伊藤博訓）は「さやけくありこそ」、講談社文庫本（中西進訓）、旺文社文庫本（桜井満訓）は「さやけかりこそ」となつてゐる。

「入日さし」（原文「伊理比紗之」）も文法的にうまく下へ続かず、「入日さす」とこゝで切るのならば、意味は分かりやすくなるが、それでは歌の調べが破壊され、二文に分裂、腰折れ歌になってしまう。「入日さし」と小休止をおき、唾をのみこんで、「今夜の月夜」と一気に打ち出してゆく、そんな風に味はほしい。『萬葉集』の代表的名歌とされながら、問題の多い一首だ。

「わたつみ」は海神の名で、転じて海の意にも用ゐられた。だから単なる海原ではなく、原義の宗教的なイメージを色濃く漂はせてゐる。夕焼雲を、海神のたなびかす紅の旗に見立てたのが「わたつみの豊旗雲」だ。

「豊旗雲」実に美しい語で、宮中の豊明殿の壁面には、この天智御製の歌意を現した華麗雄渾な「豊旗雲」の図が中村岳陵画伯の絵筆によって描かれてゐる。国賓招待の晩餐会などが実況放映された時、テレビ画面でこれを見た人は多いであらう。

川出麻須美はこの一首について、「一読我々は海辺落日の壯観に打たれて息の止まる思ひがする。区々たる言句の講釈などは止めてほしい。願はくばこの恍惚境を静かに続けさせ拡大させて貰ひたい。かう思ふであらう。それでいい。本当に古歌を読む人にはその態度が一番いい」と感嘆し、鑑賞してゐる。(自筆稿、遺稿集『天地四方』収載)。

この一首、うはべだけ読むと、三山妻争ひの長歌の反歌としては異質の感じがする。『萬葉集』の編者もこれに気づき、「今案ずるに反歌に似ず。但し旧本、此歌を以って反歌に載す。故に今猶此の次に載せたり」として、疑問をいだきながら、原資料の通り反歌として載せたと注記してゐる。

百済救援行と

「中大兄三山歌」

前項で述べた百済救援のため、大和朝廷あげて瀬戸内海を航行西進した時、中大兄皇子は印南の沖合から、皇太子として「国見」されたのであらう。単なる「印南野」でなく、「国見」とセットの語「国原」を使用して「印南国原」と詠み据ゑられてゐる点に注目したい。印南国原を遠望され、三山妻争ひの伝説を回顧してその歌を詠まれたが、作歌してゐるうちに日は傾き、壮麗無比の夕焼となつたので、続けてこの一首を詠まれたのであらう。三山妻争ひの古を思ひ、眼前の夕

映から今宵の月明を思ひ、古と今を一つにとけこませた壮大な「国見」歌と解したい。だからこそ、この長歌一首短歌二首が一まとまりの作品として原資料（旧本）に記載されてゐたのであらう。

以上のやうに、斉明七年、西進航行の折の作とする想像が許されるならば、これまた国運を賭けた百済救援戦を背景にひそめた作だ。夕焼の豊旗雲に重なって、戦野に靡く紅旗の列、紅蓮の戦火に燃え傾く大船団のイメージがちらついても、せつかくの平和恍惚境が台無しだと眉をひそめる人もあらう。しかし、戦争突入の固い覚悟があったればこそ、一層この平和悠大な自然に忘我の感動を味はれたのであらう。

五 春秋競憐と近江朝

— 才媛・額田王 なかつたのおほきみ —

春秋の争ひ

白村江敗戦後、唐の大軍の来攻が憂慮されたが、幸ひ、そのやうな事態は生ぜず、平和が続き、近江朝廷には文芸の花が開いた。漢詩も和歌もしきりに

作られた。いはゆる初期萬葉の花盛りだ。

天皇が藤原鎌足かまたりに詔みことりして、春山万花の艶と秋山千葉の彩とを競憐させるといふ文芸の遊びも賑やかに行はれた。手っ取り早くいへば、春と秋と、どっちがよいかといふことだ。諸臣それぞれ己が好みに應じて述べ立てたのであらう。その最後に、額田王が歌で判定した。これも、額田王が勝手に出過ぎたまねをしたはずはない。天皇から「そろそろ議論も出尽したやうだな。額田、お前が得意な歌で判定せよ」と命ぜられたのであらう。春をとるか秋をとるか、は額田王個人の好みに任せてあったらうが、日頃、天皇の代言歌人を勤めて居た額田王のことだ。ひそかに天皇のお好みを察して、それに合はせての判定であつたらう。

冬ごもり 春さり来れば 鳴かずありし 鳥も来鳴きぬ 咲かずありし

花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草深み 執りても見ず 秋山の

木の葉を見ては 黄葉もみつをば 取りてぞしのふ 青きをば 置きてぞ歎く

そこし恨めし 秋山吾れは(一、一六)

「鳥も来鳴き、花も咲く春はよいが、しかし山が茂く草が深いので、手に取って見ることができぬ」とまづ春の難点を述べ、ついで「秋山の黄葉は手に取って賞美する。まだ青い葉は取らないで歎く。そこが秋の恨めしいところだ」と秋にもまた難点があると云ふ。そこで一転して「秋山吾は」と判定の結句がとび出した。論理的には、ちぐはぐで、なぜさうなるのかといふ気がしないでもないが、そこが文芸の遊びのおもしろさであらう。「秋山吾は」と力強く結び、満座やれやれこれだけ、がついたと思つたであらう。天皇もお笑ひになつたであらう。後世の歌合せとはまた一味も二味も違つた遊びが萬葉にはあつたのだ。

「秋山吾は」

語順を尋常にした「吾は秋山」では力弱く、到底一首を結びきれないが、倒置形の「秋山吾は」はどっしりとして群臣の諸見を押さへ込む氣迫がある。「萬葉集」には「我は」で結んだ歌がいくつかある。人麻呂の「庵す我は」(3、二五〇)、「思ひき我は」(4、五〇一)、卷第十三の長歌の結び「言挙げす吾は 言挙げす吾は」(三二五三)、卷第十五、遣新羅使の「船出す我は」(三五九九)、卷第二十、防人歌の「醜みにくの御桶みづけと出で立つ我は」(四三七三)、「筑紫の島を指して行く我は」(四三七四)等々だ。こ

これらの歌の語順を改めて「吾は言挙げす」「我は船出す」「我は出で立つ」としては平板になるが、口を衝いて出てくる言葉の自然の勢ひのままに「我は」を転置すると、見違へるほど活力が生じ、一首が緊迫感を帯びてくる。いかにも萬葉調といった言葉遣ひだ。正岡子規もこれに倣^{なま}って「吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは」「昔せし童遊^{わらべ}びをなつかしみこより花火に余念^{よねん}なしわれは」等々、「我は」止めの歌を数々作った。しかし、この「秋山吾は」は、他の「われは」止めと違ってゐる。単なる転置でなく、「吾は秋山を愛す」「吾は秋山を好む」又は「吾は秋山を優れりと判定す」とでも言ふべきところを、余分の動詞・助詞をバサリと切り捨て、「秋山」だけで押した。額田王の情意が逆り出てゐる感^{かん}じだ。

後世の類例

萬葉調復古の根岸派の短歌でこの「秋山吾は」と同じやうな例を探すと、いくつかの作例が目につく。

紫のゆるしの色にくらべ咲く心はもたず白菊われは（伊藤左千夫、明治三四）
 秋菊の花いたづらに多けきを人はいへども冬の菊吾は（左千夫、明治三六）

朝顔は都の少女秋海棠はひなの少女か秋海棠吾は（左千夫、明治三七）

倭には山はあれどもみ仏の沙羅の花さく比叡山吾は（長塚節、明治三六）

鯉こくもあらひもよけれうま酒に舌つづみうつ焼き鮒われは（香取秀真、昭和八）

以上の例では、歌人として著名な左千夫・節の作よりも、鑄金家秀真の作の方が活気があって上出来だ。「歌びとの左千夫節の歌もあれど舌鼓打つ秀真大人われは」とでも評したいところだ。川出麻須美の

秋山に紅葉濃けれど川のべに立ちそよぎたる葦の花を我は

は「を」を挿入してゐるが、ほぼ同じ用例だ。また子規の

市に住めば水の患あり山を買へば火のうれひあり火の患君は（明治三五）

は「君は」止めであるが、似た用例だ。この歌の詞書によると、左千夫が洪水に遭って、子規の看病に来ること叶はず、山林家の蕨真（蕨真一郎）が代役で子規の病床を訪れた

時、山林の話のいろいろと聞いて、この一首をものにしたといふ。

六 藤原京讃歌の明暗

——藤原宮御井歌と藤原宮役民作歌——

藤原宮御井歌

昭和六十二年十一月二十六日の各新聞は一斉に「大藤原京」を大きく報道した。従来、藤原京の跡と考へられてゐた遺構の外側にも、同一規模の都大路の延びてゐることが確認され、藤原京は定説の三倍、平城京なみの大規模なものであったと思はれるといふのだ。

名も美はしい藤原京は女帝持統天皇の造営された都だ。持統六年（六九二）地鎮祭が行はれ、翌七年八月一日には、女帝は宮地観察のため行幸された。遷都はこの年の十二月に行はれた。持統朝こそ柿本人麻呂らの活躍した時代で、彼が数々の力作を生み、萬葉最盛期の花を咲かせたのは、実にこの女帝の下においてであった。

その藤原宮の讃歌が「藤原宮御井歌」(1、五二)だ。「八隅やすみ知し わご大君 高照らす日

の皇子」と莊重に歌ひ出し、藤井が原に大御門を造営され、埴安の池の堤上で国見された
と歌ふ。「日本の 青香具山」は大御門の日の経（東）に「青山と 繁みさび立」ち、「畝
火の この瑞山」は大御門の日の緯（西）に「みづ山と 山さびいます」。耳成の 青菅
山」は大御門の背面（北）に「宜しなへ神さび立」ち、「香ぐはし 吉野の山」は影面（南）
の大御門から遙か雲居に遠ざかつてゐると、三山を近々と東西北にめぐらし、別格の一山
を南天に配し、その四山の中に造営された新しき都宮を讚美した。

香具山に青を冠して「青香具山」、畝火山を「畝火の瑞山」、耳成山を「青菅山」と、言
葉を変へて、各山の青々としてめでたい感じをみづみづしく歌ひあげ、それぞれ「青山と
繁みさび立てり」「みづ山と山さびいます」「宜しなへ神さび立てり」と讚へ、名ぐはし
（名も美しい）吉野山は「雲居にぞ遠くありける」、即ち縹渺として天につらなり、天雲
に溶けてゆく趣に歌ふ。

そして、古代祝詞の「天の御蔭、日の御蔭」の成句を利用して「高知るや 天の御蔭
天知るや 日の御蔭」と新宮殿を美しく神話的に修飾し、その藤原宮に湧く聖水「御井の
ま清水」に視点を移し、そのこんこんと湧きて尽きぬ水こそ「とこしへにあらめ」（別訓

「とはにあらめ」と予祝して、この奉祝歌を歌ひ収めてゐる。壮麗な四周の山と清純な中央の水を題材として、祝賀の情が全篇に流露してゐる。

これに添へた短歌は「藤原の大宮仕へあれつくやをとめが伴はともしきろかも」(一、五三)(この美しい藤原の大宮に仕へるために生れついた少女たちは美しいことだ)と歌ひ、その御井の清水を汲む宮仕への清き少女たちを美しく点出して、自然を主題材とした讃歌を、人事題材に転じ、全篇をいきいきとさせた。自然は人を添へられて俄かに生きてくるのだ。

「右歌作者未詳」と注記されてゐるが、まことに賀歌として上乘の作であらう。後年、大伴家持は越中国府在任中の天平勝宝二年(七五〇)三月二日、「もののふの八十少女らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花」(19、四一四三)と美しく爽やかな一首をもつてゐるが、宮廷であらうと、天さがる鄙(地方)であらうと、井は生活の中心で、その水を汲むのが少女たちの仕事。汲みあげた潔き水は、少女たちの清らかさと映発したのであった。「原萬葉集」はこのめでたい藤原宮御井歌で終つてゐて、巻第一後半はその後増補された部分でないかといはれてゐる。まさにウル―原―萬葉集の結びにふさはしい作であった。

藤原宮役民作歌

この「藤原宮御井歌」に並べて「藤原宮役民作歌」(1、五〇)が載せられてゐる。これも「八隅知し わご大君 高照らす 日の皇子」と莊重に歌ひ出し、宮殿造営のため、近江の田上山たなかみから檜を伐り出し、その材木を宇治川に流し、それを役民たちが引き上げ、運ぶありさまを歌ひ、そのいそしみ働くのを見れば「神ながらならし」と結んでゐる。

修辭多く、めでたい詞をちりばめた歌だが、技巧が過ぎてゐる。「わが作る 日の御門に知らぬ国 依し巨勢道こせぢより わが国は 常世とこよにならむ」の個所など、「知らぬ国よしこせ」(知らぬ異国も寄せ、帰服してこい)、その「来せ」を掛け詞として「巨勢道こせぢ」に続けてゆく。この手のこんだ技巧は、私には厭味である。同じ藤原宮賀歌でも、「御井歌」には感動するが、「役民歌」は好きになれない。

当時、宮殿造営に徵発された役民の苦勞は大変なもので、『統日本紀しよく』にも、奈良遷都の時「奔亡猶多く、禁ずといへども止まず」(和銅四年九月)、「諸国の役民、郷に還る日、食糧絶乏し、多く道路に饑乏、溝壑こうかくに転填てんでんするもの、その数少なからず」(和銅五年正月)と記録されてゐるほどであつた。その役民が「さわく御民も 家忘れ 身もたな知らず」

嬉々として働く喜びを歌ふ。「わが作る、日の御門」と、いかにも「役民」自身の作歌らしく見せかけてゐるが、どこかそらぞらしく、技巧や瑞兆を重ねれば重ねるほど、ごてごてとして来て、朗々と心にひびく声調がない。

いはばこれは「滅私奉公」の歌だ。不平があつても、苦しくても、その感情をおし殺し、いかにも喜んで御奉公してゐるやうに取り繕つた歌だ。おそらく造営担当の高級官人が「役民作歌」の名目で作り、賀歌として役民に歌はせたものであらう。

後年の防人歌のやうに、汗まみれの辛苦、涙まみれの悲苦をまじへつつ歌つた役民歌を聞いたかつた。苦しみを苦しみとして、喘ぎ喘ぎ、しかもその私情をのり越えて公に向はうとする、人間的な歌、「滅私奉公」でなくて「背私向公」の歌が欲しかった。

修辞豊富であるため、人麻呂代作説もあるが、人麻呂はいかに修辞を重ねても、朗々と一本調子に歌ひあげてゆく。人麻呂はこんなごてごてとした歌は作らないであらう。

明日香風 うねめ 采女の袖吹き反す明日香風都を遠みいたづらに吹く（1、五一）

新京藤原宮へ遷都後、寂然とした旧都飛鳥をながめて懐旧の情に浸つた歌。官女たちの

袖を吹きかへしてゐた明日香の風も、都でなくなつた今、いたづらに吹いてゐるばかりだ。明日香を吹く風を明日香風と表現（伊香保風・白山風など同様の語例がある）。アスカは飛鳥とも明日香とも書いた。（現在も村名は明日香村と表記し、美術史上の時代名は飛鳥時代と表記）。明日香の表記からは官女たちの馥郁たる香が匂ってくるやうだ。作者は志貴皇子。皇子は天智天皇の皇子で、御生母は越道君伊羅都売、つまり北陸の有力豪族越ノ道ノ君の娘で、采女として貢上され、天智天皇に近侍された方であつたらう。そのことも作者志貴皇子の念頭にあつたであらう。明日香古京に重なつて、母君越道君伊羅都売の匂ひ栄えた近江廃都への懐古の情がこの一首に滲んでゐるやうに思はれる。「うねめの」と四音字足らずの初句も、心なしか寂寥感をひびかせてゐるやうだ。

（なほ、藤原京を舞台とした最も美しい歌、持統天皇の御製「春過ぎて夏来たるらし白妙の衣乾したり天の香具山」（1、二八）については別項第一三〇頁参照）

七 相飲まむ酒ぞこの豊御酒は

— 聖武・孝謙御製をめぐって —

聖武天皇御製

と 節 度 使

天平四年（七三二）、東海・東山・山陰・西海の四道へ節度使を派遣された。節度使といふのは令外の官（律令制度で定められた官以外に臨時に置かれた官）で、軍団を統轄し、その引き締め、強化を目的として設けられたものだ。そのとき、聖武天皇は節度使の卿たちに酒を下賜して労をねぎらひ、御製を下して激励された。（巻第六）

食す国の 遠の御朝廷に 汝等し かく退去りなば 平らけく 吾は遊ばむ
手抱きて 我は御在さむ 天皇朕が うづの御手以ち 掻き撫でぞ ねぎ賜ふ
打ち撫でぞ ねぎ賜ふ 還り来む日に 相飲まむ酒ぞ この豊御酒は（九七三）

反歌

ますらをのゆくといふ道ぞおほらかに念ひて行くなますらをの伴（九七四）

「お前たちが遠い政庁へ出かけ、しっかりやってくれることを信じて、朕は安心して居るぞ。天皇である私が、高貴な手でお前たちを撫でてねぎらふのだ。さあ、この酒を共に飲んで門出を祝ふのだ。お前たちが使命を達成して帰って来た時には、また一緒に飲む酒だ。そのつもりで、心して飲むべき酒だぞ、この酒は」。〔逐語訳しにくいので、思ひ切つて意識〕。そして反歌「ますらをの行くといふ道だぞ。いい加減な気持で行つてはならぬぞ。ますらををども」と詠まれた。天皇の威厳が一語一語にこもり、まことに堂々たる御製である。

「われはいまさむ」「うづの御手」「ねぎたまふ」などと御自身のことを敬語で表現されてゐる。古代の天皇はこのやうな自敬表現をされた。『古事記』では神々も「わが御心」（須佐之男命）、「わが立たせれば」（八千矛神）のやうに自敬表現をされてゐる。後代には見受けられぬ上代独特の敬語法だ。上代語の文脈の中では、それが少しも不自然にひびかず、特にこの御製には温かい親愛の情がみなぎり、力強いリズムを打って迫ってくる。

孝謙天皇御製
と遣唐使

卷第十九には、藤原清河らが入唐使として出発するとき、孝謙天皇が高麗朝臣福信を勅使として難波に遣し、入唐の労をねぎらって酒肴を下され、御製を下賜された、その御製を載せてゐる。

虚見つ やまとの国は 水の上は 地往く如く 船の上は 床に座る如く
 大神の鎮へる国ぞ 四つの船 船のへ並べ 平らけく 早渡り来て 還り事
 奏さむ日に 相飲まむ酒ぞ この豊御酒は (四二六四)

反歌

四つの船早還り来と白香著け朕が裳の裾に鎮ひて待たむ (四二六五)

「そら見つ」の枕詞に始まり、「この日本国は、水の上は地を行く如く、船の上は床に居る如く、安全に神の守りたまふ国であるぞ。入唐の使四隻の船が舳先を並べて、無事に早く海を渡って帰ってくるのを待って居るぞ。今、下賜した酒を飲んで元気で出発せよ。この酒は、お前たちが帰って来て、めでたく復奏する日に、また一緒に飲む酒であるぞ」

(意識) と予祝され、「四隻の船が早く無事で還って来いと、朕の裳の裾に白香(神事呪術の白い纖維か)をつけて、齋いはひ事をして待って居たい」と反歌を添へて祈念された。

孝謙天皇は女帝。裳は婦人用のスカートのような古代衣裳。古代の信仰習俗では、婦人の裳には神秘的な力が宿るとされ、その裳に神聖な白香を取り著けて鎮護祈願されたのだ。

遣唐使の船は四隻から成ってゐたから「四つの舶」と詠まれた。後世、四は死に通ずとして忌まれ、病棟・病室の番号に四を避ける風習は今も根強いが、上代にはそのやうな迷信はなく、死と隣合せの危険多い遣唐使船はいつも四隻で出発した。むしろ国語の四よは吉事に通ずとして、かへって心強く感じたのかもしれない。

帝王調と仏教

聖武御製・孝謙御製、いづれも力みなぎる帝王調。聖武天皇は厚く仏教を信仰され、「三宝の奴やつこ」と称された程であつた。女帝孝謙天皇も仏教に深

く帰依され、そのため皇位継承に重大な問題を生じた程であつた。しかしこの御製には仏教の片鱗も示されず、「大神の鎮へる国ぞ」と神国日本の信念を真正面から歌はれ、神事の酒・神事の白香を重要な歌材とされた。いかに仏教を尊信されても、天皇は神ながらの

御存在である。そのことをひしひしと感じさせる両御製だ。

天平勝宝三年四月、孝謙天皇は伊勢大神宮はじめ畿内・七道の諸社に幣帛を奉って遣唐使の平安を祈願されたと『続日本紀』に記録されてゐる。

仏教信者として著名な光明皇后も、遣唐使藤原清河に対しては「大船に真槌まわしじぬ繁貫あじきこの吾子わがらを韓國へ遣るいはへ神たち」(19、四二四〇)と春日かすがの神に祈念された。

『萬葉集』を、第一期・第二期・第三期・第四期と分けて説く慣例があるが、この両御製は、そのやうな四期区分を超えた、古く強い格調の歌だ。人麻呂以後の第三期・第四期の作でありながら、人麻呂を超え、むしろ第一期の「初期萬葉」に近い風格の歌だ。至尊調・帝王調の濫觴らんしやうともいふべきものを、私はこの両御製に感じ、深い感銘を覚えるのである。

御製下賜の伝統

聖武御製・孝謙御製ともに「相飲まむ酒ぞこの豊御酒は」で結ばれてゐる。節度使・遣唐使など国家重要の使節派遣に際しては、このやうな御製下賜の伝統があったのであらう。『萬葉集』に収録されたのはたまたまこの二例であるが、他にもこのやうな御製下賜が行はれたものと思はれる。聖武御製のあとに左注があっ

て「右御歌は、或は太上天皇（元正）御製なりと云ふ」と記され、作者に異説のあったことを伝へてゐるが、各天皇がその折々にこのやうな御製を下賜されたところから異伝を生じたのであらう。

はるか後世の江戸時代になって、後水尾天皇から三代將軍家光いへみつに対し、「民くさにめぐみの露をかけよかし我敷わがしきしまの四方よもの国長くにをさ」の御製を下賜された。（宮永正運著『越の本草』稿本第六冊「大猷院家光公へ給はせ給ひける御製」）。將軍に対し、國民を恵むやう諭されたのである。天保七年（一八三六）諸国不作の時には、仁孝天皇が將軍家齊いへなりに対し「人草に露の恵をかけよかし治まる国をあづかれる人」の御製を下賜して諭された。（『加賀藩鈔録合集』加越能文庫）。また天保十四年、同天皇は同將軍に「民草に露の情をかけよかし治まれる代をうけつぎし身は」の御製を下賜された。（越中氷見町人田中屋権右衛門『應響雜記』）。後水尾天皇以来、事あるごとに天皇から將軍へこのやうな御製を下して將軍の心構へを諭されるのが一つの慣例になってゐたのであらう。国政に対して全く無力の天皇がつねに國民全体の幸福を念頭に置かれ、絶大の権力者幕府の將軍に対し、精神的指導を与へられたところに深い意義がある。私はこの三例を、越中の農民・町人、あるいは加賀

藩の記録から拾ひ出したが、この他にも度々同様のことがあったのであらう、「恵の露を
かけよかし」「露の恵をかけよかし」「露の情をかけよかし」と伝統的類型歌がくり返され
てゐたのであらう。聖武・孝謙両御製の「相飲まむ酒ぞこの豊御酒は」は上代、重要使節
派遣に際しての伝統的御製類型だったのであらう。現代では、毎年全国植樹祭に際し「杉
うゑにけり」「苗うゑにけり」「けふうゑにけり」など一つの類型を持ち、しかしながら深
く御心のこもった御製を賜はるのが慣例になつてゐる。そのやうな伝統の淵源えんげんをあらため
て萬葉の両御製に仰ぐのである。

第三章

萬葉びとの悲しみ

一 萬葉集の挽歌群と安騎の大野

萬葉集に

おける挽歌

後代の勅撰集では、死に関する歌は「哀傷歌」の名で片隅に寄せられてゐるが、『萬葉集』では、死の歌——「挽歌」の比重は重い。死によって、人はぎりぎりのところで生の意義を実感し、永久に歸らぬ者への限りなき哀惜の声を放つ。その沈痛なひびきが大きく『萬葉集』を揺さぶってゐるのである。

『萬葉集』の最初の部分、勅撰の部分かともいはれてゐる巻第一・巻第二について、分類別に歌数を調べると、

雑歌

八四首（長歌一六首・短歌六八首）

相聞

五六首（長歌三首・短歌五三首）

挽歌

九四首（長歌一六首・短歌七八首）

となつて、圧倒的に挽歌が多い。その後の巻々は比率も異なつてくるし、項目別に挽歌を集めてない巻もあるので、正確には計算しにくいが、『萬葉集』全巻でおよそ二六〇首（長

歌五〇首・短歌二一〇首）ぐらゐにならうか。四五四〇首中二六〇首とあれば約十七分の一。長歌のみについていふならば二六〇余首中五〇首で、五分の一に近い。いふまでもなく、長歌は短歌よりも遙かに長大であるから、萬葉びとが挽歌につきこんだ詞の総量は実に大きいのである。

これを後代の勅撰集に比較すると、『古今和歌集』総歌数一一一首中、哀傷歌三四首で、僅か三十分の一。『新古今和歌集』総歌数一九七九首中、哀傷歌一〇〇首で、約十九分の一。『古今』には長歌体の哀傷歌が一首あるが、『新古今』に長歌はない。このやうに比較してみると、萬葉びとがいかに「死」に重要な意義を感じてゐたかがわかるのである。

天智天皇崩御・天武天皇崩御をめぐる挽歌群、有間皇子・大津皇子の刑死をめぐる挽歌群は、初期萬葉独得の力で切々と迫るが、これにつづくのが人麻呂作挽歌群だ。

挽歌群

呂作挽歌群だ。日並皇子尊挽歌、これには名もなき舍人たちの二十三首が声

を合せて群作を形作り、つづいて泊瀬部皇女・忍坂部皇子に献ずる挽歌、明日香皇女挽歌、高市皇子尊挽歌と大波が打寄せるやうに次々に打ち寄せ、悲慟の声、天地をふるはす趣である。但馬皇女薨時穗積皇子歌、弓削皇子薨時の置始東人作歌がつづき、以上が公

的な挽歌。

そのあと、人麻呂が妻の死を歎いた長短歌群、吉備津采女挽歌から、讃岐の狹岑島で行き倒れの水死人を見ての挽歌などがつづき、人麻呂の臨死自傷歌（つまり辞世歌）と、人麻呂の妻依羅娘子の悲歎歌、最後に志貴親王薨時の笠金村の歌となって、巻第二の大挽歌群は終つてゐる。

人麻呂の

宮廷挽歌

人麻呂作挽歌はいづれも力作であるが、特に高市皇子尊にささげた萬葉最大の長歌は、怒濤のリズムで壬申の乱当時の皇子尊の活動を歌ひあげ、明日香皇女挽歌は明日香川（飛鳥川）の上つ瀬・下つ瀬に靡く川藻から歌ひ始め、まことに哀切で、皇子と皇女とに対する哀悼歌の双璧である。

当時、高貴の方の御遺骸はすぐには埋葬せず、殯宮と称する仮宮に安置して、相当期間哀悼の行事を続ける慣習であった。天皇・皇子・皇女に対する挽歌はおほむね殯宮の儀礼に誦み上げられ、並み居る皇族・諸臣、肅然とこれに聴き入ったものであった。

高市皇子尊も、明日香皇女も、キノヘノミヤ（城上宮・木上宮・木廄宮）を殯宮とされたが、人麻呂は皇女に対しては「御食向ふきのへの宮を常宮と定めたまひて味さ

はふ 目言めことも絶えぬ」(美しいお声を聞くことも、美しいお姿を目で見ること、なくなつてしまった)とやさしく悼み、皇子に対しては「朝もよし 木上宮を 常宮と 高くし奉りて 神ながら 鎮まりましぬ」と厳かに悼む。長歌の結びも、皇子には「天の原 ふりさけ見つつ 玉だすき かけて偲はむ 畏くあれども」と渾身の力をふりしぼって歌ひ、皇女に対しては「御名みなにおはせる 明日香河 よろづ代までに はしきやし わが王おほきみの形見かこころ」と静かに声を落おとしてゐる。泊瀬部皇女に献じた挽歌も「玉垂たまだれの 越この大野の 朝露に 玉裳たまもは湿ひづち 夕霧に 衣は濡れて 草枕 旅寝かもする 逢はぬ君ゆゑ」と、玉が垂れるやうにキラキラ光る朝露、しつとりと衣をぬらす夕霧が、しめやかに美しくこの挽歌を浸してゐる。

江戸時代末期、歌人平賀元義もとよしに向つてある人が歌の指導を乞うたところ、元義は、人麻呂の高市皇子尊挽歌を朗々と暗誦し、余分なことは何も言ふ必要なしと答へたといふ逸話を、何かで読んだ憶えがあるが、まさに萬葉を代表する大作である。

笠金村の挽歌

卷第二挽歌群の末尾は、靈龜元年(七一五)志貴親王の薨去されたのを悼む笠金村かさのかむらの作(二三〇)である。金村の吉野讚歌は卷第六にも収められてゐる

が、この挽歌の方が遙かにすぐれてゐる。通常、二句づつ対たいにしてゆくのが長歌の修辭法であるが、この挽歌では「何しかも もとなとぶらふ 聞けば 泣なのみし哭なかゆ 語れば 心ぞ痛き」と二句対ではあるが、音調おのづから三句づつ歌ひ進めた感じになつてゐて、型を破つたところにも、押さへようにも押さへられぬ悲しみがあふれてゐる。「聞けば」「語れば」と三音・四音の句がまじるところも、嗚咽のため声がとぎれとぎれになつた感じだ。「すめろきの、神の御子の、いでましの、手火たびの光ぞ ここだ照りたる」と火をともしてしづしづと行く葬列を嚴かに歌ひをさめてゐるが、「の」を五回も重ね、切々たる哀感を湛へてゐる。

人麻呂らの

私的挽歌

妻の死に遭遇した人麻呂の「泣血哀慟作歌」も絶品であるが、これに添へられた短歌

こそ見てし秋の月夜つくよは照らせれど相見し妹はいや年さかる(2、二二二)

の如き、人麻呂特有の無常感が月の光とともに沁み透つてゐて、しみじみ心を打つ。

家に来て吾が屋を見れば玉床の外ほかに向きけり妹が木枕こ(2、二一六)

の如き、即物的な歌は人麻呂としては珍しいが、あらぬ方を向いた亡き妻の形見の枕を、人麻呂は無量の思ひをこめて凝視してゐるのである。蕪村の句「身にしむや亡き妻の櫛をなや 鬪に踏む」がふと連想される。人麻呂のこの長歌の末尾「うつそみと 思ひし妹が 灰にてませば」(二二三)も、他に類例のない表現で、火葬後の灰が白々と空しく痛々しい。

皇子・皇女にささげた挽歌、妻の死を悲しむ挽歌の他に、瀬戸内海の狭さ岑みね島の磯いそで見た名もしれぬ水死人、香具山の道ばたの行き倒れの死人に対しても、人麻呂は心こめて挽歌を手向けてゐる。

草枕旅の宿りに誰たがつまか国くに忘れたる家待またまくに(3、四二六)

田辺福麻呂あきも、足柄坂の死人を見て、その悲惨な姿を憐み歌ひ(9、一八〇〇)、巻第十三には、難所「神の渡わたり」の海岸に打ち上げられた死骸を見て悲しんだ作者不詳の長歌短歌(三三三三—三三三四三)が載せられてゐる。身許も知れぬ同胞の死に心を痛めた歌が多いこ

とは『萬葉集』の一つの特色だ。皇子尊の薨去に悲嘆したその同じ人が、名もなき民の死にも「悲慟」してゐるのだ。

安騎の大野

日並皇子尊が薨去された翌年の秋（持統四年、六九〇年）、亡き皇子の御遺

児輕皇子が、大和国宇陀郡安騎の野に宿られた時、從駕の人麻呂が詠んだ長

麻呂の絶唱

短歌は、挽歌の扱ひではなくて、巻第一の雑歌に収められてゐるが、亡き日

並皇子尊に対する悲しみの余韻を引く、いはば挽歌的な作だ。安騎（阿騎）

の野こそは亡き日並皇子尊の旧遊の地だったのだ。

八隅やすみ知し 吾が大君 高照らす 日の皇子みこ 神ながら 神さびせすと 太敷ふとしかす
 京みやこを置きて 隠口こもりくちの 泊瀬はつせの山は 真木まき立つ 荒山あらか道を 石いしが根 禁樹さへき押し靡なべ
 坂鳥さかどりの 朝越あすこえまして 玉かぎる 夕ゆふさり来れば み雪ゆきふる 阿騎の大野に
 旗はたすすき しのを押し靡なべ 草枕くさまくら 旅りやどりせず 古念いにしへひて（四五）

短歌

阿騎の野に宿る旅人打ち靡なびき寐いもぬらめやも古念おもふに（四六）

真草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君が形見とぞ来し（四七）

ひむがしの野に炎の立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ（四八）

日雙しの皇子の命の馬なめて御獵立たしし時は来向かふ（四九）

長歌一首に短歌四首を添へた連作的構成だ。「天下の隅々までしろしめすわが大君、天高く照らす日の御子」と最高の讃辞でまづ皇統直系の輕皇子（後の文武天皇）をあがめ、その御子が「神ながら神さびせず」として、都をあとにして、山深い泊瀬の山の針葉樹の茂り立つ荒山道を、岩根や、道を遮る木を押し靡かして、坂飛び越える鳥のやうに朝越えされ、玉がほのかに光るやうに光かそけき夕方になると、雪のちらつく安騎の大野で、旗のやうなススキや篠竹をおし靡かして、仮宮を作り、旅の宿りをなさいますことだ、昔のこと（亡き御父君日並皇子尊が御生前、この地で狩獵されたこと）を憶ひながら。といふのがこの長歌の大意だ。

人麻呂の長歌としては簡潔であるが、簡潔な中にいくへにも修辭を織りこみ、渾然、玉の如き秀吟である。「玉かぎる」は玉のやうに微妙な光を放つの意で、「夕」の枕詞にされ

てゐるが、この一首まさに「玉かぎる」名作である。「神ながら神さびせず」は天皇の神々しさを讃嘆する聖語で、人麻呂の愛用句。「神ながら」は「神として、神のままに、神とましますまますまに」などと訳され、「神さび」はいかにも神らしい振舞をいふ語であるから、そのまま現代語に移すと「神として神らしい振舞をなさる」となるが、かへって分かりにくくなる。少女がいかにも少女らしい立ち居振舞をするのを「少女さび」、老人が老人らしい立ち居振舞をするのを「翁さび」といふ言ひ方は現代でも行はれてゐる。また神社の森が深々と茂ってかうがうしく、おのづから身がひきしまり頭のさがるやうな感銘を受けたとき、「木立神さびて」とか「木立古り宮居神さびて」などといふ。そのやうに天皇（又は皇太子）の御動作御行動の神聖さ神厳さを感嘆讃仰した語が「神ながら神さびせず」だ。「太敷かす」は宮殿の柱を立派にお建てになつていらつしやるの意で、ここでは宏壮な宮のある都を出て、荒山道をたどられたことを言ったのだ。

この一連から「ひむがしの野にかぎろひ」の一首だけを抜き出して鑑賞されることが多いので、自然美を詠んだ歌と誤解されてゐるが、これは連作的構成の中で味はふべき作だ。亡き皇子尊のお伴をしてかつてこの野に遊獵したことを思ひ、心痛み、「寐もぬらめ

やも」安眠できなかつたのだ。その翌朝の荒野の大観だ。東に立ちそめた陽光と、西に傾きゆく月は、巧まずして、亡き皇子尊と、将来の期待を背負つて育ちます若き皇子とに重なりあつてゐるのだ。「古と来む世とを今にとりすべて」人麻呂は呆然この大観に立ち尽くした。長歌全体の重みをがっしりこの短歌で受け止めた。「菜の花や月は東に日は西に」(蕪村)の自然美の世界とは全く異質の歌なのだ。

更に人麻呂は一首歌ひ添へた。亡き日並皇子尊が馬を並べて狩をされた晩秋初冬の季節が今やって来たのだと。形は懐旧だが、「時は来向かふ」には、日並皇子の御遺児にまします若き軽皇子を奉じて出で立つといった語気があつて、将来へ向けての気魄きはくがみなぎつてゐる。

二 『死者の書』の山 二上山

—— 悲劇の皇子たちとその挽歌群 ——

私がまだ若く、図書館に司書として勤めてゐた頃、大阪で開かれた夏の研究集會に出張を命ぜられた。私は早目に出発し、奈良から当麻寺たいまへゆ

当麻寺と二上山

き、蹶速塚に野見宿禰の古伝承を偲び、曼陀羅堂で中将姫の伝説を回顧した。うす暗い厨子の中で、姫の木像の赤い唇が印象的だった。同寺中之坊では黒い竈で陀羅尼助を煮てゐた。役ノ行者の創始といふ。山岳修験と製薬の関係を思はせて興味深い。東塔の背後には二上山の双耳緑翠が滴るやうに迫ってゐた。当麻寺から二上山にかけては釈迦空（折口信夫）の名作『死者の書』の舞台だ。墓穴の中で千三百年の眠りから目ざめた死者大津皇子のつぶやきから、あの作品は始まってゐた。私は皇子を偲び、炎天下、二上山をひた登りに登り越えて大阪へ出たのであった。

（二上山、現在はニジョウザンと音読。萬葉時代はフタガミヤマ。当麻も後世タイマと音便読みになったが、古代はタギマ）。

二上山の壮麗な山容を近々と仰ぎ見て、大伯（大来）皇女が亡き大津皇子に

大伯皇女と
大津皇子

向かって切々と呼びかけられた挽歌を思ひ出し、私は胸が痛かった。

うつそみの人にある吾や明日よりは二上山を弟世と吾が見む（2、一六五）

大津皇子は事件に先立って、ひそかに伊勢に赴き、姉大伯皇女に逢つて来られた。おそらく大津皇子は父君天武天皇の壬申の事挙げにならつて大事を執行せんとされたのであらう。そのための伊勢参宮、そして姉齋宮の靈的加護を頼み、また事敗れた場合の最後の阪乞ひをされたのであらう。しかし事は成らなかつた。

弟皇子に別れる時の大伯皇女の御歌二首、

吾が背子を大和へ遣るとさ夜ふけてあかとき露に吾が立ち霑れし(2、一〇五)

二人行けどゆき過ぎ過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ(2、一〇六)

哀切きはまる絶唱だ。おそらく皇女は、すでに弟皇子の運命を予感されてゐたのであらう。『古事記』の古伝承では、東征の大任を帯びた倭建命は伊勢神宮に参拝して、姨倭姫命に逢ひ、「すめらみこと、既に吾を死ねとや思はすらむ。何なれか西の方の悪人等を撃りに遣して、返り参る上り来し間、幾時もあらねば、軍衆をも賜はずて、今更に東の方十一道の悪人等を平けに遣すらむ。此に因りて思惟へば、猶吾既く死ねと思はしめすなりけり」と、さめざめ泣かれた。齋宮姨倭姫命と甥倭建命、齋宮姉大伯皇女と

弟大津皇子。その姿が重なりあって深々と悲しかった。

大津皇子は

百伝ももふ磐余いはれの池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(3、四一六)

の辞世を残して自尽させられ、遺骸はやがて二上山に移葬された。大津皇子刑死の時、妃山辺皇女は「髪を被くだしみだして徒跣そあしにして奔り赴はしきて殉ぬともなし」、「見る者皆歔歔なげ」いたといふ(書紀)。

伊勢から帰還した大伯皇女は

神風の伊勢の国にもあらましを何しか来けむ君もあらなくに(2、一六三)
見まく欲り吾がする君もあらなくに何しか来けむ馬疲るるに(2、一六四)

と悲嘆された。「何しか来けむ」をくり返し、測々と迫る二首連作だ。結びの調べも切実、疲れはてた御乗馬の足どりが皇女の息づかひとともに聞こえてくるやうだ。

二上山越え

私は『古事記』の伝承と『萬葉集』の挽歌とを噛みしめながら營々と登った。炎天下、重い荷を両手に提げた登行で、全身から汗が噴き出した。

岩屋峠から二上山の最高点五一五メートルの雄岳むすだけにたどり着いた。午さがりの日はかんかん照りつけるが、大津皇子の御墓の茂みはかへって暗かった。東には大和国原が眼下に霞み、西には河内国原のキラキラ光っているのが見おろせた。雌岳めだけにも登り、急な斜面を西へ下り、鹿谷寺址ろくたにじを経て、竹内街道（『古事記』の当麻路たまたぢ）に出、道のほとりの孝徳天皇陵を拝した。拜所からは鳥居に正面せず、何かそっぽ向いたやうな作りのみささぎだ。あらためて「かなぎつけ我が飼ふ駒こまは引き出せでずわが飼ふ駒を人見つらむか」（書紀）のお歎きを思ひ、晩年御不遇のみかどをお惚びしたことであった。

有間皇子辞世

さういへば、大津皇子と同じ運命を辿られた有間皇子ありまのは孝徳天皇の御子であつた。皇子の辞世は『萬葉集』巻第二挽歌の冒頭に掲げられて、人口に膾炙かいしやし、後人の涙をさそつた。

磐石いはしちの浜松が枝を引き結び真幸まきさきくあらば亦還り見む（?、一四一）

家であれば筥けに盛る飯いひを草枕旅にしあれば椎しひの葉に盛る（2、一四二）

なまのはきまる
長奥麻呂も山上憶良も、この結び松を見て哀咽あいえつし、柿本朝臣麻呂歌集にも、これに唱和した一首がある。松の枝を結んで「真幸くあらば」と無事を祈るのも、椎の葉に飯を盛って道傍の祠に供へるのも、この地方の民俗的慣習であるといはれるが、これが最期かもしれぬと思ふ捕はれの旅では、生を哀惜するの情痛切なものがあつたであらう。淡々たる歌ひぶりでありながら無限の哀感を湛へてゐる。

「椎の葉に盛る」は従来、皇子自身の食事とされてゐたが、椎の葉は小さく、飯を盛るに適せぬ点に不審をいただき、高崎正秀博士が紀州の民俗等を調べ、路傍の神へのお供へとする説を出され、多くの賛同を得てゐる。一應これに従つたが、しかし自分の食事と解釈した方が遙かに哀れが深い。

聖徳太子
磯長御墓
孝徳天皇陵につづき、推古天皇陵、用明天皇陵を拝し、夕日赤々とさす叡福寺の聖徳太子の磯長しながの御墓に詣でた。

家にあらば妹が手纏かむ草枕たびに臥こやせる此の旅人たびとあはれ（3、四一五）

卷第三挽歌冒頭のこの太子の御歌を低誦し、「三経義疏」の哲人、日出づる国の偉大なる摂政、その御墓の前に額づいた。鳴きしきる蟬の声が夕日とともに降りそそぐのであった。

第四章

神話伝承の体現者

柿本人麻呂をめぐるって

一 近江荒都の悲嘆と橿原宮回顧

近江荒都を嘆く

卷第一、近江の荒都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌、

玉だすき 敵火の山の 橿原の 日知の御世ゆ あれましし 神のことごと
 樛の木つがの いや継嗣つぎつぎに 天あめの下した 知らしめししを 天そらに満みつ 倭やまとを置おきて
 青丹あをに吉よし なら山やまを超こえ いかさまに 念おもほしめせか 天あま離りる 夷ひなにはあれど
 石い走はる 淡海あふみの国くにの ささ浪なみの 大津おほつの宮みやに 天あめの下した 知らしめしけむ 天皇すめらみの
 神かみのみことの 大宮おほみやは こと聞きけども 大殿おほとのは こと云いへども 春草はるぐさの
 茂しげく生うひたる 霞かすみ立たつ 春日はるひの 霧きりれる 百ももしきの 大宮おほみや処どころ 見みれば悲かなしも (二九)

反歌

ささ浪なみの思し賀がの辛から崎さき幸さきくあれど大宮おほみや人ひとの船ふね待まちちかねつ (三〇)
 ささなみの志し我がの大おほわだよどむとも昔むかしの人ひとに亦またもあはめやも (三一)

天智天皇の築かれた大津宮は、壬申乱じんしんらんによって荒廃した。その廢墟に立った人麻呂は「すめろきの 神のみことの 大宮は ことと聞けども 大殿は ことと云へども 春草の 茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧れる 百しきの 大宮処 見れば悲しも」と悲嘆し、琵琶の大湾曲に湛たたへた水を見つめて、「大宮人の船待ちかねつ」「昔の人に亦も逢はめやも」と愁嘆した。高市古人たけちのふるひと（多分、黒人の誤記）も、近江の旧跡に立って「ささ浪の国つみ神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも」（三三）他一首を詠み、歎息してゐる。人麻呂は初代神武天皇から莊重に説き起こしたが、黒人は国つ神（土地の神）が荒れずさび、その結果都も荒廃したと、土地に即して歌ひ、それぞれの特色を見せてゐる。

春草茂り埋め、うらがなく臙おぼろに霞んだ廢都の詠嘆は、杜甫の「国破れて山河あり、城春にして草木深し」を思はせ、遙か後世の芭蕉の「夏草やつはものどもが夢のあと」をも連想させる。「人麻呂は杜甫のまねをしたのでせう」といって私を驚かした人があったが、日本文学・日本文化はすべて先進国の漢文学・漢文化の模倣かとする誤った先入見から出た語だ。杜甫は七・二年生、七七〇年没。その詩「春望」は至徳二年（七五七）の作。人麻呂の生没年は不明だが、その活躍したのは持統天皇・持統上皇の御代（六八六—七〇

二、近江荒都歌は持統四年（六九〇）作かといはれてゐる。人麻呂の方が半世紀も早いのである。

夕浪千鳥ゆふなみちどり

人麻呂はまた

淡海あふみの海夕浪千鳥ゆふなみちどり汝なが鳴けば情こころもしのに古いにしへ念ねんほゆ（3、二六六）

の一首を成してゐる。おそらく近江荒都の悲しみに打ち沈み、琵琶湖畔に立つての詠であらう。（アフミの海は琵琶湖のこと。アフミは淡海とも近江とも書く。現代はオーミと発音）。波立つ湖面は赤く夕映えして、その夕浪に千鳥が群れ飛び、チチ……チチ……と鳴いてゐる。その声を聞いて心もうち沈み、古いにしへ（大宮人の賑はった近江の都の古）を思ったのだ。「夕浪千鳥」はまことに美しい語で、複雑な情景を七音に凝縮させてゐる。この一首、人麻呂の最傑作の一つだ。

（『萬葉集』にはこの他「豊旗雲とよはたぐも」「根白高萱ねじろたかかや」「藻伏束鮒もふしつかまな」「草深百合くさふかゆら」など見事な語があつて、漢語でなく、大和言葉でこのやうな熟語を生み出すことのできた萬葉びとの造語力を思はせる。なほ『古事記』には、美しいイメージを美しいひびきで表現した神名・人名が疊みかけるやうにして

列ねられ、古代の人の自由自在な造語力を思はせる。

行く水と
人麻呂はまた、近江国から都へ戻る時、宇治河のほとりで、

人麻呂の
もののふの八十氏河のあじろ木にいさよふ浪のゆくへ知らずも

無常感

(3、二六四)

と詠んでゐる。網代木は氷魚を捕るため、川に杵を打ち並べ、簀を張った設備。その網代木に塞かれて泡立ち、たゆたってゐる浪を、じっと見つめ、「ゆくへ知らずも」と嘆息したのだ。「ゆくへ知らず」は実景であるが、同時に、その実景に、万物の流転、人生の無常をしみじみ味はってゐるのだ。近江荒都を悲しんだ心、その晴れやらぬ思ひがいつまでも尾を引いてゐるのだ。

宇治川の「うち」に八十氏（数多くの氏族）を連想して「もののふの八十氏河」と表現したのも、近江朝廷に仕へた文武百官が脳裏をよぎったからであらう。そのきらびやかな姿も盛大な儀式も、すべて過去のものとなつてしまつたのだ。

人麻呂歌集には

卷向の山辺響みてゆく水のみなわの如し世の人われは（7、一二六九）

といふ歌もあって、人麻呂は行く水に人生の無常を切実に感じてゐたのだ。後世『方丈記』冒頭の有名な一節もあるが、長明等の仏教的無常感とはまた違った無常感が強く人麻呂を貫いてゐる。

（『萬葉集』には人麻呂作歌八十四首、この他に「柿本朝臣人麻呂歌集」を出典とする歌が三六五首収録されてゐる。「人麻呂歌集」は人麻呂の採集編成した歌集ともいはれ、従って他人の作も含まれてゐるとの説もあるが、大部分は人麻呂自身の作と見てよいであらう）。

もとに戻って、近江荒都長歌を見てゆく。この歌は「玉だすき 畝火の山の
 橿原の 日知の御世ゆ あれましし 神のごとごと 樛の木の いや継嗣に

天の下 知らしめししを……」で始まってゐる。「橿原の日知の御世」即ち初代神武天皇以来、歴代天皇が神として日本国を統治されて来た。その尊厳な皇統譜の回想から筆を起こして、敬虔の情をこめて歌ってゐるのである。

萬葉末期、大伴家持の「族を喩す歌」（20、四四六五）にも「あきづしま やまとの国の

かしはらの うねびの宮に 宮柱 太知り立てて 天の下 しらしめしける すめろきの
あまの日継と つぎてくる 君の御代御代……」と歌はれてゐる。『古事記』に「畝火の
白禱原の宮に坐して天の下しろしめしき」、『日本書紀』に「畝傍の檀原に底つ磐根に宮柱
太しき立て高天原に搏風峻峙りて始馭天下らしし天皇」と讃へた、その畝火(傍)の檀原
の宮を、家持は順序を変へて「檀原の畝火の宮」と歌ひ、人麻呂は「記紀」記載の順序の
まま「畝火の山の檀原の日知の御世」と仰いでゐる。『萬葉集』全巻を通じて、神武天皇
の檀原宮(畝火宮)を歌つたのは人麻呂と家持の二人だけだ。

家持はこの喩族歌を「久方の 天の戸開き 高千穂の 岳に天降りし すめろきの 神の御代
より……」と歌ひ起こし、高千穂の峰への天孫降臨の神話も歌つてゐる。高千穂を詠じたのは『萬
葉集』中、家持ただ一人だ。

なほまた家持は七夕歌(18、四二二五)で「天でらす神の御代より」と歌ひ、人麻呂は日並皇子尊
を悼む挽歌(2、一六七)で「天照らす日女の命、天をば知らしめす」と歌つてゐるが、天照大御神
(天照日女命)を歌詞に取り入れたのは、これまた人麻呂と家持の両名だけで、『古事記』の神話
伝承に対するこの両歌人の並々ならぬ心入れを思ふのである。

戦後、史学界では、神倭伊波礼毘古命（神武天皇）を架空の人物とするのが常識のやうになつてゐて、飛鳥巡りの盛行と引きかへに橿原神宮・神武御陵の参拝者はまばらになつた。その反面、「神武以来」などといふ言ひ方がよく使はれ、「神武景氣」の新語が出来たりしたのは皮肉だ。

壬申乱（六七二年）の時、「神日本磐余彦天皇の陵に馬及び種々の兵器を奉れ」との神託があつて、託宣のままに御陵を祭り拝ましめ、馬及び兵器を奉つたと『日本書紀』に記され、当時、神日本磐余彦天皇が初代天皇として特別の崇敬を集め、その御陵も歴然としてゐたことが明白だ。

シナ（中国）では、その伝説的始祖を黄帝といふ。黄帝に対する崇敬は今中国における

黄帝崇敬

更に「黄帝紀元四六〇九年」の箋を付したといふ。民国二十四年（一九三五、昭和十年）黄帝陵の祭が営まれ、二十六年には「国民党」「国民政府」「中共」三者で祭文を捧げたといふ。一九八〇年（昭和五十五年）には中華人民共和国政府の手で、絶えてゐた黄帝の公祭が再開されたといふ。黄帝は実在の証明されない伝説的人物であるに拘ら

ず、理屈を超えた民族感情からこれを肯定し、共産党政権もその公祭を挙行したのだといふ。(以上、黄帝祭祀に関する記述は、陳舜臣氏の「黄帝陵を訪れて」―「日本経済新聞」昭和六二・六・七―による) 彼此思ひ合はせ、私は日本人としてまことに恥づかしく思ふのである。

後村上天皇

『古今和歌集』以下、代々の勅撰集で橿原宮を詠じた作は見当らず、漸く准勅撰の『新葉和歌集』に至って、後村上天皇御製

の橿原宮

回顧の御製

高御座たかみくらとばかりかかげて橿原の宮の昔もしるき春かな

の一首。吉野山中の粗末な御座所ござしよ、苦難の日々であったからこそ一層建国創業の原点に対する回顧思慕の情も強まったのであらう。

後世歌人の

神武懐古

の一端

越中の国学者五十嵐篤好は、「天保十一年(一八四〇)は神武天皇元年より二千五百年にあたりと長崎健がいひおこせたりければ」と題して七十五句から成る長大な長歌を作り、「……すべらぎの 明あきつ御神みかみと 神ながら 大ましまして 天地の よりあひの極きはみ 動きなき 山跡やまあと島根ぞ そこもへば

天地のうちもちづきに 望月もちづきの みちたらはせり いはれ彦ひこ 神の命いのちの 大き御稜威みいつは」と結び、

神武天皇を讃へてゐる。長崎健（浩齋）は当時越中随一の蘭方医・蘭学者でしかも高岡詩壇の指導的漢詩人。これら有志が紀元二千五百年を喜び、ささやかな祝意を表してゐたのだ。

近代歌人の作から一、二引く。会津八一「古事記の中巻なる神武天皇の条を読みみて」十
五首のうち「かみのよをひとのうつつにあきつよとおしてさだめしおほきすめらぎ」。

釈迢空（折口信夫）の歌集『遠山ひこ』のうち、「紀元節、大倭を懐ひて詠める」三首

日ねもすに 青山霞む大倭。こゝに 肇国治したまへり

松風や 遠世の如し。畝傍山 山の岩根に 額ふして聴く

天雲のそこひにこもる雷が音 四方に響みて、国は栄えぬ（片仮名のルビは原ルビ）

「めやも」の用法について

「昔の人に亦も逢はめやも」は反語。「逢ふことができようか。絶対にできっこないのだ」の意。堀辰雄の名作『風立ちぬ』の書名はポール・ヴァレリーの詩句「風立ちぬ、いざ生きめやも」に由来するといふ。堀辰雄は

強く生きる決意を表現したつもりであるが、「生きめやも」を辞句通り解釈すれば「生きることができようか、絶対に生きることはない」の意になる。それが「いざ」に続いては支離滅裂である。日本古典にも詳しくは掘辰雄がこんな誤を冒すとは思議である。

「紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆゑにあれ恋ひめやも」(一、二二)は「憎くあらば」といふ事実に反した仮定だから「恋ひめやも」が「憎いのだったら恋ふることはないのだ。憎くないからこそこんなにも恋ふるのだ」となって、意味を反対に打ち返してゆく。そんなところから「めやも」の用法に誤解が生じたのであらうか。それとも堀辰雄は文法の誤を承知の上で「いざ——めやも」といふ新しい語法を創造してヴァレリイを翻訳し、日本文芸に清新の気を注入せんとしたのであらうか。ついでに日頃の疑問につき一言しておく。

二 柿本人麻呂と海の旅

—— 大和島根・遠の朝廷 ——

明石大門あかしがはと

『古今和歌集』巻第九羈旅歌に「題しらず、よみ人しらず」として

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ

を録し、「このうたは、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり」と左注を加へてゐる。「ある人」の説と注記されてゐながら、これが人麿の代表作として後世愛誦された。いま一首「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」が人麿作として『小倉百人一首』に採録され、人口に膾炙かいしやした。これは『萬葉集』巻第十一の作者不詳歌である。おしなべて古い頃の作者不詳歌が、後世、人麻呂作と見なされてゆく傾向があつて、「歌聖人麿」像は雪だるまのやうにふくらんでゆく。弘法大師の事跡でないものが、全国各地に大師の事跡と伝承され、弘法大師像が大きくなってゆくのと同じやうなものだ。

「ほのぼのと」の一首はいい歌ではあるが、『萬葉集』巻第三の人麻呂羈旅歌に比較すると、雲泥うんでいの差だ。

ともし火の明石大門あはとに入らむ日や榜こぎ別れなむ家のあたり見ず（二五四）

天あまさかる夷ひなの長道ちぢゆ恋ひくれば明石の門とより大和やまと島見しまゆ（二五五）

一首目は瀬戸内海を西下してゆく時の作で、舟が明石海峡に入る日には、家郷のあたりも見えなくなつて、榜こぎ別れてゆくことかと、故里遠ざかる思ひを歌つた作。「ともし火の」は「明かし」にかかる枕詞（多分人麻呂創作の枕詞）であるが、人麻呂の心にともつてゐる懐郷の火を思はせる。「入らむ日や」と大きく打ち上げ、「榜こぎ別れなむ」とそのうねりを受け止めて声をのみ、再び「家のあたり見ず」と強く打ち返す。明石海峡の波のうねりがのり移つたやうな、言葉の大きなゆらぎ、これこそ人麻呂の声調だ。

二首目は瀬戸内海を東上して都へ帰ってくる時の作。みなかの長い長い海路を、家郷を恋ひながら航行してくると、明石海峡にさしかかり、ここからなつかしい故里大和が見えて来たといふ、はづむやうな喜びを歌ひあげたのだ。後、遣新羅使けんしらぎの一行が海路で、これら人麻呂の作歌を「古歌（として）誦詠」したことが巻第十五に記録されてゐるから、古くから人々の愛誦伝誦した歌なのだ。これら明石海峡周辺の人麻呂作の歌が幾首もあることから、「ほのぼのと」の作者未詳歌も人麻呂作と伝へられるやうになつたのであらう。

また明石に柿本神社が奉祀されたのも、この明石の浦の歌の縁であらう。

私の幼い頃、私の母は「あす早く目を覚まさうと思つたら、へほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」と三遍唱へて眠りなさい。必ず起床しようと思ふ時間に目がさめる」と教へてくれ、その通りにしたが、不思議と期待の時刻に目が覚めたものであった。一種の自己暗示であらう。人麿崇敬また和歌の呪的能力の信仰が民間信仰となつて庶民の間に拡がってゐた、興味深い一例だ。

人麻呂は明石付近ではなほいくつも海路詠を残した。

飼飯けひの海の庭よくあらしかりこも刈薦かりこもの乱れ出づ見ゆあま海人の釣船（3、二五六）

「庭」は作業場。農作業の場もニハといひ、漁作業の場もニハといふ。これはいふまでもなく漁場だ。「飼飯けひの海の漁場がいま絶好の状態らしい。漁船が、刈薦が乱れるやうに海いっぱいいに散らばつて漕ぎ出してゆくのが見えるぞ」と、漁民出漁の賑やかな光景を力強く歌つた一首だ。（以上、萬葉集に関する記述は「人麻呂」と表記し、古今集に関する記述は「人麿」と表記し、使ひ分けた）。

大和島根

名ぐはしき稲見の海の沖つ浪千重に隠りぬやまと島根は（3、三〇三）
大君の遠の朝庭とありがよふ嶋門を見れば神代し思ほゆ（3、三〇四）

「柿本朝臣人麻呂、筑紫国に下る時、海路作歌」と題した二首だ。「名もすばらしき稲見の海の沖つ浪が幾重にも幾重にもうねり立つ、その高い浪に、わがなつかしい大和は隠れてしまった」と、ふるさとに別れゆく思ひを力強い調べで歌った。

後世「大和島根」といふと、日本列島・日本国土を意味するが、萬葉時代には奈良盆地のある大和を意味した。さきに引用した「大和島見ゆ」の「大和島」も同じだ。現在はシマといふと海上・水上の島嶼を意味するが、古くは一まとまりの地をシマと呼ぶ場合があった。ここでは、海のない大和一国が島とか島根と呼ばれてゐる。笠金村の越の海での作歌にも「かけて隠ひつやまと島根を」（三六六）と歌はれてゐるが、これも北陸から奈良盆地の大和を恋ひ慕った歌だ。「千重に隠りぬ大和島根は」「明石の門より大和島見ゆ」と人麻呂が歌ったのは、大和を囲む生駒・葛城などの山々が隠見するさまをいったものであらう。

「大和島根」の語を最初に用ゐたのは人麻呂だが、実にどっしりと力ある語で、この語がやがて日本国・日本国土を意味するにいたる。まさにそれに値する語だ。『萬葉集』末期、すでに藤原仲麻呂の作に「いざ子どもたはわざなせそ天地の固めし国ぞ大和島根は」(四四八七)とあって、明らかに日本国の意に用ゐられてゐる。ただしこの歌は反対派を睨みつけたトゲのある歌で、なじみにくい一首だ。

後世の例を一、二挙げておく。昭和初年、訓練中軍艦衝突沈没して殉職した人を弔ふ三井甲之作「ますらをのかなしきいのちつみ重ねつみ重ねまもる大和島根を」。大東亞戦特攻隊員辞世「七八度生れ変りて守らばやこの美しき大和島根を」。

遠の朝廷

人麻呂は大和島根の歌に並べて「大君の遠の朝廷とありかよふ嶋門を見れば神代し念ほゆ」と詠んでゐる。「大君の遠の朝廷」は大君の遠い政庁の意で、ここでは九州大宰府をさす。瀬戸内海を通して都の中央政庁と大宰府との交通は頻繁であった。島門は、島と島との間の狭くなった地形、いはゆる海峡である。「ありがよふ」は直訳すれば「いつも通つてゐる」といふことだが、人麻呂は「蟻通」の字を宛ててゐる。『萬葉集』の宛字には、作者が特別の意味を託してゐる場合がある。後世の「蟻の熊野詣」を

連想させるこの表記は、無数の舟の点々と連なって海峡を過ぎてゆく光景に、人麻呂が蟻の行列を連想してこの字をわざわざ用ゐたのかと思はれる。その壮大なありさまに神代が思はれると、神話の世界を重ねたのだ。記紀の国生み島生み神話を踏まへての、いかにも人麻呂らしい重厚な作だ。

人麻呂はまた、瀬戸内海の狭岑嶋の磯で水死人を見て、これに長歌一首短歌二首を手向けてゐる。

玉藻よし 讃岐の国は 国柄か 見れどもあかぬ 神からか ここだ貴き

天地 日月と共に 満りゆかむ 神の御面と つぎ来たる 中の水門ゆ

船浮けて 吾が傍ぎ来れば 時つ風 雲居に吹くに 沖見れば 跡位浪立ち

へ 辺見れば 白浪さわく(以下略)(2、二二〇)

「天地日月と共に満りゆかむ神の御面」と壮大な神話から歌ひおこした。『古事記』国生みの条は、伊豫二名嶋(四国)について「この嶋は身一つにして面四つあり、面ごとに名

あり」として「伊豫国を愛比売といひ、讃岐国を飯依比古といひ、粟国を大宜都比売といひ、土佐国を建依別といふ」と記してゐるが、その「神の御面」なのだ。それを「天地日月とともに充足し整ってゆく神のお姿」と讃へ、時つ風（潮が満ちてくる時など、その時がくると、きまって吹く突風）が大空に吹くと、沖には浪がうねり立ち、辺には白浪が騒ぐと、海洋の生きた姿を動的に歌つてゐる。神代の伝承は人麻呂の血管に脈打つてゐたのだ。「嶋門を見れば神代し思ほゆ」も同じ気持から歌つたものだ。

「大君の遠のみかど」は『萬葉集』に八例。うち五例までが筑紫に関して歌はれてゐる。大宰府は通常の国府とは格が違ひ、「中央の朝廷機構をそのまま縮小したような官人構成をとり、かなり大規模な行政府が、少くとも大宝年間以来厳然としてつくられ、九州の支配にあたつていた」（井上辰雄「筑紫の大宰府と九国三島の成立」）といふ。かかる大政庁であつたからこそ「遠の朝廷」の名に価したので。通常の国府に関して「遠の朝廷」と歌つたのは大伴家持の越中における二例だけであるが、これは家持が自分の越中国守としての職責を痛感し、自負して、大宰府なみに大きく表現したのであつて、一般的な用例ではなかつたと思はれる。

いま一例は、遣新羅使の一行が「すめろきの 遠の朝廷と から国に わたるわが背は ……」(15、三六八八)と詠じた例で、通常「三韓はかつてわが属国であったといふ国民的自尊心から、かうした言葉を用ゐた」(鴻巣盛広『萬葉集全釈』、澤瀉久孝『萬葉集注釈』等)と説かれてゐる。即ち、かつて任那みまな日本府が、外地に置かれ、日本政庁として重大な意味を持ってゐたところから、任那喪失後も、このやうな表現をなしたものだといふのである。しかし、これは韓国の地を「遠の朝廷」と称したのではなく、「遣新羅使」といふ「官」を称したものと解した方が、「遠の朝廷と韓国にわたるわが背」の文脈に素直である。天皇の大権を委任されて、現地においてこれを行使する官の義であらうと私は思ふ。

「遠の朝廷」の原義は「辺要の地に設置された政庁」であるが、転じて、「重要政庁の所在する辺地全体」をも指し、別にまた「大任を帯びて辺地へ赴く官」をいふ場合も生じたと考へたい。更に人麻呂のこの歌にはもう一つ別の解釈も可能だ。

人麻呂のこの一首を、「中央政庁から遠の朝廷たる大宰府へ交通する海峡」と通説に従つて一応解釈しておいたが、海峡の島門を「御門」に見立てたと解釈してもよいやうに思はれる。即ち、朝廷の門を敬つて御門みかどといひ、御門の語によつて朝廷そのものを現し、(引

いては後には天皇をもミカドと申上げた。両側から島の迫った海峡の地形を、朝廷の外御門と見立て、多くの船舶がその門を通して往復すると解釈した方が、「遠のみかどとあり通ふ嶋門」に対し一層適切ではないか。そして、この壮大な地勢地形の島々を生み成されたといふ神代を、人麻呂は目に見る如く実感し、感動したのだ。「遠の朝廷」といふ語も、その一首一首に即して意味を判断すべきでないかと思ふのである。

大伴家持の越中における二例は、その一は「大王の 遠のみかどぞ み雪降る 越と名におへる 天離る 鄙にしあれば 山高み 川遠白し 野を広み 草こそ茂き……」(17、四〇一一)と、越中国そのものを「遠の朝廷」と歌ひ、その山高く、川遠白く、野広く、草茂き雄大な自然を力こめて歌ってゐる。その二は「大君の とほのみかどと まきたまふ 官のまにま み雪ふる 越にくだり来……」(18、四一一三)。これを「遠の朝廷と任きたまふ(任命された)官」として遣新羅使の場合と同じやうに解することも不可能ではないが、むしろ「遠の朝廷と……越に下り来」とつづけ、任地越中を遠の朝廷と表現したと解釈した方が家持の場合はよいやうに思はれる。

「遠のみかど」の用例は以上八例。他の古典には全く用ゐられたことのない『萬葉集』

独得の重々しい語彙である。

三 天地開闢神話と人麻呂・赤人

—— 天地の初めの時と天地の分れし時 ——

人麻呂・赤人の

天地開闢表現

柿本人麻呂は、日並皇子尊（草壁皇子）の薨去を悼み、長歌一首反歌二首をささげたが、その歌ひ出しは、

天地の 初めの時 久堅の 天の河原に 八百萬 千萬神の
神集ひ 集ひいまして 神はかり はかりし時に……（2、一六七）

である。敬慕渴仰の情をこめて、皇室の由来を天地の初めから説きおこしたのである。

山部赤人は不尽山（富士山）を望み、長歌一首短歌一首を作ったが、その歌ひ出しは、

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる

不^ふ尽^じの高嶺^{たかね}を 天の原 振り放^さけ見れば……(3、三二七)

である。崇高雄大な富士の高嶺を讃嘆して、天地開闢^{かいびやく}から歌ひ出したのである。

記紀開闢

伝承の比較

『古事記』本文の巻頭には「天地初発時」と記されてゐる。本居宣長の『古訓古事記』はこれを「あめつちのはじめのとき」と訓ませてゐる。人麻呂の歌詞と同じである。

『日本書紀』(以後、省略して単に『書紀』とも記す)の巻頭は「古、天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌として鷄子の如し、溟滓^{くも}りて牙^{きざし}を含めり」とあって、「天先づ成りて、地後に定まる」と続いてゆく。渾沌未分化の宇宙が、清^すみたるものは天、重く濁れるものは地となつて、天と地とに分かれたと、動的に天地開闢を描いてゐる。

これに対して『古事記』は、天と地とに分かれたとは説かず、簡潔單純に「天地の初め」である。天・地の差を絶した世界である。そこに、宇宙の中心を暗示する神名(アメノミナカヌシノカミ)、ついで万物生成の靈妙な働きを示す神名(タカミムスヒノカミ・カミムスヒノカミ)、次いで、浮脂^{うまゆら}の如く、漂^たぶ^たぶ^たの如き渾沌を貫いて、葦の芽の如

き新鮮な力がいきいきと生じたことを示す神名（ウマシアシカビヒコヂノカミ）と続いてゆく。人麻呂はその『古事記』的伝承からおごそかに筆を起こしたので。

赤人は『書紀』的伝承に立ち、天と地とが鮮やかに分離してゆくイメージを描き、その天と地の間^まに屹立^{きつりつ}する白妙の富士を点じた。天と地との分かれてゆく間に、「高く貴き富士」がいきなりぬっと出現するのだ。まさに視界明確、目がさめるやうだ。莊嚴なる神山にふさはしい歌だ。

人麻呂の歌は、天地の初め、天^{あま}の川原^{かはら}に八百^や万^{はち}、千^ち万^まの神々^{かみ}が集ひ、議をこらしたと続けてゆく。天の川原は、宇宙の遙かにきらめき懸った銀河のイメージを持ちながら、同時に岩石荒涼たる川原のイメージを重ね持つてゐる。赤人の鮮明な視覚世界とは全く違った、何か暗い巨大な拡がりがある。

『書紀』では、天照大神誕生の時、「天地相去ることいまだ遠からず」、よって父母イザナキ・イザナミの神が天照大神を「天の柱^{みはしら}以ちて天上に挙げまつりき」とあって、天地次第に遠ざかり、分かれていったことを具体的に明確に述べてゐる。

江戸時代の下河辺長流^{しもかはべながる}の歌に「富士が嶺に登りて見れば天地はまだいくほども分かれざりけり」

とあるのは、『書紀』の伝承と『萬葉集』赤人の歌とを踏まへて、富士登頂の実感を歌ったものだ。歌としては取り立てて言ふ程ではないけれども、思想的に興味深い作品だ。

『古事記』では、「高天原に成りませる神」三神は天界で、「次に国稚く、浮脂の如くして水母なす漂へる」以下は「国稚く」とあるから地界のことかと思ふと、これに続いて天の悠久を示す天之常立神とこたちが成り出で、以上を一括して別天神ことあまつかみと称し、その次が国之常立神とこたちとなるので、ここに天地の境目があるかと思はれるが、神名によって暗示する程度で、天地分化を明言せず、すべて神韻縹渺しんいんひょうびょうたる伝承のしらべに融かしこんである。そのしらべが人麻呂の長歌にうねりを打って落ちこんでゆくのだ。

『古事記』も、その序文（上表文）の冒頭は「乾坤初分」となっている。『古事記』の序文と本文とは一致せぬ場合があつて、漢文的修辭を主とし、文飾を構へた序文では、おのづから『書紀』的表現に傾斜したのだ。

逆に、『書紀』でも、「孝徳紀」には「天地之初より」と『古事記』と同じ古語をそのまま用ゐた個所がある。

『常陸国風土記』には「清濁得糺、天地草昧已前」といふ語があつて、古典文学大系本

（秋本吉郎訓）では「清^すめると濁れると糺^{あざな}はれ、天地の草味^{ひらくる}よりさき」と訓み、岩波文庫本（武田祐吉訓）では「草味已前」の四字を「わかれざりしとき」、角川文庫本（小島璣禮訓）では「ひらくるよりさき」、神典本（大倉精神文化研究所訓）では「天地草味以前」を「あめつちのはじめのとき」と訓むなど、諸訓さまざまであるが、「清濁得糺」は『書紀』神代卷冒頭の「清陽者薄靡而為天、重濁者淹滯而為地」を思はせる表現だ。また同風土記の「天地権興」の個所は諸書すべて「あめつちのはじめ」と訓み、『古訓古事記』の「天地初発」と同訓だ。

『出雲国風土記』の「天地初判後」は諸書すべて「あめつちをはじめてわかれしのち」と訓み、これは『書紀』的だ。

大伴家持は、世間の無常を悲しむ歌を「天地の遠き始めよ」（19、四一六〇）、藤原二郎の母の喪を弔ふ歌を「天地の初めの時ゆ」（19、四二二四）と歌ひ起こし、『古事記』的表現を一貫させてゐる。

天の川原（或いは天の安^{やす}の川原）が銀河のイメージを持つところから、シナ（中国）渡来の牽牛^{けんぎゅう}・織女^{しよくじよ}の七夕伝説^{たなばた}の天漢に結びついてゆく。山上憶良^{やまのうえのおくら}の七夕の歌（天平元年七月

七日夜、憶良天河を仰ぎ観ると左注)には、「牽牛ひこはしは織女たなばためと天地の別れし時ゆいなうしろ 河に向き立ち……」(8、一五二〇)とあって、赤人と同じ「天地の分れし時ゆ」の語を用ゐてゐる。牽牛・織女断絶伝説のイメージは「別れし時」の表現とびつたり呼吸が合つてゐる。同じく『萬葉集』巻第十に七夕伝説を歌つた作者未詳の長歌が二篇並べ載せられてゐるが、その一首は「乾坤あめつちの初めの時ゆ」(二〇八九)と歌ひ出し、いま一首は「天地と別れし時ゆ」(二〇九二)と歌ひ出してゐる。『古事記』的宇宙観と『書紀』的宇宙観、従つてそれに基づく表現が当時混沌として並び行はれてゐた事実を、『萬葉集』「古風土記」等によつて窺ふことができるのは興味深い。

(注) 『古事記』の「天地初発時」の「初発」を宣長はハジメと訓んだが、延佳本・寛永版本・田中頼庸本などはハジメテヒラクル、兼永筆本は単にヒラクル、田安宗武はハジメテヒラケシと訓んでゐる。現代でも倉野憲司訓(古典文学大系・岩波文庫)、神田秀夫・太田善麿訓(古典全書)はハジメテヒラケシ、また西宮一民訓(古典集成)、青木和夫訓(思想大系)はハジメテオコリシと訓んでゐる。

天地初発から

皇室起源伝承へ

人麻呂の「天地の 初めの時」の長歌は「天照らす 日女の命 天をば

知ろしめすと 葦原の 水穂の国を 天地の 依り相ひの極み知らしめ

す 神のみことと 天雲の 八重かき別きて 神下しいませまつりし

高照らす 日の皇子……」と続いてゆく。「孝徳紀」の詔も「惟神も我が子治らさむと

事寄させき。是を以て天地の初めより君と臨らす国なり」と続く。家持の歌も「天地の

初めの時ゆ うつそみの 八十伴の緒は 大君に まつろふものと 定めたる 官にしあ

れば……」と続き、悠久なる天地初発の神話が、現実の皇室の起源伝承に直接してゆくのが

特色である。最も神韻縹渺たる語り言が、最も国家的・政治的・社会的・人文的伝承にな

ってゆく。そこに、古代の人々の「八隅知しわが大君、高照らす日の御子」に対する畏

敬帰依の心情が深々と息づいてゐるのである。

これに対して、赤人の「天地の分れし時」の歌は、人間的な世界に全く

関せず、もっぱら山岳の神巖崇高清浄を、絶讃し、感嘆し、自然に没入

してゐる。カオス的な「天地の初めの時」、コスモス的な「天地の分れ

し時」、それがそのまま人麻呂・赤人に反映してゐる。まさに対照の妙である。

神議りと

人麻呂の歌ふところでは、八百万、千万神たちの神議によって、天照らす日女

天孫降臨

命（即ち天照大御神）が天上界をしろしめすのに対して、葦原の水穂国（即ち

下界の日本国）を、「天地の依り相ひの極み」しろしめす神のみこととして「高照らす日の皇子」を「天雲の八重かき分きて」下されたといふ。いはゆる天孫降臨の神話である。

「神議りによりて」とは歌はず、「神分り分りし時に」といふ表現であるが、文勢からして当然「神議の決定によって」の意にとるべきであらう。

ただし、「神議の決定」によって、天照らす日女命の天上統治も定めたとする澤瀉久孝・武田祐吉・土屋文明ら諸氏の解釈はどうであらう。むしろ、天照らす日女命の天上界をしろしめすといふ蔽然たる既定の事実に基づき、その日女命の御子を下界の統治者と議り定めたと解すべきであらう。

それにしても、『古事記』の伝承では、「天照大御神の命もちて、豊葦原の千秋の長五百秋の水穂の国は、あが御子正勝吾勝々速日天の忍穂耳命の知らす国ぞと言因さしたまひて、天降したまひき」と、大御神の御一存、後には天照大御神と高木神二柱の命によって

事は決定され、御子を降臨させられたとなつてゐる。『日本書紀』本文では、高皇産靈尊の御一存の如く記し、いづれも最高神（一柱又は二柱）の御存念で万事決定されたとしてゐるのに対して、人麻呂長歌では、八百万の神々の衆議を尽くして決したやうに歌はれてゐる。

『統日本紀』神亀元年（七二四）の聖武天皇即位の宣命では「高天原に神留りますす皇親神魯岐・神魯美命の、吾が孫の知らさむ食国天の下と依さし奉りし」（勝宝元年の孝謙天皇即位の宣命もこの個所はほぼ同文）とあつて、神ろき・神ろみ（即ち皇祖神。カムロキのキは男神の尊称。カムロミのミは女神の尊称）両神の御裁定によつて統治者が決したことが強く打ち出されてゐる。

『延喜式』所収の「大祓詞」等では、「高天原に神留りますす皇睦神ろき・神ろみの命もちて、八百万の神等を神集へ集へたまひ、神議り議りたまひて、へわが皇御孫の命は豊葦原の水穂の国を安国と平らけく知らしめせ」と事依さしまつりき」の形で、ここではまづ、神ろき・神ろみの命によつて、数多くの神々が集議し、皇御孫命の下界統治を定めたといふ形になつてゐる。人麻呂は、この大祓詞と同じ形の伝承に拠りながら、最初の部分

「神ろき・神ろみの命もちて」を省略したのであらう。人麻呂のこの長歌には、文学的省略が随所にあつて、一首の緊密度を高めてゐるが、その代り、話の筋道が分かりにくくなつてゐる。このところも文学的に省筆したとみるべきで、漠然と多くの神々が自発的に集まつて協議したと取るべきではないと思はれる。

『常陸国風土記』では「諸祖天神（俗に賀味留弥・賀味呂岐といふ）、八百万の神たちを高天原に会集へたまひし時、諸祖神、告りたまひしくへ今我が御孫の命の光宅さむ豊葦原の水穂の国」とのりたまひき」とあつて、至高神のカミルミ・カミロキの神が数多くの神たちを会集せしめ、そこでカミルミ・カミロキが御孫命の水穂国統治を宣言されたといふ形である。八百万の神たちの意見を徴したといふ表現はなく、宣言を聞かせるために会集せしめた如き文の運びである。

おそらく皇祖神が衆神を集め、議らしめ、その意見をも勘案して、下界の統治者を決定し堂々宣言されたといふ原伝承が、『古事記』『書紀』『常陸国風土記』『続紀宣命』『大祓詞』等に、各重点の置き所を違へ、或は一部省略して記述され、微妙なニュアンスの差を生じたのであらう。『萬葉集』特に人麻呂長歌の如き壮大な作品を理解するには、他の古

典を味読することが不可欠である。

天照らす

天照らす日女の命とは天照らす大御神の別名。『書紀』本文には大日靈貴と書

日女の命

いてゐる。日の女神の意である。人麻呂長歌には、天照らす日女の命の下に「一に云、さしのぼる日女の命」と注記されてゐる。人麻呂の作製した長歌の

別案（初案？）であらう。これは「さし昇る朝日の女神」の意である。「天照らす」「さし昇る」と人麻呂は光明赫灼たる太陽の女神を心に描いてゐる。頼みの皇太子が薨去されたといふ暗澹「常夜ゆく」中にあって、皇統の根源たる、はるか天上の尽十方無碍光の日の大御神が一層強く意識されたのであらう。「ひとり坐し心に思ふくら空にかくしやくと照る日の大御神」（川出麻須美）。

スメミマノミコト

草壁皇子は天武天皇の皇子で皇太子。日並皇子尊と崇められた。日に

と歴代天皇

並ぶ尊い方の意であらう。その皇子の薨去を歌ふため、人麻呂は「天地の初め」から歌ひおこし、天孫降臨を歌ひ、飛鳥の淨見の宮で天下

を統治され、崩御された天武天皇を歌ひ、いつのまにか草壁皇子の薨去に移ってゆく。予備知識がないと、天孫ニニギの命と、天武天皇と、日並皇子との三者が同一人物かと思は

れるやうな歌ひぶりである。悪口を言ふ者は、文脈混乱とか支離滅裂とか評するであらう。しかし、スメミマの命とは、皇孫ニニギの命であつて、同時に歴代天皇である。即位式につづく大嘗祭だいじょうさいの秘儀を修し、歴代の天皇はすべてニニギの命に合一され、スメミマノミコトとなられるといふのが上代以来の重要な信仰であつた。

昭和八年、皇太子殿下が誕生された時、川出麻須美は「皇神すめがみは御子下しませり清き故に悩む御国みくにに御霊みたま添たそふべく」と歌ひ「古いにしへと来こむ世とを今にとりすべてわきおこる皇国みくにのすがたうれしも」と歓喜した。代々の皇太子はすべて皇神（神ろき・神ろみ）が天上から葦原水穂国はらみづほのくにへ下されたといふのが古代日本人の信念であつた。そのことを理解して初めて人麻呂の渾沌たる歌がわかつてくる。人麻呂はこの信念に立ち、高天原から降臨され、地上の事終つて、また天上に神上かみあがりされた代々の至尊をただ一人に煮つめ、ただ一人の如く実感し、渾身の力をこめて神聖伝承を讃嘆し、皇子尊の薨去を慟哭したのであつた。

天地の依相よりあひの極み

「天地あめつちの依相よりあひの極きはみ知ろしめす」と人麻呂は歌つてゐる。遙か彼方を望見すれば、天と地とが一線に接してゐる、その天と地とが依りあふ果までも知ろしめすといふのである。『延喜式』祝詞のりとの「伊勢にます天照らす大御神おほみかみ」に

奏上する詞に「皇神の見はるかします四方の国は、天の壁立つ極み、国の退き立つ限り、青雲のたなびく極み、白雲のおりゐる向伏す限り」といふ壮大な詞章がある。多少意訳を加へて言ひ直せば、「天が壁の如く立ってゐる水平線の果までも、国土が遙かに遠く、まさに消えなんとして見える水平線の果までも、青雲たなびき、白雲たむろし、天地相接するかなたまでも」といふことにならうか。その「皇神がはるばると照覧していらつしやる広大な国々」から、海路陸路、舳艫相含んで船が満ち、陸統として馬が続き、皇孫命に朝貢してくるといふのである。そのやうなイメージをこめて「天地の依相の極み」と人麻呂は歌ってゐるのである。

しかし、『萬葉集』にはまた「天地の依相の極み」を時間的に永遠にかけて歌った例がある。巻第六、田辺福麻呂が寧楽の都について「天地の依り合ひのかぎり万世に栄えゆかむ」（二〇四七）と歌ひ、巻第十一には「天地の依相の極み玉の緒の絶えじと思ふ妹があたり見つ」（二七八七）といふ作者不詳歌がある。いづれも「天と地とが依りあふ遙か後々の世までも」の意である。

人麻呂の「天地の依相の極み」もまた、空間的視覚的な広がり、そのまま時間的に

「天地とともに窮りなく」といふ観想を伴ひ、空間も時間も一つにとかききつてゐる。やはり『延喜式』祝詞の「大殿祭」詞に「皇我が宇都の御子、皇孫の命、これの天つ高御座に坐しまして、天つ日嗣を万千秋の長秋に、大八州豊葦原の瑞穂の国を安国と平らけく知らしめせと言寄さし奉り賜ひて」といふ莊重な語句がある。『古事記』にも「豊葦原の千秋の長五百秋の水穂の国」、「日本書紀」にも「豊葦原の千五百秋の瑞穂国」といふ語が、いづれも天孫降臨に際しての皇祖神の詔として記されてゐる。「万千秋の長秋」「千秋の長五百秋」「千五百秋」、千秋万歳までもの国土の豊穰を予祝した美しい詞章である。人麻呂はそのやうな觀念をこめて「天地の依相の極み知らしめす神の命」と歌ったのである。

人麻呂の長歌には、常に古代祝詞が深く作用してゐる。人麻呂長歌において、頻繁に主語が入れ替つてゐて、現代語訳しようとするとう惑するやうな、あの粘着力のある、飴のやうな文体も、祝詞の文体から来てゐる。しかもその言葉が、大きな声調の揺らぎを伴つて読者に迫ってくる。祝詞奏上の声が高く、低く、うねりを打ってひびき、時には朗々と耳朶を打ち、時にはかすれてゆく、そのやうな声調が人麻呂の長歌にある。人麻呂個人を超えた日本民族の声がそこにひびいてゐる。人麻呂はまさに不思議な古代的心意の体现

者・表現者、すなはち民族的詩人であった。

第五章

萬葉中期の歌びとたち

—— 赤人・虫麻呂・憶良・旅人など ——

一 赤人と虫麻呂の富士讃歌

赤人の望不尽山歌

山部赤人もまた柿本人麻呂の後を継ぐ宮廷歌人で、しばしば行幸に従駕して宮廷讃歌を詠作してゐるが、人麻呂に比べると感動は浅く、伝統的辞句を羅列した感じた。しかし、赤人が長歌に添へた反歌（短歌）は、自然美に開眼した新鮮な境地を開き、人麻呂に無かつた文学を達成した。その赤人が自然美を歌つた傑作が望不尽山歌だ。

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布土の高嶺を 天の原
振り放け見れば 度る日の 陰も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も
いゆきはばかり 時じくぞ 雪は降りける 語りつぎ 言ひ継ぎゆかむ
不尽の高嶺は（3、三一七）

反歌

田兒の浦ゆ打出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は零りける（3、三一八）

「天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き」に始まり、十九句から成る比較的短い長歌で、「時じくぞ雪はふりける、語りつき言ひつきゆかむ不尽の高嶺は」と結び、凜とした気魄が一首にひびき、「田兒の浦ゆ打出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪はふりける」の反歌で全篇をひきしめてゐる。

「度る日の陰も隠らひ、照る月の光も見えず」は不尽を讃ふるあまりの誇張で、いささか気になる表現だが、富士讃嘆の強い調子で押し切つてゐる。噴煙、天を覆ひ、日も月も光を隠すほどの火山富士の神山性を、力こめて歌つてゐるのである。「白雲もいゆきはばかり」も、実際には富士山が雲で隠れることが多いのだが、そのやうな客観的事実でなく、雲も寄せつけぬ富士の神威に対する驚嘆なのである。後世の若山牧水の歌に、

富士が嶺に雲は寄れどもあなかしこ見てあるほどにうすらぎて行く

寄り来りうすれて消ゆる水無月の雲たえまなし富士の山辺に

と歌はれてゐるが、そのやうな現実の光景がもとになって「白雲もいゆきはばかり」の語が生み出されたのであらう。

萬葉の原歌と

この反歌は、後世『新古今和歌集』では、

新古今の改作歌

田子の浦に打出でて見れば白妙しろたへの富士の高嶺に雪は降りつつ

と改作され、「小倉百人一首」にもこの形で採られ、赤人の代表作として人口に膾炙かいしやした。「田子の浦ゆ」は田子の浦を起点として作者が動いてゐるが、「田子の浦に」では一地点に静止してゐる。「真白にぞ」「雪は降りける」と驚嘆畏敬の情をうちつけに打ち出した強い表現が、『新古今』では「白妙の」「雪は降りつつ」と装飾画的な白富士に描き直されてゐる。生きた富士と、額ぶちの中の富士の相違である。

海辺から、まっ白に晴れ上がった富士は見えるが、「雪は降りつつ」と高嶺に雪の降りしきる実況は見えないのである。どこまでも絵画的に、異時同図的・異所同図的に観想された世界である。『新古今』には『新古今』なりの世界があつて、それはそれでよいのだが、『萬葉集』の力強く緊張したシラベを、この原歌と改作歌との比較から、あらためて

思ひ知るべきであらう。

なほ、語順を変へて「真白にぞ雪は降りける不尽の高嶺に」とすると、一首の力が抜けてしまふ。やはり一首を総括して「雪は降りける」と結句をひきしめるべきところである。語順を変へた方が心理的に自然だといふ批評を何かで読んだ記憶があるので一言しておく。

持統天皇香具山の

同じやうな改作の例をあげると、『萬葉集』持統天皇御製、

御製とその改作歌

春過ぎて夏来たるらし白妙の衣乾したり天の香具山（1、二八）

が『新古今』「小倉百人一首」では、

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣乾すてふ天の香具山

となつてゐる。「来たるらし」「乾したり」と畳みかけてゆく力強さは改作歌ではすっかり失はれてゐる。「来たるらし」は「来たやうだ」と直線的で、シラベが張つてゐるが、「来にけらし」では「来てしまつてゐるやうですね」ぐらゐで、細々とした眩きになつてしまふ。「衣乾したり」は眼前の鮮明な実景であるが、「衣乾すてふ」では、「衣を乾してゐる

といふことですね」と、实景は見ないで、深窓での伝聞になってしまふ。力強く、素朴で、鮮明な『萬葉集』原歌と、あてやかで弱々しい『新古今』改作歌との差である。

虫麻呂の詠

不尽山歌

赤人の望不尽山歌の次に「詠不尽山歌一首并短歌」と題し、長歌一首短歌二首（3、三一九—三二二）を載せ、そのあとに左注を加へて、「右一首、高橋虫麻呂之歌中出焉、以類載此」としてゐる。このまま解釈すれば、三首

目の短歌一首だけが虫麻呂の歌となり、長歌一首短歌一首は作者不詳といふことになるが、古来、論議のあるところで、虫麻呂の他の作品との比較からも、この長短歌三首をひっくるめて虫麻呂の作とする説に従ひたい。山部赤人の望不尽山歌があるので、「類を以て此に載す」としたのだと取りたい。

この長歌は、赤人の長歌よりも長大で、三十七句から成る大作。

詠不尽山歌一首并短歌

なまよみの 甲斐の国 打ちよする 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ
 出で立てる 不尽の高嶺は 天雲も いゆきはばかり 飛ぶ鳥も 翔びも上らず

燎ゆる火を 雪以ち消ち 落る雪を 火もち消ちつつ 言ひも得ず
名づけも知らず 霊しくも 座す神かも 石花海と 名付けてあるも その山の
つつめる海ぞ 不尺河と 人の渡るも その山の 水の激ちぞ 日の本の
やまとの国の 鎮めとも います祇かも 宝とも 成れる山かも 駿河なる
不尺の高峯は 見れど飽かぬかも

反歌

不尺の嶺に零り置く雪は六月の十五日に消ぬれば其の夜ふりけり
布士の嶺を高み恐み天雲もいゆきはばかりたな引くものを

甲斐・駿河兩國の中央にそそり立つ富士の高嶺は、「天雲もいゆきはばかり、飛ぶ鳥も翔びも上らず」と、ここでも赤人と同じやうに富士の霊威を強調し、つづいて「燎ゆる火を雪もち消ち」「零る雪を火もち消ちつつ」と、頂上の噴火と降雪とが相互に激しく拮抗してゐる状況を劇的に歌つてゐる。いかにも虫麻呂らしい叙事詩的表現だ。そして「言ひもえず、名づけも知らず、霊しくも座す神かも」と、筆を置いて神山を讃嘆してゐる。

「神かも」と、はっきり富士山は神であると畏敬の念を捧げてゐるのである。更に、石花海（富士五湖のうち）もその山の包んでゐる湖だ、富士川もその山から激り落ちてくる水だと、山麓の河川湖沼を総括して富士の大きな力を讃へ、「日の本のやまとの国の鎮めとも座す祇かも、宝とも成れる山かも」と、富士こそは日本国総鎮守の神祇だ、日本国の宝だと、国家的観点に立って富士讃歌をかなで、「不尽の高嶺は見れど飽かぬかも」と息たく歌ひ収めてゐる。

赤人が専ら富士の自然美を鮮明に描き出したのに対して、虫麻呂は伝承を織りまじへつつ、富士の精神的意義を謳歌した。富士を、日本の象徴、国の鎮めと仰ぐ思想のさきがけをなすのがこの虫麻呂の長歌だ。

日の本の

やまとの国

「やまと」は、本来は現在の奈良県に相当する一地域の名だが、大和に長く朝廷が置かれたため、やがて日本全国を「やまと」と称するに至った。『萬葉集』には、大和一国（奈良県）の意に使はれた例が多いが、日本国全体を意味した用例もある。ここは明らかに日本国の意だ。しかも「日本之山跡国」と表記され、「日の本」と枕詞を冠して呼ばれてゐる。『萬葉集』全巻を通じて「日の本」の用例はこ

の一個所だけだ。その意味でも貴重な作例だ。(日本と書いてヤマトと訓ませた個所は十七例を数へるが、ヒノモトと訓ませた例は他にない)。

「日の本」に対して支那(当時、唐)を「日の入る国」と呼んだ例がある。(巻第十九、四二四五番、天平五年入唐使に贈る作者未詳長歌)。「日出づる処の天子、日没する処の天子に書を致す」の有名な辞句が思ひ合はされる。

万年雪の伝承

反歌では、「富士山が高く、畏れ多いので、天雲も山に懸かることを憚^{はばか}つて、ひそかに棚引くほどだ」と、長歌の内容の一部を反覆して讚嘆してゐる。「ものを」止^どめの結句は、いかにも、これ以上言ふすべもなく溜め息をついてゐる感じだ。いま一首の反歌は、「富士山に降り積つてゐた雪は、盛夏六月十五日に消えたが、消えたあとたちまちその夜のうちに新雪が降つたといふことだ」と、伝承を歌材にして、不尽の雪(文字通り尽きざる雪、万年雪)の神秘を畏嘆した。

同じやうな伝承は加賀^{かが}の白山にもあって、盛夏雪が消えたら、その晩のうちに新雪が積つて白山の名に背かなかつたといふ。「白き神々の座」といふ話があるやうに、雪といふ清浄無垢なものを神山の重要な条件としてゐたのだ。

『萬葉集』には数多くの山が歌はれてゐるが、多くは青々と茂った山で、夏も雪と岩に鎧よろいはれた高山は不尽山と立山だけだ。(白山らしきものも歌はれてゐるが、加賀の白山と特定してよいかどうか、多少の疑問を残す。確実に歌はれてゐるのは不尽山と立山の両山だけだ。なほ、立山は中世以降タヤマと呼ばれたが、古代にはタチヤマであつた)。

なほ、後世の歴代天皇御製で、山岳の国家的意義を讃へられたのも、多分富士と立山の両山であらう。明治天皇「萬代よろづよの国のしづめと大空にあふぐは富士のたかねなりけり」。今上天皇(大正十四年、皇太子の御時)「立山たてやまの空に聳そびゆるををしきにならへとぞ思ふみよのすがたも」。

語りつき 赤人の望不尽山歌の結びは「語りつき言ひつきゆかむ不尽の高嶺は」であつ

言ひつぐ山 たが、大伴家持の立山賦たちやまのよ(17、四〇〇〇)も「よろづ代の語らひ草と」と歌

ひ継ぎゆかむ川し絶えずは」と歌ひ収め、口を揃へて「言ひ継ぎ、語り継ぎ」を力の限り強調してゐる。

『萬葉集』に「言ひ継ぐ」「語り継ぐ」又はこれに類した表現は多いが、すべて人事にかけて歌はれてゐる。山上憶良の辞世の「よろづ代に語りつぐべき名は立てずして」(6、

九七八）は有名だが、家持も「後の代に語りつぐべく名を立つべしも」（19、四一六四）と歌ひ、笠金村も「後見む人は語りつぐがね」（3、三六四）と歌つてゐる。いづれも丈夫まぢらの名、丈夫の業績または家門の名誉である。高橋虫麻呂が「遠き代に語り継がむ」（9、一八〇九）と歌つたのは悲恋伝説だ。すべて人事である。

その中であつて、不尽山と立山の「言ひ継ぎ」「語り継ぎ」が歌はれてゐることは注目していい。人間の短き命に比べるならば、大自然は悠久である。その悠久の大山岳を、脆くはかない人間が言ひ継ぎ語り継ぐとは、どういふことか。

神山と崇められた山は、三輪山・天香具山・畝火山・二上山・吉野山等々数多いが、青々と茂り立つこれらの山には「語り継ぎ、言ひ継ぎ行かむ」などとはただの一言も歌はれなかつた。萬葉びとにとって、青く茂る山は日常見なれた親しき自然であつた。「青垣山ごもれる大和しうるはし」と心の安らく世界であつた。

ところが、天ざる鄙ひなに赴き、盛夏なほ雪をいただき、岩石が嶮々として天そそり立つ高山に、萬葉びとは度胆どぞいを抜かれ、その激しい感動を止むに止まれぬ思ひで歌ひあげたのであらう。

家持は「いまだ見ぬ人にも告げむ、音のみも名のみも聞きて、羨しづるがね」(17、四〇〇〇) まだ見たことのない人に語り告げてやらう、実際に見ることはできなくても、せめてその名、その話を聞いて羨しがるやうに告げてやらうと、歌ってゐる。しかも「よろづ代の語らひ草」いついづまでもの語り草として話してやらうと歌ってゐる。空間的な願望がそのまま時間的にも転じてゆくのだ。

赤人の場合にしても、不尽山を仰ぎ見て驚嘆した思ひを、いまだ見ぬ人に語り告げたいといふ気持がまづ湧きおこつたであらう。赤人は勝鹿の真間娘子の墓で「われも見つ、人にも告げむ」(3、四三二)と詠んでゐるが、その「人にも告げむ」の思ひが不尽山に対しては更に深く、強く、後々までも「語りつき言ひつきゆかむ」と高騰したのであらう。崇高なる大山岳は、卑近な世間話的話題など吹っ飛ばして、ただちに「語りつき言ひつき」の悠久感を呼びおこしたのであらう。

古代ヨーロッパ人の山岳観との対比

古代のヨーロッパ人は、雪と岩のアルプスを悪魔悪龍の住み処として忌み嫌ひ恐れたといはれてゐるが、日本人は萬葉の昔から、雪と岩の立山(日本アルプス)に対して心の底から感動し、「見れども飽かず

神からならし」(17、四〇〇一)と手放して讚嘆した。日本文化を考察する上で忘れてはならぬ点である。

後世の立山を 富士山については牧水の歌を引いたが、立山を神山として讚嘆した後代の

神山と仰ぐ歌

短歌を若干左に挙げておく。

立山にとこしく雪に月影のかがよふ見れば玉にかも似る(天明六年、荒木田久老)。立山は高く尊し天そそりそそりいませば高く尊し(天保六年、岩雲花香)。常夏にみ雪積りて天そそり立てるを見れば息づかしもよ(安政二年、五十嵐篤好)。

見てあれば立山のつく白き息たちまち凝りて雲にかもなる(吉井勇)。見飽くまで見れど見飽かず立山はいかなる山ぞありがたき山。立山の氣息に通ふ我がいぶき大いなるかな我のいのちは(中川与之助)。青雲にかがやく立山古への人も見き今も我等仰がむ(土屋文明)。立山の嶺々ならぶ冬野が原入日にはふその嶺の雪(尾山篤二郎)。夕日さす雪のつら山見おどろき街にたたずみき言も絶えつゝ。天地の大きな花挿頭やムやムにあせゆきしはや夕暮のいろに(川出麻須美)。

一一 高橋虫麻呂をめぐって

—— 伝説歌人・自然歌人・日本の歌人 ——

真間の手児名と

『萬葉集』卷第三に山部赤人が勝鹿の真間娘子の墓を見て詠じた長歌・

芦屋の菟原処女

短歌（四三一—四三二）が載せられてゐる。赤人は「打ち靡く玉藻刈りけ

む手児名し念ほゆ」「言のみも名のみも吾は忘らゆましじ」と懐旧の情

に浸ってゐるけれど、娘子について具体的なことは赤人の歌ではさっぱりわからないので

ある。卷第九には、高橋虫麻呂の「勝鹿の真間の娘子を詠む」長歌一首・短歌一首（一八

〇七—一八〇八）が載せられてゐる。これを読むと、東国に真間の手児奈といふ娘が居て、

「髪だにも 搔きは梳らず 履をだに 著かず」「麻衣に 青袴つけ 真佐麻を 裳には

織り服て」といふ粗末な服装であつたけれど、錦綾に包まれた良家の箱入り娘もとても及

ばぬ美しさで、「夏虫の 火に入るが如く 水門入りに 船こぐ如く」多くの男から言ひ

寄られ、つひに「浪の音の 騒く湊」を奥津城として投身自殺したといふ伝説が印象的に

歌はれてゐる。虫麻呂は萬葉歌人中第一の叙事詩的能力を持った歌人であった。

虫麻呂は「菟原処女の墓を見る」長短歌三首（一八〇九—一八一）も作ったが、これまた、血沼壯士・宇奈比壯士の二人が菟名負処女といふ美女を手に入れようとして、「焼大刀の 手かみ押しねり 白ま弓 鞆取り負ひ」刀の柄に手をかけ、押しひねり、弓矢で身を固め、生死を賭けて争った時、処女はどちらにも靡きかねて、「ししくしろ 黄泉に待たむ」、思ふ人をあの世でお待ち申しませうと自殺した。これを夢で悟った血沼壯士はすぐさま後を追って自殺し、取り残された宇奈比壯士は「天を仰ぎ 叫び、おらび 地を踏み 牙喫み建怒び」、「もころ男（相手の男）に負けてはあらじ」とこれまた自殺した。三者の親族共が相集つて、「永き代に 標にせむと 遠き代に 語り継がむと」、処女墓の中に造り、壯士墓をその両側に造つたといふ当時の伝説を、手に取るやうに知ることができる。同じ伝説を、田辺福麻呂（9、一八〇二）も、大伴家持（19、四二二）も長歌短歌に作つてゐるが、伝説内容を叙事詩的にリズムづけけて歌つた虫麻呂の作が何と言つても白眉だ。

なほ、真間の手児名は葛飾、すなはち千葉県から東京都にかけての地の娘。菟原処女は葦屋、すなはち兵庫県芦屋市付近の地の娘。東国の伝説と西国の伝説である。

浦嶋子伝説歌

虫麻呂はまた「水江みづのえの浦嶋の子を詠む」、即ち、いはゆる浦島太郎の伝説も長い長歌（9、一七四〇）に仕立てた。「春の日の霞める時に墨吉すみよの岸に出で居て釣船つりぶねのとをらふ見れば古いにしへの事ぞ思ほゆる」に始まり、浦島が堅魚かつぎを釣り鯛を釣り、海界うみさかを過ぎて遙々とこ榜こぎ行き、海神の女に出あひ、相携あひたへて常世とこよに至り、幸福な生活を送ったが、「しばらく家に帰って、父母に事情を話し、またここに戻って来た」と言ひ出し、玉くしげ（いはゆる玉手箱）を貰って帰ったが、「家見れど宅いへも見かねて 里見れど 里も見かねて」、禁制の箱を開くと、白雲が箱から出て常世の方へたなびく。浦島は「立ち走り 叫こゝろび袖振り 反側こゝろび 足ずりしつつ」「たちまちに情こころ消失せぬ、若くありし皮はだも皺しわみぬ、黒くありし髪も白けぬ」、そして息絶えてゆくまでが興味深く歌はれてゐる。「立ち走り、叫こゝろび、袖振り、こゝろまろび、足ずりしつつ」と動作の具体的な描写も、さきの宇奈比うなひ壮士そとこの「天を仰ぎ、叫こゝろび、おらび、地を踏み、牙きかみ、建怒たけび」とともに、実に鮮明で、演劇的だ。まさに虫麻呂は古代日本を飾るただ一人の伝説歌人、叙事歌人であった。

虫麻呂の自然描写

伝説歌人高橋虫麻呂はまたすぐれた自然歌人でもあった。自然歌人といふと、高市黒人や山部赤人の名がまづあがってくるが、虫麻呂は黒

人や赤人とはまた趣を異にした自然詠を残した。赤人は「み吉野の象山の木末にはこ
こだもさわぐ鳥の声かも」「ぬば玉の夜のふけぬれば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く」
(6、九二四—九二五)など清澄、静寂の新境地を開き、黒人は「いづくにか船泊すらむ安
礼の埼榜ぎたみ行きし棚無し小舟」(1、五八)、「売比の野のすすきおしなべ降る雪に宿借
る今日し悲しく思ほゆ」(17、四〇—六一)など沁みとほるやうな旅愁の歌を歌ったが、虫麻
呂の自然描写には独自の風格があった。

さきに紹介した水江浦嶋子の長歌も「春の日の霞める時に、墨吉の岸に出で居て、釣船
のとをらふ見れば」で始め、春日遅々たる難波の海の沖合に釣船の揺ら揺らとゆらめく風
情を写して、伝説の舞台を見事に構成してゐる。不尽山(富士山)を歌っては、「燃ゆる
火を 雪もち消ち 降る雪を 火もち消ちつつ」(3、三一九)と、雪と火と相拮抗する壯
大な大自然を神話的劇的に力強く描きあげてゐる。ホトトギスを詠んでは「うぐひすの
かひこの中に ほととぎす 独り生れて 汝が父に 似ては鳴かず 汝が母に 似ては鳴

かず」(9、一七五五)と、ホトトギスがウグヒスの巢から生まれてくるといふ習性を的確に観察し、それをいささか童話風にたのしく歌ってゐる。この長歌の反歌では「かき霧らし雨の零る夜をほととぎす鳴きてゆくなりあはれその鳥」(一七五六)と詠嘆してゐる。

虫麻呂と登山詠

大伴卿(大伴旅人か)を案内して夏草茂る筑波山に登った時は、「熱けくに 汗かきなげ 木根取り うそぶき登り」(9、一七五三)と營々登

攀の汗と息とを詠み、「男神も 許したまひ 女神も ちはひたまひ」と神話の世界に入り、「時となく 雲居雨ふる 筑波嶺を 清に照らして いふかりし 国のまほらを つばらかに 示したまへば」といふ山頂からの壮大な眺めに、「嬉しむと 紐の緒解きて」喜んでゐる。

秋、ひとり「旅の憂へを なくさもる 事もありやと」筑波に登った時は「尾花ちる 師付の田井に 雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白浪立ちぬ」(9、一七五七)と、山上から見はるかす田野・湖沼の秋深みゆく光景をいきいきと描写してゐる。山を遠望した歌とは違って、これは足で登山した歌だ。汗まみれの登山の労苦と山頂の清明の大観とを併せ歌った虫麻呂は、日本最初の登山詩人といつていい。「草枕旅

の憂へを慰めることもありや」といふ登山心理も、後世風にいへば「浩然の気を養ふための登山」といった感じだ。信仰のためでも、生業のためでもなく、政治・軍事のためでもなく、ただ山に魅かれて登ったのだ。

虫麻呂の

日本人的自覚

虫麻呂の傑作、不尽山歌については、すでに別項で取り上げたが、「日の本の やまとの国の 鎮めとも います祇かも 宝とも 成れる山かも」(3、三一九)と、富士山を日本国の鎮めの山、象徴の山と仰ぐところは、虫麻呂の日本人的自覚が横溢し、リズムを打って迫ってくる。富士山を国の鎮めの神山とした最初の人が虫麻呂だ。

天平四年(七三二)、藤原宇合が西海道の節度使として派遣された時、虫麻呂が贈った長短歌にも、日本の気魄が漲ってゐる。その反歌は「千萬の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき男とぞ念ふ」(9、九七二)といふ力強い一首だ。

龍田山の桜花

この長歌の中には「龍田道の 岳辺の路に 丹つつじの 薫はむ時の 桜花 開きなむ時に」(6、九七一)と、龍田山越えの道をいろどる赤つつじ

と桜花が印象的に点描され、一首を引き立ててゐるが、これとは別に、虫麻呂は龍田山の

桜花の歌を何首も（長歌三、短歌三）作ってゐる（9、一七四七—一七五二）。

「山高み 風しやまねば 春雨の 継ぎてしふれば 最末枝は 落り過ぎにけり 下枝に 遺れる花は しましくは 落りな乱ひそ」と風雨に打たるる桜花に呼びかけ、「河そひの 丘辺の道ゆ 昨日こそ 吾が越え来しか 一夜のみ 宿たりしからに 峯の上の桜の花は 瀧の瀬ゆ 落らひて流る」と落花流水を惜しみ、「山おろしの 風な吹きそと打ち越えて 名に負へる杜に 風祭りせな」と龍田の神に花を散らさぬやう、風を吹かせぬやう祈願をこめてゐる。「風祭」といふ語を用ゐたのは『萬葉集』中、虫麻呂だけだ。

虫麻呂はまさに桜と富士の歌人であつた。いかにも日本的な歌人であつた。後世、若山牧水が桜と富士を熱愛して多くの歌を遺し、没後、これに酒の歌を加へた歌集『桜・酒・富士』の刊行されたことが思ひ合はされて、ほほゑましい。

三 愛憐と志操の人 山上憶良

子を思ふ歌

山上憶良といへば、

しろがねもくがねも玉も何せむにまされる宝子たからにしかめやも（5、八〇三）

の一首を思ひ出す人が多いであらう。あらゆる財宝にまさる子宝と歌ひあげ、「瓜はめば子ども思ほゆ 栗はめば まして偲はゆ」と歌ひ、「子どもといふのは、一体どこから来たものか」と親子の縁の不思議に驚き、「まなかひに（目のさきに）、しきりにちらついで安眠もできぬほどだ」と歎じた。萬葉第一の子煩悩の男であった。

また酒宴の席を退出するとき、

憶良らは今は罷まからむ子泣くらむそれぞれの母も吾あを待つらむぞ（3、三三七）

とおのろけぶりを發揮した話も有名だ。まさに家庭人憶良おくらであった。

貧窮問答歌

これらに劣らず有名なのが貧窮問答歌（5、八九二）。

貧者と窮者の問答体の長大な長歌で、「風まじり 雨ふる夜の、雨まじり

雪ふる夜は」と、寒々とした歌ひ出で、みぞれ 雲の音が聞えてきさうな感じだ。寒さに堪へか

ねて「堅塩かたしほを とりつづしろひ 糟湯酒かすゆざけ うちすすろひて」粗末きはまる飲食で飢ゑと寒

さをまぎらかし、「咳しほふかひ 鼻びしびしに」しきりに咳をして鼻水をびしょびしょ垂ら

し、「しかとあらぬ鬚ひげかきなでて」、「吾あれをおきて人はあらじ」とうそふいてみるが、どう

にもかうにも寒くてたまらぬので、麻衾あさぶすまをひき被り、布肩衣ぬのかたぎぬ（チヨッキのやうなもの）の

ありったけを着込むが、やはり寒い。「こんな晩は、わしよりも貧乏な者の父母妻子は飢と

寒さで泣いてゐることだらう。そんな時はどうして居るのか」といふ問に対して、窮乏

者が答へる。「綿も無い布肩衣ぬのかたぎぬの、ミルのやうにポロポロになったやつを、肩に打ち掛け、

みすぼらしく、べっしやんにゆが歪んだ粗末な家で、地べたに藁を敷き散らして床とし、父

母妻子と寄り合つて憂うれへ呻うめき、竈かまどには火の気も立てず、こしき（飯を炊く器）には蜘蛛くもの

巢くわがかかつて、飯いひを炊くかしことも出来ぬ状態で、ぬえ鳥のやうにあはれな声を出して苦しん

で居るのに、『いといのきて短き物を端切る』（ひどく短い物を更に端を切る）といふ諺のや

うに、鞭むちを持った里長さとをさがやって来て、寢所にまで踏み込んで、荒々しく税を出せとどなるのだ。こんなにも、どうしようもないものか、世間といふものは」。と絶望的な返事をするのである。貧窮者のみじめな生活がなまなましく実感をもって迫ってくる。こんな、どん底生活の歌を作った者は、古今、憶良ただ一人だ。一首の中で、二人が問答する形になつてゐるのも、憶良の特色的歌体だ。

憶良の創出した歌体と言ひたいところだが、柿本人麻呂歌集の歌（13、三三〇九）にも、男女別々の問と答を一首の長歌に煮つめた例がある。しかし一首としての熟合度は格段に憶良の歌が強い。

この他にも憶良には、「老期重病、年を経て辛苦し、及び児等を思ふ歌」（5、八九七）を作つて、生活の苦しさを切々と訴へてゐる。まことに特異な歌人であつた。しかし、憶良自身は筑前守（今でいふならば福岡県知事）になつた官人だから、一応まともな生活はして居たはずで、歌にしたのは自分の生活苦ではなくて、世間の人々の暮らしのみじめさを見聞して、これに同情し、我が身のことのやうに苦しんだのだ。

惑へる情を
反さしむる歌

憶良は、漢学・儒教・仏教にも詳しく、しばしば和歌に長文の漢文序をつけて、その中で儒教・仏教の語を引用して道を説いてゐる。そして、世間

を顧みぬ者に対しては、父母妻子の恩愛を説き、「天へゆかば 汝がまにまに 地ならば 大君います この照らす 日月の下は（中略） きこしをす 国のまほらぞ」と天皇統治下の民草の人倫を掲げて戒め、「なほなほに 家に帰りて 業をしまさに」（すなほに家に帰って仕事をしなさい）と、脚下を顧み、現実に立ち帰るべきことを懇々と説く。そんな長歌「惑へる情を反さしむる歌」（5、八〇〇）も作つてゐる。

神功皇后伝説の歌

また、筑前国子負の原にある息長足日女命（神功皇后）伝説の石「鎮懐石」に対しては、「かけまくもあやに畏し」と歌ひ出し、敬虔な情

をささげて神話伝承を回想し、「かむながら 神さびいます 奇し御魂 今の現に 尊きろかも」（5、八一三）と「敬拝」してゐる。（戦後、多くの史家は神功皇后伝説を一笑に付し、皇后を架空人物の如く言ひなし、その渡海戦をも頭から否定してゐるが、諸国風土記逸文いたるところにオキナガラシヒメの名が散見し、その渡海戦が記され、まさに国民伝説であった。この伝説の石に対して「公私往来、馬を下りて跪拝せざるなし」と万人が畏敬してゐた事実を億良は記録し、「古老相伝」としてその石の由来を書きとめてゐる。心して読むべきである）。

好去好来歌

更に憶良は、天平四年（七三二）八月、多治比真人広成が遣唐使として出発するに当って、「好去好来歌」（5、八九四）を作って激励した。（「好去好来」

は「さよなら、御機嫌よう」「元気でいっていらっしやい」の意の初唐時代の口語の由）。

その歌は、「神代より 云ひ伝てくらく」と神代以来の伝承から重々しく歌ひ出し、「そ

ら見つ 倭の国は 皇神の いくしき国、言霊の 幸はふ国と 語りつぎ 言ひ継がひ

けり」と、わが日本国の尊厳なる伝統を強調し、しかもそれが単なる遠き世の伝承でな

く、「今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり」と、現実ですべての人の実

感してゐるところだと言ひ据ゑてゐる。そして「高光る 日の朝庭」「神ながら愛での盛

り」と荘重な辞を連ね、「勅旨 戴き持ちて 唐の 遠き境に 遣はされ」ることを述

べ、「海原の 辺にも沖にも 神づまり うしはきいます 諸の大御神たち」「天地の 大

御神たち、大和の 大国魂」の守護冥助を歌ひ、神助によって「つつみなく 幸くいまし

て 速帰りませ」と予祝してゐる。日本の自覚・国家的精神・神国的情念の漲る力作であ

る。人麻呂にも家持にもひけを取らぬ澆漓たる萬葉的心情である。貧窮問答歌のみ云々し

て、憶良を社会主義歌人みたいに説くことは片手落ちである。好去好来歌と貧窮問答歌と

を重ね合はせたとところに憶良の真面目がある。

憶良自身、遣唐使の一員として大陸に渡ったことがあった。大宝元年（七〇一）、無位のまま遣唐少録に任命され、翌大宝二年、粟田真人あはたのまひとに従って渡唐した。真人は慶雲元年（七〇四）帰朝してゐるから、一緒に帰ったのであらう。粟田真人については、シナの史書『新唐書』に記録があつて、その進退儀容、唐人を感心させ、「海東に大倭国あり、これを君子国といひ、人民豊樂にして礼儀にあつく、今使人を看るに、儀容甚だ清し」と絶讃され、君子国日本の名を海外に輝かしたのであった。その人の部下として、憶良には日本人の自覚烈々たるものがあつたであらう。

帰国が近づいた時、憶良が詠じた短歌は

いざ子ども早く日本やまとへ大伴みづの御津の浜松待ち恋ひぬらむ（一、六三）

『萬葉集』中、海外で詠作されたただ一首の歌である。さあ祖国日本へ早く帰らう、難波の港の浜松が待ってゐるぞと歌つてゐる。帰心矢の如くであるが、ホームシック的な、めめめとした感情のかけらもない。無事使命を果して帰国するといふ喜びが、祖国のなつ

かしさと一つにとけて、一首のひびきを高めてゐる。

辞世悲嘆の歌

憶良おくらが病重く、あす知れぬ状態となつた時、藤原八東やつかが河辺東人あづまひとを遣して見舞ひせしめた。憶良はお礼の言葉を述べ、涙にむせんで、

士もののこやも空しくあるべきよろづ代に語りつぐべき名は立たずして（6、九七八）

と吟じ、悲嘆したといふ。これが辞世の歌となつて、やがて生涯を閉ぢたのであらう。憶良は、名も立たず、朽ちてゆくことを歎いたが、しかし、『萬葉集』は憶良の名を不朽に伝へた。好去好来歌・貧窮問答歌、それらの歌は、萬葉第一の特異な詩人の魂を、千二百年後の今も生きいきと伝へてゐるのである。

四 志賀の海人の遭難を悼む

—— 山上憶良の悲傷連作短歌 ——

神龜年中（七二四—七二八）、大宰府は対馬つしまへ食糧を送るため、筑前国宗像郡むなかたの津麻呂つまろに

その運送船の船頭を命じた。津麻呂は「容姿衰老、海路に堪へず」として、糟屋郡志賀村の白水郎（海人）荒雄にこの大役を替はってくれと頼みこんだ。俠気の強い荒雄はこれを引き受け、肥前国松浦県的美祢良久埼から鴨といふ名の舟に食糧を積んで出航、対馬をめざして海を渡ったが、「たちまちにして天暗冥、暴風、雨を交しへ」、船は遭難沈没、荒雄は玄海灘の藻屑と消えた。荒雄の妻子は子牛が母牛を慕ふやうな激しい慕情にたへずして、十首の歌を作った。しかし、これは筑前守山上憶良がこの哀話を聞き、「妻子の傷みに悲感し、志を述べて」、つまり荒雄の妻子になり替はって、この歌を作ったのだともいふ。

憶良は、大伴熊凝といふ肥後国の十八歳の青年が天平三年（七三二）上京の途上、安芸国で病死した時も、これを憐れみ、「其の志を述ぶるため」六首の歌（5、八八六―八九一）を熊凝の心情になって代作してゐる。また、古日といふ名の男子が幼くして死んだ時、親が「立ちをどり、足ずり叫び、伏し仰ぎ、胸うち歎き」歌った長歌一首短歌二首（九〇四―九〇六）が巻第五の巻末に収録されてゐるが、この歌について「作者未詳」だが、「裁歌の体、山上の操に似たるを以って此次に載す」と萬葉編者が注記してゐる。これも憶良が、

幼児を病死させた親の悲嘆をわがことのやうに悲感して作った歌であらう。卷第十六収録の筑前国志賀白水郎歌十首も憶良の作と見てほぼまちがひないであらう。その歌、

王おほきみの遣つかはさなくに情進さかしろに行きし荒雄あらをら奥おくに袖振る（三八六〇）

荒雄あらをらを来こむか来こじかと飯盛いひりて門かどに出で立ち待てど来きまさず（三八六一）

志賀しげの山痛いたくな伐りそ荒雄あらをらがよすかの山と見みつつ俛しのはむ（三八六二）

荒雄あらをらがゆきにし日より志賀しげのあまの大浦田たぬ沼はさぶしくもあるか（三八六三）

官つかさこそ指さしても遣やらめ情出さかしちに行きし荒雄あらをら波なみに袖振る（三八六四）

荒雄あらをらは妻め子の産業なりをば念ねんはずろ年の八歳やとせを待てど来きまさず（三八六五）

奥おくつ鳥鴨とり鴨とふ船ふねの還かへり来こば也良やらの埼守さきもり早く告つげこそ（三八六六）

奥おくつ鳥鴨とり鴨とふ舟ふねは也良やらの埼さきたみて榜こぎ来きと聞きこえこぬかも（三八六七）

奥おくゆくや赤羅あから小船せぶねに褰つとや遣やらばけだし人見ひとみて解ひら披ひらき見みむかも（三八六八）

大船おほいぶねに小船せぶね引き副そへかづくと志賀しげの荒雄あらをに潜かづきあはめやも（三八六九）

『萬葉集』中、大伴旅人の讚酒歌十三首（3、三三八―三五〇）に次いで長い連作短歌だ。（連作の定義のしかたによって多少ちがってくるが、同一人が同じテーマについて、何らかの有機的関連をもって、複数の歌を次々に詠み、一篇の作品としてまとめたものを連作としておく）。旅人の讚酒歌が、いはば酒によって憂憤を散じたエッセーであるのに対して、これは不遇の死を遂げた男にささげた切々たる弔辞だ。

「王おほきみの遣つかはささなくに」「官つかさこそさしても遣やらめ」とくり返し、官命でもないのに「さかしらに」自分から危険な仕事を買って出て遭難したことを悼み、「沖に袖振る」「波に袖振る」と最期の姿を思ひ描いてゐる。妻子は、夫が今にも「来いむか来きじか」と飯いひを盛もって「門に出で立ち待てど来きまさず」と悲歎の涙にくれ、妻子のなり（生計）を思ってもくれぬのか、八年経っても還かへつて来きぬと恨み言を並べて、「志賀の山の木をあまり伐きつてくれぬな、この山を亡き荒雄のゆかりの山、形見の山とながめて偲おもんでゐたいのだ」と哀訴してゐる。まさしく「岸壁の母」ならぬ「岸壁の妻」だ。「年の八歳」といふのは実数か、単に多くの年の意か、とにかく相当の年数が経たつてゐるのだが、なほ諦めかねて「鴨鴨といふ名の舟が還かへつて来たならば、也良やらの埼守さきもりよ、早はやく知しらせてくれ」「鴨鴨といふ舟は也良やらの

埼をめぐって榜いでくるといふ知らせが来てほしいものだ」とくり返し歌ひ、「沖へ出てゆく舟にツト（包みの物・贈り物・みやげ）を託したならば、海底の亡き夫に届き、亡き人が披いて見てくれるだらうか」と、はかない夢の繰り言を述べ、最後に「大舟小舟を並べて海上に榜ぎ出し、多勢で海中にもぐって捜したとて、もはや志賀の荒雄あらしに出あふといふことは絶対ないのだ」と断腸の思ひで歌ひ閉ぢてゐる。『萬葉集』中最も感銘深い作の一つだ。そして、人の痛みを己れの痛みとして、その悲感を歌はずにをられなかつた憶良といふ人物をひしひしと感じさせてくれる歌だ。

三八六七の「聞こえこぬかも」については、「聞こえてこないことだ」と否定の意にとる解釈と、「聞こえてこないかなあ」と願望の意にとる解釈とがある。八三六八の「けだし人見て披き見むかも」を、亡き夫が披いて見てくれるだらうかとはかない願望にとる解釈と、舟の人が披いて見るのでなからうかと羞恥の情にとる解釈とがある。

付記

この歌及び左注に出てくる志賀・宗像の地名に関して一言。かつて北九州で古事記学会が開かれた折、大会終了後、私は小柳陽太郎氏の御案内で宗像神社へつみや・辺津宮へつみやに参拝し、船で博多湾を漕ぎ出て

志賀島に渡り、志賀海神社に詣でた。記紀神話以来の古社だが、『萬葉集』には

千磐破る金の三崎を過ぎぬとも吾は忘れじ志賀の皇神（？、一二三〇）

の歌もあって、この海域を舞台に生活した古代の海人たちを思ひ、萬葉志賀海人の歌を偲んだことであつた。

美祢良久は五島列島で、遣唐使船の出港帰港に利用された要地。かつて遣唐使を勤めた憶良にとつて、忘れがたい地名であつたらう。

五 夢想の挽歌と大伴旅人の夢の歌

天武天皇崩御と
皇后の夢想歌

天武天皇が崩御されて八年後、御命日の九月九日、御齋会（法要）の夜、天武天皇の皇后（即ち持統天皇）が夢を見られ、その夢の中で作られた御製。「奉為御齋会之夜、夢裏習賜御歌」と題があつて、

明日香の 清御原の宮に 天の下 しらしめしし 八隅知し 吾が大君
高照らす 日の皇子 いかさまに 念ほしめせか 神風の 伊勢の国は
奥つ藻も 靡みたる波に 塩気のみ 香をれる国に うまこり あやにともしき
高照らす 日の御子（2、一六二）

と記されてゐる。夢の中で、文字通り夢うつつのうちに作られた歌を、目覚めてから思ひ出して書きとめられた御製だ。夢の中の作だから、意味が十分通ぜず、論理的に何か不安定なところがあるが、それがかへって夢の作としての神秘感を漂はせてゐる。伊勢の海の靡く沖つ藻と、たちこめる潮の香。「いかさまに念ほしめせか」（どのやうに思つていらつしやつてか）とは、貴い方の御胸中を恐る恐る、しかも、いぶかりながら村度申上げる時に用ゐられる、慎しみ深い語だが、これに「うまこり、あやにともしき」と慕はしくてたまらぬ思ひを重ね、「高照らす日の御子」を反覆して、背の君を讃嘆された。縹渺として心を打つ不思議な御歌だ。

大海人皇子（天武天皇）は、壬申の乱の時、迫りくる危機を感じ、妃もろとも吉野を脱

出して伊勢に向かはれたが、妃は疲れ甚だしく、深夜、雷雨しきりで、一行濡れそぼち、家を焼いて煖をとり、辛うじて寒気を凌ぐといふ難行苦行であった。夜明けて、迹太川トハカハの辺から大海人皇子オホノミチノミコは皇祖天照大御神を（即ち伊勢神宮を）遙拝された。苦難の中、皇子は夢告によって天位を嗣ぐことを悟られたといふ。戦乱たけなはなる時、度会ワタチノミの斎イツキの宮（伊勢神宮）から神風が吹き、天日を暗くして敵を惑はしたともいふ。かくて戦ひ勝ち、天位に即かれ、労苦を共にされた妃は皇后となられた。天皇は殊の外、伊勢神宮を尊ばれ、式年遷宮も天武御宇テンムに始まるといはれてゐる。「神風の伊勢の国は、沖つ藻も靡みたる波に、潮気のみ香をれる国に」といふ夢の詞には、その思ひ出が深くこもつてゐるのであらう。

後世、夢の中で作った歌を「夢想歌」と呼び、神仏の示現を受けて感得した歌として特別に扱った。中世以降、連歌では、夢想の句を神仏カミツツから授さづかつた句として、これを発句ほつくに据ゑ、これに脇句わきく以下を続け、「夢想開連歌むせうひらき」と称した。そのやうな夢想歌の最古の作がこの御歌だ。

天智天皇崩御と 一婦人の挽歌

天智天皇崩御の時も、姓氏不詳の一婦人が、夢に示現された天皇のお姿を見て、切々たる一首を詠んでゐる。

うつせみし 神に勝へねば 離り居て 朝嘆く君 放れ居て 吾が恋ふる君
玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば 脱く時もなく 吾が恋ふる

君ぞきその夜 夢に見えつる(2、一五〇)

これは夢の中で作った歌ではなく、目ざめてからの作だが、言葉の端々は夢うつつのうちに成つてゐたのであらう。「うつせみし神に勝へねば」の嘆きは痛切である。おそらくこの句が夢のうちになり、夢さめてこの句をくりかえし、口ずさみ、つぶやいてゐるうちに第二句以下が出来て来たのであらう。一種の神秘感を帯び、諦め切れぬ思ひが綿々と余韻を引いてゐる。夢はまさしく神霊と交感する場であつた。

大伴旅人の文芸 卷第二の夢の歌はいづれも天皇崩御に関する歌で、神巖沈痛なひびきを
持つてゐるが、卷第五には、文芸趣味豊かな夢想歌が収められてゐる。

趣味的夢想歌

大伴淡等(旅人)の「梧桐の日本琴一面」と題する歌文がそれだ。対馬

の結石山の桐の木で作られた和琴が、旅人の夢に、娘子になつて現れ、「私は遙かな海の島に茂つてゐた木で、このまま朽ちゆくことかと心配してゐました。たまたま良き匠に切

られて琴となりました。姿も粗末で、音色も貧弱ですけれど、良いかたのお側に置いていただけますやう常に願ってゐました」(原漢文)といひ、

いかならむ日の時にかも音知らむ人の膝の上わが枕かむ(5、八一〇)

と歌った。旅人はこれに答へて

言問はぬ木にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしあるべし(5、八一二)

と慰めたところ、少女は「嬉しうございます」と厚く礼を述べたといふ。そして旅人たびとはこの琴に、夢の由緒を添へて天平元年(七二九)十月七日付で藤原房前ふじのらのまへに贈ったのであった。

夢想歌とはあるが、文人大伴旅人が夢に事寄せて作った文芸的創作かとも思はれる。旅人

梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ(5、八五二)

といふ歌も作ってゐる。梅の花が夢の中で自分に語って「私は風雅な花です。酒に浮かべ

下さい」と言ったといふのだ。旅人が、夢に託した文芸趣味、風雅の遊びであって、初期萬葉の敬虔な夢想歌とは異質の世界だ。

仙女歌・讚酒歌と

旅人の人間像

旅人は大伴家持の父、大納言にまでなつた人物だ。本名は旅人と書くのだが、漢文趣味から淡等とも署名した。大宰府の長官であつた天平二年（七三〇）正月十三日、部下たちを集めて梅花の宴を開いた。三十二人が歌を詠み、これに員外二首、後追和梅花四首を加へた大歌群が成り、この盛大な歌宴は後々まで語り草となつた。二十年後の天平勝宝二年（七五〇）越中在任中の大伴家持が「追和筑紫大宰之時春苑梅花」歌を作つて思慕したくらゐだ。

旅人はまた松浦河に遊び、鮎を釣る仙女に出逢ひ、仙女と歌を贈答したとして、八首（八五三―八六〇）を記録し、漢文の序を添へてゐるが、これも旅人の文芸的想像の所産であらう。仙女の歌といふのも、もちろん實際の作者は旅人であらう。『古事記』の神功皇后松浦河鮎釣りの伝承を念頭に置きながら、旅人好みの仙女絵巻に仕立てたのだ。

旅人はまた酒を愛し、讚酒歌十三首（3、三三八―三五〇）の連作短歌を作つてゐる。

中々に人とあらずは酒壺さかづぼになりにてしかも酒に染しみなむ(三四三)

とまで酒を讀へ、酒に浸り、

あな醜みにく、さかしらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る(三四四)

と酒飲まぬ者を痛罵した。

驗しるし無き物を念おもはずは一杯ひとつきの濁れる酒を飲むべくあるらし(三三八)

賢さかしみと物言ふよりは酒飲みて酔泣あひなきするし益まさりてあるらし(三四一)

「偉さうな口をきいて利巧ぶって居るよりは、酒を飲んで酔泣あひなきして居る方がずっといいんだ」と。この連作中、「酔泣」の歌が三首もあるが、こんな語を使ったのは『萬葉集』中、旅人ただ一人だ。萬葉はおろか、古代・中世の古典和歌二十万首を調べても、旅人の用例以外には出てこないであらう。

旅人は「志」の人であった。しかし、その志をのぼすことは不可能であった。旅人と親

しかつた太政大臣長屋王は策謀にかかり、謀叛の疑ひで自殺に追ひ込まれた。陰悪な政治情勢の下、鬱屈した「志」は酒と風雅の世界に向かった。旅人は、遊逸の貴公子でも、濁酒の墮臣でもなかった。酒も夢も仙女も、清き高き「志」を裏返しにした姿だった。だから酔がまはると、「あな醜」「猿にかも似る」と憤慨し、「酔泣き」したのであった。

家持の夢の歌

旅人の子大伴家持は越中守在任中、布勢湖のほとりで見事な蒼鷹を得て、これを愛育してゐたが、天平十九年（七四七）九月、その愛鷹が放逸し、ゆくへ知れずになった。この時、家持の作った長歌一首・短歌四首（17、四〇一一—四〇一五）は劇的な構成と叙事詩的なおもしろさを備へ、なかなかの力作だ。その長歌の末尾に、「をとめらが夢に告ぐらく」として、不思議な少女が夢枕に立って鷹のゆくへを知らせてくれたと歌つてゐる。夢の中で作った歌ではなく、夢告に歓喜して作った歌だが、夢に少女が現れるところ、父旅人の琴の歌・梅の歌に続くものだ。

『古事記』崇神記、大毘古命が高志道（北陸道）へ馬を進めた時、山代の幣羅坂に腰裳を着けた少女が現れ、「御真木入彦はや…」と危急を告げる歌を詠ひ、ゆくへも見えず失せたと伝へられてゐる。神言は清純な少女の口を借りて告げられる。その伝統が旅人・家

持の夢の歌にも余韻を響かせてゐる。

旅人と家持

の「志」

旅人の歌には、高らかな気品と清らかな響きが備はつてゐて、その人柄を偲ばせるが、しかし彼は終生その「志」を言はなかつた。

その子家持は、「海ゆかば」の歌に、「族を諭す」歌に、滔々とその「志」を歌ひ上げた。黙々と「言挙げせぬ」父と、敢然、祖先の「言立て」を呼び起こした子と、萬葉歌壇の中期・後期を主導した異色の親子であつた。

六 大伴旅人の亡妻挽歌群

—— 連作短歌開拓者旅人 ——

大伴旅人は大宰帥おほとものたびと だざいのすけ（大宰府長官）になつて筑紫へ赴任した時、愛妻を同伴した。しかし神亀五年（七二八）妻は空しく他界した。旅人は「永く崩心の悲しびを懐き、ひとり断腸だんちやうの泣なみたを流」し、「世の中はむなしきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」（5、七九三）と悲嘆した。天平二年（七三〇）旅人は都へ帰任することになつたが、その時、

還るべく時はなりけり京にて誰がたもとをか吾が枕かむ（3、四三九）

京なる荒れたる家にひとり宿ば旅にまさりて辛苦しかるべし（3、四四〇）

と詠み、亡妻を思ひ、涙を噙んだ。

帰京の途次、景勝地鞆の浦で

吾妹子が見し鞆の浦の天木香樹は常世にあれど見し人ぞなき（3、四四六）

鞆の浦の磯の室の木見むごとに相見し妹は忘れえぬやも（3、四四七）

磯の上に根蔓ふ室の木見し人をいづらと問はば語り告げむか（3、四四八）

とムロノキに向つて切々と歌ひかけた。九州下向の折、妻と共にながめた室の木はありし日そのまま根を張つて茂つてゐるが、もはや妻はゐない。その悲しみが淡々と、しかも深く歌はれてゐる。ついで敏馬埼を通過した時、

妹と来し敏馬の埼を還るさに独りし見れば涙ぐましも（3、四四九）

ゆくさには二人吾が見しこの埼を独過ぐればこころ悲しも（3、四五〇）

と涙ながらに詠んだ。「涙ぐましも」「こころ悲しも」と繰り返す旅人の息づかひが聞えてくるやうだ。奈良の家に還り着いた旅人は更に三首、

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて辛苦しかりけり（3、四五二）

妹として二人作りし吾が山斎は木高く繁くなりけるかも（3、四五二）

吾妹子が植ゑし梅の樹見ることこころ咽せつつ涕し流る（3、四五三）

妻もなき空しき家は、筑紫で予想した通り辛苦そのものだ。かつて妻とともに造成した庭園は木高く繁くなった。しかしその妻はこの世にゐないのだ。妻が植ゑた梅の木を見るとにいよいよ涙がこみあげ、老いたる旅人は嗚咽したのであった。

筑紫から鞆浦へ、鞆浦から敏馬埼へ、敏馬埼から京へ、綿々として尽きせぬ情が短歌のリズムとなって続いてゆく。それから八カ月後の天平三年七月、萩の花咲く頃、旅人は妻を恋ひつつ、その後を追ふやうにして永眠したのであった。

『萬葉集』に亡妻挽歌は多いが、長歌では人麻呂の大作、連作短歌では旅人のこの作が白眉だ。亡妻歌の双璧といってもよいであらう。旅人はこの他にも「讚酒歌」十三首など連作短歌にすぐれた才能を見せた。

萬葉歌人には、長歌製作に多大の力を傾注した人麻呂・赤人・憶良・金村・虫麻呂・福麻呂・家持・池主らがあった。長歌作者は長歌に附随して短歌も作った。

これに対して、長歌は一首も作らず、短歌ばかり作って、しかしながら露の玉の光るやうな名吟をとどめた人々もあった。大_{おほく}伯_の皇_{ひめみこ}女_こ（六首）、志_{しきのみこ}貴_き皇_{みこ}子_こ（六首）、その子_{おほきみ}湯_ゆ原_{はら}王_み（十九首）、高_{たけちのくろひと}市_し黒_{くろ}人_{ひと}（十八首）、長_{なが}奥_{おく}麻_ま呂_ろ（十四首）等々の人たちだ。

大伴旅人は短歌七十七首を残した。一首だけ長歌（3、三一五）も残したが、僅か十一句の短い長歌で、しかも奉勅作歌であるから、事情止むを得ず、不得意な長歌を作ったのであらう。本来は短歌の人であった。

萬葉歌人にも、このやうに長歌體質の人と短歌體質の人とがあった。そして旅人は、特に「連作短歌」に新生面を開いた異色の短歌人であった。

七 才女坂上郎女をめぐる

大伴氏の国際感覚

神代からの名門大伴氏といふと、「海ゆかば」の言立を伝承した、極めて保守的国粹的な家柄だと思つてゐる人が多い。たしかにさうした面もあつたが、大伴金村かなむらが外交官として活躍し、朝鮮半島へ往来した歴史もあつて、大伴家には国際的感覚も備はり、舶来趣味も濃厚であつた。大納言大伴旅人だいなごんは大宰帥ださいのそうの時、漢文学趣味の梅花の盛宴を開き、また仙女趣味の歌を数々作つてゐる。

新羅の尼と大伴家

この大伴家には、新羅しらぎの尼理願あまうりが身を寄せ、「数紀を逕よ」とあるから、多年住み着いてゐたのだ。天平七年（七三五）理願が病死した時、旅人の妹坂上さかのうえ郎女いらつめは葬儀を執行し、長歌一首短歌一首（3、四六〇—四六一）を作つて哀悼した。その歌には深い悲しみがこめられてゐて、この「外人尼」が家族の一員として温く遇されてゐたことが偲しのばれる。理願りがんは「哭なく子なす慕なひ来な」（泣く子が母を慕ふやうにして来）たといふから、理願も心から大伴家になつてゐたのだ。

祭神歌

旅人の正室が病没した後は、坂上郎女が家刀自として大伴家の祭祀を司ったといはれる。後世になると、男尊女卑で、女は神事から遠ざけられたが、古代では女性こそ神祭りの主役であった。郎女には「祭神歌」と題した長短歌（3、三七九―三八〇）があつて、「奥山の 榊の枝に 白香付け 木綿取り付けて 齋戸を 忌ひ穿り居ゑ 竹玉を 繁に貫き垂れ ししじもの 膝折り伏して 手弱女の おすひ取り懸け」神を祭つた様子がつぶさに歌ひ込まれ、「天平五年冬十一月、大伴氏神を供祭する時」の作と左注がつけられてゐる。氏祭祀の実態を歌つた『萬葉集』でもただ一つの貴重な歌だ。

恋愛歌

大伴家の大刀自で、一門の重鎮などといふと、いかにも「神さびた老女」のやうな印象を与へるかもしれないが、若い頃はかなり奔放で、結婚し、死別し、再婚し、その他幾人もの男と相聞歌をとりかはしてゐる。作品を見ても、なかなかの才女である。

青山を横切る雲のいちしろくわれと笑まして人に知らゆな（4、六八八）

「青山を横切る白雲がくっきり見えるやうに、私をにっこりとさせ、それが人目につ

き、あなたと私の関係が人に知られないやうにして下さい」の意。「青山を横切る雲のいちしろく」といふ序詞がまことに鮮明だ。それを、恋人と見かはして、うれしさうに微笑む自分の譬喩にしてゐる。郎女の代表作である。

夏の野の茂みに咲ける姫ゆりの知らえぬ恋は苦しきものぞ（8、一五〇〇）

夏草の茂みの中にひっそりと咲く姫百合の花、そのやうに繁みに隠れて、知られぬ恋の息苦しさを切々と歌った一首で、郎女の熱い息づかひが迫ってくるやうだ。彼女の秀吟の一つである。中には、

来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを

（4、五二七）

「来ますといったって、来てくれないぢやないですか。まして、来ませんと言つてゐるのを、来てくれないかしらなどと期待したつてどうにもなりません。ええ、くやしい。あなたは来ないといつてゐるぢやありませんか」。これは「来む」「来ぬ」「来じ」「来む」

「来じ」とコノ音を五回も重ね、技巧に走り過ぎ、才氣あり余って、輕薄だ。しかし、沈痛な恋の恨みの歌ではなく、相手を半分からかった歌であるから、輕妙で、可笑しくて、これでいいのかもしれない。

甥家持への愛情

天平十八年（七四六）家持が越中守となつて单身赴任することが決した

時、郎女は別れの歌二首をはなむけとした。家持は郎女の甥で、しかも郎女の娘が家持の妻になつてゐるから、郎女は家持の義母でもあるわけだ。少年時代から家持に作歌の手ほどきをしたのもこの郎女であつた。その歌、

草枕旅ゆく君を幸くあれと齋瓮据ゑつあが床の辺に（17、三九二七）

今のごと恋しく君が思ほえばいかにかもせむするすべのなさ（17、三九二八）

遠く旅立つ家持を、達者で居てくれと念じて、自分の寢床のもとにイハヒベを据ゑたと
いふ。床の辺に神聖な祭器を据ゑて主人の旅の無事を祈るのは、当時の妻たちの慣習であつた。叔母の甥に対する儀礼としては、ふさはしくないといふ気がしないでもないが、これは娘の大嬢（つまり家持の妻）になり代つての作であらう。

五味智英氏が『萬葉集講義』の中で、「床の辺に齋瓮据ゑ」の句は『萬葉集』中他に全くないと言つて特殊視されてゐるが、それは五味氏の見落しで、丹生王の歌にも「枕辺に齋瓮をすゑ」(3、四二〇)、家持が防人になり代つてその境涯を詠じた長歌にも「つつまはず 帰り来ませと 齋瓮を床べにすゑて (中略) 待ちかも恋ひむ 愛しき妻らは」(20、四三三二)と歌はれてゐる。

更に、家持越中赴任後まもなく、郎女は二首の歌を送つてゐる。

旅にいにし君しもつぎて夢に見ゆわが片恋の繁ければかも (17、三九二九)

道のなか国つ御神は旅行きも為知らぬ君を恵みたまはな (17、三九三〇)

「越中へいってしまったあなたが、ひき続き夢に見える。私の片恋があまりにも激しいからでせうか」「越中の国の神よ、どうか旅の生活に不慣れた君に恵みをかけてやって下さいませ」と。「恵みたまはな」の句には、甥に対する真情が春光のやうに暖かく溢れ、一首の調べも柔かく、いい歌である。

更に、家持越中赴任後、二年半を経た天平二十一年(七四九)三月には、二首送つてゐる。

常人つねびとの恋ふといふよりは余りにて我は死ぬべくなりなりにたらずや（18、四〇八〇）
片思かたおもひを馬にふつまに負ほせもて越辺こしべに遣やらば人かたはむかも（18、四〇八一）

「通常、人の言っている（恋ふ）などといふところではありません。激しい思ひがあり余って、死ぬほどになったぢやありませんか」と訴へ、「この片思を馬にどっさり載せて、越中へ送ったならば、あなたは何とかしてくれることでせうか」と、例の才気を利かせて言ひ添へてゐる。郎女は家持に「片思」「片恋」などの語を使用してゐるが、これだけ見たら、叔母の甥に対する歌とは思へない。まさに恋人に対する歌だ。娘の大嬢おほいらつめの気持を代弁する意もこめてであらうが、同時に郎女自身もこれほどまでに家持を慈いづくしんでゐただ。一首目は情熱漲って迫力がある。二首目の「馬にふつまに」「人かたはむ」の語は難解で、学者によって解釈がまちまちだが、とにかく片思かたおもひを馬に載せて運び届けるといふ着想は大胆奇抜でおもしろい。

家持はこれに答へて、

天さがる鄙ひなの奴やつこに天人あめひとしかく恋すらば生けるしあり（18、四〇八二）
常の恋いまだ止まぬに都より馬に恋来こば荷になひあへむかも（18、四〇八三）

「田舎いなかにくすぶってゐる賤しい私に、都の天人のやうな方がこのやうに恋して下さるならば生きてゐるかひがあるといふものです」「通常の恋だけでもいっばいで処理しきれぬのに、その上、都から馬に乗せて恋が送られて来たら、とても荷なひきれないでせうね」と郎女に言ひ送り、更に一首

あかときに名のり鳴くなるほととぎすいやめづらしく思ほゆるかも（18、四〇八四）
と添へてゐる。叔母からすばらしい歌を贈られたうれしさが余韻を引いて、時鳥ほととぎすの声と一つになって揺らいでゐる感じた。

娘大嬢 家持は初め単身赴任であつたが、やがて（赴任三年後の天平勝宝元年の秋の頃か？）妻の大嬢おほいらつめは越中に下向した。母の坂上郎女の手を離れて、夫家持のもとに赴いたのだ。

大嬢は、都に残して来た母郎女に贈る歌（長歌一、短歌一、19、四一六九—四一七〇）を夫家持に代作してもらつてゐる。（大嬢は作歌が不得手であつたらしく、ある時は母に代弁してもらひ、ある時は夫に代作してもらつてゐたらしい。幼い頃、家持と贈答した歌も母の代作かもしれない）。

天平勝宝二年（七五〇）には、坂上郎女が越中さかのうえのいらつめにゐる娘の大嬢おほいらつめに対して、長歌一首短歌一首（19、四二二〇—四二二一）を送り届けてゐるが、その中で、海神わたづみの玉にもまさつて大切に思つてゐたわが娘が越中へ去つてしまつたと歎き、「沖つ浪とをむまよびき大舟の ゆくらゆくらに おもかげに もとな見えつつ かく恋ひば 老いづくあが身 けだしあへむかも」（面影がやたらに見えて、こんなに恋しくては、年老いた我が身は持ちこたへることができでせうか）と切々と詠んでゐる。才女坂上郎女も寄る年波で、ひたすらに娘が恋しく、心細かつたのであらう。これが郎女の残した最後の歌であつた。

第六章 葦原の水穂の国

一 大君は神にしませば

—— 天皇神格語彙をめぐって ——

雷の丘

持統天皇が、雷丘に行幸された時、柿本人麻呂は

大君は神にしませば天雲のいかづちの上に庵せるかも（3、二三五）

と歌って讃嘆した。明らかに「人」にまします天皇が、恐るべき雷の丘の上に堂々と庵（仮屋）を構へられた「神」さながらの威光に人麻呂は感動したのだ。息の太い、たくましい一首だ。人麻呂を「御用歌人」などと悪口する人があるが、人麻呂は心底から、天皇の神々しさに感激した。だから魂を揺り動かすやうなこんな歌が出来たのだ。

『日本靈異記』の巻頭には、雷丘に関して次のやうな伝説が記されてゐる。雄略天皇が小子部栖輕（螺嵐）に「汝、鳴雷を請け奉らむや」と言はれた。手取り早く言へば「雷をお連れしてこい」といふことだ。栖輕は勅を奉じて雷を捉へようと、緋の縷を頭に

つけ、赤き幡^{はたほこ}をささげ、すっかり赤づくめの呪的装束で馬に乗り、阿部山田前の道と豊浦寺の前の道から走り、「天の鳴雷^{なるいかづちのみ}神を、天皇^{すめらみこと}請け呼び奉る…」と叫び、「雷神といへども、何の故にか、天皇の請けを聞かざらむ」と呼ばはりつづけた。つひに雷は豊浦寺と飯岡の間に落ちた。栖^{すがる}軽はその雷を籠に入れ、大宮に持参した。天皇が斎戒せずして雷を御覧になると、雷は光を放ち、明^てり炫^{かがや}いたので、天皇は恐れられ、幣帛^{へいはく}を奉^{たてまつ}つて、落雷した場所へ還させられた。そこを雷の丘といふ。

栖^{すがる}軽は雷を呪縛するほどの特別の靈力を備へた男ではあつたが、心魂尽くして雷を捉へた過労のためか、やがて死んだので、天皇は栖^{すがる}軽の忠信をしのび、雷丘に墓を作らせ、その墓碑には「雷を取りし栖^{すがる}軽が墓」と書かせられた。

すると、雷はこの碑文を怨み、鳴りとどろいて落下し、碑文の柱を蹴破つたが、その柱の裂け目に挟まって、また捕へられた。天皇は雷を放たしめられたが、雷は柱に挟まったショックで、ボンヤリして、七日七夜動けなかつたといふ。天皇は再び碑柱を建て、「生きても死にても雷を捕へし栖^{すがる}軽が墓」と記されたと。

その伝説の丘が、雷^{いかづちの}丘だ。雷ゆかりの地点として、人々に畏怖された場所だ。その雷丘

に持統天皇は行幸されたのだ。

昭和十五年三月、当時中学生だった私は大和路をたづね、雷丘を探した。雑木茂った小さな丘で、やや意外であった。その丘に攀ち登った時、突如として一天かき曇り、激しい風とともに霰あられが轟音を立てて、た走り、しばし目もあけられぬくらみだった。古代人の畏怖した雷丘を実感した気持で、あらためて私は人麻呂の歌を誦したのであった。五十数年前の忘れられぬ思ひ出だ。

人麻呂は、持統天皇の吉野行幸にも從駕じゆうがして、壮大な讚歌（長歌二首、短歌二首）を作り、「神ながら神さびせず」と歌ひ、山も川も天皇に奉仕する光景を詠し、その吉野川の激しい川水に舟を漕ぎ出されたのを讚嘆してゐる。

山川も依りて仕ふる神ながら激つ河内に舟出せずかも（1、三九）

「大君は神にしませば」といふ語は、壬申にしんの乱平定後、天武天皇の威光を讃へて大伴御行みゆきが作った

「神ながら神さびせず」

大君は神にしませば赤駒あかこまの腹はらはふ田居たゐを京みやことなしつ（19、四二六〇）

これに並べて作者未詳の

大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都となしつ（19、四二六一）

この二首が最初のものであらうといはれる。国家隆盛の気運（古代日本の高度成長期ともいふべき気運）の中で、赤駒の腹ばふ田んぼも、水鳥のすだく沼も、たちまち埋め立てて都を造営してゆく、とても人わざとは思はれぬ大事業力に感嘆して、天皇の威光をひしひしと感じ、「大君は神にしませば」と嘆声を放ったのだ。

両首とも一直線に歌ひおろし、調べの張った力強い歌だ。しかし、人麻呂が歌ったのは、そのやうな都市造営の大事業遂行力ではなかった。畏怖すべき伝説の丘の上に堂々と歩を進められたといふ、むしろ精神的威光に感激してゐる。同じ「大君は神にしませば」でも、人麻呂の歌ひ方は大きく深い。

しかし、同じく人麻呂の歌でも、忍壁皇子に献じた「大君は神にしませば雲隠るいかづち山に宮敷きいます」（二三五或本）は呼吸が浅く、長皇子に献じた「大君は神にしませば真木の立つ荒山中に海を成すかも」（二四一）も実感薄く、大伴御行の歌にも及ばず、「大

君は神にしませば」の二番煎じといった感じだ。

「神にしませば」の他に、人麻呂は「神ながら神さびせず」(1、四五、1、三八)、「神ながら太敷き座して」(2、一九九)と歌ひ、天皇が神のままに神々しくましますことを讃仰敬嘆してゐる。人麻呂の渾身の力をこめての敬虔な歌ひぶりに、これを読む者の心もちなびき、同じ讃嘆に打ち浸る思ひである。

明つ神 天皇を神と仰ぐ表現としては、田辺福麻呂の久爾新宮讚歌に「明津神 吾が皇

の 天の下 八嶋のうち」(6、一〇五〇)とある。「明つ神」の用例は『萬葉集』ではこれがただ一つだ。『萬葉集』は一例だけだが、『続日本紀』の宣命(国文の詔勅)を見てゆくと、各宣命「明つ神と大八洲知らしめす倭根子天皇」と、堂々たる御名告で始まってゐる。神として日本国をしらしめすといふ天皇の御資格の宣言である。「人」である天皇が「神」の資格において統治権を行使するといふ宣言である。田辺福麻呂はこの詔勅用語を自作長歌に取り入れて皇都を讃へたのだ。

現人神をめぐる

近代では、天皇を「現人神」と申上げ、これが常識みたいになつてゐる

たが、上代の古典で、天皇を現人神と称した確実な例は無い。『萬葉

集』には「住吉の荒人神」(6、一〇二〇)の一例があるだけだ。(大阪市鎮座の住吉大社の

祭神をいふ)。『日本書紀』では、葛城山に出現した一言主神が「現人の神ぞ」と自称して

ゐる。『書紀』ではこの他、日本武尊が「吾は是れ現人神の子なり」と名告つて賊を畏怖

せしめた特殊の例がある。『古事記』には現人神の語は使用されてゐない。しかし、『書

紀』で現人神と書かれた葛城の一言主神に対して『古事記』では雄略天皇が「恐し、我が

大神、宇都志意美にしあれば、覺らずありき」と恐縮されてゐる。ウツシオミは難解な語

であるが、「現実の人間の姿」の意であらう。ウツソミ・ウツセミの語源もこのウツシオ

ミでないかと言はれてゐる。常は目に見えぬ神でありながら、時としてウツシオミ(現実

の人間の姿)で出現する畏怖すべき神が現人神なのであらう。荒人神とも書き、荒御魂の

連想を伴ひ、恐るべき神のイメージを濃く持つてゐる。だから、いつも人間の姿をされ、

人間として生活されてゐる天皇を現人神と申上げるのは誤用であらう。日本武尊が「吾は

是れ現人神の子なり」と名告られたのは、賊を畏怖させるための、いはばおどし文句で、

天皇を現人神と称した例に挙ぐべきではないと思はれる。後世の勅撰集などにも現人神の語は出てくるが、具体的にこの語で表現されたのは住吉神と北野神であって、天皇を現人神と称した確実な例は多分無いであらう。

神は目に見えぬ存在だからこそ人々は安心して生活できるので。(もし神がいつも目に見える存在だったら、人間は困ってしまふであらう)。その見えぬはずの神の中で、例外的に時々人間の姿で現れる恐ろしい神があると信じられ、これを現人神と称したのだ。葛城・住吉・北野の神がそれだ。

天皇は、天つ日継を受け継ぎ、神性を備へられた「神ながら」の御存在であるが、現実に肉体を持ち、人間生活を営まれる方だ。その威光を「神にしませば」と文学的に讃嘆し、その神性、その振舞を「神ながら神さびせず」と讃仰し、「神のみこと」と尊称したが、現人神とは多分申上げなかつたはずだ。

アラヒトガミと違って、アキツカミ(明神・明津神・現津神)は天皇に対する専用の尊称であるが、国家の大事を宣言する詔勅の冒頭に置き、統治者の資格・総攬者の權威を示すため、公式に定められた重要な政治用語だ。従って、天皇以外には絶対転用されなかつた。

た語だ。(後世、神祇を何々明神・何々大明神と呼称したが、その明神は、アキツカミとは全く別の語だ)。

遠つ神

この他、天皇を神と称した語で「遠つ神」といふのがある。舒明天皇、讚岐国行幸の時、軍王いくさのおほみの作った長歌に「遠つ神 わが大君の いでましいの 山越やまこす風の」(1、五)と歌はれ、角麻呂すみまろの短歌四首中に「住吉の岸の松原遠つ神わが大君のいでましい」(3、二九五)と歌はれてゐる。以上二例である。人間を遠く離れた神の意とも、遠い昔の神の意とも説かれてゐるが、二例とも「わが大君」に続き、また「いでまし」について歌はれてゐるところから考へると、遠来の神の意で、遠路はるばる行幸された天皇を畏敬しての称かと思はれる。いづれにしても天皇を神とあがめた呼称だ。

「遠つ人」は遠くに居る人、「遠つ国」は遠くの国で、空間的に遠い意を持つ、しかし「遠つ神祖」は遠い先祖の神である。『出雲国風土記』には「伊伎いぎらが遠つ神」といふ語があつて、この場合伊伎氏の遠祖の意で、時間的に遠い意を持つ。『萬葉集』の「遠つ神」については、なほ慎重に考へたい。

1 大君は神にしませば

すめるきと大君

柿本人麻呂かきのものひまろは「すめるきの神のみことの大宮」(1、二九)と歌ひ、山部やまべ赤人あかひとも「すめるきの神のみことの敷きませる国の尽ことごと」(3、三二二)、田たな

辺福麻呂べのさきまろも「すめるきの神の御代より敷きませる国にしあれば」(6、一〇四七)と歌ひ、大伴家持おほともやかもちは「すめるきの神のみことの聞こしをす国のまほら」(18、四〇八九)、「すめるきの神のみことの御代重ね」(18、四〇九四)、「すめるきの神のみことの畏かしこくも始めたまひて」(18、四〇九八)、「皇神祖すめらみの神の大御世」(18、四一一一)、「すめるきの神の御代よりはじ弓たにぎを手握り持たし」(20、四四六五)とくりかへし歌ひ、歴代天皇を「神のみこと」、その御代を「神の御代」「神の大御代」と畏嘆した。

「大君」は現実に仰ぎ、現実に奉仕すべき、現実の主君、現在の人としての天皇を指すが、「すめるき」は皇祖の天皇をいひ、また過去・現在・未来にわたって継ぎ来たり継ぎゆく皇統そのものをもいふと『時代別国語大辞典、上代編』に解説されてゐる。勿論、現在の天皇について用ゐた場合もあるが、「すめるき」と「大君」とでは、取り上げ方が違ひ、言葉のニュアンスが大きく違つてくる。「吾が大君、神のみこと」(田辺福麻呂、6、一〇五三)の如き用例もあるにはあるが、「すめるきの神のみこと」の方が遙かに用例多く、

言葉の続きも自然だ。『しよく統日本紀』せんみやう宣命には「高天原に事始めて、とほすめろき遠天皇祖の御世、なかいま中今に至るまでに」の語も記されてゐる。「遠すめろきの御世」「すめろきの神のみこと」、まことに神聖感溢れ、尊嚴感満ちた語で、この語を誦すると、古代の人々の嚴肅な思ひが言葉のひびきとなって、ひたひた迫ってくる。

なほ、スメラミコトはスメラに敬称のミコトを付けた形で、『古事記』『書紀』の何々天皇を何々のスメラミコトと訓みならはし、これが古くから定訓になつてゐるが、記にも紀にもスメラミコトと仮名書きした個所はなく、『萬葉集』にもスメラミコトと書いた例はない。『りやうのぎげ令義解』『りやうのじゆりげ令集解』には「俗に云ふ」として須明樂美御徳・須売良美己止と仮名書きし、『唐書』の「日本伝」にも主明樂美御徳と明記してあるから、海外にまで知られてゐた天皇の称号であつたことは確かだ。

「高光る」

「やすみしし」

「たか高光る日ひの御子みこ」「やすみししわが大君」といふ讚称は、すでに『古事記』の美夜受比売みやうぢひめの歌にも出、その他記紀歌謡に散見するが、『萬葉集』には「やすみししわが大君」（又は「わご大君」）が二十七例。うち

「やすみししわが（わご）大君」から「高光る日ひの御子」に続くのが二例、「高照らす日

の御子」に続くのが六例で、天皇を讃仰讚美する常用句になってゐる。

「やすみしし」の表記を「八隅知之」としたものの二〇例、「安見知之」としたものの六例。「八隅知し」には天皇が天下の八方の隅々までも知らしめすといふ意が籠ってゐるのであらう。「安見知し」には安らかに平和に天下を知ろしめすといふ意が宿ってゐるのであらう。萬葉びとの描いた天皇の理想像である。これに続けて「高照らす」「高光る」と讃へたのは、天照らす大御神の御直裔としての光明かくかく赫々たるお姿を目も眩まばゆいまでに強調してゐるのである。

後代の勅撰集には「やすみしし」も「高照らす」「高光る」も絶無である。記紀萬葉の天皇像は平安時代に入って大きく変貌したのである。その中であつて、源実朝は

天のした八隅やすみのなかに一人ますしまの大君よろづ代までに

（『金槐集』外。『夫木和歌抄』収録歌）

の一首を残してゐる。しかし「八隅知し」ではなく「八隅のなかに」である。そして「一人ます」である。萬葉時代の天下八方に光臨したまふ天子のお姿ではなくて、広い天下に

ただ一人さびしくおはす天子といふイメージである。鎌倉幕府の中で、ひしひしと孤独を感じてゐた実朝は、遙か京の天子の孤独を偲び奉って、心を痛めながら、そのよろづ代を深く祈念したのであらう。

「しまの大君」は「大八島国の大君」の意であるが、実朝歿後まもなく勃発した承久の乱で、隠岐島に流され、孤島でさびしく生涯を終へられた後鳥羽上皇の御運命を予感したのでないかと思はれるやうな、不思議な一首だ。

「高御座」「天つ日
はそのまま（「高光る」を「高照らす」と多少変へた例も含めて）初

嗣」と「天の日嗣」

期萬葉に受け継がれ、人麻呂とその時代にも頻りに用ゐられ、宮廷讃歌を彩った。「やすみしし」はその後も山部赤人・田辺福麻呂・大伴家持らに歌ひ継がれてゆく。しかし「高光る日の御子」「高照らす日の御子」の使用は人麻呂までで、赤人も福麻呂も家持もこの語を用ゐなかつたことは印象的である。

「天つ日嗣」の語は『古事記』の本文に出てくるが、歌謡には用例がない。また「高御座」の語は『古事記』に無い。『統日本紀』宣命、『延喜式』祝詞には「天つ日嗣」の語も

「高御座」の語もしばしば出てくる。「高光る」を使はなかった大伴家持は、この「天日嗣」「高御座」の語を愛用し、「高御座」を二回、「天の日嗣」は五回も使用して、その長歌を莊嚴してゐる。反対に、人麻呂はこの両語を全く使用してゐない。宮廷讃歌を多作した両歌人も、その使用語彙がかくの如く相違してゐるといふのは興味深い事実である。

ただし『古事記』『延喜式』等で「天津日嗣(継)」とあるのに対して、家持は「天乃日嗣」である。「つ」でなく「の」である。「天つ神、国つ神」「時つ風」「沖つ浪」を「天の神、国の神」「時の風」「沖の浪」と言ひ換へると、緊密な熟成語が弛み、解体しさうになるが、同じやうに「天つ日嗣」も「天の日嗣」としては弱々しくなる。萬葉末期の日本語の衰退、朝威の弛緩を思はせる表現である。家持は古語を呼び起こし、天皇を尊ぶ至情を歌ひあげんと全力をこめて努めたのであるが、家持の個人的努力ではいかんともなしえぬ時代の傾きであった。それがおのづから家持の用語にも反映してゐるのである。

二 言挙げせぬ国 言霊の佐くる国

『萬葉集』卷第十三に「あきづ嶋 倭の国は 神からと 言挙げせぬ国 然れども 吾はことあげす……」(三二五〇)で始まる作者不詳の長歌を掲げ、これに並べて「柿本人麻呂朝臣歌集歌曰」と標記し、

葦原の 水穂の国は 神ながら 事挙げせぬ国 然れども 辞挙げぞ吾がする

言幸く 真福くませと 恙無く 福くいまさば 荒磯浪 ありても見むと

百重波 千重浪に敷き 言上げす吾は 言上げす吾は (三二五三)

(反歌) 志貴嶋の倭の国は事霊の佐くる国ぞ真福くありこそ (三二五四)

と記してゐる。日本国は言挙げせぬ国、あれこれ言ひ立てぬ国柄だと言ひながら、しかし、敢へて言挙げすると宣言し、相手の無事を祈りますぞと畳みかけ畳みかけ歌ひ、「言上げ

す吾は、言上げす吾は」と反覆して長歌を結び、反歌では、日本国は事霊Ⅱ言霊（言葉の靈力）が助ける国であると高らかに歌ってゐる。言挙げせぬ国であつて、同時に言霊の助くる国なのだ。「言挙げせぬ」と「言霊の佐くる」とがセットになつてゐる。言葉の力に對する日本人の伝統的信念を、人麻呂は己れの信念として力強く歌ひあげたのだ。まさに百重波千重浪の力で読者に迫ってくる不思議な歌だ。

山上憶良の好去好来歌も「神代より 言ひ伝つてくらく 虚見そらつ 倭やまとの国は 皇神すめかみの、い
つくしき国 言霊ことだまの さきはふ国と かたりつき 言ひつがひけり」（八九四）と宣言し、
言霊の幸はふ国、即ち言葉に靈力があつて、その靈力が幸福をもたらす国だと力をこめて
歌つてゐる。

大言壯語、或は不平不満、糾弾激語を慎しみ、むやみに物事を言ひ立てぬが、やむにや
まれずして言葉に出した時は、その言葉が強い力を發揮して幸をもたらす、神代から、さ
ういふ国柄だといふのだ。

そして、「言挙げせぬ」、「言霊の幸はふ」に關したこれらの歌が、「神からと」「神なが
ら」「神代より」と、すべて神威または神意にかけて歌はれてゐる。皇神の尊嚴と言霊の

靈妙とが一体のこととして歌はれてゐるのである。

『日本書紀』では、日本武尊が、相模から上総に往かむとして、海を望りて「こは小き海のみ、立ち跳りにも渡りつべし」と「高言」されたが、暴風起り御舟漂蕩して沈没に瀕し、つひに弟橘媛の入水といふ最悪の事態に立ち至つたと記す。海を侮つての言挙げがたつたのであつた。

『古事記』では、やはり倭建命が伊服岐能山（伊吹山）の荒ぶる神を侮つて言挙げされたため、山神は大氷雨を降らせて打ち惑はし、命は目的を達せずして下山、つひに病み、戦旅で薨去された。「言挙げに因りて惑はさえつるなり」と注まで加へて強調されてゐる。

剣と歌と恋のたぐひなき英雄であつた倭建命（日本武尊）も、言挙げのために大災難を蒙られた。うかつに大言壮語、或は不用意に言葉を吐いてはならぬといふ思想が記紀の伝承を貫いてゐる。

『萬葉集』では、高橋虫麻呂が藤原宇合の西海道節度使に赴くのを見送つた時の長歌に添へて、

千萬の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき男とぞ思ふ（6、九七二）

と力強い一首をものしてゐる。大敵たりとも「言挙げせず」討ち取ってくる日本男子だと励ましたのだ。

この虫麻呂の歌で思ひ合はすのは、昭和十九年、山本聯合艦隊司令長官戦死の後、『山本元帥遺詠集』が公刊されたが、その中に、

千萬の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべく思ひ定めたり

国を負ひてい向ふきはみ千萬の軍なりとも言挙げはせじ

千萬の軍なりとも言挙げせずみことかしこみい向ふわれは

とあった。開戦直前の作の由。高橋虫麻呂の歌に基づき、艦隊長官としての決意の程を示されたものだが、私はこれを威勢のよい歌とは思はなかった。大戦の困難をひしひしと感じ、しかしながら大命をいただいた上は、「みこと畏み」「言挙げせじ」と「思ひ定めた」悲痛きはまる歌だと直感し、策略用ゐられず、必敗の湊川出陣に臨んだ『太平記』の楠木

正成まさしげの心事をも思ひ合せ、大戦の前途容易ならじと切実に思ったのであった。

「神柄みむからと言挙げせぬ国」「神ながら言挙げせぬ国」の両例は、いづれも「あきづ嶋倭やまとの国」「葦原の水穂の国」から歌ひ起こし、「言霊ことだまの佐くる国」「言霊ことだまの幸さきはふ国」の両例も「志貴嶋しきしまの倭やまとの国」「虚見そらみつ倭やまとの国」から歌ひ起こし、国柄、日本国の文化伝統、精神伝統といった観念が強く漲つてゐるが、いま一つ言霊の歌、

事霊ことだまの八十やその禰ちまたに夕占ゆふげ問ふ占正うらまさに謂る妹いもは相依たすらむ（11、二五〇六）

は恋の占を歌った、私的、民俗的な歌だ。「言霊の八十のちまた」といふ語は「言霊の働く道の辻」といふことらしい。そこで、人々の話を聞いて、それによって夕占をし、恋ふる人は必ず我に依ると確信したのだ。言霊の助けで必ず恋は成就すると思つたのだ。

『古事記』允恭天皇の条に、「天の下の氏氏名名の人等の氏姓の竹たかひ過かてるを愁なひ」、「味白あま禱かの言こと八十やそ禍津まが津つひのさき前に玖か訶べ瓮すを据あゑて、天あめの下の八十やそ友とも緒のの氏姓うらを定さだめ」られたといふ。熱湯の中に手を入れて正邪真偽を判定する裁判だ。その場所が味白あま禱か（甘櫃）の丘の

「言八十禍津日の前（埼）」。「萬葉集」の「言霊の八十の衢」と似た表現だが、さまざまに言ひ立てる氏々の主張を裁き、誤れるもの偽れるものには刑罰を下す意で、恐るべき禍津日神の名に因み、「言八十禍津日」の名をつけた場所なのであらう。「言霊の八十の衢」がプラスの言霊であるのに対して、これはマイナスの言霊といふ感じだ。

この場所には、延喜式内の甘樞坐神社が鎮座してゐる。祭神は大禍津日神。昭和三十八年私が参詣した時は、小暗い森には梟が昼も目を光らせてゐて、境内には梟に喰ひ荒された小鳥の羽が散乱し、鬼気迫る感じで、言八十禍津日埼といふ物怖しい古名をひしひし実感させられた。

「言挙げせず」にも私的な歌がある。

大方は何かも恋ひむ言挙げせず妹に依り寝む年は近きを（11、二九一八）

この小川霧ぞ結べるたぎちゆく走井の上に事あげせねども（7、一一一三）

前者は恋の歌。後者は民俗的信仰の窺はれる歌だ。いづれも作者不詳。大伴家持の一首、

わが欲^ほりし雨は降りきぬかくしあらば言^{こと}挙げせずとも年は栄えむ（18、四二二四）

これは、雨乞の歌を作った後、望みの雨が降って来た、もはやあれこれ言ひ立てなくても、今年の五穀は豊穰だと喜んだ歌で、越中国守としての職責上公的な気持が強いが、同時に雨乞の習俗を踏まへた作だ。（なほ『萬葉集』中、雨乞の歌は大伴家持の越中における例がただ一つあるだけだ）。

「殺し文句」といふ後世の語もあるが、真心こめた言葉、或は心の限りを尽して美しく磨き上げた言葉が、いかに人を動かし、世を動かすかは、われら日常体験するところだ。

「至誠にして動かざるものは未だこれ有らざるなり」（吉田松陰）、至誠とは言葉にこもる真心、それこそまことの言霊だ。

付記 「言立て」について

「言立て」は大伴家持がしばしば使用した語で、社会的公的儀礼的な発言・宣誓。「海ゆかば」は大伴氏の有名な言立であった。「言挙げ」がその場かぎりの偶発的な発言であるのとは趣を異にしてゐる。

三 葦原中国と葦原水穂国

——古事記語彙と萬葉集語彙——

古事記の

葦原中国

「葦原の中つ国」「豊葦原の水穂の国」ともに日本国の古名であるが、『萬葉集』には「葦原の水穂の国」が歌はれ、「葦原の中つ国」は全く姿を見せない。『古事記』の本文はすべて「葦原の中つ国」で、「豊葦原の水穂の国」は特別な場合に三回使用されただけだ。

实例を見てゆく。黄泉の国（冥界）から逃げ帰られた伊耶那岐命の語に「葦原中国にあらゆるうつしき青人草」とあるのが「葦原中国」の語の初出だ。これは地下の冥界に対する現実国土としての葦原中国だ。

つづいて天岩屋戸の条の「高天原みな暗く、葦原中国ことことに闇し」「高天原と葦原中国と自らに照り明りき」。これは天上の高天原と地上の葦原中国を対比併称したものだ。猿田毘古神の段の「上は高天原を照らし、下は葦原中国を光らす」も同じだ。

また国譲り交渉に関して「この葦原中国はあが御子の知らす国と言依さしたまへる国ぞ。かれ、この国に道速振る荒振る国つ神どもの多にあると思ほす……」「葦原中国に遣はせる天菩比神」「汝を葦原中国に使はせる故は、その国の荒振る神どもを言趣け和せとぞ」「汝がうしはける葦原中国はあが御子の知らす国と言依さしたまひき」「この葦原中国は天つ神の御子の命のまにまに献らむ」「この葦原中国は命のまにまにすでに献らむ」「葦原中国を言向け和平しつる状を復奏しき」「今、葦原中国を平らげつと白す。

神武東征の時、天上界で天照大神が「葦原中国はいたくさやぎてありなり」「その葦原中国は、もはら汝の言向けし国ぞ」と建御雷神に救援を命ぜられた場面。以上が『古事記』の「葦原中国」使用例だ。黄泉国に対応する一例を除いて、すべて天上界「高天原」からの呼称、または天上界との関連においての使用だ。

（大国主神の別名「葦原の色許男」もまた葦原中国の強剛者の意であらう。異界「根の堅州国」において須佐之男大神が「こは葦原色許男と謂ふかみぞ」と識別し、天上界から神産巢日御祖命が「汝葦原色許男命」と語りかけてゐるのを見ても、明らかに異界や天上界と対応する葦原中国の男の意にとるべきであらう）。

古事記の豊葦原

水穂国

ところが、天忍穗耳命あめのおしほみのみことに降臨を命ぜられた天照大御神あまてらすおほみかみの神勅は「豊葦原の千秋ちあきの長五百秋ながいほあきの水穂国みづほのはあが御子みこ正勝まさかあ吾勝かつかち々速日あめのおしほみのみこと天忍穗耳命あめのおしほみのみことの知らす国ぞ」、これに対して忍穗耳命は「豊葦原の千秋の長五百秋の水穂国はいたくさやぎてありなり」、また忍穗耳命に換へて日子番能邇々芸命ひこほのににぎのみことに下された神勅は「この豊葦原の水穂国はいまし知らさむ国ぞ」とあつて、降臨下命の重々しい神勅と、神勅に密接に関連した部分にのみ「豊葦原水穂国」の名が用ゐられてゐる。特別厳粛な儀礼的呪術的詞章以外には使用されなかつた語だ。

萬葉集の

葦原水穂国

『萬葉集』の用例を見てゆく。柿本人麻呂は「葦原のみづほの国を、天地の依相よりあひの極み、しろしめす神の命」(2、一六七)と歌ひ、大伴家持は「葦原の水穂あまくだの国を、天降り知らしめしける、天皇すめみの天の日嗣」(18、四〇九四)と歌ひ、卷第十三の作者未詳歌には「葦原の水穂の国に、手向けすと天降りあもましけむ、五百萬いほよろづ千神ちよろづの神代」(三三二七)と歌はれてゐる。いづれも、天孫または天神の降臨に関する神話伝承を歌つたものだ。

卷第十三の「葦原の水穂の国は神ながら言挙げせぬ国」(三三二五三)は日本国の文化伝統

を歌ひ、人麻呂の高市皇子尊哀悼長歌は「水穂の国を神随太敷きまして」(2、一九九)と、神代を受け継ぐ日本国を歌ってゐる。「葦原の」を冠せず、単に「水穂の国」となつてゐるが、これもほぼ同じ例と見てよい。

巻第九の田辺福麻呂の弟死去を悼む長歌「葦原の水穂の国に、家無みや、又還りこぬ」(一八〇四)は私的な挽歌で、やや異例だが、とにかく以上六例が『萬葉集』に歌はれた「葦原の水穂国」又は「水穂の国」だ。「葦原中国」は皆無だ。『古事記』語彙と『萬葉集』語彙の注目すべき相違点だ。

未開、妖怪うご
「葦原中国」は神話構成上「高天原」と対応し、また「黄泉国」とも対応してゐるが、この語自体の持つイメージは、周囲に葦がぼうぼうと繁

めく葦原中国

茂した未開地だ。その未開の状況を『日本書紀』は「その地に多に螢火

の光く神、また蠅声なす邪ぶる神あり、また草木威能く言語ふ」、『出雲国造神賀詞』は「昼は五月蠅なす水沸き、夜は火瓮なす光く神あり、石根・木立・青水沫も事問ひて荒ぶる国なり」、『常陸国風土記』は「荒ぶる神たち、又石根・木立・草の片葉も辞語ひて、昼は狭蠅なす音声ひ、夜は火の光明く国なり」と表現してゐる。未開の国土に荒ぶる邪神が

蠅の如く充滿して騒音を発し、夜は怪光を放ち、岩石草木みな物を言ってざわめき、妖怪百鬼横行してあるといふのだ。それが太古未開の日本「葦原中国」の原風景であった。

その邪神跋扈する国を平定した状況を、『書紀』一書に「遂に邪神また草木石の類をひて皆已に平け了へぬ」と記し、『常陸国風土記』には、

天地の権輿、草木言語ひし時、天より降り来し神、み名は普都大神と称す、葦原の中つ国を巡り行でまして、山河の荒ぶる梗の類を和平したまひき

『延喜式』の「大祓詞」には

かく依さしまつりし国中に、荒ぶる神どもをば神問はしに問はしたまひ、神拂ひに拂ひたまひて、語問ひし磐根・樹立・草の片葉をも語止めて、天の磐座放れ、天の八重雲をいつの千別きに千別きて天降しまつりき、

と莊重に述べてゐる。邪神妖怪を掃ひ、鎮め、和め、「葦原の中つ国」を「安国と平らけくしろしめす」、すなはち、平和と秩序をもたらし、安らかな国を打ち建てるといふのが、降臨伝承の眼目であった。

葦茂る低湿地は、開拓すれば豊かな水田ともなるべき地だ。「秋の垂穎、八握に莫々然

て甚く快し」(書紀)といふ状態になるやう、先取りして予祝し、祈念し、讚美した神語が「豊葦原の水穂の国」だ。更にこれを荘嚴して「千秋の長五百秋」とか「千五百秋」と修飾し、たぐひなき美称としたのだ。だから『古事記』では、皇祖神からスメミマに降臨を命ぜられた神語神勅にのみ、この語が使用され、地の文は「葦原中国」で一貫させたのだ。(逆に『延喜式』祝詞では、荒ぶる状態についても、豊葦原の水穂国の美称で一貫させ、葦原中国の呼称を避けてゐる。)

荒ぶる自然を制御し

われわれ文明生活に馴れた者は心安く「自然保護」とか「自然に親

調和させた日本文化

しむ」とかいふが、本来の自然は畏怖すべきものであった。豪雨・

洪水・噴火・暴風・海嘯・地震・疾病・虫災・獣災、あらゆる災害

が満ちみち、たえず飢饉にも襲はれた。これを「言向け和平す」、即ち自然を制御し、人間に調和させることこそ統治の大眼目であった。

「葦原の中つ国」の手もつけられぬ未開地を開拓し、作物豊かに穰り、人々安らかに住む「うまし国」「豊葦原の水穂の国」に作り変へてゆくため、オシホミミ(大いなる稲穂)、ホノニニギ(稲穂が賑々しく)と、五穀豊穰の美称を持つ神霊を降下させられたのであつ

た。

日本文学は自然を歌ひ、日本文化は自然に親しむ文化であるが、それは荒々しい原初の「葦原中国」の自然ではなく「言向け和平」された「水穂国」のやさしい自然だ。われわれは、水田に水満ち、蛙の音が聞え、稲実り、赤蜻蛉とび、早稲の香が漂ってくるとき、心のみ、自然の良さに溶け、幸福感に浸るが、水田そのものは、実は人間が自然に手を加へて作り上げた二次的自然だ。荒ぶる自然が和平され、人間と調和した自然なのだ。

「岩根・木立・草の片葉も言止め」と繰り返し語られた、荒ぶる自然の調伏伝承に、国譲りの史的・政治的伝承が癒着複合して成立したのが、記紀の天孫降臨物語だ。

『古事記』神話は、天上界「高天原」と地上界「葦原中国」とが交互にその舞台となつてゐるが、『萬葉集』の舞台は現実の地上界だけだ。だから

舞台とした
萬葉びと

『萬葉集』には「高天原」も「葦原中国」も歌はれなかった。（「天の原振りさけ見れば」「天の原より生れきたる」とは歌ったが、それは地上界か

ら仰ぎ見ての天空であつて、神々が生活する舞台としての「高天原」ではない）。

草昧の「葦原中国」の荒々しい姿は、神話の世界に遠ざかり、白鳳・天平の文化人「萬

葉びと」からは遠い存在であった。「葦原の」といふ枕詞的な冠辭に「葦原中国」の痕跡をとどめながら「水穂国」こそ『萬葉集』の現実の舞台であった。（『古事記』の豊葦原の美称「豊」が『萬葉集』では消えてゐるが、これは五音七音で交互に詠む倭歌としての音数的事情によるものであらう）。

なほ、「葦原の水穂国」と歌ったのは、古歌謡を集めた卷第十三と、古代伝承を好んで歌った人麻呂・家持・福麻呂とだけで、「葦原の水穂国」さへ『萬葉集』中の古語となりつつあったと思はれる。「公式令」によれば、詔書は「明神御宇日本天皇」「明神御大八州天皇」と書くことが規定されてゐる。『令集解』では前者は落国に対する辭、後者は朝廷大事の辭とあるから、対外的には「日本」、対内的には「大八州」が当時の正式国号であつたわけだ。

付記 千早振る荒
振る神について

『古事記』には「道速振る荒振る神」と連記され、千早振る神といふのは恐るべき猛威を振るふ邪神の意であつたが、自然が和平やはされ、人々に親しいものになるにつれて、原義も変化し、靈驗あらたかな神の

義となり、単に神の枕詞ともなつてゆく。『萬葉集』でも「夜よならべて君を来ませと千石ち

破る神の社を祈まぬ日はなし」(11、二六六〇、作者不詳)、「ちはやぶる神の社に、照る鏡、倭文に取り添へ、祈ひ禱みて」(17、四〇一一、大伴家持)となると、すでに靈驗あらたかな祈願の対象となつてゐて、これが後代に及んでゆく。

後世、「ちはやぶる」を多用されたのは明治天皇であらう。『新輯明治天皇御集』の索引で見ると「ちはやぶる」の初句で始まる御製が三十首にも及ぶ(例「ちはやぶる神の心にかなふべくをさめてしがな葦原のくに」)。この他「うけつぎて守るもうれし千早ぶる神のさだめしうらやすの国」等、初句以外に「ちはやぶる」を使用された御製も多々あるから、明治天皇御製におけるこの語の使用総数は更に増えるはずだ。

「荒ぶる神」は後々までその原義をとどめたが、それでも亀山上皇が弘安四年(一二八二)元寇国難に際して詠まれた御製に「世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶる神は照らし見るらむ」とある。上皇はこの未曾有の国難に際し、伊勢神宮へ勅使を派遣、身命にかへて国難克服を祈願され、宸筆を認められたといふ。九州の宮崎八幡宮には「敵国降伏」の宸筆勅額を掲げられた。『増鏡』には「まことに此日本のそこなはるべくは、御命をめすべきよしに手づから書かせ給ふ」とある。そのやうな切羽詰った御心から、一層荒

々しい神威を切望され、「荒ぶる神」の表現を選ばれたのであらう。

四 天孫降臨伝承と大伴氏・物部氏

天孫降臨伝承と

おほとものかもち
大伴家持の最大の力作は「賀陸奥国出金詔書歌」（18、四〇九四）であるが、家持はこの長歌を、

大伴家持の表現

葦原の みづほの国を 天降り しらしめしける すめろきの

神のみことの 御代重ね 天の日嗣と しらしくる 君の御代御代……

と歌ひ起こした。記紀の神話伝承から説き始めたのである。「喻族歌」（20、四四六五）では、更に具体的に、

ひさかたの 天の戸開き 高千穂の 岳にあもりし すめろきの

神の御代より はじ弓を た手にぎり持たし まかご矢を たばさみそへて 大久米の

ますらたけ男を 先に立て 鞞取り負ほせ 山河を 岩根さくみて 踏み通り

国まぎしつづ ちはやふる 神をことむけ まつろはぬ 人をもやはし……

と降臨の山名「高千穂」をも明示し、「はじ弓」「まかご矢」と降臨に奉仕した大伴の遠祖が身に帯びた弓矢にまで及んでゐる。『古事記』には「天のはじ弓を取り持ち、天の真鹿まか児矢を手挟み」とあつて、家持の歌と一致してゐる。(天神の資格を保証する聖器として、この弓矢の名は重要だったのであらう)。『書紀』第四ノ一書は「天の梶弓はじ、天の羽羽矢」とあつて、「まかご矢」でなく、「羽羽矢」である点、若干名称は相違してゐるが、話の大筋は一致してゐる。

「喩族歌」はこのあと「あきづしま 大和の国の 榎原の 畝火の宮に 宮柱 太知たぢ立てて 天の下 しらしめしける すめろきの 天の日つぎ……」と続き、天孫降臨伝承がそのまま神武天皇東征伝承に移つてゆく。

高千穂の山名を劈頭へきとうに掲げ、降臨・東征を大きく打ち出し、「喩族歌」はまさに記紀建国神話の核心を歌ひあげたものだ。それは同時に、終始皇孫命すめみまのみことに随ひ、皇孫命と起居を共にして来た大伴氏の氏族伝承でもあつたらう。

「賀出金詔書歌」で簡潔に歌つたところを、「喩族歌」で詳細に、具体的に歌つたわけで、両者の天孫降臨記述は矛盾しないが、同じ家持が同じ天孫降臨を歌ひながら、全く趣

を異にした一首がある。家持が越中守の任を終へて帰途につき、越前国府を過ぎ、「京に向ひて路上興に依りて、預め作り、宴に侍り、詔に応ずる歌一首」(19、四二五四)である。「興に依り」即ち感興湧くままに作ったのだが、上京後、天皇の賜宴に列し、その晴れの場で「歌を作つて献ぜよ」と詔が下ることを予想し、あらかじめ準備したといふのである。

八重雲押し分け伝

この「向京路上作歌」の冒頭には、

承と磐船漕ぎ伝承

あきづ嶋 やまとの国を 天雲に 磐船浮べ 艫とこに舳へに

真楫まからしじぬ繁貫まからしじぬき い漕ぎつつ 国見くにみしせして 天降あもりまし

掃かまひ平かまげ 千代累かまね いや嗣ついで継ついでに 知らしくる 天あまの日ひ継ついで……

と歌はれてゐる。天孫降臨を「天雲に船を浮べて楫かぢを連ね、漕かぎながら国見くにみをして天降あもつて来た」と表現してゐるのである。

『古事記』は「天の石位いはくらほな放はなち、天の八重やへたな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて」と表現。『書紀』本文は「天磐座いはくらほなを離はなち、また天の八重雲を排おし分けて、稜威いっの道ち別わきに道ち別わきて、日向ひなの襲その高千穂たかちほの峯あもに天降あもります」、同第四ノ一書にも「天磐戸あまのいはくらほを引き開け、

天八重雲を排分け」とあって、すべて天上なる岩の聖座を離れ、岩戸を開き、幾重にも棚引く雲を押し分けての降臨である。

『延喜式』祝詞も「天の磐座放れ、天の八重雲をいつの千別きに千別きて天降し依さしまつりき」（大祓詞）、「天の磐座放れて天の八重雲をいつの千別きに千別きて天降し寄さしまつりし」（遷却崇神）、『日向国風土記』逸文も「天の磐座を離れ、天の八重雲を排けて稜威の道別き道別きて、日向の高千穂の二上の峯に天降りましき」とあって、いづれも天空から雲をおし分けおし分け降るといふ壮大な表現である。人麻呂の日並皇子尊挽歌にも「天雲の八重搔き別きて（一云、天雲の八重雲別きて）神下しいませまつりし高照らす日の皇子」（2、一六七）と歌はれてゐる。この形が皇室の聖なる伝承として、語り継ぎ言ひ継がれ、定着してゐたのだ。

川出麻須美は薩摩の旅の大連作「空の初旅」（昭和三三）において、

身をはなれ浮べる魂か白雲にくるまる乳児か空ゆく我は

霧島の山々とさす雲のなか今し行くかと目とちて思ふ

八重雲のたなびく見つつ古事記なる天孫降臨の章を思ひき

と驚嘆し、敬虔に歌つてゐる。「白雲にくるまる乳児か」の表現は、『書紀』に、瓊々杵尊にたぎのみことが生れたばかりの乳児の姿で真床まとこおほふすま覆衾といふ布団にくるまって降臨されたと伝へる記事を連想させて興味深い。

物部氏の始祖伝承

ところが、『書紀』の神武紀の末尾に、大和の別号を列記し、その最後に「饒速日命、天磐船あめのいはふねに乗りて、太虚おほぞらを翔行かぎりゆきて、是の郷おせを睨りて降りたまふに乃至りて、故、因りて目けて、虚空そら見つ日本やまとの国と曰ふ」と記してゐる。

神武紀の初めにも「塩土老翁しほつちのぢぢに聞きき。曰ひしく『東に美うまし地あり、青山よも四めくに周れり。其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降れる者あり』といひき。(中略)その飛び降るといふ者はこれ饒速日か」とあつて、これが東征の発端となつてゐる。

長髓彦ながすねひこの言上ごんじやうにも「むかし天つ神の子ましまして、天磐船に乗りて天より降りいでませり。号なづけて櫛玉くしたま饒速日命と曰す」とあつて、長髓彦は饒速日を奉じて、神武天皇に抵抗したのであつた。長髓彦誅殺の後、饒速日は神武天皇に帰順し、忠効を致した。この饒速日

命こそ「物部氏の遠祖なり」と『書紀』に記されてゐる。『古事記』にも邇芸速日命の子
 宇麻志麻遲命は物部連の祖と記されてゐる。

即ち、磐船に乗つての天降りは、物部氏の始祖伝承である。家持は物部氏の伝承を取り
 入れて天孫降臨の神話を修飾したのであった。

いかなる乗物も用ゐず、八重雲を押し分けての降臨は、いかにも神業らしく、縹渺とし
 て壮大神敞であるが、天雲に舟を浮べて多くの水夫に漕がせて降ってくるのは、幻想的・
 童画的で、これはまたこれで別個の美しさを備へてゐる。家持は、北陸から奈良の都へ向
 ふ長旅の間、その伝承を思ひ出し、これに魅かれ、まさに「興に依つて」かく作歌したの
 であった。

物部氏伝承に由来するらしい「空見つ」の呪語が、「やまと」の枕詞として極めて多く
 使用され、「空にみつ」を含め「空みつ」七回、「しき嶋の」七回、「秋津嶋」五回、「日
 の本の」一回）、天皇御製にも「虚見つやまとの国は押なべて吾こそ居れ」（雄略天皇、1、
 一）、「虚見つやまとの国は水の上は地ゆく如く」（孝謙天皇、19、四二六四）と用ゐられてゐ
 る点から見ても、物部氏の伝承が皇室神話に取り入れられてゆくのは自然の勢ひであつた

と思はれる。家持はそこへ一步踏み込んだのであった。

饒速日命の子孫、物部氏は屈指の大豪族で、多くの枝族に分れた。神事・軍事に関与した記事多く、石上神宮いそのかみの祭祀も物部氏の管理するところであった。天皇御一代最重要の神儀たる即位大嘗祭そくみだいじようさいに当って、大嘗宮の南北の門に盾を立てるといふ重い役割は物部氏（石上氏・榎井氏えのゐ）の担当であると『延喜式』に明記されてゐる。持統天皇即位の時は「物部麻呂、大盾を樹つ」（書紀）、文武天皇の大嘗祭には「榎井倭麻呂、大盾を堅て、大伴手拍、楯杵を堅つ」（続日本紀）と記録され、大伴氏と分担してゐる。「物部の大臣楯立つらしも」（1、七六）と『萬葉集』元明天皇御製にも詠まれてゐる。

大嘗祭・新嘗祭の前日行はれる鎮魂祭は、天皇の御魂を鎮めるための神秘的な、重要な祭儀であるが、これもまた物部氏が、天神から授けられたといふ家伝の呪詞を以て奉仕したのであった。物部氏とはかくの如き特別の氏族であった。

物部氏は後、石上氏いそのかみと称したが、その石上宅嗣いさかつぐは大伴家持と政治的立場を同じくし、親しい間柄であった。その物部氏の伝承を家持は積極的に取り入れたのだ。天空を船で漕ぎゆくといふ美しいイメージが家持の詩的想像力を刺激し、漫々たる琵琶湖をながめなが

ら（或は湖上を漕ぎ渡ったのかもしれない）、都へ向って旅行く心をはづませたのであらう。
古事記の天の鳥船

皇室の伝承にも、僅かながら空ゆく舟のイメージが痕跡をとどめてゐる。『古事記』に伊耶那岐・伊耶那美両神の子として「鳥之石楠船神、亦の名は天の鳥船」が記されてゐる。天の鳥船といふ名は美しい。この天鳥船神は、天孫降臨に先立って行はれた国譲り交渉に当って、建御雷神に副へて派遣されてゐる。しかし肝腎の天孫降臨には随伴してゐない。

神宮の御船代

伊勢神宮の御神体を奉安する聖なる容器を御船代といひ、天磐船を象つたものとも伝承されてゐるといふ。他の神社でも神体安置の容器には船の形をしたものが多いと聞く。一物部氏を超えて、日本人の神祇信仰に舟が深くかかはつてゐたことを示すものであらう。それだからこそ家持は安んじて天磐船による天孫降臨を歌つたのであらう。

天の梯建伝承

天孫降臨伝承には「八重雲押し分け型」と「天磐船型」の他に「天の梯立型」の行はれてゐた形跡がある。『続日本後紀』収録の興福寺大法師らの長歌に「あかねさし 天照る国の 日の宮の 聖の御子ぞ 瓠葛の 天の梯建 践み歩み

天降り坐しし 大八洲 天つ日嗣の 高御座 万世鎮ふ……」とあって、天の梯建即ち天のハシゴを踏み下つての天孫降臨が歌はれてゐる。『丹後国風土記』逸文には、伊射奈芸命が天に通ひ行でますため椅を作り立てられたが、命が寝て居られる間に仆れ伏して天ノ椅立になつたといふ伝説が記されてゐる。天上界と地上界とをつなぐハシゴがあつて、天地の通ひ路になつてゐたといふ考へ方があつたことを示すものだ。

『萬葉集』卷第十三「天橋も長くもがも（中略）月夜見の持てる越水、い取り来て（下略）」（三二四五）の天橋も天に登る橋で、その橋を伝ひ登つて月世界の若返りの水を取つて来たいと歌つてゐる。『播磨国風土記』印南郡益氣里の条にも「石橋あり、伝へ云ふ、上古の時、この橋、天に至れりき、八十人衆上り下りして往き来しき」との伝説がある。いづれも、地から天まで届く梯子状の施設が想像されてゐたのだ。後世の民話にも、生長した植物の蔓などを伝つて天に登る話がある。同系統の伝承であらう。

天の浮橋

『古事記』の降臨伝承は「天の八重たな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて」の次に「天の浮橋にうきじまり、そりたたして、それから「筑紫の日向の高千穂のくじふる岳に天降り坐さしめき」と続いてゆく。ウキジマリ、ソリタタシテは

「宇岐士摩理 蘇理多多斯旦」と表記されてゐる。『古事記』筆録時すでに意味不明で、神聖視された伝承の古語をそのままに記したものであらう。『書紀』では「立於浮渚在平処」と書き、ウキジマリタヒラニタタンと訓を付記してゐる。これを参考にすれば、なほ多少の疑問はあるが、天浮橋のもとに浮き島があつて、そこを経て高千穂への降臨といふことにならうか。浮橋は多分浮島を根にして架かつてゐたと考へられてゐたのであらう。

さきに、天忍穂耳命あめの忍しほみみのみことへの下命の時も、命は「天の浮橋に立たして」豊葦原水穗国を下瞰、その騷擾いまだ降臨の期にあらずと判断し、引き返されてゐる。更に溯つて、伊耶那岐・伊耶那美命二柱ふたが、天つ神もろもろの命によって「天の浮橋に立たして」天の沼矛ぬぼこを指し下ろして海水を掻き鳴しな、オノゴロ島を作り成し、その島に天降りされてゐる。

この天浮橋は、一般に「神が昇降するに使う天界と下界をつなぐ橋」(新潮日本古典集成本の頭注)と解されてゐるが、果してさうであらうか。「天の八重雲を稜威いづつの道別ちわきに道別きて」といふ威風堂々たる降臨と、梯子を一段一段踏みくだる降下とはどうしても呼吸が合はない。これは、天地をつなぐ梯子ではなくて、天空に虹のやうに懸かる、文字通り浮橋だ。八重棚雲の間からかすかに隠見する神秘の橋だ。天界と地界との、いはば中

継基地で、ここから下界を観望観察する重要な施設であるが、これを伝って地上に降下する設備ではないであらう。「浮橋」と「梯建」とは別系統の伝承と見るべきであらう。

なほ、国譲り交渉のため、高天原から次々に葦原中国に下った神々は「天浮橋」には立ち寄つてゐない。天祖伊耶那岐命、天子天忍穗耳命・天孫邇々芸命に関してのみ、「天浮橋」が語られてゐるのは、この橋が極めて神聖な地点、「高御座」的、「お野立所」的なのと考へられてゐたからであらう。そのお野立所から更に高千穂の峯に降下されたのだ。

『日向国風土記』逸文には、降臨の時、「天暗冥く、昼夜別かず、人物暗冥から開晴へ」

道を失ひ、物の色別き難」かつた。ここに土蜘蛛（土着の豪族）が「皇孫尊、尊の御手以ちて稲千穂を抜きて粃と為して四方に投げ散らしたまはば、必ず開晴りなむ」と奏上したので、千穂の稲を揉みて粃となして投げ散らされたところ、「天開晴り、日月照り光」き、無事、高千穂の二上の峯に降臨されたといふ。暗天から、幾千幾万の稲粃を、雪の如く、花の如く散らしながら、しづしづと降下され、降られるにつれて天開晴、太陽燦々と輝き、その眩しい光に照明されて、アメニギシ、クニニギシ、アマツヒコ、ヒコホノニニギ（天も賑々しく地も賑々しく、天つ神の御子の赤々と穰った稲穂）の名を持

ったスメリマノミコトが山頂に天降られたといふのだ。目のさめるやうな舞台装置だ。草深い南九州の一角に、言ひ継ぎ語り継がれて来た日本肇国の伝承だ。

五 「海ゆかば」をめぐって

大伴氏の言立て

大伴氏の「海ゆかば」の言立ことばだては聖武天皇天平二十一年（七四九）四月一日の宣命せんみょう（国文の詔勅）に引用され、これを受けて越中守大伴家持の「賀陸奥国出金詔書歌」みちのくに（18、四〇九四）に重ねて高誦され、近代には、これが信時潔のぶときよしの作曲によつて広く唱はれた。言立とは、特に取り立てて宣言すること、ここでは大伴氏の誓ひの詞だ。この言立は「海ゆかば」「山ゆかば」を対句にしてゐるが、山よりもまづ海を強く押し出し、冒頭に掲げてゐる。これは、いくたびも渡海作戦に従事した大伴一門の体験が大きく影響してゐるのであらう。

『日本書紀』によれば、雄略天皇九年、大伴談連かたりのむらじは新羅しらぎに出征し、新羅軍を打ち破つたが、残敵と戦ひ、壮烈な戦死を遂げてゐる。この時、従者大伴津麻呂つまろも、談かたりの戦死を知

つて、敵中へ引き返して奮戦し、これまた戦死した。談の子大伴金村はいくたびとなく朝鮮に渡って画策した。金村の子大伴狭手彦も新羅征討軍に従事してゐるが、肥前松浦の弟日娘子と悲別した哀話は『肥前国風土記』に伝説化して記され、人口に膾炙した。同じ伝説が『萬葉集』巻第五では、松浦佐用嬪の名で取り上げられ、出航する狭手彦の船を山上から見送り、「悵然として肝を断ち、黯然として魂を銷ち」領布（ネッカチーフのやうな婦人用の布で、呪具として神秘視された）を振って別れを惜しんだ。それで山名を領布磨之嶺と名づけたといひ、これを追慕する歌が数首（八六八、八七一―八七五）書きとめられてゐる。この他にも、大伴氏の人々は数知れず朝鮮渡海戦に活躍したのであらう。「海ゆかば」はその一門一族の切実な体験から生み出された語だ。

「大君のため、にこそ死なめ」ではなくて、「大君のへにこそ死なめ」である。天皇陣頭親率のもとに親衛軍として戦った、極めて古い記憶がこの言立に強く息づいてゐる。伝承的には、神武天皇東征に従軍した大伴・久米の兵たちを髣髴させる語だ。大伴氏の長い歴史と伝承が重層してこの短い言立に煮つまつてゐるのだ。

萬葉集における

屍の表現

「水づく屍」「草むす屍」は凄惨である、酸鼻の極である。屍を踏み越え、踏み越え戦った実感が迫ってくる。萬葉の挽歌でも、大部分、死はこれを直叙せず、婉曲に表現してある。「草枕旅に臥せる」とか「荒磯を枕とまきて寐せる」とか「誰が夫か国忘れたる」とか「黒髪は吉野の川の沖になづさふ」とか、美化されてゐる。わづかに田辺福麻呂の足柄坂の死人を見ての作歌「恐きや神の御坂に 和雲の 服寒らに ぬば玉の 髪は乱れて 邦問へど 国をも告らず 家問へど 家をも云らず 益荒夫の ゆきの進みに ここに偃せる」(9、一八〇〇)の「服寒らに」「髪は乱れて」が死骸の惨状を直視してゐるが、それでも「こやせる」(臥してゐる)と和らげて結んでゐる。「水づく屍」「草むす屍」と屍を詠んだのは『萬葉集』中、この家持の長歌だけだ。

卷第二、姫嶋松原で嬢子の屍を見て河辺宮人が悲嘆しての作歌も

難波瀉潮干ありそね沈みにし妹が光儀を見まく苦しも(二二一九)

と「沈みにし光儀」と和らげてゐる。題詞には「屍」とあるが、歌は「沈みし屍」でなく

て「光儀」である。この意味でも、「水づく屍」「草むす屍」を見つめてたじろがぬこの歌は注目すべきであらう。

防人歌の採録

家持がこの歌を作つて国民の志気を鼓舞したなどと誤解されてゐるが、家持が歌つたのは「他氏の追隨を許さぬ武門大伴氏の誇」であつた。これを他氏にまで及ぼさうとは、家持、夢にも思はなかつたであらう。

家持が兵部少輔（今ならば防衛庁次官か）として防人の歌を採録した時、「防人の悲別の心を追ひて痛み作れる歌」（20、四三三—三六）、「防人の情に為りて思を陳べて作れる歌」（20、四三九—四四〇）、「防人悲別の情を陳ぶる歌」（20、四四〇—四四二）と長篇の長歌三篇に十一首の反歌を添へて、東国農民召集兵の情を歌つてゐるが、「水づく屍、草むす屍」「顧みはせし」などとは片言も言はず、父母妻子らの「涙をのごひ、むせひつつ言どひ」「出でたちがてに、とどこほり、顧みしつつ」別れた様子を歌ひ、「待ちかも恋ひむ愛しき妻らは」「別れを惜しみ歎きけむ妻」「妻別れ悲しくありけむ」とくりかへし歌ひ、防人になり代つて、

海原に霞たなびき鶴が音のかなしき夜は国方し思ほゆ（四三九九）

家思ふと寐を寝ず居れば鶴が鳴く葦辺も見えず春の霞に（四四〇〇）

と旅愁に浸ってゐる。防人を叱咤激励するのではなくて、防人の悲苦に心から同情し、いつのまにか自分が一兵士になった立場で歌ってゐる。それが兵部少輔家持の心情であつた。

しかし、千年後の後世、厳しい国際情勢の中で日本が戦つた時、大伴氏の言立——「海ゆかば」の歌が国民の共感を得、一族一門の言立が国民的言立となつて、国民の覚悟を強めたことも、これまた歴史的事実であつた。

老幼婦女福祉の
家持のこの長歌は、終始、聖武天皇宣命を受けた形で歌はれてゐる。

行政と「海ゆかば」
宣命の「天に坐す神、地に坐す神の相うづなひ奉り、さきはへ奉り、

又天皇の御霊たちの恵び賜ひ撫で賜ひ」を受けて、「天地の 神相う

づなひ 皇御祖の 御霊たすけて」と詠み、「天の下の 百姓衆を撫で賜ひ恵び賜はく」
を受けて「老人も 女 童も しが願ふ 心足らひに 撫でたまひ 治めたまへば」と老

人・女・童に至るまで恵撫したまふ仁政に感激し、「ここをしも あやに貴み うれしけ
く いよよ思ひて」、そこで大伴氏祖先の言立を打ち出してゐる。天皇の御まつりごとと
は、老人・婦人・子供に至るまで、その願ひを叶へ、喜びを分かち、現代風に言へば社会
福祉であると信じ、従つて「大君の任のまにまに」執り行ふべき行政の目標もここにある
と家持は固く思つてゐた。「老人も女童も、しが願ふ心足らひに、撫でたまひ治め賜」と
「海ゆかば水づく屍」とは、家持にとって表裏一体であつた。この重要な一点を見落して
はならぬと思ふのである。

「海ゆかば」の歌碑

越中国府の跡、富山県高岡市伏木古国府の勝興寺境内には「海ゆか
ば」の歌碑が建つてゐる。昭和十二年、郷土史家飛見丈繁の建碑であ
る。同じく高岡市国分の石雲寺境内にも同じ歌の碑が立つてゐる。昭和十五年、僧南喜笛
の建碑、歌人尾山篤二郎の揮毫である。

追記一 大伴氏と佐伯氏 宣命には「大伴・佐伯の宿禰は常も云ふ如く、天皇が朝守り仕
へ奉る事、顧みなき人等にあれば、汝たちの祖どもの云ひ来らく、海行かばみづく屍、山
行かば草むす屍、大君のへにこそ死なぬ、のどには死なじと云ひ来る人等となも聞こしめ

す」とあって、これを受けて家持の長歌も「大伴と佐伯の氏は」「人の祖おやの立つる辞立ことだて人の子は 祖の名絶たず 大君に まつろふものと 言ひ継げる ことのつかさぞ」と歌ひ、大伴・佐伯両氏が併記されてゐる。『新撰姓氏録』によれば、雄略天皇御代、宮門護衛の任は一氏では重すぎると奏請し、大伴氏から佐伯氏を分かち、両氏で担当することになったといふ。佐伯氏は大伴氏から分かれて創立された氏なのだ。(これとは別系統の佐伯氏もある)。

奈良時代天平年間の越中国守は大伴宿禰すくね家持であった。その百五十年後の平安時代延喜年間の越中国守は佐伯宿禰ありわか有若であった。家持は越中の神山立山を初めて歌ひ、有若はこの霊山を初めて開いたと伝承されてゐる。家持は、越中で愛育の鷹が放逸した事件を劇詩的に長歌に歌ひ、有若は、放逸した白鷹を追跡して立山に登り、これが開山の端緒になったといふ。大伴・佐伯と越中のかかはり、立山と鷹をめぐる冥々のつながりを深く思ふのである。

追記二 外国人の疑念 ある外国人が「海ゆかば」を聞いて「西洋人ならば、こんな歌を歌ったら、厭戦気分えんせんきぶんに陥おとつたらう。日本人はどうしてこんな歌で戦意を昂揚きやうやうしたのだから

う」と不思議がったといふ。まさに戦意昂揚の威勢のよい歌ではなく、必死の覚悟を歌ひ上げた悲壮な辞立だ。戦時中も、勝ち軍の報道には使用されず、戦死玉砕の報道に際し、この曲が放送された。「前に生ぜん者は後を導き、後に生ぜん者は前をとぶらひ」（親鸞、『教行信證』）、玉砕戦死者にこの鎮魂の曲を捧げつつ、その後につき大和島根を守る決意を固めたのであった。

第七章

萬葉集の種々相

一 萬葉集と記紀歌謡

「待ちにか待たむ」と

『萬葉集』卷第二、「相聞」の卷頭歌は「難波高津宮御宇なにはのたかつのみやにあめのしたしろしめし

「待つには待たじ」

天皇代すめらみことのみよ

即ち仁徳天皇の御代の「磐姫皇后いはひめののおほきさき、天皇すめらみことを思ひて

作りませる歌四首」である。磐姫皇后は『萬葉集』中、最古の作者である。

君が行きけ気長く成りぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ（八五）

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根いはねし巻きて死なましものを（八六）

ありつつも君をば待たむ打ち靡なびく吾が黒髪に霜の置くまでに（八七）

秋の田の穂への上に霧きらふ朝霞いつへの方に我が恋やまむ（八八）

烈しい恋慕の歌で、熱気が紙面から掌へ伝はってくる。しかし、その熱情はすべて内向

的で、「迎へか行かむ待ちにか待たむ」と迷ひためらひ、「死なましものを」と思ひつめ、黒髪が白くなるまでも「君をば待たむ」と堪へ、最後に「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いっへの方に我が恋やまむ」と深々と溜め息をつく。「秋の田の」一首は、萬葉相聞歌中の白眉ともいふべきであらう。

ところが、記紀伝承中の磐姫（石之比売）像はむしろ外に向かつて激発してゐる姿だ。「言立てば、足もあがかに嫉みたまひき」「いたく怒りたまひて、人を大浦に遣りて（黒日売を舟から）追ひ下して、歩より追ひ去りたまひき」「いたく恨み怒りたまひて、その御船に載せたる御綱柏は、ことごと海に投げ棄てたまひき」といふすさまじさで、天皇もほとほと手を焼かれた御様子に記述されてゐる。記紀から萬葉へと人間像が大きく変貌したのだ。

第一首「君が行きけ長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ」について、『萬葉集』には注がついてゐて、『古事記』を引用して、かろのおはいらつめ「輕太郎女の歌

君が行きけ長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ（九〇）

を掲げてゐる。『萬葉集』に『古事記』が引用されてゐるといふので、『古事記』の成立と伝来を考へる上でも注目すべき個所だ。同じ歌の異伝には違ひないが、作者を異にし、歌詞にも小異がある。「山たづの」が「山尋ね」、「待つには待たじ」が「待ちにか待たむ」。辞句は小異であるが、「待つには待たじ」(もはや待てない、断じて迎へにゆく)といふ積極的な歌から「待ちにか待たむ」と苦しみたゆたひ、迷ひためらふ歌に大きく変貌してゐる。『古事記』に比べると、やはり『萬葉集』は新しく、いはば「近代的」である。

木梨輕太子きなしのかるのみこ 卷第十三、作者未詳の長歌、

情死の辞世

こもりくの 泊瀬はつせの河の 上つ瀬に 伊杭いくひを打ち 下つ瀬に

真杭まぐひをうち 伊杭いくひには 鏡を懸け 真杭まぐひには 真玉またまを懸け 真珠またまなす

我が念おもふ妹も 鏡なす 我が念おもふ妹も ありといはばこそ 国にも 家にも行かぬ
誰たが故か行かむ (三二六三)

これにも左注があつて「古事記を検するに曰く、件の歌は木梨之輕太子きなしのかるのみこみづか自ら死みまかりし時に

作れる者なり」と記されてゐる。ところが、『古事記』の歌は、これも少しく辞句が入れ替はつてゐる。

こもりくの 泊瀬の川の 上つ瀬に 伊杭を打ち 下つ瀬に 真杭をうち

伊杭には 鏡を懸け 真杭には 真玉を懸け 真珠なす 我が念ふ妹 鏡なす

我が念ふ妻 ありといはばこそよ 家にも行かめ 国をも偲はめ

『古事記』は「あが念ふ妹」「あが念ふ妻」と「妹」を「妻」と言ひ換へただけで、一息に畳みかけてゆくのに對して、『萬葉集』は「あが念ふ妹も」「あが念ふ妹も」と「も」を付けてゐる。これでは息が抜けてしまふ。この「も」は不要である。『古事記』は「ありといはばこそよ」から「家にも行かめ」「国をも偲はめ」と畳みかけ、無解決のまま声を絶つ。そして地の文「かく歌ひて、即ち共に自ら死にたまひき」となつてゆく。日本最古の男女心中物語である。

ところが『萬葉集』は「国にも 家にも行かめ」と概括集約し、『古事記』の畳みかけ

てゆく氣迫を失ってしまつてゐる。そして最後に「誰が故か行かむ」と打ち返し、願みて、ボンボン呟いてゐる。この一句は蛇足だ。

記紀歌謡から萬葉へと進歩したやうに常識的にいはれてゐるが、少くともこの例では、『萬葉集』はかくも弛緩し、『古事記』歌謡の迫力を失つてゐる。更に『萬葉集』では、この長歌に「年わたるまでも人はありといふをいつのまにぞも吾が恋ひにける」(三二六四)と拙い反歌をつけ、いよいよだらしなくなる。その上、「或書反歌曰」として「世間よのなかを倦うしと思ひて家出せし吾やなにか還りて成らむ」(三二六五)と、とまどつたやうな一首まで添へてゐる。「記紀歌謡」から「萬葉」への墮落といふ一面もあることを知るべきである。

走り出の宜しき山 　　同じく『萬葉集』卷第十三の歌、

こもりくの	泊瀬 <small>はつせ</small> の山	青幡 <small>あおはた</small> の	忍坂 <small>しのがは</small> の山は	走り出 <small>はし</small> で	宜しき山 <small>よろ</small> の
出で立ちの	妙 <small>くは</small> しき山ぞ	惜 <small>あたら</small> しき山の	荒れまく惜 <small>あたら</small> しも	(三三三二)	

この萬葉歌から、ただちに思ひ合はされるのは『書紀』雄略紀収録歌、天皇が「泊瀬の小野に遊びたまひ、山野の体勢を觀給ひて、慨然として感を興して」詠まれたといふ御製、

こもりくの 泊瀬はつせの山は 出で立ちの 宜よろしき山 走り出の 宜よろしき山の
こもりくの 泊瀬の山は あやにうら麗うらし あやにうら麗うらし

である。走り出るやうに平野に突出した山勢の見事さがリズムに乗って歌はれ、山の力が作者の感動と一つになって迫ってくるやうだ。『書紀』の歌は一筋に泊瀬の山だけを歌ひ、語勢、ほどばし進しめるが如くである。『萬葉集』の歌は泊瀬の山と忍坂山と並べたため、勢ひを削がれてしまつてゐる。そしてこの山の荒れゆくのが残念だと声を落として、ひっそり一首を結んでゐる。「挽歌」の部に収められてゐるから、山に寄せて人の死を悼惜する歌と理解されてゐたのであらう。山の荒廃を歎く歌、或は山に寄せて人の死を惜しみ悼む歌として、それなりに味はひのある歌である。

しかし『書紀』の歌の「出で立ちの宜よろしき山」「走り出の宜よろしき山の」と畳みかけ、語勢おのづから渦を巻いて反転し、「こもりくの泊瀬の山は」と初句をくりかへし、そのまま勢ひに乗って「あやにうらぐはし、あやにうらぐはし」と奔騰してゆく。この力あふるる書紀歌謡に比べると、萬葉歌も細々とした感じだ。

因みに、「こもりく」は「隠り国」と書き、山に深くこもった土地の意で、地名ハツセ（泊瀬・長谷）にかかる実景的枕詞。書紀・萬葉ともに山勢を「走り出」「出で立ち」と歌ってゐるのは、後世の国文学の静観的な山岳表現とはまるきり違つた動的な山岳表現で、上代文学の活力は目が覚めるやうに新鮮だ。

聖徳太子の飢人・
『書紀』推古紀、聖徳太子が片岡山の飢人多を見て歎き歌はれた一首、

死人悲傷の御歌
しな照る 片岡山に 飯いひに飢*て 臥こやせる その旅人たびとあはれ

親無しに 汝なれなりけめや さす竹の 君はや無なき 飯いひに飢*て 臥こやせる

その旅人たびとあはれ

『萬葉集』卷第三「挽歌」冒頭に「上宮聖徳皇子、竹原井たけはらのゐに出遊いでましし時、龍田山の死人を見て悲傷して御作歌、

家にあらば妹いもが手纏たまかむ草枕旅こやに臥こやせるこの旅人たびとあはれ（四一五）

片岡山と龍田山、飢人と死人と、小異があつて、同じ説話の異伝である。『書紀』の「飯

に飢て臥せるその旅人あはれ」を二回も反覆した調から、太子の御心が惻々として伝はつてくるが、『萬葉集』はその内容を短詩型に煮つめ、更に強く心に迫る絶唱である。庇護者としての「親」「君」の有無よりも「妹が手纏かむ」の愛情の断絶は切実である。「その旅人」よりも「この旅人」が身近で、現実感がある。飢人よりも死人の悲惨感は強い。太子の悲傷は一首を貫いて痛いまでにひびき、人麻呂の行路死者を悼む歌よりもすぐれた挽歌となつてゐる。

二 萬葉集の短歌と旋頭歌

萬葉集の歌体

『萬葉集』の主体を成すのは、いふまでもなく二六〇余首の長歌と約四二〇〇首の短歌とであるが、この他に旋頭歌六二首、仏足石体歌一首又は二首、更に若干の漢詩・漢文序・漢文書翰も収録されてゐる。

旋頭歌は五七七・五七七の歌体で、短歌よりも七音多い。ただ七音多いだけでなく、短歌は直情を一気に吐露してゆく。これに対して旋頭歌は上

半・下半に截然と分かれてゐる。

短歌の例、

秋の野の美草^{みくさ}刈り葺き宿れりし兔道^{うさぢ}のみやこの仮庵^{かりいほ}し思ほゆ（1、七）

一首一文で、まっすぐに詠み下してゐる。

熟田津^{にぎたづ}に船乗り^{ふね}せむと月待てば潮^{しほ}も叶^{かな}ひぬ。今はこぎ出^いでな（1、八）

これは文法的には第四句で切れてゐるが、「叶ひぬ」と息をのみ、その勢ひを「今は漕ぎ出でな」と大きく打ち出してゆく。一首のリズムが頓座せず、うねりを打ってゆく。

三輪山^{みわ}をしかも隠すか。雲だにも情^{こころ}あらなも。隠さふべしや（1、一八）

は形式は一首三文だが、三輪山へ向かつて高まった感情が、畳みかけるやうに押し出してゆく。

潮騒しほさるに伊良虞いらごの嶋辺しまべ榜べこぐ船ふねに妹乗いもるらむか。荒あき嶋廻しまみを（一、四二）

これは、散文的にいへば「荒き嶋廻を妹乗るらむか」となるところを、感情の高まった勢ひで、まづ「妹乗るらむか」と一首の眼目を打ち出し、「荒き嶋廻を」と後から言ひ添へた転置形で、内容は一貫してゐる。歌は抒情詩だから、心理の自然に随つて直叙してゆく。その自然の勢ひで時々転置形になるのだ。

後世、拙劣な短歌を「腰折れ」といひ、転じて自作の歌を謙遜して「腰折れ」といふ。短歌は腰が折れてはならぬ。歌ひ起こしから結びまで一息に押してゆかねばならぬ。だから息切れがして一首のシラべの中断したのを「腰折れ」と称して嫌忌したので。

三句目で切ると、上一七音・下一四音、ほぼ中程に切れ目がくるため、一首が二分され、腰砕けになり易い。だから『萬葉集』の短歌は、文法上切れる場合でも、たいてい二句目か四句目で切れる。かつ三句切れは「七五調」的になって頭重尻軽、弱くなる傾向があるが、二句切れ・四句切れは「五七調」で頭軽尻重、強い力が切れ目を越えて下の句に殺到し、一首のシラべを断絶させないのだ。

二句目で切れた例、

大宮の内まで聞こゆ。網引きすと網子調ふる海人の呼び声（3、二三八）

四句目で切れた例

秋山に落つるもみち葉、しましくはな散り乱ひそ。妹があたり見む（2、一三七）

二句目・四句目の二個所で切れた例、

直の逢ひは相ひかつましじ。石川に雲立ち渡れ。見つつ偲はむ（2、二二五）

飼飯の海の庭よくあらし。荻薦の乱れ出づ見ゆ。海人の釣船（3、二五六）

二句目又は四句目で切れてはゐるが、転置形の例、

うらさぶる心さまねし。久堅の天のしぐれの流らふ見れば（1、八二）

巨勢山のつらつら椿、つらつらに見つつ思はな。巨勢の春野を（1、五四）

以上の用例、いづれも萬葉調の正調、朗々誦すべき名吟だ。

萬葉の三句切れの例、

おくれゐて恋ひつつあらずは追ひ及しかむ。道のくまみに標結しめゆへ。吾が背せ（2、一一五）

これは古い歌の三句切れとして珍しい例だが、（しかも五句目の中途でも切れ、一首三文になってゐるが）、熱情は切れ目を越えて下句めがけて殺到してゆく。

藤波の花は盛りになりにけり。奈良の都を思ほすや、君（3、三三〇、大伴四綱）
ほととぎす鳴く羽触はふりにも散りにけり。盛りさかりすぐらし。藤波の花

（19、四一九三、大伴家持）

これは三句目ではっきり切れてゐる。よほど目立つ三句切れだ。『萬葉集』には珍しい例だ。特に後者は三句目・四句目の二個所で切れてゐる。萬葉調としては末期症状だ。

旋頭歌せうとうかのすがた

以上のやうな一首一調子を基本とする短歌に対して、旋頭歌は、

新室の壁草刈りにいたしましたまはね。草の如依りあふをとめは君がまにまに

(11、二三五一)

江林に宿る猪鹿やも求むるによき。白妙の袖まきあげてしし待つわが背

(7、二二九二)

のやうに、必ず「五七七」五七七」の二部分から成り立つ。

旋頭歌の原形ともいふべきは記紀歌謡の片歌問答だ。

あめつつ ちどりましとど などさける利目

と伊須気余理比売の詰問したのに対して、大久米命は

をとめに 直に逢はむと わがさける利目

と答へてゐる。四七七形の間答だが、五七七の字足らずと見てよい。正確には、五七七に整ふ以前の古形だ。

新治 にいじ 筑波 つくば を過ぎて 幾夜 いくよ か寝 ね つる

と倭建命 やまとたけるのみこと の間 ま に対して たいして 御火焼 みひたぎ の翁 おきな が

かかなべて 夜 よ には九夜 ここのよ 日 ひ には十日 とっぴ を

と答へたのは、俗に連歌の始まりといはれ、そのため連歌を「筑波の道」とも称したが、通常の連歌、短歌の上句と下句とはなく、片歌の問答だ。

大宮 おほみや の をとつ 鱗手 はたで 隅傾 すみかたぶ けり

との志毘臣 しびのおみ の嘲 あざわら りに対して、袁祢命 をけのみこと が

大匠 おほたくみ をちなみこそ 隅傾 すみかたぶ けれ

と切り返された。

このやうな五七七の問答歌一対を一続きにして一首の作品に仕立てたのが五七七・五七

七の旋頭歌だ。一筋に思ひを吐露せんとする短歌が抒情性を深めてゆくのに対して、両者の掛け合ひから発生した旋頭歌は、集団の場を舞台として、民謡的性格を色濃くとどめてゐる。

旋頭歌のまとまって載せられてゐるのは卷第七と卷第十一。どちらも「旋頭歌」の標目を掲げて特記してゐる。卷第七は二十四首（一二七二—一二九五）、卷第十一は十七首（二三五—二三六七）。うち三十五首が「柿本人麻呂歌集出」の注記、五首が「古歌集中出」の注記を有し、人麻呂がこの歌体に異常な関心を示してゐたことを思はせる。

住吉すみのえの小田おのを刈かりらす子賤やっこかも無なき、奴やつあれど妹いもが御み為ためと私わたくし田刈たかりる（7、一二七五）
 水門みなとの葦あしの末葉うらを誰たれか手折たをりし、吾わがが背子せこが振ふる手てを見みむと我わがぞ手折たをりし

（7、一二七八）

の如ごときは、五七七問歌、五七七答歌の姿を残のこすものだが、

夏影なつかげの房ねやの下したに衣裁きぬたつ吾妹わがも、裏儲うらまけて吾わがが為裁たばやや大たに裁たて（7、一二七八）

橋立の倉橋川の河のしづ菅、わが刈りて笠にも編まなく川のしづ菅（7、一二八四）
春日すら田に立ち疲る君は哀しも、若草の嬌なき君が田に立ち疲る（7、一二八五）
此の岡に草刈るわらは然かな刈りそね、ありつつも君が来まさば御馬草にせむ

（7、一二九一）

朝戸出の君が足結をぬらす露原、早く起き出でつつ吾も裳下ぬらさな（11、二三五七）

の如き、民謡的情調をなみなみと湛へ、短歌とは一味ちがった哀調を奏でてゐる。

しかし、

長谷の弓槻が下にわが隠せる妻、赤根さす照れる月夜に人見てむかも（11、二三五三）
ますらをの念ひ乱れて隠せるその妻、天地に通り光るとも顯れめやも（11、二三五四）

となると、形は旋頭歌でも、内容はすこぶる短歌に近い。かくて旋頭歌は短歌に近づき、その独得の味はひを失ひ、やがて衰へてゆくのである。

三 能登国歌と越中国歌（北陸民謡）

熊來の夜良と

熊來酒屋の

勞務者

旋頭歌については前章で述べたが、地方では謡ひ物がこの形をとつてゐた。卷第十六の末尾近く、能登国歌・越中国歌が採録されてゐる。国歌といふのは民謡とほぼ同じ意だ。能登国歌三首中の二首、

はしだての 熊來の夜良に 新羅斧 墮し入れ 和之 かけてかけて

勿泣かしそね 浮き出づるやと見む 和之（16、三八七八）

はしだての 熊來酒屋に まぬらる奴 和之 さすひ立て 率て来なましを

まぬらる奴 和之（16、三八七九）

この「和之」のリフレインは囃し詞と考へてよい。後世ならばワッショイぐらゐのところだ。「和之」を除くとほぼ旋頭歌に近い形になる。

熊来（熊木）は七尾湾西岸の低湿地。日本海に突出した熊登には朝鮮半島からの渡来人・帰化人が多く住み着き、また渤海国からの使節もしばしば来着した地。美麻奈比古神社・古麻志比古神社など朝鮮系の名の古社（いづれも平安時代の『延喜式』神名帳所載の、いはば宮廷公認の神社）が多く、熊来地方鎮座の久麻加夫津阿良加志比古神社のお熊甲祭は朝鮮系の祭礼として近年注目されてゐる。祭神も渡来人の始祖だ。熊登島には蝦夷穴古墳と称される特別な形の古墳があつて、考古学者はこれを高句麗系の墳墓と断定してゐる。その渡来文化濃厚な土地の民謡だ。

一首目は、舶来品の貴重な新羅斧をヤラ（泥海？）に落してベソをかいてゐる労務者からかつた歌だ。「泣くな、泣くな、浮いて出てくるか、見てみようじゃないか、ワッショイ」といったところだ。

熊登はまた杜氏（酒造り）で知られた地。一首目は酒造り屋で主人に叱られてゐる労務者に同情した歌だ。「まぬらる」は怒鳴られてゐるの意。「怒鳴られてゐる奴よ、可哀さうに。何とかこちらへ連れて来てやりたいものだ。可哀さうに怒鳴りとばされてゐる奴よ、ワッショイ」といったところだ。二首とも民謡の土の香を持つてゐる。

鷺宮巢の祝ひ歌

越中国歌四首中一首は

波谿しよたにの二上山ふたがみに鷺わしぞ子産こむといふ、指羽さしほにも君が御為に鷺わしぞ子生こむといふ（16、三八八二）

「二上山（もちろん大和の二上山ではなく、越中の二上山）」に鷺が宮巢し子を産んでゐる。指羽さしほ（貴人にさしかける日除けの傘の如きもの）にでもなつて、君のお役に立たうとして鷺が子を生んでゐるといふことだ、めでたい、めでたい」といったところだ。後世の「めでためでの若松様よ枝も栄える葉も茂る」のやうに、めでたい酒の宴などで歌はれた謠ひ物であらう。形は典型的な旋頭歌だ。

大伴家持は一首だけ旋頭歌を残した。天平二十年（七四八）春、七尾湾を横断して熊来村くまきへ向ふ船上、能登島を望見して、

とぶさたて船木ふねぎ伐るといふ能登の嶋山、今日見れば木立繁しも幾代いくよ神かみびそ

（17、四〇二六）

と歌つた。「とぶさ立て」といふ伐木の時の民俗儀礼を詠み入れて、船舶建造用の木を伐

るといふ能登の島山が深々と茂って神さびてゐる光景を詠じたのだ。これも、旋頭歌体の民謡が歌はれてゐる能登の風俗に刺激され、同化されて、興味湧然としてこの歌形を試みたのであらう。内容的には「とぶさ立て船木伐るといふ能登の山木立茂しも幾世神びそ」と短歌形に煮つめても差し支へない境地だ。

仏足石体歌と伊

夜彦の神事歌謡

う。その歌は

仏足石体歌といふのは、五七五七七七、即ち短歌の五七五七七七に更に七音の一句を加へた歌だ。奈良薬師寺境内の仏足石の傍に、仏足石を讀へた歌二十首が刻まれた碑が立ってゐる。歌碑としては日本最古であら

御足跡作る石のひびきは天に到り地さへゆすれ父母が為に諸人の為

(原文はすべて一字一音式漢字で記載)

に始まり、すべて五七五七七七の形であるところから、この歌体の歌を仏足石体歌と呼んでゐる。これは、短歌を謡ひ物として歌ふ際、最後の一句を、多少辞句を変へて繰り返したところから発生した歌体だ。

越中国歌四首中の一首、

伊夜彦神のふもとに今日らもか鹿の伏すらむ皮服著て角附きながら（16、三八八四）

は集中唯一の仏足石体歌だ。伊夜彦（現在、新潟県弥彦山鎮座弥彦神社）の神山に神鹿が伏すさまを歌ったもの。神事芸能の鹿踊りを歌ったものかともいはれる。この歌の前の一首（三八八三）は

伊夜彦おのれ神さび青雲のたなびく日すら霖そほふる 一云、あなにかむさび

「一云」と注の形であるが、これも「伊夜彦おのれ神さび青雲のたなびく日すらこさめそほふるあなに神さび」と仏足石体歌であったものが、誤って、末句を別伝の如く記載したものかともいはれる。弥彦の神山の神さびて、晴天の日でも樹間に小雨そほ降る神秘を詠嘆したものだ。

かつては伊夜彦（弥彦山、新潟県の中央部）のあたりまで越中国であった。大宝二年（七〇二）越中国四郡を割きて越後国に属させたと『続日本紀』に記録されてゐるから、そ

れ以後、越後になったわけだ。だから、伊夜彦の歌を越中国歌として採録したのは、大宝二年以前の極めて古いことだ。『萬葉集』編纂の頃はとくに越後になってゐたはずだが、古い採録がそのまま訂正されずに再収録されたのであらう。

もっとも大宝二年から二十四年も後の神龜三年（七二六）の「山背国愛宕郡雲下里計帳」に「越中国蒲原郡」と記されてゐる例がある。（蒲原郡は現在の新潟県の中央部）。行政区画変更後も、古くから固定した觀念が訂正されずに通用してゐる例だ。この伊夜彦神事歌謡も、行政区画の変更に関はりなく、越中国歌として伝承され、採録されたのもあらうか。

大伴家持は越中守であつたから、このへんの地理的歴史的事情には詳しかつたはずで、『萬葉集』の編成について種々論議の生ずるところだ。（この部分は家持編成の稿本萬葉集に別人が追録したものではなからうか、などと）。

ついでにいふならば、能登四郡は、大伴家持越中守在任当時は越中国に属能登鯖の木簡

と家持

してゐた。だから家持は天平二十年（七四八）能登半島を巡視し、各所で歌を詠み、半島突端の珠洲岬から歸路は舟で富山湾へ向ひ、

珠洲^{すず}の海に朝びらきして漕ぎくれば長浜の浦に月照りにけり（17、四〇二九）

と爽やかな名吟を残した。

平城宮跡から出土した木簡に「越中国羽咋郡中男作物鯖壹百隻」「天平十八年」と記載したものがあつた。羽咋郡は能登半島西側の地で、そこでの漁獲物鯖一百尾を越中国の調として都へ送つた時の荷札だ。能登鯖は江戸時代にも同地の名産であつた。それが奈良時代すでにこのやうな物証を残してゐる。しかも天平十八年といふ年は大伴家持が越中守となつて赴任した年だ。おそらく家持が越中守として最初に担当した徴税事務の一端であらうと古代史家米澤康氏は興深く考証された。年度の大任を果した後、家持が、部下を集め、干鯖を肴にして慰勞の酒宴を開いたのではないかと想像すると、まさに興無尽である。

能登国歌として『萬葉集』に採録されたいま一首は長歌体のもの、
 しただみの童謡

かしまねの 机の嶋の 小螺を い拾ひ持ち来て 石以ち つつきやぶり
 早川に 洗ひ濯ぎ 辛塩に ここともみ 高杯に盛り 机に立てて

母に奉りつや めづ児の刀自 父に献りつや みめ児の刀自（16、三八八〇）

シタダミは『古事記』にも「神風の伊勢の海の大石にい這ひもとろふしただみのいはひもとほり撃ちてしやまむ」と歌ひこまれた海辺の小貝。「机島のシタダミを拾つて来て、石でつつき破り、早川で洗ひすぎ、辛塩でココと音を立てて揉み、高杯に盛り机に載せて、母さんにさし上げたか、かわいいお嫁さん、父さんにさし上げたか、かわいいお嫁さん」といったところであらう。実に可愛い童謡的民謡だ。七尾湾の小さな島、机島周辺には今もシタダミがいっぱい居て、住民の食用にもなつてゐる。名も今なほ古語のままシタダミと呼んでゐる。こんな楽しい歌も『萬葉集』にはあるのだ。

最後に、能登の海の漁火を詠み入れた作者未詳の一首
能登の海の漁火

能登の海に釣する海人のいざり火の光にいませ月待ちがてり（12、三一六九）

「漁火の光を頼りにおいでなさい、月を待ちがてら」と深夜、女が帰りゆく男を送るやさしい言葉だ。土屋文明氏はこれも能登の民謡かとされてゐる。（「いませ」は原文「伊往」。

鶴久・森山隆訓のイマセを採ったが、イユケ・イユク等の別訓も行はれてゐる。（漁火、現代ではイサリ火と清んで訓むが、古代ではイザリ火と濁って訓む。先日テレビを見てゐたら、対馬では今もイザリ火と古代のままの発音で興味深く聞いたことがあった。この他にも萬葉時代と後代とで清濁相違する語が少くない）。

繁道森径（しげぢ もりみち）
越中国歌の残る一首は「大野路は繁道森径しげくとも君し通はば径は広けむ」（16、三八八一）。「大野路は樹叢繁茂して通りにくい道だが、どんなに繁くと

も、あなたがお通りになれば、おのづと道は広くなるでせう」と、女が男に來訪を求めた歌だ。繁道森径といふ語は味はひ深い。これは整然とした短歌形式だ。

越中・能登両国歌七首で、長歌・短歌・旋頭歌・仏足石体歌の各歌体を網羅してゐる点も興味深い。しかし、越中国歌が祝ひ歌とか神事歌謡とか整った歌であるのに対して、能登国歌は囃し詞をまじへ、内容も労務者を取りあげたり、童謡的であつたりして、自由に揺れてゐる感じた。

四 野の花 東歌あづまうた（東国民謡）

『萬葉集』の中で最も野性を帯びてゐるのは東歌だ。卷第十四は全卷「東歌」。東国の農民の訛、方言まるだしの、なまの歌声だ。まるで野の花のやうに可憐で、しかもたくましい。東歌を読むと、私は埴輪を思ひ浮べる。人物・動物などの姿を、素朴に、愛らしく造形した埴輪、それを多く出土したのは近畿と関東。とりわけ関東には、鷹を据ゑた鷹匠の姿、楽人の琴ひく姿、鍬持つ農夫、胸を打ち叩いて笑ふ男、壺をささげる女性、水汲む女性、踊る男女、赤子を背負った農婦、巫女、武人、盛装した女、馬、猿、水鳥、鶉など千差万別、実に豊かで、愛くるしく、ほほゑましい。その素朴で健康な、民謡的詩情が東歌にあふれてゐる。宮廷を中心とし皇族・貴族・官人を詠み手とした萬葉歌が、白鳳・天平の仏像の完成した美を思はせるのに対して、東歌はまさに埴輪の、時には古拙で、あどけない世界だ。

（ただし、中央の歌が東国へ伝承されて、地方に謡はれ、根づいたらしいものも、いくらかまじ

つてゐる）。

『萬葉集』卷第十四の東歌二百三十首。この他『古今和歌集』卷第二十にも「東歌」の標目を掲げ、十三首採録されてゐる。理知的な詠風の「古今」にこんな歌もあるのかと思ふほど素朴な歌だ。「萬葉東歌」の伝統が平安時代にも息づいてゐたのだ。

萬葉の東歌を数首あげておく。

筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき児ろが布乾さるかも（三三五一）

「筑波山が白く見えるのは雪が降つてゐるのだらうか、いや、さうではなくて、かわいいあの娘が布を乾してゐるのだらうか」の意。「降れる」が「降らる」、「乾せる」が「乾さる」、「ぬの」が「にの」と東訛りのまま歌はれてゐる。可憐な一首だ。江戸時代の俳書に、山の雪を干し物に見立てた句があるのでついでに挙げておく。

しら山やきれいな雪の土用干 是通（『桃盗人』宝永五年一七〇八刊）

立山の模様や雪の土用干 魯九（『雪山河』享保十二年一七三七刊）

さぬらくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢の如（三三五八）

「一緒に寝たのは玉の緒ほどの短い間だ。恋ひに恋ふる思ひは富士の高嶺の鳴沢のやうに激しいことだ」の意。激情ふつふつと煮えたぎる一首だ。

多摩川にさらす手作りさらさら（三三七三）

「多摩川でさらさらと晒す手織りの布」といふ東国庶民生活風景から歌ひはじめ、そのサラサラといふ音にかけて、「さらさら、さらさら、どうしてこの娘がこんなにもいとしいのだらう」と感極まった一首。

信濃道（三三九九）

「信濃路は今切り開いたばかりの新しい道です。いたる処に鋭い刈り株が残ってゐます。その刈り株を足で踏みつけられることでせう。沓を履いていらっしやい、わが夫よ」の意。刈り株を踏みつけて怪我した時の痛さを思ひやるだけで、わが身が疼くやうだ。美しい、いたはりの歌だ。

伊香保ろの八尺やさかの井手いであに立つ虹にじの頭あたまはろまでもさ寝ねをさ寝ねてば（三四一四）

「伊香保の川水を塞き止めた高い堰に立つ虹のやうに、はっきり人目につくほど共寝したならば、ああ、さうしたら、どんなにかうれいことだらう」の意。虹を歌ひ込んだのは『萬葉集』中この一首だけだ。ニジをノジ、アラハルをアラハロと東訛あづまなまりで歌っている。「さ寝ねをさ寝ねてば」と切々たる願望が奔騰し、情熱の狭霧さぎりに七色の虹をきらめかせてゐる。『古事記』軽太子物語の「うるはしとさ寝ねしさ寝ねてば刈薦かりこもの乱れば乱れさ寝ねしさ寝ねてば」を思ひ出させる。「さ寝ねしさ寝ねてば」「さ寝ねをさ寝ねてば」と言葉にあまる思ひを、ぶちまけるやうに激しく言ひ切ったのだ。

おもしろき野をばな焼きそ古草こくさに新草あたらしくさまじり生おひば生おふるがに（三四五二）

「おもしろい冬枯の野を焼くな。古草こくさに新草あたらしくさがまじって生えてくるやうに」の意。古草こくさにまじって若草わかしらが萌えでてくる方が趣があるのだ。『古今和歌集』に「春日野は今日はな焼きそ若草わかしらの妻もこもれり我もこもれり」とあるから、この萬葉歌も単なる風景愛好歌で

はないのであらう。

恋しけば来ませ我が背子垣つ柳末摘み枯らし我立ち待たむ（三四五五）

「恋しいのならおいでなさい。垣根の柳の枝のさきを摘みながら、柳も枯れてしまふほど摘みつづけながら、私はずっと立ってお待ちいたしませう」と男に対して歌った女の歌。待つのは辛いものだ。所在なさに柳の葉先を一枚一枚ちぎって待つ女の仕草が目に見えるやうな可憐な一首だ。

稲つけばかかる吾が手を今宵もか殿の若子が取りて嘆かむ（三四五九）

「稲を春くと、赤切れ、ひび割れしてくるこの私の手を握りしめて、今夜も屋敷の若様が、おう可哀さうにと嘆いてくださることとせうか」の意。農作業で激しい労働をしている農家の娘が、豪族の若殿に愛されてゐるといふのがこの歌の背景だ。うれしさと羞ぢらひと期待とが歌ひこめられてゐる。可憐で、しかも調子の強い歌だ。（ただし、近年、この歌を少女の抒情と見るよりも、稲春きの作業の唄と解釈する学者が多い）。

春べ咲く藤の末葉うらのうら安やすにさ寝ねる夜よぞなき児ころをし思へば（三五〇四）

「春咲く藤の枝先の初々しい葉」をまづ歌ひ、「うら葉」から「うら安く（心安らかに）寝た夜は一晚もないことだ。あの娘に悶々と恋ひ焦がれてゐるので」と展転反側の嘆きを美しい調べで歌った。この歌からふと連想するのは『梨のかた枝え』の一首、三条実美さねとみ、九州流謠中「人のもとにて」と題して「花ぞの藤のうら葉のうらとけて語らふまどゐたのしくもあるか」。窮迫の情勢下、心休む暇もなかった実美も、心知る同志と語りあひ、たまゆらの安らぎにくつろいだのであらう。「藤のうら葉のうら」まで同じ序詞を使ひながら、東歌は沈痛切実、実美は和気霽々あいきいの境地だ。

五 大群作 防人の歌さきもり

東国農民が兵士として徴集されるといふ非常事態に遭遇し、悲痛な思ひを直叙したのが防人歌である。防人歌は、いはば非常時における東歌である。

卷第十四「東歌」歌卷の末尾にも「大君のみこと畏みかなし妹が手枕離れ夜立ち来ぬかも」(三四八〇)など数首の防人歌が載せられてゐるが、卷第二十には百首近い防人歌が大歌群を形造つてゐる。これは、天平勝宝七年(七五五)二月、防人交替期に當つて、召集された防人たちの歌つた歌を、当時兵部少輔(軍事担当官)であつた大伴家持が集めたものだ。正確にいへば、八十四首、これに昔年の防人歌九首を添へ、計九十三首。田舎まるだしの方言をまじへ、訥々として真情を訴へ、東国農民の魂の声をひびかせてゐる。

採集した家持は「拙劣なる歌は取り載せず」といつて、約半数の八十二首を削り捨ててゐるが、採録された歌も、決して洗練された巧みな歌ではない。しかし、洗練された専門歌人の作品以上に、われらの胸に迫る力を備へてゐるのである。

東男子は「額には矢は立つとも、背には矢は立てじ」(神護景雲三年―七六九、稱徳天皇宣命)と言ひ切るほどの勇敢さを持つと称揚されてゐた。召し出された防人たちは、陸路難波まで行き、そこから船に乗せられて北九州へ行き、三年の間、筑紫・杵岐・対馬警備の任に着いたのであつた。

水鳥の飛び立つやうなあわただしい出発。頭をかき撫でて別れを惜しむ父母、垣根の側

で泣きくづれる妻。裾にとりついて泣く子。その恩愛の絆を断ち切り、家族を恋ひ、留守家族の生活を案じ、後髪引かれる思ひで出でゆく心が切々と歌はれてゐる。

ふるさとの山川（筑波山や駿河の嶺や久慈河）を恋しがった歌もある。病氣してゐる自分を防人に指名したといつて役人を恨んだ歌もある。父母が花であつてほしい、捧げて行きたいとも願ひ、妻を絵に描いて持つてゆく時間が欲しかったと歎き、松並木を見て、いつまでも見送つてくれた家族の姿を思ひ出してゐる。

私事を顧みず、大君の御楯となつて征で立つと決然たる覚悟を歌ひ上げた一首もある。防人の父が、大刀になつてお前を守つてやりたいと歌つた歌も、防人の妻が夫に針を持たせ、旅衣の紐が切れたら、私の手だと思つてこの針で付けて下さいと言つた可憐な作もある。これら九十余首が一つの群作となつて、リズムを打つて迫ってくる。

家持は、防人たちの境涯に深く同情し、防人になり代つて思ひを述べた歌を、長歌三首短歌十一首も作り、防人歌群作中に挿入してゐる。専門歌人家持の力作も、防人歌に並べると、色あせて見えるほど、防人の歌には真情切々と迫るものがある。

家持の削り捨てた拙劣歌八十二首は、文字通り拙劣歌であつて、思想的検閲でないこと

は、役人を恨んだ歌があることによつてもわかるであらう。しかし、拙劣歌、歌の体を成さぬ、ただたどしい作に、どんな思ひがこめられてゐたか、削除されたのが残念だ。

防人歌の実例を少しく示さう。

父母が頭かしらかき撫なで幸さくあれて言いひし言ことば葉はぜ忘れかねつる（四三四六）

「父母が頭かき撫で」出征の門出の情景が目に見えるやうに活写されて居る。「さきくあれと」が訛つて「さくあれて」「ことば」が「けとば」、「ぞ」が「ぜ」となつて居る。その訛りが作者の素朴な感情をなまなましく伝へて居る。

忘らむと野行き山行き我来れどわが父母は忘れせぬかも（四三四四）

父母をひたすら思ひながら、野を越え山を越えて長い旅をつづけてゆく防人の心が強く迫ってくる。「野行き山行きわれ来れど」とたたみかけ、「ワスラムト…ワレクレド…ワガ…ワスレセヌ」と同じワの音を反覆して居るところに、忘れようとしても忘れられぬ思が綿々と尾を引いて居る。これは技巧をこらして同音をわざと使用して居るのではない。やむ

にやまれぬ気持が、おのづから同音を反覆してさそひ出すのである。

父母も花にもがもや草枕旅は行くともささごて行かむ（四三二五）

「ささごて」は「ささげて」の訛。「父母は花であってくれたらよいのに、さうしたら旅路にも捧げ持って行くのだが」。何といふ可憐な歌であらう。萬葉には男女の愛情を歌った作品は無数にあるが親子の情を歌ったものは意外にすくない。ところが防人歌には親子の情愛が集中的に歌はれて居る。それが防人歌の大きな特色となつて居る。純朴で健康な東国農民の生活がゆかしくしのばれるのである。

水鳥の発ちのいそぎに父母に物言ず来にて今ぞくやしき（四三三七）

水鳥が飛び立つやうな、あわただしい出発で、父母にろくに物も言はずに出て来たことを後悔してゐる。出発のあわただしさを水鳥にたとへたところに、農民の生活環境が写し出されて居る。水鳥の羽音と防人出発のざわめきとが相重なつて、耳もとにきこえてくるやうである。

唐衣裾にとりつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして（四四〇一）

着物にとりすがって泣く子を置いて来たのだ。しかも母のない子を。「置きてぞ来ぬや」といふ異常に強い語が悲痛断腸の思ひを伝えて居る。（昭和十五年九月大陸で戦死された北白川宮永久王殿下はこの一首を愛誦されて居たといふ。殿下も幼少の御子―四歳の道久王―を残して出征されたのであった。）

葦垣の隅所に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ（四三五七）

道の辺のうまらの末に這ほ豆のからまる君を離れか行かむ（四三五二）

袖びっしょりに泣く妻。ウバラの枝先にまつはりつく豆の蔓のやうに、からまりついて歎く妻。ひしと抱きあって別れを惜しむ農民夫婦の姿が、田園の風景と相重なっていきづいて居る。

松の木の並みたる見れば家人のわれを見送ると立たりしもころ（四三七五）

「もころ」は「ごとし」と同じ意味の古語。松並木を見ると、自分を見送ってくれた家族たちの姿さながらで、なつかしいといふのである。

家ろには葦火焚けども住み好けを筑紫に到りて恋しけもはも（四四一九）

葦火を焚くやうな貧しくむさくるしい家だが、我が家にまさるものはない。遠い筑紫へいったら、その葦火焚くわが家がどんなに恋しいことだらう、といふ一首である。さうかと思ふと、

我妹子と二人わが見しうち寄する駿河の嶺らは恋しくめあるか（四三四五）

と、妻と二人ながめた駿河嶺（富士山）を誂だらけの一首に歌って恋しがって居る。あるいはまた、

筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹そ昼もかなしけ（四三六九）

と、ふるさと筑波山のユリの花のイメージに結びつけて妻のいとしさを、いささか艶めか

しく歌って居る。この作者が同時に「霰あられふり鹿島の神を祈りつつ皇御軍すめらみくさにわれは来にしを」(四三七〇)と決然たる一首もとどめて居ることは重大である。

大君のみことかしこみ磯いそに触り海原うらの渡る父母を置きて(四三二八)

今日よりは顧かへりみなくて大君のしこの御楯みたせと出でたつわれは(四三七三)

天地あめつちの神を祈りて幸矢さつ貫ぬき筑紫つくしの島をさして行くわれは(四三七四)

父母を置いて海原を渡って行く悲しみにたへて「大君のみこと畏み」国防の任につく決然たる気持を歌って居る。あるいは、ひとすぢに大君の御楯として出征する覚悟を歌ひ、天地の神々を祈って出征する決意を歌って居る。これらの歌のひきしまったしらべに、作者の精神の沈痛な緊張を思ふべきである。

防人の歌は一つ一つ切り離して味はふべきではない。百首をひとつづきの連作のごとく読み味はふべきである。父母を恋ひ、妻子を恋ひ、ふるさとの山や花を恋ひ、家族の生計を気づかひ、国防の使命感を全身的に歌ひあげて居る。一首一首作者はおほむねちがって居るが、それらを次々に読んでゆくと、防人たちの心は同一鹹味かたみの大海にとけ、大波の

うねりとなって迫ってくるのである。

戦時中、「大君のしこの御楯」等の数首だけを強調し「滅私奉公」の題目としたのも一面的であったが、戦後、その反動で、防人歌のセンチメンタリズムを強調し、あるいは厭戦的、反戦的などと説くのも、勝手な曲解である。

齊明天皇七年（六六一）百濟救援のため渡海出征して、白村江敗戦、日本軍撤退後、敵地にとり残された四名の日本人があった。天智天皇三年（六六四）、四人は唐軍の日本進攻計画を探知し、それを日本に急報しようとしたが、旅費がない。すると四人の一人大伴部博麻おほともべのほかが、進んで「願はくば我が身を売って衣糧にあてよ」といひ、一身を犠牲にして三人を帰国させ、祖国に急を報じた。博麻ほかまは三十年間も異国にさすらひ、持統天皇四年（六九〇）やっと帰国。博麻は天皇からその「尊朝愛国」を深く嘉賞された。（これが愛国といふ語の日本最初の用例である。）この大伴部博麻は筑紫出身の軍丁、すなはち防人であった。天智天皇十年、唐国人使節の船が日本に近づかうとして「今われらの人船多し。たちまちに対馬に到らば、かの防人ら驚き射戦はむ」といって恐れ、誤解を避けるために慎重を期したといふ。平田俊春氏はさきの記事とこの記事（いづれも日本書紀）とに注目して

「防人らの防衛の意識がすこぶる盛んであったこと」を示すものとされ、「このように戦わずして唐の侵攻を防ぎ、国家の独立を保つことができたのは、一に大伴部博麻おほともべのほかまが一身を犠牲にして唐の計画をわが国に報告したことに基く」ことを考察され、「唐使が対馬の防人の攻撃を恐れたことも、博麻のような愛国の防人が多くいたことを示すものであり、それは萬葉集に見える防人の歌によっても窺われる」(『日本の建国と二月十一日』昭和四十二年刊)と説かれたところに、私は深い共感をおぼえるのである。

防人歌を感傷的・厭戦的などと一方的に説くのは、古代日本人に対する重大な侮辱である。「私わたくしに背そむきて公おほやけに向ふ」(聖徳太子・憲法十七条)、父母を恋ひ妻子を恋ひ故里を恋ひ、その悲しみのゆらぐがままに祖国防護の任におもむいた防人の悲痛な心持は、百首の大群作となって萬葉集の巻末を飾り、われらの前に力強く生きて渦巻いて居るのである。

六 「醜しこの御楯みたて」論議

—— さ蠅はなす曲解曲論 ——

防人歌、下野国しもつけの火長、今奉部いままつりべのよせ与曾布ふの一首、

今日よりは顧みかへりなくて大君のしこの御楯みたてと出で立つ我は（四三七三）

は、戦時中、戦意昂揚に利用されたため、戦後はその反動で、その決然たる精神を曲解する解釈が続出した。『萬葉集』における「しこ」の用例を調べて、「しこ」とは厭ふべき、憎むべきもの、醜悪なるものを言ふ語だから、この歌は、大君の御楯となってゆくのを厭ひ、「いやらしい御楯となってゆくのだ」と歎いた歌だ、「顧みなくて」も反語的用法だといふのである。「しこ」といふ語は多義であるが、ここでは自分の身分を卑下した語だ。「いやらしい楯になる」と歎くなど、この一首の凛たる調べを無視した暴論である。

これとは違った角度から池田弥三郎氏は「今日からは、このおれには、かえりみ役の者はなくなくて、そうして、たった一人で、家族の何の庇護もなしに、大君の醜の御楯として、任務につくことだ、おれは」と口語訳（森幸一氏の引用から孫引き）されたといふ。「顧みなくて」を「かえりみ役の者もない」「家族の庇護もない」の意にとつて、心細い歌と解釈したのだ。池田氏ほどの学者がどうしてこんな曲解をされたのか、残念だ。

断ちがたい恩愛の絆きづな、それがあつからこそ、これを踏み越え、決然として征で立つ、その気魄が一首の調べに溢れてくる。「顧み」といふ語には、すくなくとも上代では、後見庇護の意はないであらう。「統日本紀」宣命にも、「天皇が朝廷守り仕へ奉ること顧みなき人等があれば」として大伴・佐伯両氏を称讃された。大伴氏の言立ても「顧みはせじ」である。家持も「防人の悲別の心を追ひて痛み作れる歌」(四三三一)の中で「東男は出で向かひ顧みせずて勇みたる猛き軍卒」と詠んでゐる。「顧みず」と「顧みなくて」とは同義なのだ。

なほ、この五首の前に据ゑられたのが、防人歌中、ただ一首の長歌で、

足柄あしがらの み坂たまはり 顧みず あれは越えゆく 荒し男も 立しや憚る
不破ふたの関 越えてわは行く 馬の爪 筑紫の埜ささきに 留り居て あれは斎はむ
諸は 幸くと申す 帰り来までに (四三七二)

と歌はれてゐる。(作者は常陸国、倭文部可良麻呂)。ここでも「顧みず我は越えゆく」と

歌はれてゐる。

この長歌は「足柄のみ坂を越えさせていただき、顧みず我は越えゆく。荒くれ男も立ちはばかるといふ不破の関を越えて我はゆく。筑紫の埜に留まって居て、我は慎み祈らう。故郷の人たちが遠者で居るやう祈らう。帰ってくるまでは」と、言葉をたたみかけて応召の決意を高唱し、謙虚にふるさと人の無事を祈願してゐる。

防人歌の配列の偶然かもしれぬが、この長歌の次に「今日よりは顧みなくて」の短歌が続き、あたかも一組の長歌短歌の感じた。「顧みず」「顧みなくて」その一貫した心情を観取すべきである。更に、「今日よりは」の次の歌は、火長、おはたべのあらみ大田部荒耳の作、

天地の神を祈りてさつ矢貫やぬきき筑紫の島をさして行く我は（四三七四）

で、「我は」止めの二首がつづき、連作の如きリズムを生じ、防人大群作の起伏の中で、この三首が最も緊張高まる個所だ。

なほ、防人歌に「大君のみこと畏かしこみ」で始まる歌が五首、巻第十四東歌中の作を加へると六首。「畏きやみことかかふり」「大君のみことにされば」「障さへなへぬみことにあれば」

各一首。戦時中、「大君のお召しをいただき、勇躍して」とか「喜び勇んで」の意の如く取る向きがあつたが、「かしこみ」の原義は「恐ろしい」の意だ。「恐れ慎しみ、私情を押しさへて」の悲痛な思ひをこの語からきくべきである。「滅私」ではなくて、「私わたくしに背まむきて公おほやけに向ふ」苦悩の声をこの語から聴き取るべきである。

七 萬葉茶漬飯

—— 萬葉の挨拶・滑稽・即興・軽み ——

飛鳥あすかに大雪が降った時、天武天皇は、大原の里に居る藤原夫人ふじなんのもとへ、御

藤原夫人

歌を贈られた。

吾が里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後のち（2、一〇三）

これに対して藤原夫人は

吾が岡のおかみに言ひて降らしめし雪の摧けしそこに散りけむ(2、一〇四)

とお答へした。「わしの里には大雪が見事に降ったぞ。お前の居る大原のやうな古びたるなかに降るのはまだ後のことだらう」との、からかひの御歌に対して、「とんでもございませぬ。私の岡のオカミ(龍神)に命じて雪を降らせたので、こちらは真っ白でございませぬ。私の岡に降った雪の僅かばかりのカケラがそちらにも散ったのでございませう」と、あざやかにお返ししたわけだ。お二人の睦ましい間柄が偲ばれてほほゑましい。『萬葉集』といふと、まじめ一筋と思はれがちだが、時にはこんな明るい冗談もとりかはされ、萬葉の世界を豊かにしてゐるのだ。

「大雪」「大原」とオホの韻を重ね、「ふれり」「ふりにし」「ふらまく」とフの音を畳みかけ、リズムカルで明るい。(天武天皇には「よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見」(1、二七)とヨの音を九回も反覆した御製歌もある)。オカミは『日本書紀』には籠と書かれ、雨雪を司る龍神のこと。字面からは恐ろしげな怪神だが、ここではユーモラスに登場させられてゐる。興福寺の天燈鬼・龍燈鬼の風貌がふと連想さ

れる。

持統天皇と志斐姫

卷第三には、持統天皇が志斐姫に賜はった御歌、

いなといへど強ふる志斐のが強ひ語りこのごろ聞かずて朕恋ひにけり（二三六）

これに対して志斐姫の奏和した歌、

いなといへど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強ひ語りと言ふ（二三七）

「もうたくさんといつても『まあ、お聞き下さいまし』と強ひて語る志斐の姫の押しつけ話のほら話も、このごろ聞かないので、ちょっとさびしい。聞きたくなくなった」との御製に対して、「私が『いやだ』といつても、『語れ語れ』とおっしゃるからこそお話申上げて居るのではございませんか。それを、無理強ひの話とおっしゃるのは、あんまりひどいではございませんか」とやり返したのだ。ここにも君臣間の打ちとけた間柄がそのままユーモラスに出てゐてたのしい。

『新撰姓氏録』によると、大彦命の子孫で名代といふ者が、天武天皇に楊の花を献上し

た。「何の花ぞ」と問はれたのに対して「辛夷の花なり」と奏した。群臣わいわい騒ぎ、「これは楊の花なり」と訂正を求めたけれど、名代は頑として「辛夷の花なり」と言ひ張ったので、その強ひ語り（ほら吹きのおしつけ話）に対して阿倍ノ志斐ノ連と名を賜はった、と。志斐しひのおうなといふのは、この志斐連一族の女であらう。後世、武将にお伽衆がついてゐて、いろいろ話相手を勤めたが、そのやうに天皇の側近に侍ってお話相手をする職分だったのであらう。こんな歌の応酬があるといふのは萬葉のたのしい一面だ。

大伴家持と紀女郎

大伴家持をめぐっても、これに似た唱和がいくつも記録されてゐる。紀女郎きのいらつめがネムの花と茅花つばなを家持に贈った時の歌、

戯奴わげがため吾が手もすまに春の野に抜ける茅花つばなぞ食して肥えませ（8、一四六〇）

昼は咲き夜は恋ひ寝る合あ飲木ねの花君のみ見めやわけさへに見よ（一四六一）

これに対して家持の贈和歌、

吾が君に戯奴わげは恋ふらし給たまばりたる茅花つばなを喫はめどいや瘦せに瘦す（一四六二）

吾妹子が形見の合歓木は花のみに咲きてけだしく実にならじかも（一四六三）

紀女郎は名門大伴家の御曹子家持に向かつて、わざわざおどけて「戯奴」と蔑称を使用し、「いやしい奴のため、私の手も休めずに春の野に抜き取った茅花ですぞ。これを召し上がってお肥えなせませ」「昼は咲き、夜は恋ひながら眠るといふこのネブの花を、主君たる私だけが見てゐても無意味だ。賤しい奴もこれを見なさい」とからかった。ふざけて自分を「君」、相手を「奴」とおとしめたのだ。親密だからこそその悪ふざけだ。

家持すかさずこれに答へて曰く、「主君たるあなた様に、この奴めは恋をして居るやうでございます。いただいた茅花を食べても、いよいよ痩せてゆくばかりでございます」と相手のからかひに乗って、自分を「奴」、相手を「君」として軽妙に答へ、二首目は調子を変へて、「君」でなく「吾妹子」、恋人として扱ひ、「あなたの贈って下さったネブは花が咲くだけで、あるいは実にはならないのではないでせうか」、言外に「あなたの私に対する恋も、実らないかもしれないですね」と、つっぱなした。親しい男女の愉快な応酬だ。

茅花つばなはチガヤの花で、ススキを小さくしたやうな白い花を咲かせる。私なども子供の頃はよくこれを噛んだものだ。淡い甘味があった。あんなものを食べても肥えることはないであらうし、この頃の子供は見向きもしないであらう。

ネブは後世ネムといひ、芭蕉の「雨に西施がねむの花」の名句（『奥の細道』）で知られてゐる。山野いたる所に自生し、夏日美しく花を咲かせ、都市の街路樹にも植ゑられたりしてゐるから、知ってゐる人も多いであらう。

家持とウナギ
卷第十六には、家持が吉田石麻呂よしのいはまろに贈った歌がある。題して「瘦人せうじんを嗤笑ししやうする歌」といふ。

石麻呂いはまにわれ物申す夏瘦なつせうせによしといふ物ぞむなぎ取りめせ（三八五三）

瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはたむなぎを取ると河に流るな（三八五四）

瘦せた石麻呂をからかつて、「夏瘦せによいと言ひますぞ。ムナギ（ウナギ）を取って召しあがれ」「しかし、どんなに瘦せてゐても、生きてゐるに越したことはない。無理してムナギを捕へようとして川に流れては元も子もなくなりますぞ」と。

夏土用になると、鰻の蒲焼の由来でよくこの歌が引き合ひに出される。ムナギは胸黄が語源かといふ。ムナギが後世ウナギになったのだ。石麻呂の返歌がないところを見ると、気を悪くして返歌しなかったのか。それとも歌が拙劣で『萬葉集』に採録されなかったのか。

卷第十六には、このやうな滑稽な贈答歌、あるいは宴席での即興歌など異色の歌が並んでゐる。宴遊即興歌の一例を引く。

即興歌群

夜、集まって宴遊してゐたら、川の橋のあたりから狐の声が聞えたので、皆が、即興歌の得意な長忌寸奥麻呂ながのいみきさまくろに向かつて、ここに並んでゐる食器と狐声と川の橋とを詠みこんで一首作れと言つた。即座に奥麻呂は、

さし鍋なべに湯ゆわかせ子こどもも櫛津いしづのひ檜橋ひのよりきつ来あむさむ狐きつにあ浴あむさむ（三八二四）

「お前たち、さし鍋なべに湯ゆをわかせ。櫛津いしづのひ檜橋ひのからやつてくる狐きつにその湯ゆをぶつかけてやらう」と歌ひ、酒興しゆこうをもりあげた。「来きつむ狐」の「来きつむ」には狐きつの鳴なき声のコンを掛かけてあるのだらう。うまいものだ。

山本健吉氏は、俳句の「挨拶」「滑稽」「即興」の機能が持つ意義を強調され、また俳句の「軽み」を説かれたが、これら萬葉の歌も、まさに挨拶の歌であり、即興・滑稽・軽みの歌だ。

正岡子規は明治三十一年「萬葉集卷十六」と題する歌論を『日本』に載せ、「此一巻は萬葉の光彩を添ふると共に和歌界の光彩を添ふる者」「真面目まじめの趣を解して滑稽の趣を解せざる者は共に文学を語るに足らず」「複雑なる趣向、言語の活用、材料の豊富、漢語俗語の使用、いづれも皆今日の歌界の弊害を救ふに必要な条件ならざるはあらず」「歌を作る者は萬葉を見ざるべからず、萬葉を読む者は第十六巻を読むことを忘るべからず」と称揚したのであった。

萬葉調歌人としては子規の先輩格であった福本日南が明治三十一年、フランスから子規へ贈った歌に「暫しばし待て萬葉十六茶漬飯ちづけめし食ひては語り語りては食はん」と詠んでゐる。二人は口角泡を飛ばして萬葉卷十六を論じたことがあったのだらう。フランスから帰国したら、また二人で卷十六を語りあはうと、たのしい約束をして病床の子規を励ましたのだ。

第八章 萬葉集と日本の自然

一 記紀萬葉と桜

国の花としての

さくら

さきに高橋虫麻呂むしまろの桜の歌を取り上げたが、あらためて『萬葉集』の桜について述べたい。『萬葉集』には梅の歌は一一八首、桜の歌は四〇首だ。そんなところから萬葉びとの好みは桜でなくて梅であったとよく言はれるが、梅は渡来植物で物珍しく、大宮人の興を惹ひき、大伴旅人の盛大な梅花宴なども催されて、歌数は多くなった。いはば文人的・大宮人的・サロンのであった。これに対して、在来からの桜は、当然の事ながら、常民感情に深々と根づいてゐた。

若宮年魚麻呂あゆまろが伝誦した作者不詳の長歌「桜花歌」(8、一四二九)は「敷きませる 国のはたてに 開ききにける 桜の花の 丹穂にほひ日はもあなに」と結ばれてゐる。「敷きませる 国」は大君の統治していらっしやる国の意。その「国のはたて」は契沖が「くにのはてにて、あらゆる国のかぎりにさく花をおもひやるなり」と注したやうに、日本列島の国といふ国の果まで、全国に咲き満ちてゐる桜花を言ったのだ。丹穂にほひ日と表現されてゐるが、後

世ニホヒは専ら香氣をいふやうになつたけれども、古くは、主として美しく照り映える色、特にほんのりと赤みを帯びて、ほのぼのと魅力を発散させる色あひをいった。本居宣長の「朝日にはふ山桜花」も薫香でなく、朝日に映発する色あひのみづみづしい美しさをいったものだ。(ただし、『萬葉集』にもすでに薫香をニホヒと表現した例が一、二あって、後世意味の変つてゆく端緒を示してゐるが)。「はも」は助詞「は」「も」の熟合した形で、上の語を指し示して深い感動をこめた上代語。「あなに」は感極まった詠嘆の語で「ああ本当に美しいことよ」といった氣持を強く打ち出してゐる。(後世の手紙文の末尾の「あなかしこ」の「あな」だ)。この一首、日本国土を強く意識しての桜の讚歌だ。こんな歌は桜だからこそ生まれたのだ。現今、春になると、桜前線の北上がしきりにテレビに取り上げられ、茶の間の話題になるが、まさに萬葉びとの「国のはたてに開きにける桜の花の丹穂日」といふ氣持が国民感情として今に生きてゐるのだ。

年魚麻呂伝誦歌に「敷きませる国」とあるが、大伴家持の難波宮讚歌の反歌にも「桜花いま盛りなり難波の海おし照る宮にきこしめすなへ」(20、四三六一)とあって、光り輝く春の海に臨む宮殿にとりあはせて満開の桜が歌はれてゐる。後世、正岡子規は「桜さく御

国しらすと百敷ももしよの千代田ちよだの宮に神ながらいまします」「桜さく浜びの宮に外国とくごの使等しら召して大御言みことたまふ」(明治三三三)と詠み、千代田宮・浜離宮はまにとりあはせて桜を歌った。

神話伝承とさくら

記紀の伝承では、高千穂降臨あまつひこひこほのの天津日高日子番能邇邇にぎのみこと芸命(瓊々杵尊)が笠沙かささの岬で見せめられたのが木花この之佐久夜毘売さくやびめ(木花開耶姫)、即

ち桜の花の姫であった。「咲くや」の「や」は感嘆の助詞。咲く花の美しさの讃称がそのまま姫の名になつてゐる。

ホノニニギは水穂国の稲の穂こぎにぎが賑々しく豊かに実ることを意味する神名。そしてホノニニギノミコトこそ歴代天皇の原型——皇孫命すめみまのみことであった。古来、神社の祭祀に掲げられる幟のぼりには「五穀豊稔」と大書されてゐた。穀物の豊かに実ることが民生安定充足の第一の要件で、その常民の念願がホノニニギの神名に結晶してゐるのだ。

桜の花は古くから稲の豊稔を予兆する神花として尊ばれて来た。それだからこそ稲の穂のニニギノミコトと桜の花のコノハナノサクヤビメの神婚が重要な神話として語られたのだ。桜は神代以来、皇孫命すめみまのみことゆかりの花なのであった。

サクラの語源説はいろいろあるが、代表的なのは、咲く花の美しさを讃へた「咲くや」

即ち神名木花之佐久夜の開耶さくやの転だといふ。またサは田の神を意味する神聖な語で、クラは神座、即ち田の神のよりつく神聖な花だといふ。(田植女をサヲトメといふのは田の神に奉仕する清浄な女の意。だからサヲトメは盛装し赤い襷たすきをかけて田仕事をした。田植終了の祝ひをサノボリ・サナブリといふのも田の神の上りの意。サツキは通常陰曆五月の称とされてゐるが、全国各地で田植仕事をサツキと呼び、田植の農繁期をサツキドキといひ、サの古義を示してゐる)。咲くや説は文学的、田神座説は民俗学的。いづれにしても桜は日本常民の魂の花だ。

なほ、この他『古事記』須佐之男命すさのをのみこと神統譜中に「木花知流比売このはなちるひめ」の神名も登場する。咲くや姫も散る姫も共に大山津見神おほやまつみの女むすめと記されてゐる。山の神の神霊が美しくにほひ出でたのが桜の花なのだ。山の神は春、里に下って田の神となり農耕を守りたまふと広く民間に伝承されてゐるが、その山の神が田の神となった姿が桜の花だといつてもよいであらう。

『書紀』には、雄朝津間稚子宿禰おとあそまわこすくぬすめらみこと天皇(允恭天皇)が「井の傍の桜の華はなを見そなはして」衣通郎そとほしのいらつめ姫に寄せられた御製として

花ぐはし桜の愛でこと愛では早くは愛でず我が愛づる子ら

の一首を記してゐる。姫の美しさと桜花の美しさとを重ね写しにして「めで」「めで」「めで」「めで」と同音をリズムミカルに反覆。これは桜花の美を讃へた最初の歌だ。

『新撰姓氏録』の伝承では、去来穂別天皇（履中天皇）が両枝船に乗り磐余の市磯池で遊宴された時、桜の花が飛来して酒盃に浮かんだので、物部ノ長真胆ノ連を遣して尋ねさせられた。連は掖上の室ノ山でその桜の木を見つけて献上した。天皇欲ばれ、酒を献じた余磯には稚桜部臣、桜を探し出した長真胆連には稚桜部造の姓を賜はったといふ。履中天皇の宮の名も、『古事記』には伊波礼之若桜宮（『書紀』では磐余稚桜宮と表記）と記され、この清く美はしい名が履中記を丹穂はせてゐる。

鴨君足人の香具山歌は「天降りつく 天の香具山 霞立つ 春に至れば 松風に 池浪立ちて 桜花 木のくれ茂に」(3、二五七)「天降りつく 神のかぐ山 打靡く 春さりくれば 桜花 木の暗茂に 松風に 池浪立ちて」(3、二六〇或本歌)とあって、天から降下したといふ聖なる伝承を持つ香具山（天の香具山・神の香具山）が桜の花を取り添へて歌

はれてゐる。

高橋虫麻呂は「丹につつじの 匂におはむ時の さくら花 咲きなむ時に」(6、九七一)と、ツツジとサクラを対たいにして歌ったが、柿本人麻呂歌集の歌にも「青山を ふりさけ見れば つつじ花 にほえをとめ さくら花 さかえをとめ」(13、三三〇九)と、やはりツツジとサクラで美しきをとめを表現してゐる。人麻呂歌集のこの歌の異伝が作者不詳歌として『萬葉集』に並べ載せられてゐるところを見ると、広く当時の人々に愛誦伝唱された歌詞なのであらう。桜はまさに国の花、神の花、君の花、民の花であった。

春雨のしくしく降るに高円たかまどの山の桜はいかにかあるらむ(8、一四四〇)
絶等木たふちぎの山の空上そへのの桜花開かむ春へは君し思しのはむ(9、一七七六)

二 山桜花——大伴家持・池主を中心に——

落花と死の幻想

『萬葉集』の桜の歌四十首といふが、この他に、単に春花と詠んだもので、桜を意識した例も多いはずだ。大伴家持おほとものかもちは天平十八年(七四六)越中

に赴任、翌十九年二月、大病に臥したが、その時、病中しきりに「春花」「春の花」を詠み、春の野山に夢をかけめぐらせてゐる。部下の大伴池主おほとものいけぬしは家持を慰めて、やはり「春花」を詠み、その反歌には「山峽かひに咲ける桜をただ一目君に見せてばなにをか思はむ」（17、三九六七）と歌ひ、これに対して家持は「あしひきの山桜花一目だに君とし見てば吾恋ひめやも」（三九七〇）と返してゐる。「山桜花」といふ語は『萬葉集』に二回使用されてゐるが、これがその一つだ。

この大病中、家持の詠んだ歌に、

世間よのなかは数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべきおもへば（17、三九六三）

とある。「まがひ」は乱れること。家持は自分の死を考へ、春の花のしきりに散り乱れる下で、その花に埋もれて死ぬことを夢見てゐる。落花と己れの死とを結びつけた最初の歌であらう。家持は、ひょっとしたら死ぬかもしれないぬと心細く思ひ、しかもなほ自己の死を落花紛々によって美化し、これに陶醉してゐる。「願はくは花の下にて春死なむ」と歌つた後世の西行が思ひ合はせられる一首だ。

思ひ出の桜

やがて池主は越中掾から越前掾に転出してゆく。別れた後も、家持と池主はしきりに歌文を贈答してゐるが、天平二十年三月十五日池主は越前深見村（石川県津幡町か）から「桜花今ぞ盛りと人はいへど我はさぶしも君としあらねば」（18、四〇七四）と言ひ送つたのに対して、家持は

わが背子が古き垣内のさくら花いまだふふめり一目見に来ね（18、四〇七七）

と応へてゐる。池主の越中在任中の住まひの西北隅には立派な桜樹があつたといふ。それを見て思ひを発しての作だ。前年、病臥中の家持を慰めて「ただ一目君に見せてばなにか思はむ」と池主がよみ、家持が「山桜花一目だに君とし見てば」と嘆いた時、二人の念頭にあつたのは、おそらくこの西北隅の桜樹だったのであらう。後年の芭蕉の句に「さまざまのこと思ひ出す桜かな」とあるが、家持はこの桜をながめて、池主についてのさまざまに思ひ出が湧き、感に堪へなかつたのであらう。

死の譬喩と桜

家持は、天平十六年、安積皇子薨去の折の挽歌にも、「あしひきの山さへ光り咲く花の散りゆくごときわが王かも」（3、四七七）と、皇子を散り

ゆく花に譬へてゐる。『萬葉集』では、「萬葉の過ぎて去にき」「露霜の置きていにけむ」「雲に棚引く」「入日なす隠りにしかば」「晩闇ゆふやみと隠りましぬれ」など、人の死を黄葉・露霜・雲霧・入日・夕闇などに譬へた例は極めて多いが、花に譬へた例は少ない。また自己の死を予想しては「磐根いはねし枕まくらきて」「石根し巻ける」などと冷たい岩石上での永眠を歌っているが、家持は、他者の死にも、自己の死にも、落花を思ひうかべたのであった。若死された安積皇子あさかのみこを悼むこの歌の「咲く花の散りゆく」も桜花のイメージであらう。

なほ『古事記』の神話では、命短きことを桜の花のはかなくもろきことに譬へ、「天つ神の御子の御寿みいのちは木の花のあまひのみ坐ましまさむ」と記されてゐる。はかなくもろいからこそ桜は一層美しいのであらう。

後世の元禄十四年、落花の下で切腹させられた浅野内匠頭たくみのかみながのり長矩の辞世自然のリズムと

日本人の人生観 「風さそふ花よりもなほわれはまた春の名残りをいかにとやせん」は哀切で、無念の情が強くひびいてくる。いはゆる「忠臣蔵」の発端であ

る。「忠臣蔵」では、各場面場面における情意の高まりが伝統的季節感と見事に調和してゐる。そこに国民的共感を呼び起こした理由の一つがあるといはれてゐる。

和歌・俳句に自然諷詠が多いのは、「月花の弄び」「風雅の遊び」ではなく、自然と人生の調和こそ日本文化の神髄だからである。その根底には日本のアニミズムがある。宇宙のありとあらゆるものに靈性を認め、動物・植物・鉱物にも人間と同じいのちを認め、生きとし生けるもののいのちを尊ぶ日本の神道的アニミズムは、後に仏教の「悉有仏性しつうぶつしょう」の精神とも結合して日本文化の基底であった。人生は自然と調和し、宇宙と冥合してゐる。そのリズムが季節感である。

桜花の散り際のいさぎよさを君国のため戦死する精神に結びつけたのは、幕末国難期からであらうと思はれる。「落花」と題した佐久良東雄さくらくらあづまをの「ことしあらばわが大君のおほみため人もかくこそ散るべかりけれ」あたりが多分最も早い例であらう。この精神は明治以後の度重なる対外戦争によって強化され、軍歌にも「散兵線の花と散れ」「見事散ります国のため」などと歌はれ、特攻隊勇士も「若桜散って甲斐ある命」と辞世を残した。平和を愛好し、自然を愛好する日本人が、国家存亡の非常事態に対処して、おのづから取った姿であった。やはり特攻隊勇士の辞世「七八ななやたび生れ変りて守らばやこの美しき大和島根を」。この美しき大和島根を守るために花と散らうとしたのであった。

三 虫の声・鹿の声と萬葉集

虫の声と日本文化

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、日本人が庶民に至るまで虫の声を賞美することを知って驚嘆した（『小泉八雲全集』第五巻収録「虫の業師」大正一五訳刊）。西洋には、（ギリシヤの古い例を除いて）、虫の声をめぐる文化はなく、西洋人の耳には、虫の声は雑音のやうにしか聞こえないのだといふ。

『源氏物語』には「長き夜を声の限りを尽くして」鳴く虫の声が物語のいくつもの場面にしみにしむとあはれを添へ、和歌も俳句も虫の声を歌ひ、国文学に不可欠のものとなつてゐる。日本文化はしばしば漢文学・漢文化を師とし、範として来たが、虫の声を愛でる伝統だけは漢文学に無いといふ。朝鮮にも無いといふ。いはば、虫の声こそ日本人が育てあげあげて来た独自の文化なのだ。（近年、角田忠信氏は右脳・左脳の機能を研究され、日本人だけが虫の声を美しく聴いてゐることを科学的に証明された。（『日本人の脳』昭和五三年））

萬葉集と

虫の声は『萬葉集』の後期から現れてくる。作者の明らかなのは湯原王ゆはらのおほきみの一首、

こほろぎの声

夕月ゆづく夜心もしのに白露の置くこの庭にこほろぎ鳴くも（8、一五五二）

心もしみじみと虫の声に聴き入っての作だ。湯原王ゆはらのおほきみは志貴皇子しきのみこの子。志貴皇子は天智天皇の皇子で、三代統いてすぐれた歌人であった。なほ志貴皇子の御生母は越こしの道君伊羅都みちのきみいらつ売め、即ち北陸の豪族の娘であった。

虫の声を詠んだ作者未詳の歌は卷第十に六首。うち一首、

影草かげくさの生なひたる屋外やどの暮陰ゆふかげに鳴くこほろぎは聞けどあかぬかも（10、二二五九）

と「聞けどあかぬかも」とまで虫の声に浸ってゐる。また「虫に寄す」の一首、

こほろぎの待ちまち歎なげぶる秋の夜を寝ねるしるし験しるしなし枕まくらと吾われは（10、二二六四）

夜氣をふるはすコホロギの声を「待ち歎ぶる」歎喜よろこの声と聞いたのだ。作者の心は虫の声

とひとつに融け、ひとつになつて鳴り響いてゐる。実に、はずむやうな美しいシラベだ。しかし、虫の欲びに反して、自分はわびしい独り寝だと長歎息してゐるのだ。「枕と吾はいざ二人寝む」(大伴坂上郎女、4、六五二)といふ歌もあるが、じつと枕を抱いて虫の声を聞き、涙にくれてゐるのだ。

草深みこほろぎ多に鳴く屋外の茅子見に君はいつか来まさむ(10、二二七二)

の一首もある。虫の音がさまざまに歌はれ、やがて平安朝以後の虫の文化につながつてゆく。

天皇と鹿の声

『古事記』『日本書紀』には、まだ虫の声は登場しないが、『書紀』の伝へる、仁徳天皇と「鹿の声」の伝説は、「虫の声」文化に先立つものとして興味深い。天皇が皇后と共に高台に避暑され、毎夜、菟餌野で鹿の鳴く声を聞かれた。「その声、寥亮にして悲し」「共に可憐とおもほす情を起したまふ」と『書紀』は記す。月末、鹿の声が聞えなくなつたので、「こよひ鹿鳴かず、何に由りてならむ」といふかられた。明日、鹿肉を献上する者があつて、鹿の殺されたことが判明し、天皇はいたく残念がられ

たといふ。

『播磨国風土記』には、品太天皇（應神天皇）が狩猟された時、一頭の鹿、御前に立ち、その「鳴く声比々たり」、そこで天皇は射目人の射ることを止められた、との伝承を載せてゐる。「比々」とは擬声語で、芭蕉の句「ひいと鳴く尻声悲し夜の鹿」の「ひい」に相当する。鹿の声に「もののあはれ」を感じて殺生を止められたのだ。

『萬葉集』には、舒明天皇御製として、

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずいねにけらしも（8、一五二一）

を載せ、別伝として、卷第九卷頭に雄略天皇御製、

夕されば小椋の山に臥す鹿の今夜は鳴かずいねにけらしも（9、一六六四）

を載せてゐる。生きとし生けるものの鳴く声を「可憐」と思ひ、心しづめてきくのが、日本人の「もののあはれ」の心情である。それが聞えなくなった時、ひとしほ「あはれ」は深まるのである。はるか後年、明治天皇は

さよふかく心しづめてきく時ぞむしの鳴くねはあはれなりける

さまざまの虫のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは

くさひばり鳴きもぞやむと秋の夜の月なき窓もさされざりけり

かれがれになりぬる庭の虫のねはなかぬ夜よりもさびしかりけり

と詠まれ、心魂傾けて虫の声に聞き入られた。そのことを思ひ合はせるのである。

今昔物語の鹿

『今昔物語』第三十卷第十二話には、丹波国の男が鹿の声を聞き、なじみの女に「此ハイカガ聞キ給フカ」とたづね、「煎物イリモノニテモ甘シアマ、焼物ヤキモノニテ

モ美ミキ奴ヌゾカシカシ」（煮ても焼いても旨い奴だ）と答へた女を離別し、あはれな歌を詠んで答とした女と添ひ遂げたといふ説話を載せてある。虫の声・鹿の声は日本文化を深々と浸してゐるのである。

第九章

大伴家持をめぐって

一 常世とこよの橋と大伴家持

たなべのさきまろ
田辺福麻呂の

天平二十年（七四八）春三月二十三日、左大臣橋家の使者として、造酒司みきのつかさ

越中下向と

令史まつりごとびと 田辺福麻呂が越中に下り、国守家持ぐかもちに会ひ、家持の館で饗応を受

橋の歌の伝達

け、互ひに新歌を作り、古詠を誦して交歓してゐる。この福麻呂の越中下向を橋家の墾田に関する用件とみる史学者の説に対して、尾山篤二郎・久

松潜一・市村宏・伊丹末雄ら国文学者諸氏の間では、『萬葉集』編纂へんさんに関する用件とみる説が根強い。

この時、福麻呂は、元正上皇難波宮におはした折の歌七首を家持に伝へた。御船が江をさかのぼ 浜ま っつて遊宴ゆゑんした時、橋諸兄もろえの奏した賀歌と、これに唱和された御製一首。更に橋邸でのしえん 肆宴の折の上皇御製、

橋のとをの橋や 弥つ代にもあれはわすれじこの橋を（18、四〇五八）

と、橋を忘れじと詠まれた。橋氏の誠忠を忘れじとの御心である。

これに河内女王・粟田女王が各一首唱和の歌を奏した。河内女王の歌は

たちばなの下照る庭に殿建てて酒宴いますわが大君かも（18、四〇五九）

といふ美しい歌だ。更に、御船を綱手で引いて江を浜さかのぼって遊宴した時の二首が続き、以上七首を総括して「伝誦の人、田辺史福麻呂是れ也」と注がつけられてゐる。

この君臣和楽の歌群を伝えられた家持は感激した。君と臣とが歌を詠みかはして相睦ぶ、それが家持の理想世界であった。しかも、家持が政界で最も頼みとする橋諸兄もろえの邸に上皇が行幸されての歌宴だ。家持はあふるる思ひを抑へえず、橋の歌に追和する二首、

常世とこよものこの橋のいや照りにわご大君は今も見るごと（18、四〇六三）

大君は常磐とこきはにまさむ橋の殿の橋ひた照りにして（18、四〇六四）

常世から将来されたといふ橋の葉も実も「いや照り」「ひた照り」に照り輝くがごとく、今仰ぎ見るやうに大君はいついづまでも長く栄えませと祝福したのだ。感動の流露したい

い歌だ。

家持の橋愛好

と橋讚歌

家持は若い頃から橋を愛で、橋の歌を数々作ってゐるが、政治上、橋氏に親近するに至って、橋はおのづから橋氏の象徴としての意味をも帯びた。

越中には南国系の橋は無かったので、「越中の風土、橙橋あること希也」(17、三九八四左注)と歎いた。のち「わが屋戸の植木橋」(19、四二〇七)と詠んでゐるところをみると、わざわざ苗木を越中へ取寄せて植栽したものらしい。

「海ゆかば」の大作をものした翌月の閏五月二十三日には「橋の歌一首」(18、四一一)を作り、「かけまくも あやに畏し 皇神祖の 神の大御代に」と祝詞のやうな歌ひ出しで、橋(時じくのかくの木の実)にまつはる田道間守将来の伝説を詠みこみ、その花をも実をも葉をも愛玩することを細かに述べ、「秋づけば しぐれの雨ふり あしひきの 山のこぬれは くれなるに 匂ひ散れども」橋の実は「ひた照りに いや見が欲しく」、冬「霜置けども その葉も枯れず 常磐なす いや榮はえに」青々としてゐるのを言葉尽くして讚美した。この橋讚歌にも、橋諸兄に傾倒した家持の心情が深々とこめられてゐるのであらう。

この長歌の反歌「橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見がほし」(四一一二)は、明らかに天平八年(七三六)橘氏創設(葛城王らが皇族籍を離れ、橘姓を賜はった)の時の聖武天皇御製歌

橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹(6、一〇〇九)

を念頭においての作だ。この御製、常葉の樹、橘に寄せて橘氏の末長き繁栄を寿がれた、瑞気みなぎる御名吟だ。

文化勲章と

橘のデザイン

はるか後年、家持の橘歌製作から数へて一一八八年後の昭和十二年、文化勲章が制定されたが、その章には、橘の花弁に勾玉を配し、鈕の部分には橘の葉と実とをあしらったデザインだ。この橘の意匠の採用は、陛下の思し召しによったものだといふ。はじめ桜の意匠であったが、陛下が武勲には桜がよく用ゐられるが、文化にはむしろ橘がふさはしくないかといった趣旨の意見を述べられ、これによって橘に変更されたのだといふ。もしこの話を知ることができたならば、地下の家持の感激いかばかりであらうかと、しきりに思ひ、私も感涙を禁じえぬのである。

古人の思ひに共感し、古人と共に泣き、悲しみ、喜び、歎くのが真の古典の読み方である。真の歴史の学び方である。

二 萬葉の雷鳴と雪夜の宴

四尺の豪雪と

雪夜の宴

天平勝宝三年（七五二）正月二日、大伴家持はじめ越中の国司たちは、守の館に集宴、翌三日は次官内蔵繩麻呂の館で宴を開いた。「時に零る雪殊に多く積みて四尺あり」と記されてゐる。これを加藤千蔭は『萬葉集略解』の中で「積尺有四寸とありしが、かく誤れるなり」（四尺は誤写で、もと尺有四寸つまり一尺四寸とあったはずだ）と訂正し、鹿持雅澄の『萬葉集古義』も千蔭の説を引用肯定し、おまけに「大雪落りて積むこと尺二寸」といふ奈良の都での記述を証に引いてゐる。江戸の千蔭、土佐の雅澄、ともに北陸豪雪の実態を知らなかったのだ。

この時の家持の歌は「ふる雪を腰になづみて参り来ししもあるか年の初めに」（19、四二三〇）。「ふる雪を腰になづむ」といふ表現は『萬葉集』でこの一例だけだ。四尺（一

三二センチ余)の大雪だから腰まで没し難渋しつつ歩いたのだ。一尺四寸(四七センチ)であつたら「腰になづむ」といふ独特の表現は生まれなかつたであらう。

この日、積雪を用ゐて「重なれる巖の起てるさまを彫り成し、奇巧みに草樹の花を綵りいろど究ひらく」とあるから、雪で岩や草木花の形をこしらへ、これに着色したのだ。今いふ「雪の芸術」である。

北陸では、昭和一桁けたの頃まで、雪に染め粉をふりかけ、赤や青や黄に彩って、いろいろの造形をたのしむ子供の雪遊びが行はれたが、その最古の姿をここに見るのである。

この雪の芸術を題材として、掾久米広縄じょうくめひろなはが一首よみ、つづいて遊行女婦かぎよらによ(遊女)の蒲生かまふ娘むすめ子が唱和してゐる。いづれも秋咲くナデシコが雪の巖に咲いたと歌ってゐる。長官家持なせしこの愛好する撫子なせしこの花を雪で作つてもてなしたのだ。

主客これに興じて杯を重ね、夜を更かした。鶏が鳴き出したので、主人の縄麻呂が「羽ばたきして鶏が鳴いても、こんなに降り積もつてゐる雪です。お帰りなさることはありません」と引き止め歌を歌ふと、家持がこれにこたへて「鶏はしきりに鳴くが、雪がこんなに積もつてゐるから、立つに立てません。おっしる通りに致しませう」と返し、更に杯

を重ねた。

その時、雷が鳴りとどろいた。北陸特有の冬雷である。久米広縄が雷の伝誦歌を朗々と歌ふと、蒲生かまふがこれを受けて「光る神、鳴りはたをとめ」の雷にちなむ長歌を歌ふ。おそらく楽器を弾きながら歌ったのであらう。

天地の 神は無かれや 愛うつくしき 吾が妻さか離る 光る神 鳴波なりはた多をとめ 携たづはり
 共にあらむと 念おもひしに 情こころたが違ひぬ 言はむすべ せむすべ知らに 木綿ゆふだすき
 肩にとりかけ しつ幣ぬさを 手に取り持ちて な離さけそと われは禱いのれど
 巻まきて寐し 妹がたもとは 雲にたなびく(19、四二三六)

妻を失った悲しみを綿々と歌った歌だ。後世富山方言でブリオコシとかユキオコシといふその冬雷の鳴りはためく中で、国司一同しみじみと凄絶な謡ひ物に聞き入り、酒を味はった、北国の新年の一夜であった。

萬葉の雷鳴歌と棟方

志功の蒼青不動像

ひろなほ
広繩が伝誦し朗誦した雷の歌「天雲をほろにふみあだし鳴る神も今日にまさりてかしこけめやも」(19、四二三五)は「天雲をばらばらに踏み散らして鳴りとどろく雷は実に恐しいが、それ以上に畏れ多いこととございます」とあがたのいぬかひ 県 犬養橋三千代みちよが天皇に献じた歌だ。この歌は、同じく『萬葉集』の

あまぐも
天雲に近く光りて響る神の見れば恐しい見ねば悲しも(7、一三六九)

を連想させる。「天雲に近く光って鳴る雷のやうに、あの人に逢ふと畏れ多くてならない。しかし、逢はないであると、むしろように悲しくてたまらない」といふ高貴な方に対する思慕の歌(作者未詳)である。「見ればかしこし見ねば悲しも」といふ言葉のひびきが惻々と迫ってくる。「神といふものは、体がちぢむほど恐ろしいが、近づかずにはをられないもの、激しく惹きつけられるもの」といふ宗教の境地——ヌミノーゼ(宗教学者オットーの語)をそのまま示すやうな歌である。

昭和二十年、富山県福光町に疎開してゐた棟方志功は、祖国敗戦の悲しみと怒りと憂へ

と嘆きを絵筆にたたきこんで、荒々しく一幅の「蒼青不動明王尊像」をかきあげた。血潮のやうに赤々と燃え立つ炎の中に青い不動が突っ立ってゐる。構へた剣にも炎が照り返し、赤く染まつてゐる。恐ろしいまでに迫力のある絵である。(板画でなく、肉筆画で、富山県立図書館に所蔵されてゐたが、後、新設の県立近代美術館に移管された)。志功しこうはこの絵の箱書きに萬葉の雷鳴の歌を書きつけた。白文のまま「天雲近光而響神見者恐不見者悲毛」の十五字が奔放自在に箱の上に躍つてゐる。不動明王の恐ろしく、しかもひきつけてやまぬ不思議な力を、この萬葉歌に託したのであった。

私は冬の夜天を裂いて鳴りとどろく壮絶な雷鳴をききつつ、家持の雪夜の宴を思ひ、萬葉の雷鳴歌を思ひ、この歌を書きなぐつた志功を思ひ、志功の凄絶な青不動を思ふ。

家持も志功も越中に数年滞在し、おびただしい作品を残した。志功は敗戦の悲嘆憤怒をこめて不動を描いた。家持は、急転する時代の矛盾に対して深く悲しみ、深く嘆き、その大きな悲しみをこめて黙々と歌日記をつづつた。『萬葉集』には家持の魂の雷鳴がこもつてゐる。『萬葉集』は恐るべき書物である。新春の酒宴の記事のあひまにも、ただならぬものを潜めてゐる。まさに「見ればかしこし、見ねば悲しも」といふ歌そのままの書物で

ある。

棟方志功の「天皇拝従記」

志功が「蒼青大不動明王尊像」を描いたのは敗戦下の昭和二十一年九月であったが、その翌々年、昭和二十二年十月、志功は富山県下御巡幸の天皇に扈從して「天皇拝従記」を書いた。「御下問の、御調子は、強くも真実の極みに、人間の生活くらしにあられる妙情の、吐露でもあらせられた」と感動し、「没日をうけて御泊所なる富山県庁に御帰着、市民の歓呼の萬歳に彩電、明るい壁を御背おんせなに受けて脱帽のお応答を拝した」と書いた後、

天雲に近く光りて響神を見れば恐し不見ば悲しも

あまくもにちかくひかりてなるかみをみればかしこしみねばかなしも

と、漢字まじりの形と仮名書きの形にして二回も繰り返してこの萬葉歌を書きつけ、この「謹記」を結んだのであった。（「天皇拝従記」は当時の『北陸夕刊』に掲載。小高根二郎著『湧然する棟方志功』に引用されてゐる）。

三 大伴家持の悲劇的生涯と萬葉集

越中赴任と

家持は天平十八年（七四六）越中守に任ぜられ、七月任地に赴いた。越中

叔母坂上郎女

へ旅立つ家持に対して、叔母坂上郎女は、

道の中国つ御神は旅ゆきも為知らぬ君を恵みたまはな（17、三九三〇）

他三首、心こめた歌を贈ってその無事を祈った。『古事記』の伝承では倭建命が常に

姨倭姫命をばやまとひめのみこと

の庇護の下にあったやうに、古代における叔母と甥の精神的な結びつきはた

だならぬものがあつた。坂上郎女は『萬葉集』に長歌六首短歌七十一首旋頭歌一首をとどめた歌人（萬葉女流歌人中最多作者）で、家持は幼少からこの叔母に作歌の手ほどきをされて育つた。かつ、家持の正妻坂上大嬢おほいらつめは坂上郎女の娘であつたから、郎女は叔母であると同時に義母でもあつた。

橋諸兄と家持

当時は、東大寺の造営・大仏の建立に国家の総力が傾注されてゐる時であつた。また中央政界は橋氏と藤原氏とが勢力を争つてゐた。大伴氏は橋諸兄とその子橋奈良麻呂（ならまろ）に親近してゐた。諸兄はもと皇族葛城王（かづらぎのおきみ）。天平八年、橋姓を賜ひ、一家を創立した。その時、聖武天皇からは御製一首「橋は実さへ花さへその葉さへ枝（え）に霜降れどいや常葉（とこは）の樹」(6、一〇〇九)を下賜して祝福された名譽の家柄であつた。(この一首、一説には元正上皇御製ともいはれる)。

天平十八年正月、奈良の都に数寸の雪が降つた時、左大臣橋諸兄はじめ諸王諸臣、元正上皇の御在所に参上し、雪を掃ひ、奉仕した。その後の酒宴の時、上皇から雪の歌を作れと詔（みことり）があつて、各、詔に応じて歌を献じたが、橋諸兄の作は

降る雪の白髪（しろかみ）までに大皇（おほきみ）に仕へまつれば（たふと）貴くもあるか(17、三九二二)

といふ謹厳にして誠忠あふるる一首であつた。この時、家持は「大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れどあかぬかも」(17、三九二六)の一首を献じてゐる。

後年、諸兄の作に「あぢさゐの八重咲くことに（やへ）弥つ世（や）をいませわが背子（せこ）見つつ（しよ）偲はむ」(20、四

四四八)といふ一首もあるが、これもいい歌だ。なほ『太平記』卷三「主上御夢の事、附 楠の事」の条には「河内国金剛山の西にこそ楠多聞兵衛正成とて弓矢取つて名を得たる者は候ふなれ。これは敏達天皇四代の孫、井手の左大臣橋諸兄公の後胤たりといへども、民間に下つて年久し」とあつて、楠氏は橋氏の後胤と称してゐる。「枝に霜ふれどいや常葉の樹」の楠は、六百年後に楠の香を天下に薫らすことになるのだ。

応詔献歌と

預作未奏歌

その橋諸兄の推挽によつて、家持は天皇から越中守に任ぜられ、「大君の任のまにまに」天離る鄙、しな離る越の任地に赴いたのであつた。雪の宴のあつた年に、奇しくも雪国の長官に任命されたわけだ。「白雪多く零り地に積むこと数寸」の都から、「零る雪殊に多く、積むこと四尺」といふ桁はづれの大雪の地「雪ふる越」への赴任は、家持にとつて感慨深いものがあつたらう。

それにしても、この都での雪の賜宴は家持生涯忘れえぬものであつたらう。「聊か此の雪を賦して各其の歌を奏せ」との詔に応じ、諸臣作歌献上した盛儀こそ「日の大朝廷」の理想的な姿であつた。後世風にいへば「しきしまのみちの御まつりごと」であつた。

後年、家持は「芳野離宮に行幸まさむ時のために儲ねて作れる歌」(18、四〇九八—四一〇

○、「興に依りて預め作り、宴に侍り詔に應ずる歌」(19、四二五四―四二五五)、「詔に應ぜんがために儲ねて作れる歌」(19、四二六六―四二六七)、「侍宴の為に預て此の歌を作れり」(20、四四九四)、などと「儲ねて」「預め」侍宴詔を予想し予期して作歌してゐるが、実際に奏上した形跡はない。更にまた「未だ奏せず」(四二七二)、「奏せず」(四四九四)、「大蔵の政に依りて之を奏するに堪へざりしなり」(四四九三)などと左注された歌があつて、未奏に終つてゐる。あらかじめ用意しながら、その機を与へられなかつた家持の失望は大きかつたらう。そして天平十八年正月の盛儀をなつかしく回顧したことであらう。

その満たされぬ思ひが、将来の『萬葉集』全卷奏上の念願となつて、家持は全力こめてこの集の編成に努力したのでなからうかと思ふのである。

「大君の任のまにまに」

東大寺の経済的基盤として注目を浴びたのが北陸であつた。現存する東大寺開田図(正倉院等に所藏)二十四枚中、十七枚が越

中、四枚が越前、一枚が北陸道入口の近江だ。地図の伝存には偶然的な事情があるとはいふものの、いかに北陸が重要であつたかがうかがはれる。その辺要の地越中へ、家持は負荷の大任を自覚して赴任した。

家持は繰り返し「大君の任のまにまに」と歌つてゐる。集中、この語の使用は八例。そのうち六例までが家持だ。更に類似の表現として「大君の任きたまふ官のまにま」^{つかさ}「大君のみことのまにま」を加へて計算し直すならば、十例中八例が家持。いかに家持がこの語を愛用したかがわかるであらう。

「大君のみこと畏み」は『萬葉集』中二十八例（「大君のみことにしあれば」等の類例を加へると三十例）、このうち家持は四例（しかも、そのうち二例は防人の心情になり代つての作）。「みこと畏み」は私的な感情を強く押さへつけて公に向ふ心情である。石上麻呂が流罪に処せられた時も「大君のみこと畏み」、長屋王が死罪を賜った時も「大君のみこと畏み」と表現され、強い挫折感を伴つてゐる。これに対して、「任のまにまに」は官人として当然の任務に就くといふ気持だ。私的なものを公的なものへ押し向ける点は同じであるが、ニュアンスは大きく違つてゐる。

家持が「天さかる鄙」^{ひな}の越中国守になつたことを、「左遷された」^{させん}「田舎へ追ひやられた」などと書き、家持が望郷の念にうちひしがれ、めそめそしてゐたやうに書いたものを往々見受けるが、實際は逆だ。家持は自分に与へられた任務を強く自覚し、その職務を生

きがひとしてゐた。

単身赴任と

単身赴任であつたから、故郷の妻を恋しく思ふのは人情の自然だ。特に病

愛妻家、家持

臥（赴任の翌天平十九年二月「枉疾に沈み、殆と泉路に臨む」ほどの大患に罹かつたといふ）した時は妻恋の歌を作つたのも当然だ。そんな歌も作り

ながら、家持の魂は決してうちひしがれてはゐなかつた。

越中在任中の歌を見れば、家持の生活は張りつめ、作歌にも油が乗つてゐる。張り切つてゐたからこそ、越中の風土、山川草木すべてが新鮮に澆瀾として心に映り、それを力強く歌ふことができた。そして五年間の越中在任中に家持は歌人として大きく成長を遂げたのであつた。

家持が浮気な生活を送つてゐたなどといふのも勝手な臆測だ。奈良の都にゐた頃のうら若い家持は、多数の女性と相聞の歌を詠みかはした。二十名ぐらゐの女性の名が出てくる。しかし、越中に赴任してからは、それらの女性は家持の目から消え去つた。平群女郎へぐりのいらぬめから十二首の熱烈な歌を送りつけて来たが、家持はこれを青春時代の心のアルバムとして書きとめただけで、返しの歌も作らなかつた。

布勢水海遊覧の時、遊行女婦が「今日の日は楽しく遊べ言ひ継ぎにせむ」(18、四〇四七)と歌ひかけたのに対して、家持は「垂姫の浦をこぐ舟楫間にも奈良の我家を忘れて思へや」(18、四〇四八)(つかのまも我が家のこと、即ち妻のことを忘れぬ)とおのろけて遊女の誘ひをいなしてゐる。「ぶすいな長官様ですこと」と遊女は面をふくらませたことであらう。

そして妻に対して「妹も我も 心は同じ たぐへれど いやなつかしく 相見れば 常初花に こころぐし めぐしもなしに 愛しけやし あが奥妻」(17、三九七八)と歌つてゐる。「常初花」いつもうひうひしく、みづみづしい初花と妻を讃へ、「あが奥妻」心の奥に大切にしてゐる妻と呼びかけた。「常初花」「奥妻」、『萬葉集』にただ一回出てくるだけの語だ。別居してゐたから一層、家持は妻坂上大嬢を美化し、理想化したのであらう。これほど妻を讚美した語は他にないであらう。越中赴任の家持にとって、女性は妻ただ一人であつた。

だから部下の尾張小咋が遊行女婦左夫流児と深い仲になつた時は、長官としてこれを教諭してゐる。家持自身が遊行女婦にうつつをぬかしてゐたら、そんな説教などできないは

ずだ。

五年間の在任中、前半は单身赴任であったが、後半は妻を越中へ呼び寄せてゐる。(政務報告のため上京した折、連れて来たのであらう)。天平勝宝二年(七五〇)三月、桃の花・李の花などの美しい歌を次々作ったのは、妻を迎へ、満ち足りた心から迸り出したものであらう。

「海ゆかば」の感激

天平二十一年(七四九)、陸奥国から黄金が発掘され、献上された。

建立中の大仏に塗るべき黄金の不足を深く憂慮されてゐた聖武天皇は大喜びされ、長文の宣命(国文体の詔勅)を発して、その喜びを天下に告げられた。その宣命の中で大伴・佐伯両氏(佐伯は大伴の支族)の祖先以来の忠節を深く嘉賞された。年号は天平感宝元年と改められた。

この宣命を任地越中で伝へ聞いた家持の感激は大きかった。五月十二日「陸奥国より金を出せる詔書を賀く歌」長歌及び反歌三首(18、四〇九四―四〇九七)を作った。宣命の中で天皇は大伴氏の遠祖以来の言立て「海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、のどには死なじ」を引用された。家持はこれを受けて「海ゆかばみづく屍、

山ゆかば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、願みはせじ」と長歌の中に歌ひ込んだ。(一)のどには死なし」を「願みはせじ」と歌ひ変へた)。家持の生涯で最長の大作、かつ最高の力作だ。

家持の歌には両極がある。片方の極は「うらうらに照れる春日にひばりあがり心かなしも独し思へば」(19、四二九二)であらう。そして、ま一方の極はこの「海ゆかば」百四句の長歌だ。この長歌、もりあがる感動がうねりを打って迫ってくる。

越中離別

「既に六載(歳)の期満ち」、家持は越中守の任を終へ、少納言に昇進して都へ還ることとなった。家持は都へ還る喜びは歌はなかった。みづから「悲別之歌を作る」「旧に別るるの懐、心中鬱結し、涕を拭ふの袖、何を以てか能く早かむ。因つて悲歌二首を作り、式ちて莫忘の志を遺す」と題詞して二首、越中へのなごりを惜しみ、更に八月四日介内蔵繩麻呂館で送別の宴が開かれた時、一首

しなざかる越に五箇年住み住みて立ち別れまく惜しき夕かも (19、四二五〇)

と詠んだ。

妻^{さい}凋^{ちよう}の意、歌に
非^ひずば撥^{はら}ひ難^し

要職につき都へ上った家持が、そこに見たものは、藤原仲麻呂^{なかもろ}の強大な勢力の前に、橘氏も大伴氏も、もはや齒の立たぬ現実であつたらう。家持は鬱々として楽しまなかつたであらう。

天平勝宝五年（七五三）二月二十三日の春の夕べ、家持は「春の野に霞たなびきうら悲しこの暮影^{ゆふ}にうぐひす鳴くも」「わがやどのいささ村竹ふく風の音のかそけきこのゆふべかも」（19四二九〇・四二九二）と詠み、つづいて二十五日、

うらうらに照れる春日にひばりあがり情悲^{こころ}しもひとりしおもへば（19、四二九二）

と詠み、「春日遅々^{ちち}として鶴鷗^{せうこう}まさに啼^なく。悽惻^{せいちよう}の意、歌に非ずば撥^{はら}ひ難^しのみ。仍^よつて此の歌を作り、式^{しき}ちて締緒^{ていしよ}を展^のぶ」と左注を書きつけた。むすぼれた心情は、作歌以外に解きほごすすべがなかつたのだ。悲しき独^{ひとり}の思ひを詩に託して歌ひ霽^{はら}らし、己れの生をしみじみと味はつたのだ。歌ひ霽^{はら}らすことによつて、悲しき思ひはそのまま強き思ひとなつたのだ。家持にとつて、歌こそは起死回生の不思議な力であつた。その言語芸術の秘奥を、実作をもつて示した最初の人が大伴家持であつた。

川出麻須美の「富山を憶ふ」中に「ひとり思へば心ぞいたき氷見の海磯むら松とひばりの声と」の一首がある。氷見は萬葉の故地。その松田江の長浜は家持が歩み、家持が歌った白砂青松の砂浜。そこで聞いた雲雀の声の回想だ。越中を去った翌々年、麗々と照れる春日に揚雲雀をきき「心かなしも独し思へば」と孤絶の春愁を歌った、あの家持の絶唱が、氷見の磯辺の雲雀の声と相重なつて、麻須美の、これも「ひとり」の心を強く痛ませたのであらう。

橋奈良麻呂の

変と大伴池主

天平勝宝八年（七五六）聖武上皇は崩御された。続いて翌天平宝字元年（七五七）一月、家持が最も頼みとしてゐた橋諸兄が薨じた。時勢は急速に動いてゆく。

橋・藤原両氏の間は刻々險悪化し、つひにその年の七月、諸兄の子、橋奈良麻呂はクーデターを計画して一挙に藤原仲麻呂を打倒せんとしたが、事は未然に発覚し、奈良麻呂以下橋派の者は一網打尽に捕縛され、あるいは投獄され、あるいは刑に処せられた。

大伴・佐伯一族からも多くの犠牲者を出した。家持にも当然奈良麻呂からの誘ひがあったらうと思はれるが、家持は慎重に対処して手を出さず、危く難を免れた。家持は穩健温厚な人柄で、性争ひを好まなかったが、更にいふならば、橋・藤原の派閥を超えて大君に

帰属する心情から、家持はクーデターには与し得なかつたのであらう。

家持越中守時代、その部下越中掾であつた大伴池主も、この事件に連坐して捕縛され、史上から姿を消してゆく。おそらく刑死したのであらう。

さかのぼって天平十年（七三八）十月十七日、橘家の集ひに家持も池主も出席し、その席で池主は「かむな月しぐれにあへるもみち葉の吹かば散りなむ風のまにまに」（8、一五九〇）と詠んでゐる。この歌が予感させるやうに、池主は嵐のまにまに散っていったのだ。

越中掾池主は国守家持の片腕であつただけでなく、歌人としても傑出し、家持との間にしばしば歌を詠みかはしてゐる。家持が病臥した時、繰り返し歌や漢詩を贈つて慰め励ましたのも池主であつた。家持の「立山賦」に対して池主は「敬和立山賦」、家持の「布勢水海遊覽賦」に対して池主は「敬和布勢水海遊覽賦」を唱和してゐるが、その出来栄えはいづれも池主の作の方がすぐれてゐる。池主が越前掾に転出した後も、両者はしばしば歌の贈答をして慰めあひ、励ましあつてゐる。その池主の連座・捕縛を、家持はどんな思ひで聞いたであらう。おそらく家持は、池主のことを生涯、心の傷としたであらう。

萬葉集卷末の歌

家持自身は危ふく難を免れたが、大伴・佐伯の人々が多く姿を消し、家持は孤影悄然たるものがあつたであらう。やがて、家持は因幡守いなばのかみに任せられた。かつての越中守拜任は抜擢であつたが、中央政府の少納言ともなつた家持にとつて、因幡守は左遷であつた。多分藤原氏の策謀で地方へ追ひやられたのであつたらう。

その因幡国庁いなばの（鳥取県国府町）で天平宝字三年（七五九）正月一日、国郡司たちを集めて宴した時、家持は

新あらたしき年の始めの初春のけふ降る雪のいや重しけ吉事よごと（20、四五一六）

と詠んだ。この一首を最後として『萬葉集』はその巻を閉ぢたのであつた。

初春を祝ひ、この降りしきる雪の如く、吉よき事よもっと積れかしと祈念し、予祝した歌だ。この一首からも、不遇な中にあつても、まじめに職務を尽した家持の誠実な人柄がうかがはれる。おそらく家持の目には、天平十八年（七四六）正月、上皇の御所で詔に應じて雪の歌（17、三九二六）を奏した光榮、そして張りあひのあつた越中在任五カ年間の大雪山の印象が、重ね写しになつて見えてゐたであらう。

鎮守府將軍として みちのくに赴任

その後、家持は薩摩・伊勢・相模などの地方長官を転々とした。政情の転変めまぐるしく、さしも権勢を誇った藤原仲麻呂も、道鏡政権に圧倒され、天平宝字八年（七六四）戦ひ敗れて近江で処刑された。その道鏡もまたゆゆしき野望を起こしたが、神護景雲三年（七六九）和氣清麻呂は捨身の尽忠によってこれを阻止した。神護景雲四年、称徳天皇崩御され、白壁王（萬葉歌人志貴皇子の第六子）が即位されて光仁天皇となられ、道鏡は下野国に放逐された。

多少の起伏は経ながらも、漸く家持にも返り咲きの運が開けてくるかに見えた。桓武天皇の延暦元年（七八二）、家持は按察使鎮守府將軍に任ぜられ、陸奥国に派遣された。対蝦夷の最前線の將軍だ。武門の名門大伴氏としては最適の大任だ。越中在任中、「海ゆかば」の長歌に添へて「天皇の御代栄えむとあづまなるみちのくに山に黄金花咲く」（18、四〇九七）と讃へた、そのみちのくだ。その意味でも家持はうれしかったであらう。

「黄金花咲く」の歌は富山県出身山田孝雄博士の揮毫で、宮城県金華山神社の境内に歌碑となつて建てられてゐる。

遺体葬るを許さず

三年後の延暦四年（七八五）八月二十八日、家持は六十八歳（推定）の生涯を終へた。

その死後二十余日、中央では重大事件が発生した。桓武天皇の寵臣で長岡京造營の担当者であった藤原種継たねつぐが暗殺されたのだ。下手人として大伴継人つぎひと・竹良たけながらが逮捕され、尋問の結果、大伴家持が主謀者であるとされたのだ。

家持の遺体は葬ることを許されず、大伴氏の財産・所領ことごと悉く没収され、家持の息子永主ながぬしは隠岐おきの島に流された。この事件には不審な点多く、ここにも大伴氏を押さへんとした藤原氏の策謀の匂ひが濃い。（平安時代、菅原道真みちざねの左遷された事件が思ひ合はされる）。

「大君の辺へにこそ死なめ願かへりみはせじ」を信条とし、誠心誠意勤めた家持が、死後かくの如く賊名を着せられ、屍を葬ることも許されなかったのだ。これを思ふたびに私は一掬の涙を禁じえぬのである。

家持の遺骨はどうなったのか。息子永主ながぬしが父の遺骨を携へて隠岐島へいったか。（川口常孝氏はそのやうに推定されてゐる）。しかし永主が奉じて行ったのは父家持の位牌程度で、遺骨そのものは「葬るを許さず」の官命に従って、みちのくの刑場の片隅にでも空し

く打ち捨てられたのではなからうか。

隠岐の孤島へ行ったとすれば、まさしく「海ゆかば水づく屍」、みちのくに打捨てられたとすれば、これぞ「山ゆかば草むす屍」。高らかに歌ひあげた祖先の言立てことだそのままの最期を家持は遂げたのだ。

しかし、家持が生涯かけて編集した『萬葉集』の草稿は、他の財産とともに没収されて朝廷の書庫に納められたのであらう。それが書き写され、写

萬葉集の伝存

し継がれ、持ち伝へられて、今日の『萬葉集』となったのであらう。

萬葉時代の他の書、『類聚歌林』るいじゆうかりんも『銜悲藻』がんぴそうもすべて散佚いつした。もし家持の最後が平

穩であったとしたら、『萬葉集』の草稿が大伴家の書庫に置かれたままであったとしたら、その後の栄枯盛衰の中で散佚してしまったかもしれない。その可能性は大きい。賊名を着せられ、財産没収されたがために、かへって『萬葉集』はまさに名の通り「萬葉」萬代にわたって伝へられ、日本民族の宝となったのではないかと思はれる。さうだとすると、家持が無実の罪で悲惨な最期を遂げたことも、『萬葉集』をこの国に遺すための、止むをえぬ歴史の歯車ではなかったか。「願みはせじ」と詠んだ家持は、たとへ自分の屍が路傍に捨

てられ、草むす屍かばねとなったとしても、そのことによって自分が身命かけて採録編纂した『萬葉集』が日本国に残り、日本民族の宝となったことを心底から喜んでゐるに違ひないと私は思ふ。「日の本のやまとの国の鎮めしづめともいませ書よみかも、宝ともなれる書かも、家持がいのちかけたる奈良の代の萬葉集は読めどあかぬかも」。

『萬葉集』は、大伴家持の悲劇的生涯の全体から照らし出して、はじめて生きてくるのである。

著者略歴

大正十一年、富山市にて出生。
 富山県立富山中学校卒、国学院大学中退。
 富山県立図書館に三十余年勤務（司書のち館長）。
 富山女子短期大学助教授（図書館学）。
 平成十七年十月十日逝去（享年八四歳）。
 ▲著書「越中奥山の地名」昭32、「立山信仰」昭44、「立山と白山」昭46、「立山黒部奥山の歴史と伝承」昭59、「歌集 坂の沼琴」昭58 ▲共編「川出麻須美遺稿集 天地四方」昭47 ▲解説校注「青楓泉達録」昭49、「越中安政大地震見聞録」昭51、「越の下草」昭55、「越中遊覧志」昭58 ▲共同執筆「和歌文学大辞典」昭37、「世界山岳百科事典」昭46、「富山県大百科事典」昭50、「角川 日本地名大辞典、富山県」昭54、「富山県史 古代」昭51、「富山市史」昭62、「富山県歴史の道調査報告書」昭53、56、「式内社調査報告 北陸道」昭60、「高瀬重雄古稀記念日本海地域の歴史と文化」昭53、「川口久雄古稀記念古典の変容と新生」昭59、「白山立山と北陸修験道」昭52、「修験道の伝承文化」昭56、「新編日本思想の系譜」昭46、「越中の万葉」昭46、「大伴家持と越中万葉の世界」昭59、「とやま文学の旅」昭46、「越中山座図巻」昭53、「和歌と日本文化」（国文研叢書）平1、その他

萬葉集 その漲るいのち

国文研叢書 No.30

平成元年三月十日 第一刷
 平成二十一年十月二十日 第二刷

頒価 九〇〇円

著書
 発行所

廣瀬誠
 社会法人 国民文化研究会
 理事長 上村和男

印刷所

〒150 0011 東京都渋谷区東一丁目三番十四〇
 TEL (〇三) 五四六八一六・三三〇
 FAX (〇三) 五四六八一・四七〇
 郵便振替 〇〇・七〇一・一六〇五〇七
 三光社出版印刷(株)
 東京都品川区上大崎一丁目一

落丁乱丁のものはお取り替へいたします。

No. 1	夜久	雄一	著	古事記のいのち (改訂版) (原) 昭和41年・(改) 昭和48年	316頁
No. 2	高木	一	著	親鸞と実朝の系譜 昭和41年	279頁
No. 3	小田	二郎	著	弁証法批判の歴史 昭和42年	241頁
No. 4	小田	二郎	著	日本思想の系譜 文獻資料集・上巻 (古代・中世) 昭和42年	309頁
No. 5	小田	二郎	著	日本思想の系譜 文獻資料集・中巻その1 (近世Ⅰ) 昭和43年	317頁
No. 6	小田	二郎	著	日本思想の系譜 文獻資料集・中巻その2 (近世Ⅱ) 昭和43年	409頁
No. 7	小田	二郎	著	日本思想の系譜 文獻資料集・下巻その1 (近世Ⅰ) 昭和44年	403頁
No. 8	小田	二郎	著	日本思想の系譜 文獻資料集・下巻その2 (近世Ⅱ) 昭和44年	381頁
No. 9	川井	修	著	歴史と人生観—マルクス主義の超克 昭和43年	283頁
No. 10	小田	二郎	著	欧米名著訳訳 (明治) 集 文獻資料集 昭和45年	483頁
No. 11	桑原	一	著	日本精神史抄 花山院とその系譜 昭和45年	310頁
No. 12	夜久正徳・山田輝彦共著	一	著	短歌のすずめ 創作と鑑賞 昭和46年	309頁
No. 13	夜久正徳・山田輝彦共著	一	著	短歌のすずめ (続 別巻のすずめ) 昭和46年	316頁
No. 14	桑原	一	著	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集 昭和48年	338頁
No. 15	夜久	正	著	白村江の戦—7世紀・東アジアの動乱 昭和49年	324頁
No. 16	夜久	正	著	国史の地熱—聖徳太子と桓武の精神 昭和49年	293頁
No. 17	戸三	雄	著	日本における マルクス主義批判論集 昭和51年	329頁
No. 18	国民文化研究会編	之	著	明治天皇御集研究 (復刊) 昭和52年	354頁
No. 19	国民文化研究会編	之	著	いのちをささげ—戦中学徒・遺詠遺文抄 昭和53年	450頁
No. 20	加納祐五・三浦貞蔵編	五	著	いのちをささげ—戦中学徒・遺詠遺文抄 昭和54年	421頁
No. 21	桑原	一	著	社会主義理論との戦い (山本勝市博士論文選集) 昭和55年	420頁
No. 22	山田	輝	著	「とっちゃん」先生の国語教室 昭和56年	172頁
No. 24	山田	輝	著	戦後教育の中で 昭和56年	298頁
No. 25	夜久	正	著	明治の精神—近代文学小論 昭和57年	335頁
No. 26	国民文化研究会編	之	著	米英思想研究抄 昭和58年	270頁
No. 27	国民文化研究会編	之	著	「ししまの道」研究 昭和59年	309頁
No. 28	国民文化研究会編	之	著	学問・人生・祖国—小田村寅二郎選集 昭和60年	350頁
No. 29	国民文化研究会編	之	著	戦後世代からの発言 昭和61年	357頁
No. 30	廣瀬	祐	著	戦後世代からの発言 昭和62年	279頁
No. 31	加納	祐	著	萬葉集 その漲るいのち 昭和63年・(改) 平成21年	328頁
No. 32	廣瀬	祐	著	Belief that and Belief in 平成元年	276頁
No. 33	戸島	三	著	和歌と日本文化 平成2年	326頁
No. 34	小田	二郎	著	祖国と人類の悲願 平成3年	336頁
No. 35	山田	輝	著	ソ連抑留と日本回帰 平成5年	338頁
No. 36	山田	輝	著	占領後遺症の克服—祖国の真の独立のために—平成6年	267頁
No. 37	長内	俊	著	われらがマン、ツーマン 運動の戦後史 平成7年	224頁
				若き友らへ語りかける言葉 平成10年	282頁

(既刊) 国文研叢書

